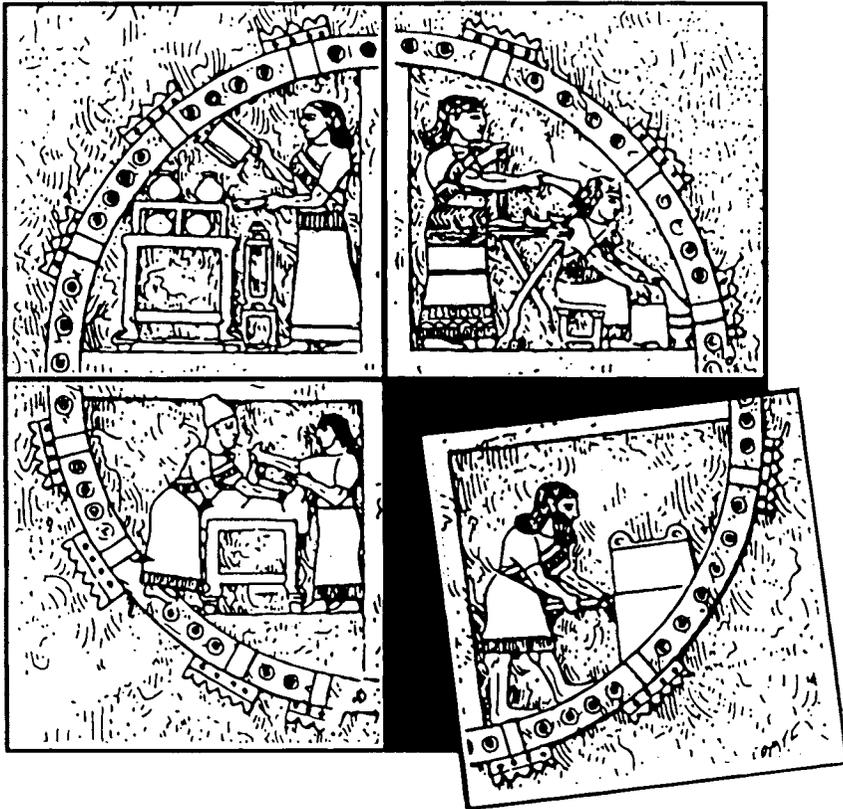


日本女子大学 総合研究所紀要

21



目 次

途上国における女性支援のためのプログラム開発

Development of the Program for the Support of Woman in the Developing Countries

……………研究課題 (60) 研究代表者 天 野 晴 子 … 1

日本女子大学における学生を主体とした地域連携活動の活性化のための調査・研究

Stimulating Student-Oriented Activities in Cooperation with Local Communities:

A Case Study of Japan Women's University

……………研究課題 (61) 研究代表者 田 部 俊 充 … 57

イギリスのファッションに見る「女性らしさ」の規範

—フランス、日本との比較を通して

Defining the Feminine Body in Modern British Fashion:

A Comparison between French and Japanese Modes

……………研究課題 (62) 研究代表者 坂 井 妙 子 … 119

途上国における女性支援のための プログラム開発

Development of the Program for the Support of Woman
in the Developing Countries

天 野 晴 子 AMANO Haruko
(研究代表者、日本女子大学家政学部家政経済学科教授)

飯 田 文 子 IIDA Fumiko
(日本女子大学家政学部食物学科教授)

佐々井 啓 SASAI Kei
(日本女子大学名誉教授)

高 増 雅 子 TAKAMASU Masako
(日本女子大学家政学部家政経済学科教授)

田 中 俊 子 TANAKA Toshiko
(元日本女子大学大学院家政学専攻客員教授)

望 月 一 枝 MOCHIZUKI Kazue
(元日本女子大学大学院家政学専攻客員教授)

目 次

I	研究の概要	天野 晴子
	1. 研究の目的と背景	
	2. 研究経過	
II	ラオス人民民主共和国における女性の支援とラオス女性同盟 —学校給食プログラムとのかかわり	
	1. ラオス人民民主共和国における女性と教育	天野 晴子
	2. ラオス人民民主共和国における女性同盟の位置付け	望月 一枝
	3. 学校給食プログラムとラオス女性同盟の役割	
	4. ウドムサイ県およびラー郡における 学校給食プログラムと女性支援	飯田 文子
III	ラオス人民民主共和国におけるセミナー及びワークショップの開催	
	1. 学校給食プログラムを通したリーダー育成と女性支援	高増 雅子
	2. 女性の生活時間調査を用いたワークショップ	天野 晴子
IV	女性支援の展開と今後に向けて	
	1. ネパールの女性グループによるマイクロファイナンスの活動と エンパワメントの事例から	佐々井 啓・田中 俊子
	2. 今後に向けて	天野 晴子

I 研究の概要

天野 晴子

1. 研究の目的と背景

本研究は、日本における家庭科教育の手法を生かし、衣食住、家族、経済を専門とする家政学の見地から、主としてアジアの女性自立をサポートするプログラム開発をめざすものである。

筆者らは、過去に文部科学省拠点システム構築事業「国際協力イニシアチブ」における家政分野の拠点校に採用され、「途上国における家庭科教育の推進（2003年度～2008年度）」「家政分野における派遣現職教員の活動支援教材などの開発」（2006年度～2008年度）で6年間の活動実績を有している。また、「開発途上国における生活支援のための教材及び指導法の開発」（2012～2014年度）では、2004年に行った調査を発展させ、2012年の国際家政学会参加国21か国の家庭科教育状況調査の比較検討も行った。その結果からアジアの男女別修の多さや女子教育に関する内容の偏りなどが浮き彫りになった。そこで、アジアにおいて貧困に陥りやすい女性支援のため、生活を対象とし、ジェンダー視角からアプローチができる家庭科教育の視点で生活のボトムアップを井とした。具体的には、妊娠婦と母親、子どもの食生活の改善を図ることで健全な生活を、さらに収入を得るための技術や知識の伝達などの教育から、女性の支援のためのプログラム開発を計画した。

本学は成瀬仁蔵の女性教育、女性を人として、婦人として、国民として教育する、の精神から創立当初より生活の基盤である家政学に重点をおいた教育をしてきた。女性のエンパワーメントには、第一に女性を人として教育すること、すなわち人間として真に平等に扱われるための教育が必要である。この観点を附属中学、高校の教員とともに発展させることで、本学の教育理念をアジアの女性のために役立てることが出来ると考え、そのためのプログラム開発を目的とした。

2. 研究経過

1) 2015年度

ラオスを対象国とし、子どもの食生活の改善を図るプロジェクト（学校給食プログラム）への支援を通して、女子教育ならびに収入を得るための技術や知識の伝達などの教育の可能性を検討した。

ラオス国において、これまで国際機関や先進国からの支援として、ビタミンやミネラルが豊富なシリアルスナックの小学校への配布等が行われてきた。これは、喫緊の空腹を軽減し、学校での集中力を高めたり、ラオス村落部で生じやすい微量栄養素欠乏症の改善などが目的とされたが、家族への持ち帰り分をも合わせて配布し、親に対して子どもを学校へ通わせるための刺激策としての効果も意図されていた。しかし、持続可能性という視点からは、支援物資（スナック）の供給が終了すれば、効果が持続しないことになる。（われわれのインタビュー調査では、ラオスの食文化からみても味覚の点でスナックはあまり好評とはいえないようであった）。これに対し、学校給食プログラムは、（工夫すれば）持続可能性をもち、教育環境において男子より不利な状況におかれてきた女子の就学率向上ならびに初等教育中の反復および中退率の縮小が期待できる。現在、学校給食プログラムは、ラオス国の39の貧困を抱える郡での優先的実施が計画されている（まだごく一部の試行的段階）。

そこで、ラオス国教育スポーツ省をカウンターパートとし、ラオス国のウドムサイ県において、学校給食プログラムの関係者を対象としたセミナー及びワークショップを開催した。訪問日程は、2015年10月25日～10月30日で、セミナー及びワークショップは10月27日10：00～16：30、ウドムサイ県教育局会議室において実施した。ウドムサイは、首都ビエンチャンからは遠く離れた北部の山岳地帯に近い農村地域で、貧困村落でもある。セミナー・ワークショップには、Pongsaly、LuanNantha、QuodomXay の3県から、計28名が参加した。参加者の内訳は、県教育局から8名（役職者5名、担当者3名）、小学校から17名（校長6名、教員9名、給食調理等2名）、ラオス女性同盟から2名、ラオス国教育スポーツ省から1名で、性別は女性・男性とも14名ずつであった。

セミナー及びワークショップの主な内容は、学校給食に関するもの、衛生管理に関するもの、献立に関するもの、女性の生活時間に関するもので、グループワーク及び発表を行うアクティブラーニング形式で実施した。生活時間に関わる内容は、グループの中の一人の女性の一日の生活時間を生活時間調査表に記入し、生活行動の分類方法や生活を可視化する手法も学べるようにしたが、我々としては実際のラオス女性の一日の生活実態を把握するためのプレ調査的な位置づけとしても有効であった。

また、セミナー・ワークショップの前後には、ウドムサイ県の関係者との打ち合わせやインタビューを行い、10月28日にはビエンチャンのラオス国教育スポーツ省において、セミナー及びワークショップの報告ならびに意見交換をおこなった。また、今後の展開についても検討し、次年度の計画に必要な双方の条件のすりあわせや必要な準備についても相談した。

このほか、訪問調査では、セミナーやワークショップで使用するための教材用の資料収集（主に市場での食材等の撮影、価格調査等）も行った。

2015年度の研究成果については、公開報告会として、2016年2月26日（金）15時30分～17時、西生田キャンパス付属中・高校校舎3階会議室において、「途上国における女性支援のためのプログラム開発—2015年度ラオス国訪問調査報告会」をおこなった。

2) 2016年度

前年度、ラオス国教育・スポーツ省を窓口として、現地から要請されたラオス国ウドムサイ県の貧困農村地域において、学校給食プログラムの関係者を対象としたセミナー及びワークショップを開催し、多くの参加者を得たが、その際、次のステップとして、関係部局のナショナルマシーナリー担当官および当該地域の行政官に、先進事例として同じ米を主食とする日本において現場をみていただきながら、意見交換を行うことが有用であるとの判断に至った。

そこで、2016年度は、ラオス国の教育行政官を招聘し、現場視察を組み合わせながら意見交換及びワークショップ、研究会を開催した。招聘期間は2016年6月5日～6月10日で、①日本における女性の自立支援や学校給食の現状視察を含めた研究会の実施、②期間中の6月9日に、本学において「ラオスにおける女性と教育」「ラオスにおけるスクールランチ事業の現状と課題」というテーマでの公開講演・ワークショップを開催し、共同事業の報告等を行った。一連の過程を通しさまざまな観点と多様な事柄が明らかになったが、そのうちいくつかのポイントを中心に以下に示す。

ラオス人民民主共和国政府は、2030年に向けて、社会経済的発展、若者の中等教育の充実、市民の公衆衛生と平均寿命の向上を目標に取り組みを進めている。改善したいことは、地方や遠隔地におけるジェンダー不平等、教育指標の見直し、低栄養状態である。結果として、給食事業は、小学生の身体の発達、学力向上、入学率、進級率と卒業率の上昇、退学率と休学率の低下に寄与した。

さらに、男女の差別の低減および授業機会の平等、事故や火事などの危険発生率も減少した。その他、親の仕事時間の増加、生徒の欠食率低減などの食習慣の確立にも貢献することがわかった。今後の課題は、水の確保（現在42.5%の学校で不十分）、学校での栽培、養殖、飼育技術向上がある。解決には、担当責任者の能力構築、郡の現場への支援、県による関係者の技術面の知識向上策があり、日本女子大学から食品加工技術や地域内での栄養改善の助言を受けたい希望がある。

学校給食では、政府と開発パートナーが支援を要請し、2009年から2013年の子どもの健康状態改善に効果的に影響を及ぼしている。学校給食に地元の文化や食材を用いたこと、学校菜園と小動物飼育、地域農業の促進、管理や栄養や栽培技術の能力向上、研究と栄養のモニタリング、情報の共有、地元の様々な人や制度との協力の促進、政府によって配分される予算計画などが有機的に結びついて効果をあげている。このような学校給食の成果を支えたのは、女性同盟との連携である。学校給食の実施によって、女子教育が成り立ち、ジェンダー格差を縮小し、女子教育問題を解決する施策となった。ラオスの人口は、20代から10代の層が厚い構成になっており、人口の59.2%が地方に住み、7.9%が山岳地帯にいる。貧しい子どもたちがドロップアウトしたり留年したりしている。しかし、ジェンダーギャップは、小学校で狭まり、中学校レベルから大学で高い。特に遠く離れた民族地区でジェンダーギャップが認められる。教育による男女の支援、コミュニティの健康改善、個人が人生の選択肢をより多く持つことを可能にすることに取り組んでいる。ジェンダー平等教育は、社会的基準の明確化、経済的支援、インフラ整備、民族の多様性の尊重によって進められている。女性同盟は、教職員と地域の人々と共に学校給食を支える役割を担い、法律、政策、プロジェクトなどの立法におけるジェンダー平等の主流化、奨学金、学校給食プログラム、教育における女性のクォータ制度、ジェンダー平等とインクルーシブ教育など、教育のシステム全体への貢献も大きい。

なお、先方より、今後の展開としてラオス国内の複数候補地でのセミナー及びワークショップの開催を強く要請された。

3) 2017年度

昨年度のラオス国教育スポーツ省からのリクエストにこたえ、2年間の蓄積を踏まえ、2017年10月20日～27日の日程でラオス国を訪問し、ラオス国政府の要請による新たな要支援地域＝ルアンナムター県において、ワークショップを開催した。

ルアンナムター県は、ミャンマーと中国に接し、北西の国境はメコン川である。ルアンナムター県の95%が標高2000m程度の山林山岳地帯である。ワークショップ参加者は、ラオス国政府との事前協議では28名の予定であったが、当日は43名に増えており盛況であった。ルアンナムター県だけでなく、近隣のウドムサイ県、ポンサラー県からの参加もみられた。参加者の所属は、村役場(28%)、小学校(21%)、教育機関(19%)、女性同盟(16%)、県教育局(16%)で、職務別には教員(28%)、技術者(23%)、村長(21%)、校長(12%)であった。ワークショップを通して、学校給食担当者に課題認識や実態把握が不足していることや、各国の支援で作成された教材が活用されておらず、その存在も知らないケースが多いこと、参加者は校長や教員、女性同盟、役場等のリーダー層が中心であるが、男女ともに生活の自立に必要なごく簡単な数字の計算、特に割合(%)の理解が難しく、基本的な事項をわかりやすく説明する必要性があることなどが明らかとなった。参加者によるワークショップの評価は良好であり、「また参加したい」と考えている参加者がほぼ100%であった。元JICA隊員の随行者からは、他団体のワークショップに比べ、参加者が自ら発

表し、わからないことをはっきりと言っていた点が高く評価された。今後の課題として、参加者の職種ごとのニーズに合わせたワークショップの実施、わかりやすいテキストの作成等があげられる。

また、研究成果を、第19回アジア地区家政学会（19th ARAHE Biennial International Congress 2017、6-10 August 2017）において発表した。テーマは、“The school meal programme in Laos and the role of the Lao Women’s Union” で、ポスタープレゼンテーションを行った。

2017年度の公開講演・報告会は、2018年2月27日（火）14時～16時、日本女子大学目白キャンパス百年館高層棟11階家政経済学科共通ゼミ会議室において開催した。本学関係者ではない一般の方も、ホームページをみて参加された。講演は、「ネパールにおける女性支援」と題し、日本大学国際関係学部特任教授 青木千賀子氏にお話を伺った。特に本研究課題の女性自立をサポートするプログラムの事例として、ネパールの女性グループによるマイクロファイナンスの活動とエンパワーメントを通し、女性グループの活動→エンパワーメント→社会的包摂に向けてのベクトルの有効性が指摘された。また、グループ内のネットワークを起動させるキーパーソンの存在が必須であり、リーダーの資質が組織強化の上でも鍵を握るため、リーダーシップを発揮できる人材の育成が重要であるとの結論から、われわれのワークショップにおけるリーダー育成の意義を確認することができた。次いで、今年度の活動について「ラオス国における2017年度ワークショップ」と題して報告を行った。

Ⅱ ラオス人民民主共和国における女性の支援とラオス女性同盟 —学校給食プログラムとのかかわり—

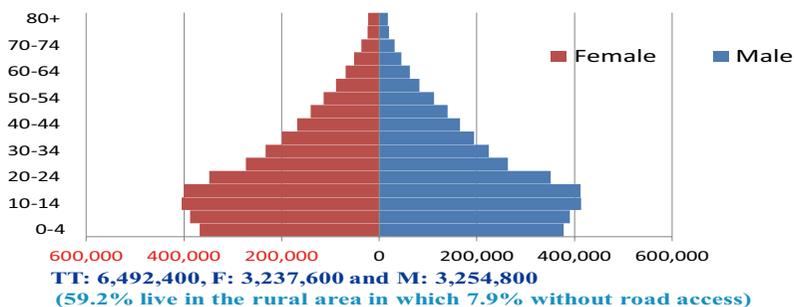
天野 晴子

1. ラオス人民民主共和国における女性と教育

2015年のラオス国人口センサスによると、人口は6,492,400人で、女性3,237,600人、男性3,254,800人である。年齢別人口構成は、子どもおよび若い世代が多いピラミッド型となっている（図Ⅱ-1-1～図Ⅱ-1-4における図表は、ラオス国教育スポーツ省 Yangxia LEE 氏による）。

学校段階別に男女の就学比をみてみよう。図Ⅱ-1-2のデータで、2014-2015年の男性を100とした場合の女性の指数を算出すると、幼・保99.4、小学校92.3、中学校90.9、高等学校85.9となる。学校段階が上がるほど、男性に比べた女性の数は減少傾向がみられる。

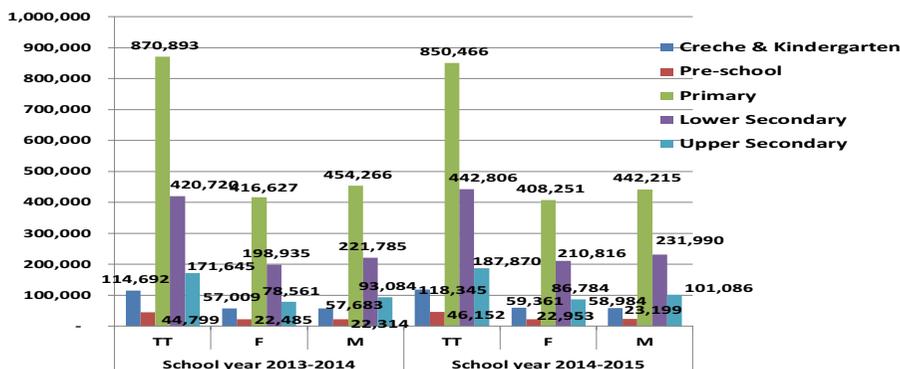
Lao Population Census-2015 About 6,492,400 persons



Source: Lao Statistics Bureau, MPI, December 2015

図Ⅱ-1-1 ラオス国の人口構成¹⁾

General Education



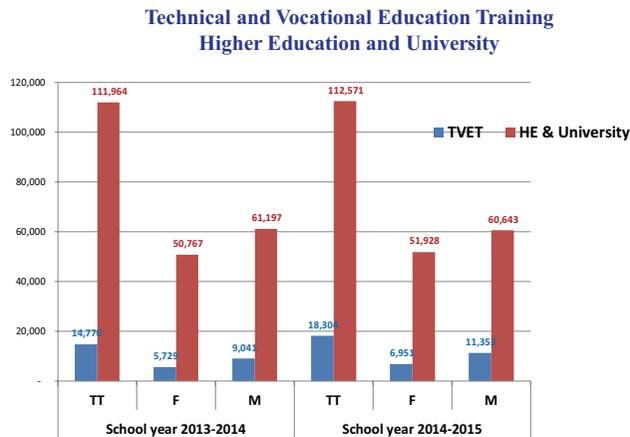
Source: EMIS, MOES

図Ⅱ-1-2 ラオス国の学校段階別の男女の就学状況

技術・職業専門及び高等教育（短大・大学等）については、図Ⅱ-1-3の就学者数をもとに、同様に男性を100とした場合の女性の指数を算出すると、技術・職業学校で61.2、高等教育で85.6となり、格差が大きくなっている。

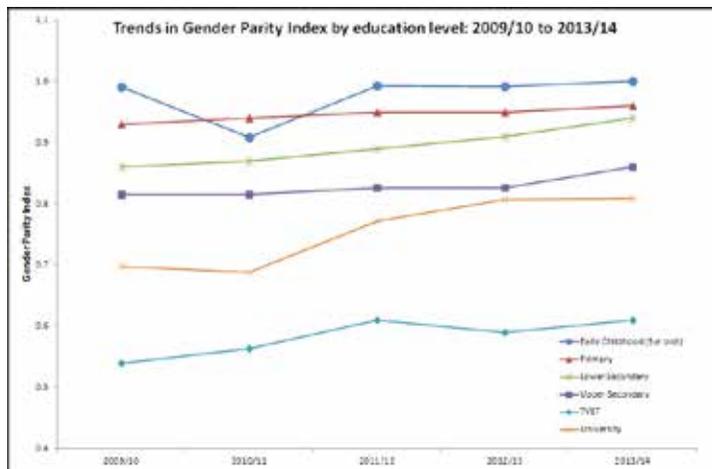
学校段階別の就学者の近年の推移について、男性に対する女性の比率で示した指数でみると、女性の割合が少ない高等教育において、女性の割合が少しずつ上がっていることがわかる（図Ⅱ-1-4）。

ラオス国の教育におけるジェンダーギャップは、小学校・中学校では比較的小さいが、それでもギャップがみられる。高等教育においてはジェンダー格差が開き、さらに貧困層や少数民族においても差が大きい。学校給食は女子の就学率向上に寄与しており、次項に示すように、ラオス国の女性同盟の関わりを通し、本プログラムにかかわる成人女性に対する支援としての効果が期待できる。



Source: EMIS, MOES

図Ⅱ-1-3 ラオス国の職業・技術専門学校及び高等教育の就学状況



図Ⅱ-1-4 ラオス国の学校段階別ジェンダー指数の推移

2. ラオス人民民主共和国における女性同盟の位置付け

望月 一枝

1) ラオス人民民主共和国と女性同盟

ラオス国は、東南アジアの内陸に位置する山岳国である。人口の多くが農村地帯や、孤立した山地の村落に住んでいる。ラオス国には49の民族と言語があり、文化的な多様性に富んでいる。近年、経済発展への動きが見られるなか、貧困状況はいまだ深刻である。ラオス国は、1975年に王制を廃止し、ラオス人民民主共和国（以後、ラオス国と略す）の建国を宣言して社会主義体制の建設を行ってきた。

ラオス国における1975年から1991年の憲法制定までの改革の特徴は、それまで地方に権限がある分権的な制度から、中央集権的な制度へと改革が行われてきたことにある。1980年代のラオスの地方制度は、県党委員会を中心に地方が中央に対して大きな自律性（autonomy）を有し、県レベルに権限が集中していた。しかし、1991年、初めての憲法を制定した事を機に、社会主義体制後、最も大きな政治制度改革が行われ、地方議会（地方人民議会）が廃止された。その背景には、49の民族、とりわけ少数民族の生活向上や政治参加を促すことがあったと思われる。民族別にみると人口の50%を占める低地ラオ人と中地、高地のラオ人に比して、成人識字率は人口の6.5%を占めるモン族は、26.5%ときわめて低く、少数民族の女性にとっては就学の機会は極めて低い。妊産婦死亡率も出生10万人に対し、ビエンチャン市150人、地方では900人以上である。労働人口は200万人のうち女性の割合が47%を占める。女性が大きな労働力を担う一方、女性の教育機会が少ないために、意識変革の機会がなく、小さいときから男性に従う意識を身につけ、従順が美德とされ、現在も、性別役割分担の明確な社会である。

ジェンダーギャップ指数（The Global Gender Gap Report2017）によれば、ラオス国は、144カ国中64位、経済的参加は、0.703で22位、教育は、0.769で118位、健康は、0.933で74位、政治参加は、0.974で84位である。民族間の格差は、あるもののラオス国の女性がこのような状況まで達成した背景にラオス女性同盟の役割が大きいことが伺える。1991年に制定された憲法では男女平等がうたわれ、家族法の改正で一夫多妻が禁じられ、財産法での男女平等が明記された。伝統的にはラオス国は、女性が労働の半分を担ってきたこともあり、男児偏重の少ない社会といわれている。しかし、ラオス女性連盟は、性別役割意識改革や男性の意識改革をも目標にしている。ラオス女性連盟のスローガンは、1984年大会での「よき母親、よき妻はよき市民」から1988年には男性、少数民族との協力、結合などに変化し、1991年大会では一夫多妻を禁じた家族法、財産法など女性差別を制度的に禁じることに成功している。女性国会議員の数は、1995年9人だったのが、1997年には99人中21人に増えた。管理職は8873人中581人と日本に比較すると高い。

ラオス女性連盟は、全国80万人の女性組合員を組織し、5年に一回大会を開催し、教育、健康分野における政策決定過程への参画を重点的に取り組んでいる。ラオス国は、第2次世界大戦後のフランスのインドシナ復帰から約30年にわたり、断続的に戦争が続く混乱の時代にあった。インドシナ戦争の時代、ラオスの公定史観では、それは「フランス植民地主義者」及び「アメリカ帝国主義（新植民地主義）者」の抑圧からラオスの人々を「解放」するための闘い、「民族解放闘争」の時代と位置づけられている。「植民地主義者の手先」に支配されたラオス王国の国土の一部に、既に「解放」の達成された解放区があった。その人民革命党の民族解放闘争の本拠地であった解放区は、先行研究においては、人民革命党が一党支配を展開する疑似国家の領域になっていたと認識されてき



写真Ⅱ-2-1 ラオス女性同盟本部への聴き取り調査（2014年10月）

た。人民革命党は1955年に樹立されたが、少なくとも内戦期においてはその存在が公表されては無く、自由ラオス戦線として闘っていた。しかし、左派勢力「パテート・ラオ」として知られていた政治勢力の中核に人民革命党が存在することが初めて実証されたのは1968年だった。その組織には、ラオス女性同盟、ラオス青年同盟などが存在した。なお、自由ラオス戦線は、1956年にラオス愛国戦線、1975年にラオス建国戦線に改称した。すなわち、解放区で1955年頃から活動していたラオス女性同盟が1975年の王制廃止、ラオス人民民主共和国の建国と共に表舞台に登場したといえよう。多民族、多言語を有するラオス国の地域格差を無くし、中央の人民革命党の指導を山岳地帯にまで遡及するためであったと考える。

しかし、2015年の憲法改正では、25年ぶりに地方人民議会の設立が規定され、2016年、各県・都人民議会が開催された。地方人民議会の役割は、その地方の基本的問題の決定と国家組織の活動の監督と規定されている。地方の国民の政治参加、地方の経済社会開発を推進するためであったと考えられる。本研究プロジェクトは、2014年に女性同盟の本部に聞き取り調査を実施したが、女性同盟の役割は、女性の政治参加と経済社会開発だけでなく、ラオス国の国家的な凝集性を高めることもその一つであることが明らかになった。それは、女性同盟に所属する女性たちがラオスの伝統的な衣装と髪を長くしてまとめる髪型であることに表徴されている。

よく働くラオスの女性たちが、グローバリゼーションの影響に翻弄されることなく、ラオスの伝統文化を維持することによって、地方と中央をつなぐ役割を果たしていると考えられる。ラオス国と女性同盟は、女性の地位向上、地方と中央政府、及びラオス人民革命党をつなぐ役割が明らかになった。

3. 学校給食プログラムと女性同盟の役割

ラオスにおいて「ジェンダー」は新しい概念ではなく、ラオス語で「ポッパー・ニンサイ」、直訳すると「男女の役割」という単語を用いて表現されている。ラオスでジェンダー平等というと、「作業を男女で分業する」という考えを持った人が多い。そのため、ジェンダー＝男女の役割の概念だけでなく、本プログラムでは、生活時間調査をワークショップで実施し、女性が1日の時間をどのように過ごしているかをグループで書き込み、全体で話し合うなどの作業を共有した。ジェンダーの枠組みに合わせ、女性がどのような生活を土台にして、教育やリーダーシップに参加しているか話し合いができたことは意義あることである。

2016年、「SDGs = Sustainable Development Goals（持続可能な発展目標）」として、国連は、「誰

も置き去りにしない (no one will be left behind)」ことを基本理念に、2030年の世界を見据えた新たな指針を策定した。第60回「国連女性の地位委員会」(CSW60)は、「持続可能な発展目標」の進展は、ジェンダー平等と女性・女兒のエンパワーメントなくしては不可能であると指摘している。

ラオス人民民主共和国政府は、2030年に向けて、社会経済的発展、若者の中等教育の充実、市民の公衆衛生と平均寿命の向上を目標に取り組みを進めている。なかでも、2016年から2020年の栄養状態改善のためのナショナル・アクションプランは重要である。学校給食、学校における菜園、栄養に関する知識教育、寄生虫の駆除と貧血対策という4つの事業の協同である。2030年に向けて、すべてのラオス国民は、質の高い教育を受け、効果的に国を発展させ、地域や国際社会と共に道徳的、健康的、知識豊かでありたい。目標と目的は、子どもたちが学校で良い健康と栄養を得て卒業すること、教育目標を改善し高等教育を受けられるような能力を持たせることであり、保護者やコミュニティを含むすべてのレベルの人々の参加を促進すること、食料の安全と学校の食料生産に関する国の目標に貢献すること、地元の文化や価値を尊重してすべてのレベルの能力を強化することである。改善したいことは、地方や遠隔地におけるジェンダー不平等、教育指標の見直し、低栄養状態である。また、対象となるのは、幼稚園、就学前の子どもたち、初等教育、中等教育の子どもたちである。

1) 学校給食と女性同盟の役割

学校給食では、政府と開発パートナーが支援を要請し、総合的なカリキュラムによって、生活のスキルと生涯学習と自然保護の促進を図る。学校は、安全かつ栄養のある食べ物を提供し、地元の豊かさと自立を促進して健康増進に寄与する。事実、学校給食は、2009年から2013年の子どもの健康状態改善に効果的に影響を及ぼしている。学校給食を地元の文化や食材を用いたこと、学校菜園と小動物飼育、地域農業の促進、管理や栄養や栽培技術の能力向上、研究と栄養のモニタリング、情報の共有、地元の様々な人や制度との協力の促進、政府によって配分される予算計画などが有機的に結びついて効果をあげている。

このような学校給食の成果を支えたのは、女性同盟との連携である。学校給食の実施によって、女子教育が成り立ち、ジェンダー格差を縮小し、女子教育問題を解決する施策となった。ラオスの人口は、前項で述べたように、20代から10代の層が厚い構成になっている。人口の59.2%が地方に住んで7.9%が山岳地帯にいる。国民の多くが小学校に通い、中学校は、その2分の1、高校はまたその2分の1が行っている。小・中・高とも男児が若干多く通っている。教師教育は、ジェンダー化され、幼稚園、小学校、中学校に女性が多く、芸術教育については男性が多い。子どもたちが学校に通えているかを見ると貧しい子どもたちがドロップアウトしたり留年したりしている。しかし、ジェンダーギャップは、小学校で狭まり、中学校レベルから大学で高い。特に遠く離れた民族地区でジェンダーギャップが認められるが教育による男女の支援、コミュニティの健康改善、個人が人生の選択肢をより多く持つことを可能にすることに取り組んでいる。ジェンダー平等教育は、社会的基準の明確化、経済的支援、インフラ整備、民族の多様性の尊重によって進められている。

教育全体を見ると博士レベルから基礎レベルまで男女の教育格差は、男性53.6%、女性46.39%であるが、すべてのレベルに女性が参入していることが特徴である。1991年に制定された憲法では男女平等がうたわれ、家族法の改正で一夫多妻が禁じられ、財産法での男女平等が明記された。伝統的にはラオスは、男児偏重の少ない社会といわれている。ラオス女性連盟は、教育、健康分野における政策決定過程への参画を重点的に取り組んでいる。具体的には、女性同盟は、教職員と地域の

人々と共に学校給食を支える役割を担っている。憲法、法律、政策、プロジェクトなどの立法におけるジェンダー平等の主流化、奨学金、学校給食プログラム、教育における女性のクオータ制度、ジェンダー平等とインクルーシブ教区など、教育のシステム全体への貢献も大きい。

本研究プロジェクトでは、ウドムサイ県の学校給食推進事業の調査と支援を実施した。ウドムサイ県教育スポーツ局のチャンスニー・ユアムサムラン先生によれば、ウドムサイ県はラオス国の北部、ビエンチャンから583kmに位置し、面積15,370km²で国土の6.5%を占める。県は7つの郡からなり、そこに61の村グループ、471の村がある。人口は303,275人。12の民族で構成される。ウドムサイ県の7つの郡のうちの一つであるラー郡が学校給食推進事業の対象である。ラー事務所の副所長であるトーンルン・ウォンサワット先生は、ラー郡はウドムサイ県の北東部にあり、土地の95%が山岳地帯で、4民族で構成される。学校給食推進事業は、世界食糧計画が2010-2011年度にラー郡の5校に給食を試行したことに始まり、米・植物性油・調理師手当の支援があった。2011-2012年度にAFI (Education for All-Fast Track Initiative) を受け36校を追加し41校となった。しかし、2013-2014年度は支援が終了した。World Bank (世界銀行) からの資金提供による事業は、2014-2015年度にECE (Early Childhood Education) の資金提供と政府からの無利息融資を獲得した。事業の担当者に郡から副知事以下15名、村では、校長、国家建設戦線、女性同盟、青年同盟の村代表、自警団の責任者など8名があたった。各学校の活動にコミュニティが作業参加し、給食準備・調理、学校による小規模な魚の養殖、鶏や豚の飼育、学校菜園の整備と栽培、果樹の植林などを行った。コミュニティから野菜、果物、肉、魚の食品、地元産の調理器具、労力の提供も受けた。郡は村の担当者に管理運営、調理、会計、菜園整備に関する研修を実施した。

事業実施1年後、生徒の学力向上、3-5歳児・小学校入学率の上昇、進級率と卒業率の上昇、退学率と休学率の低下などがあった。事業実施が出来たのは郡と村の教育開発委員会が参加協力し、住民が理解して活動に参加し、米や食料を提供し、野菜の栽培などが出来たことによる。今後の課題は、水の確保 (42.5%の学校で十分な水の確保ができていない)、学校での栽培、養殖、飼育技術向上等がある。

ラオス教育スポーツ省が1991年に発表した「ラオス国の理念と一般教育開発計画」の中で提唱した理念の「5つの重要点」または、「5つの局面」ともいわれる5つとは、1) 知力の発達、2) 身体の発達、3) 芸術性の発達、4) 道徳的発達、5) 職業的発達である。学校給食は、この5つの教育理念に沿って、学ぶこと、教えることがなされ、担当責任者は教育の役割の重要性、特に学校給食のプログラムの大切さを認識した。学校給食は、小学生の身体と知識の向上に貢献しただけでなく、小学生の休学率、退学率が低下し、男子と女子の差別の低減、授業における平等、事故や火災などの危機管理能力の向上、保護者が安心して労働に従事することができるなどの成果があった。

学校給食における女性同盟の役割は、県からの現金送金の制度を利用し、教育事務所に通知して村の会計に送金したため、現金の使用と管理は村の責任とし、PTAの会長と女性同盟の代表が現金を管理した。予算の範囲で献立を立て、調理することも女性同盟が参加した。学校給食の予算管理、栽培、献立作成、調理、子どもたちへの配膳など、一連の学校給食管理過程へ女性同盟が参加したのである。それは、学校給食事業の成功だけでなく、女性同盟のコミュニティへの貢献であり、女性自身の能力開発と自信につながった。女性の政策決定、経済的参加、健康、教育への貢献である。



写真Ⅱ-3-1 3県を対象とした栄養食と衛生に関するワークショップ実施 2014年10月



写真Ⅱ-3-2 学校給食に携わる女性同盟 2014年10月

4. ウドムサイ県およびラー郡における学校給食プログラムと女性支援

飯田 文子

1) ウドムサイ県における学校給食プログラム

教育スポーツ局チャンスニー・ユアムサムラン氏より、ウドムサイ県の学校給食推進事業の実施概要報告を受け以下にまとめた。

(1) ウドムサイ県について

ウドムサイ県はラオス国の北部にある。ビエンチャンから583kmに位置し、面積15,370km²で国土の6.5%を占める。県は7つの郡からなり、そこに61の村グループ、471の村がある。人口は303,275人。12の民族で構成される。

ウドムサイ県の7つの郡のうちの一つであるラー郡が国の学校給食推進事業の対象である。

(2) 事業実施の経緯

ウドムサイ県は2002-2003年度から7つの郡を対象に世界食糧計画から援助を受けている。その援助の形態とは、毎日学校の2限目の休憩時間におやつとして、トウモロコシ・大豆でできたスナックを提供することであった。

2010-2011年度からは、EFA-FTI²⁾の予算が確保されてラー郡の40校が対象となり、食料補助から学校給食事業へ移行した。

2014-2015年度にEFA-FTIプロジェクトが終了したが、世界食糧計画の食料補助はなお継続し、ECE³⁾の予算により第2フェーズとして事業継続されることとなった。

つまり、世界食糧計画の食料補助は6つの郡で継続している。

さらに、2014-2015年度には、世界食糧計画は食料補助から学校給食へと活動枠を切り替える試みを行った

新事業の対象地域としては、ベン郡が選ばれた。米と菜園の整備費、学校やコミュニティの菜園から提供される給食用食材と技術面の訓練費などを考慮して、59校が対象になる。

(3) 事業実施体制

県知事の承認を得て、各レベルでの事業担当責任者、県レベル15委員、郡レベル15委員、村レベル8委員が任命される。

事業は県からの現金送金の制度を利用して実施する。県はラー郡の教育事務所に通知して村の会計に送金する。現金の使用と管理は村の責任とし、PTA会長と女性同盟の代表が現金を管理する。学校給食促進事業の目的と目標を各組織の調整役に理解してもらうため、その政策に関する会議を開催する。

県と郡レベルのインストラクターには、様々なテーマのトレーニングを実施。さらに県と郡とが共同で県、郡、村の責任者に対してトレーニング実施する。

県は郡の調整役と合同で、学期ごとに1回、村レベルの活動をモニターし支援を行う。

事業を継続するため、コミュニティが事業の主体であることを強調して認識させる。

郡は学期ごとに2回、担当チームとともに活動をモニターし支援を行う。

県、郡、村の担当責任者は、国内および国外研修旅行に参加できる。

(4) 事業実施により得られた成果

ECEからの活動予算を獲得でき、各レベルの担当責任者は教育の役割の重要性、特に学校給食のプログラムの大切さを認識出来た。そして学ぶことと教えることが5つの教育理念⁴⁾に沿って行われたことがあげられる。

さらに、各レベルの担当責任者の能力の構築、理解と協力参加ができた。その他、小学生の身体と知能が発達し健康になったこと、小学1年の入学率、6-10歳の入学率、進級・卒業率が増加したこと、また、休学率、退学率は低下したことがあげられる。男子と女子の差別の低減や授業における平等も実現した。

学校外の地域では、事故や火事などの危険事態発生が減少した。また、親の子供に対する心配がなくなり、父母が仕事の時間を多く確保できるようになったことも挙げられる。

学校教育としては、生徒が栄養のある食事を得られ、食事が摂れない割合が低減した。

それと同時に、生徒に習慣とすることの自覚を持たせることが出来た。

他の県や外国との交流活動として、ブラジル、ネパール、米国との交流、フアパン県、ルアンパバン県、ボリカムサイ県、カムムアン県、サラワン県、セコン県、アタブー県との交流が出来た(写真II-4-1)。



写真Ⅱ-4-1 教育省とウドムサイ県の給食事業担当者チームによるタイ国視察



写真Ⅱ-4-2 県レベル担当責任者への給食事業説明会



写真Ⅱ-4-3 幼児初等教育局長とネパール国視察団によるラー郡給食事業訪問（1）



写真Ⅱ-4-4 幼児初等教育局長とネパール国視察団によるラー郡給食事業訪問（2）



写真Ⅱ-4-5 ヤンシア・リー先生とブラジル世界食糧計画の飢饉対策センター所員の訪問

途上国における女性支援のためのプログラム開発



写真Ⅱ-4-6 米国からの視察団



写真Ⅱ-4-7 村レベルでの支援についての会議



写真Ⅱ-4-8 村担当者と学校関係者との会議



写真Ⅱ-4-9 菜園と調理についての研修





写真Ⅱ-4-10 菜園と調理についての研修



写真Ⅱ-4-11 菜園と調理についての研修

(5) 教育運営面への影響

2010-2011年度に学校給食事業が開始され、その結果、入学率等が徐々に向上するなど、教育運営が改善した。

(6) 事業実施における利点、困難、課題について

以上のまとめ

◇1 利点

- ①事業予算を獲得した。
- ②各レベルの担当責任者が関連する研修を受けた。
- ③県レベル、郡レベルの調整担当者が事業を理解し活動に参加した。
- ④県の教育スポーツ課が人員と移動手段の便宜を図った。

◇2 困難と課題

- ①いくつかの関係部署で調整官が頻繁に交代し、活動に一貫性がなくなり支障が出た。
- ②各レベルの担当責任者の能力開発が十分に行われていない。村の教育開発担当者の教育レベルが充分でない。
- ③地域コミュニティの貢献度が限られる。住民の貧困問題が依然根強い。

(7) 今後の計画

- ①新たな活動地域についての説明会議を開催—世界食糧計画の4つのターゲット郡での活動を学校給食に変更する。
- ②4つのターゲット郡の学校菜園にかかわる郡のインストラクター対象の訓練についての会議を開く。
- ③4つの郡のターゲット村135校について、地域・村グループの会議を開く。
- ④事業継続のため、菜園に関するラー郡40村の担当責任者に対して集中説明会を実施する。
- ⑤十分な活動が行われていない村に対して支援のためモニタリングを実施する。

(8) 今後の支援について

事業ターゲットの県、郡、村の担当責任者を対象とした、栄養改善のための研修の実施を望む。

2) ウドムサイ県ラー郡学校給食促進事業の実施

次に、ウドムサイ県の中のラー郡での学校給食促進事業について、ラー郡の教育スポーツ事務所副所長トーンルン・ウォンサワット氏による報告を以下にまとめた。

(1) ラー郡の概要

ラー郡はラオス国の北部に位置し、ウドムサイから28キロ離れ、人口は17,643人（うち女性は8,631人）である。以下に示すように、言語的に4つの民族で構成される。

- ▶モン・クメール語族 59.54%
- ▶支那チベット語族 26.31%
- ▶ラーオ・タイ語族 11.70%
- ▶モンイーウミエン 2.45%

土地の95%が山岳地帯である。

(2) ラー郡の教育事情

ラー郡全体で幼稚園3校、8室。園児166人（女兒76人）教員12人（女性12人）

図1に示すように、準備学級22校、22室。生徒数177人（女子84人）、教員22人（女性22人）である。小学校（5年制）は32校、小学校（低学年のみ）8校。小学校（予備学年のみ）1校（マイ村）。生徒数1,780人（女子792人）、教員142人（女性45人）である。

2015-2016学校年度での全生徒数は2,123人（女子952人）、教員175人（女性79人）である。中学校（低学年のみ）は4校で、生徒数1,180人（女子583人）、教員80人（女性23人）である。

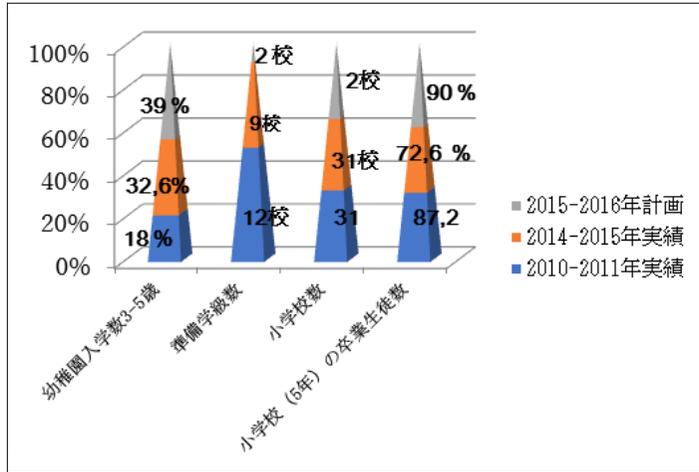
中学校（高学年）は2校で、生徒数719人（女子336人）、教員37人（女性16人）である。

小学校における学校給食の実施前と実施後の状況調査結果は以下の通りである。給食事業実施前と実施後の小学校への入学率は図3のように上昇した。

(3) 事業開始時点

給食促進事業は、世界食糧計画が、2010-2011年度の2学期にラー郡の5校を対象とした給食の試行を行ったことに始まる。試行の内容は以下の通りであった。

- ①うるち米 100g/人/食



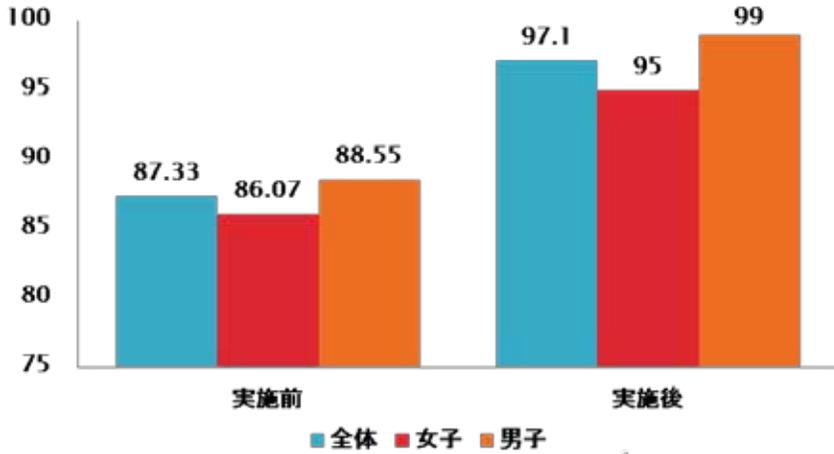
図Ⅱ-4-1 ターゲット郡（ラー郡、ベン郡）の学校給食事業の計画目標

表Ⅱ-4-1 ラー郡の6-10歳児童数と入学児童数の比較と男女平等の度合い

郡	学校年度	3-5歳の生徒数	女子	3-5歳の入学率	小学校数	小学生定着率
ラー	2010-2013	310	158	16.80%	33校	82.6%
	2014-2015	318	147	32.6%	33校	72.6%
ベン	2010-2011	513	249	30.08%	43校	85.00%
	2014-2015	967	506	47.20%以上	52校	88.50%
計画目標						
ラー	2015-2016	1,977	898	39%	33校	90%
ベン	2015-2016	1,079	2,418	47%以上	52校	95%



図Ⅱ-4-2 ターゲット郡（ラー郡、ベン郡）の男女比

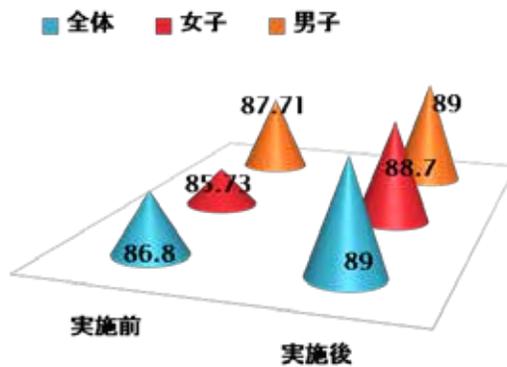


図Ⅱ-4-3 2015-2016年度の小学校の(入学)率

表Ⅱ-4-2 2015-2016年度の小学校卒業率

全体	女子	男子
97.99%	97.25%	98.62%

2009-2010年度と2011-2012年度



図Ⅱ-4-4 給食事業実施前後の男女の割合

- ②費用 600キープ / 人 / 食
- ③植物性油
- ④調理師の手当て 米30kg / 人 / 月

2011-2012年度には学校給食促進計画は AFI からの支援を受け36校を追加し41校となった。

(4) 予算

①予算の詳細

モミ米購入費 3,000キープ (訳者注⁵⁾) /kg、生徒に平均で、白米100g / 人 / 食
調理師手当 150,000キープ / 人 / 月、平均で生徒50人当たり 1名
運営費 2,000,000キープ / 学期、生鮮食材費 800キープ / 人 / 食
用具購入費 900,000キープ (3学期分)
郡内の活動推進支援費

②2013-2014年度以降

AFI からの支援が終了した。その後、2014-2015年度には ECE の資金提供と政府からの無利息融資を事業展開のために獲得した。しかし用具の調達その他のための予算は得られなかった。

(5) 村での事業の推進と強化

その後は、郡による学校へのモニタリングと支援が学期ごとに2回行われるようになる。村の担当責任者に対する管理運営、調理、会計、菜園整備に関する研修も開催されるようになった。

(6) 郡と村レベルの担当者と責任者数

郡の担当者は以下の15人である。

- ①代表：副知事 (社会文化担当)、②副代表：ラー郡教育スポーツ事務所副所長
 - ③委員：ラー郡保健事務所副所長、④委員：ラー郡農業事務所副所長
 - ⑤委員：ラー郡女性同盟副代表、⑥委員：ラー郡計画投資事務所副所長
 - ⑦ラー郡財務事務所副所長、⑧ラー郡青年同盟執行部副書記
 - ⑨ラー郡国家建設戦線副代表
- 委員は、教育スポーツ事務所所員6名、村の担当者8人
- ①代表：村グループ副書記、②副代表：副村長、③委員：校長
 - ④委員：教員、⑤委員：戦線の村代表、⑥委員：女性同盟の村代表
 - ⑦委員：青年同盟の村代表、⑧委員：村の自警団責任者

(7) 健康と栄養状態についてのモニタリング

主に幼稚園、準備学級、小学1年と2年を対象に12の学校で生徒の身長と体重を計測した。

(8) 学校活動

事業計画に沿ったコミュニティの作業参加の様子を以下に示した。



写真Ⅱ-4-12 身長計測風景と栄養状態モニタリング



写真Ⅱ-4-13 コミュニティ作業参加風景 1



写真Ⅱ-4-14 コミュニティ作業参加風景 2



写真Ⅱ-4-15 コミュニティの参加一給食準備ー1



写真Ⅱ-4-16 コミュニティの参加—給食準備—2（かぼちゃとたけのこ）



写真Ⅱ-4-17 学校による小規模な養殖／飼育（ナマズの養殖と魚の養殖）



写真Ⅱ-4-18 学校による小規模な養殖／飼育（豚の飼育と鶏の飼育）

（9）学校の菜園の整備と果樹の植林

多くの学校が活動に取り掛かり、学校ごとの状況によって多様な形態の菜園がいろいろな方法で作られた。ある学校では学校の敷地の外に作られ、野菜の種を用意できる学校は学校菜園を開始した。菜園での植え付けが終了した後も、果物や木陰を得るため、そして景観向上のための植林を行うようになった。

（10）調理師による学校での調理

学校給食の調理師は、常勤の調理師が27.5%、輪番制の調理師が72.5%である。



写真Ⅱ-4-19 学校菜園の整備 1



写真Ⅱ-4-20 学校菜園の整備 2



写真Ⅱ-4-21 景観と食用果実のための植樹



写真Ⅱ-4-22 常勤の調理師 (左) と輪番制の調理師 (右)

(11) 学校での水の使用

年間を通して水が使用できる学校は23校 (56.09%)、6ヵ月から9ヵ月使用可能な学校は7校 (17.07%)、3ヵ月から6ヵ月使用可能な学校は7校 (17.07%)、3ヵ月使用可能な学校は4校 (9.75%) の割合である。

(12) 学校の米倉庫、調理室、食堂の状況

郡内全校の倉庫、調理室、食堂の建設は100%完了したが、学校によっては状況が異なる。恒久的な倉庫と調理室を建てた学校は62.5%、半恒久的な米倉と調理室を建てた学校は37.5%である。



写真Ⅱ-4-23 学校の米倉庫の様子



写真Ⅱ-4-24 学校の調理室の様子1



写真Ⅱ-4-25 学校の調理室の様子2



写真Ⅱ-4-26 学校食堂の様子

(13) 2015-2016年度のコミュニティの参加

コミュニティは野菜と果物1,785kgを提供し、これは1kgあたり平均6,000キープとして10,710,000キープに相当。肉類、魚他は358kgを提供、7,160,000キープ相当。労働の提供は延べ3,458人、121,030,000キープに相当。以上のほかコミュニティは桶、お玉、蒸し籠ほか地元で調達できる用具について11,988,500キープ相当を提供した。

(14) 注目すべき結果の要約

給食推進事業を実施して1年が経過し、以下に示す指標を得た。つまり、生徒の学力の向上、3-5歳の児童の入学率の上昇、新規純入学率の上昇、純入学率の上昇、進級率の上昇、小学校卒業率の上昇、退学率と休学率の低下である。教育面の改善のほか、生徒と父兄の関心が高まり、すべての幼稚園と準備学級で児童数が増加した。

事業実施のポイントは以下の5つがあげられる。

- ①郡と村の教育開発委員会が学校給食事業の実施に参加協力したこと
- ②住民が学校給食事業を理解し、進んで活動に参加したこと
- ③水田を有する住民とコミュニティは村や近隣の村の学校に米を提供あるいは売って支援したこと
- ④自然の野菜や学校の菜園があること
- ⑤多くの学校で野菜を栽培する敷地があること

(15) 今後の課題

ウドムサイ県ラー郡での給食推進事業を通し、事業を推し進める上で課題が明らかになった。野菜の栽培と養殖または飼育は、給食推進事業を進める過程で大きな助けになるが、まだ実施できる状態にある学校は少ない。なかなか学校の計画に組み込まれて実行するには以下の観点から問題がある。

- ①村の教育普及委員に異動がある。
- ②菜園が狭い
- ③42.5%の学校で十分な水が確保できない

そこで解決策をあげると、

- ①学校と村レベルの担当責任者の菜園と飼育のさらなる能力構築

- ②郡の責任担当者が学校とコミュニティのモニタリングと支援を行う。同時に、担当責任者が交代した村においては、特に、事業の目的と方針を説明し理解を高める。
- ③県の担当者は、学期ごとに1回、技術面に関する会議を開き、関係者の知識を深める。
- ④県は学期ごとに3回、モデル学校に対するモニタリングと支援を行う。

(16) 今後の支援について

各グループに沿った能力構築として、様々な食品加工技術や地域内での栄養改善についてのアドバイスをいただきたい。

3) ラオス国ウドムサイ県における給食事業の展開と女性支援

チャンスニー・ユアムサムラーン氏、トーンルン・ウォンサワット氏のインタビューを通じて、ラオス国における女性支援の一環として、小学校における給食事業支援は、女性支援としても有効と考えられた。つまり、男女の学びを等しくする機会を与えること、また、子供が小学校に通うことによって、家事労働の負担が軽減され、親が仕事に専念できることが窺われた。さらに、村の女性同盟を通じて調理員の代替、または指導を行うことで、一つの女性の仕事として認知され、ひいては女性が社会で貢献できることが周知されるという2重の利点が垣間見られた。

Ⅲ ラオス人民民主共和国におけるセミナー及び ワークショップの開催

高増 雅子

1. 学校給食プログラムを通したリーダー育成と女性支援

1) はじめに

ラオス教育スポーツ省 (MoES) は、2015年までに「万人のための教育 (EFA)」を達成するために、「公平さとアクセス」、「質と妥当性」、「教育行政とマネジメント」を3本柱とした教育改善に積極的に取り組んでいる⁶⁾。このうち、学校建設、新規教員採用に積極的に取り組んだ結果、初等純就学率が84% (2005年) から95% (2012年) に向上した⁷⁾。

しかし、教科書・教材不足、不十分な教授時間、不適切なカリキュラム、教員数の絶対的不足、教員の資質・能力の低さ等の要因から、最終学年 (5年生) 残存率は70% (2012年) に留まっている。また、都市部と農村部の教育格差もあり、背景には、家庭の貧困と親の教育の重要性に対する認識の低さ (学校に行っても知識が身に着かない、生活の役に立たない等)、季節労働、児童労働、学校施設が劣悪であること等が挙げられている。

これらの課題に取り組むための教育行政のもつ人材能力は、中央・地方ともに不十分で、必要な予算の確保も厳しい。そのため、農村部の小学校では給料も安いせいか、女性教員がほとんどである。学校運営も、保護者や寺院といった地域社会からの財政支援を受けて行っている小学校が、多くみられる。これに対し、MoESは各村に村落教育開発委員会 (VEDC) を設置し、コミュニティの参画を得ながら学校改善を促しているが、なかなか進展していない⁸⁾。

MoESは、2025年までの栄養に関する中長期計画で、学校給食の充実、学校菜園の充実、栄養教育・食文化継承のカリキュラム化、寄生虫駆除と鉄剤の配布・トレーニングを挙げている⁹⁾。食の面から学校教育を支える学校給食は、現在あまり普及しておらず、多くの児童たちは昼休みに一旦家に昼食を食べに帰るか、二部制学級に通っている。しかし、家庭によっては、経済的な理由で十分な食事が摂れず、栄養不良とみられる児童が多くみられる。

そのため、国際連合世界食糧計画 (以下 WFP) は、ラオスにおいて2002年より栄養補助食や米や油を小学校に提供し、学校給食の普及を支援してきた。また、食材を各家庭から持ち寄ったり、学校菜園で野菜を育てたりして賄っていたが、たんぱく質や微量栄養素不足がみられた。これらの栄養素の不足は、発達障害や知的発達障害、感染症に感染しやすいといった児童の健康にも大きく影響する¹⁰⁾。

本プロジェクトは、山間地域における学校給食活動を支援するため、また、学校給食に関する女性人材の育成も兼ねて、日本の米食を中心とした学校給食プログラムをラオスの現状に合わせて改良した。2015年と2017年の2回、学校給食セミナー及びワークショップをラオス山間地域で開催した。このような活動は各国で行われてきてはいるものの、学校給食に関する人材育成、特に学校給食に多く携わっている女性の人材育成については緊急性を要する課題と考える。

そこで、本研究の目的は、ラオス北部地域でセミナー及びワークショップの実施することで、学校給食現場に従事する女性を中心とした女性同盟員や学校教員・行政官、学校給食を管理する村落教育担当者への食教育支援を行うことと、持続可能な学校給食・地域コミュニティに必要な女性

リーダー育成の可能性を探ることである。

2) セミナー及びワークショップの概要

ラオスでの学校給食関係者への人材育成と女性支援のため、セミナー及びワークショップを開催した。ワークショップ参加者は、ラオス北部のウドムサイ県、ルアンナムター県、ポンサリー県の3県の学校給食に関する行政官、小学校校長や教員、村落教育開発委員会（VEDC）の構成員、女性同盟の技術員、教員養成校教員及び学生であり、各回とも女性が半数であった。

ワークショップの時期と実施場所は、第1回セミナー及びワークショップは、2015年10月にウドムサイ県教育委員会会議場で、第2回目は、2017年10月にルアンナムター県教育委員会会議場で実施した。セミナー及びワークショップ参加者の属性は、表1・表2に示す。ただし、第1回目の参加者が、第2回目にも8名（18.6%）参加していた。



図Ⅲ-1-1 ルアンナムター・ウドムサイの位置
出所：Zen Tech ラオス白地図2018

表Ⅲ-1-1 各回セミナー及びワークショップ参加者の属性

回数	性別	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代
1回目	男性(n=14)	0.0%	50.0%	28.6%	21.4%
	女性(n=14)	7.1%	50.0%	28.6%	14.3%
	合計(n=28)	3.6%	50.0%	28.6%	17.9%
2回目	男性(n=22)	22.7%	40.9%	36.4%	0.0%
	女性(n=21)	19.0%	61.9%	14.3%	4.8%
	合計(n=43)	20.9%	51.2%	25.6%	2.3%

表Ⅲ-1-2 各回セミナー及びワークショップ参加者の所属先

回	所属	教育スポーツ省			小学校			女性同盟	村落教育開発委員会	教員養成校	
		役職	役職	技官	校長	教員	技術職	技術者	村長	教員	学生
1回目	合計(n=28)	3.6%	17.9%	10.7%	21.4%	32.1%	7.1%	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%
2回目	合計(n=43)	4.7%	11.6%	7.0%	11.6%	9.3%	0.0%	16.3%	20.9%	11.6%	7.0%

(1) セミナー及びワークショップの実施内容

セミナー及びワークショップの実施内容は、第1回目は①学校給食について ②衛生管理について ③学校給食献立についての3部構成で、1日で終了した。

第2回目のセミナー及びワークショップでは、①望ましい学校給食とは ②栄養バランスの取れた食事とは(教材活用法) ③自分たちにとって持続可能なよりよい学校給食についての3部構成で3日間行った。第1回目も第2回目のワークショップも、グループワーク及び発表を取り入れたアクティブラーニング形式で行った。

ポンサー県等開催地より遠距離の地域からの参加者は、バスを乗り継ぎ泊りがけで来るため、前日からウドムサイに泊り、1日参加して次の日に帰るとのことであった。最初にワークショップを計画したときには、1日実施が精一杯かと考え、丸1日を使ったセミナー及びワークショップの内容を計画した。

ワークショップ終了後、参加者の感想から、1回目は内容を詰め込みすぎた感があり、「もっとゆっくり」という意見が出された。そのため、第2回のセミナー及びワークショップは3日間連続して実施した。また、通訳の方がセミナーの内容をラオ語また日本語に訳すのに、思ったより時間がかかっていた。事前に通訳の方には、シナリオを渡し、専門用語等も理解していただいていたが、もともとラオ語にはない用語もずいぶんあり、それを説明するのも時間がかかっていた。

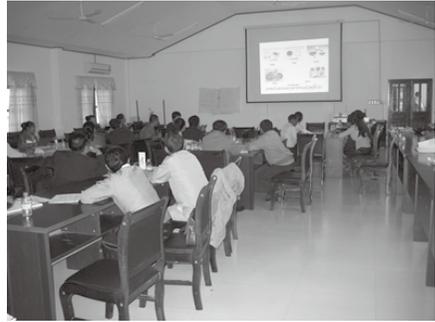
表Ⅲ-1-3 第1回セミナー及びワークショップの時間割表

1	10:00-10:15	開会の言葉
2	10:15-11:30	学校給食について
3	11:30-11:45	休憩
4	11:45-13:00	衛生管理について
5	13:00-14:00	休憩
6	14:00-15:00	学校給食献立について
7	15:00-16:00	グループワーク及び発表
8	16:00-16:30	時間管理について

第1回ワークショップ実施風景



写真Ⅲ-1-1 第1回セミナー開催



写真Ⅲ-1-2 学校給食に関する情報提供

3県からの様々な職域の参加者であるが、ランダムに分け、班を構成した。



写真Ⅲ-1-3 ティータイム



写真Ⅲ-1-4 話し合いの準備

ティータイムは和やかな情報交換の場で、その間にスタッフはワークショップの準備をする



写真Ⅲ-1-5 献立を各グループで考える



写真Ⅲ-1-6 各グループの献立発表

献立作成の話し合いも、女性が主となって行っている班が多くみられた。また、班で話し合った事を発表しているもの女性が多くみられた。

第2回セミナー及びワークショップの日程及びワークショップの実施内容

1日目

- ・ルアンナムター県教育委員会からの挨拶
 - ・メンバー紹介
 - ・学校給食とは
日本の学校給食の歴史 ・日本の米飯給食の現状
 - ・学校給食の効用
- ※ウドムサイ県の関係者が、学校給食による子どもたちへの効果について発表
- ・体内での食べ物の働き
消化と吸収（エプロンシアター・紙芝居等の教材紹介）
 - ・食べ物の働き
 - ・栄養素の働き
- ※ラオススポーツ教育省担当官による、食品と栄養素との関係について講習会内容等の現状を発表してもらう。

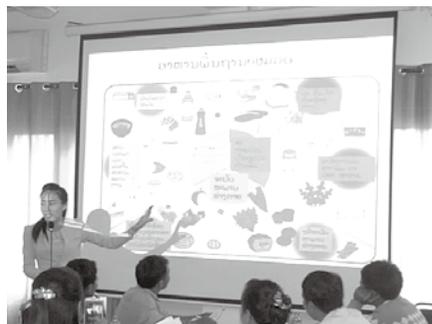
第2回セミナー及びワークショップ実施風景



写真Ⅲ-1-7 開会にあたり、全員で記念撮影（中央手前男性がルアンナムター県教育委員会委員長、左端女性がルアンナムター県教育担当課長）



写真Ⅲ-1-8 ラオススポーツ教育省学校給食担当官による食べ物の働き説明



写真Ⅲ-1-9 ウドムサイ県の関係者による給食の現状発表

2日目

・ 1日目の振り返りと質問

・ 食品と栄養素

ラオスの食品カードの使い方（各班で食品カードを3つの食品群に分けてみる）

ラオスの食品成分表の使い方（各班で鉄分・カルシウム・タンパク質の多い食品を探し、発表する）

・ 食品衛生と安全

食中毒とは 食中毒の防止（各自、日頃行っている衛生管理をカードに書き、班でまとめてから、発表する）

・ 手洗いの仕方

手洗いを実施し、手洗いチェッカーで、正しい手洗いができたか、チェック



写真Ⅲ-1-10 お互いの情報を付箋に書き意見を出し合う



写真Ⅲ-1-11 手洗いを実践

3日目

・ 2日目の振り返りと質問

・ 食物と栄養素

・ お菓子とエネルギー

実際の菓子のエネルギー量を見ながら、お菓子マップに置いてみる。1回のおやつ分200kcalの菓子を選んで試食する。菓子の選び方で考えたことを発表する。

・ 栄養計算の仕方

食品成分表の栄養価について、自分で考えた料理の食材重量で換算してみる。

・ 給食献立作成

オーストラリア学校給食支援で作った模範献立について、栄養評価をしていく。特に、鉄分、カルシウム、タンパク質の基準値をクリアすることを考えて、各自献立作成を行う。お互いの献立を評価した後、班の中でのベスト献立を全体発表し、公表後優秀な献立を表彰する。

栄養価計算を理解するのに、1時間以上かかったが、参加者の8割程度は、理解し、実際に使うことができるようになった。ただし、高齢の村長たちは、なかなか理解することが難しいようだった。

献立作成と栄養価計算の仕方が理解できると、各班とも積極的な意見が出てきて、自分たちの地域の児童の喫食状況等の情報交換も、行われていた。



写真Ⅲ-1-12 各自自分の考えた献立の栄養価計算を行う

(2) セミナー及びワークショップの教材

セミナー及びワークショップで使用した教材は、筆者らが2013年から行ってきた開発途上国家庭科教育推進活動の成果物である食教育教材を用いた。この教材は、日本の小学校・中学校・高等学校の家庭科教材を、発育年齢を考え、開発途上国の文化、慣習、環境等に合わせ、誰もが使いやすい形を目指して作成してきたものである。2回とも、実施時にはラオ語に翻訳したテキストや教材を使用した。

①ラオスの食品成分表冊子

食品成分表に関しては、すでに日本の研究者（村上伸子氏等）によって作られたラオス食材100g当たりの食品成分表 [The Lao food book project 2008] があった。

しかし、学校給食の現場では一切使われておらず、ラオス教育省学校給食関係者でもその存在を知らなかった。この資料をもとに、誰にでもわかりやすくするため、地元の食材写真をのせ、食品特性によって黄色・ピンク。緑に色分けにしたテキストを作成した。



写真Ⅲ-1-13 食品成分表表紙

Lao	English	Picture	Ener- gy	Prot- ein	Car- b	Di- et	Ca	P-	Fe	Na	VB1	VB2	Ni-	VC	Fibe- re
ບຸນ	Bread		257	9.7	1.0	52.0	40	77	3.0	25	0.42	0.31	0	2	~
ບຸນ ຂາຍ	Com (white)		148	4.4	(0.8)	20.9	13	116	0.7	0	0.22	0.10	1.8	6	~
ບຸນ ສີຂາຍ	Com (red/low taste)		173	4.4	(1.5)	25.4	8	107	0.8	25	0.22	0.13	1.6	11	(0.4)
ບຸນ ສີຂາຍ	Com		257	8.3	(1.5)	77.5	11	86	0.4	0	0.08	0.05	0.5	0	(1.4)

写真Ⅲ-1-14 食品成分表内容の一部

②食品カード

上記のテキストの内容を1食品ずつカード化し、カードの裏には英語とラオス語で食品の成分を記載した。カードは、児童がカルタのように使えるように、B6の大きさ、パウチでコーティングしたカードを作成した。



写真Ⅲ-1-15 カードに使用した写真

L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
Genl	100	Protein	4.4	P	107	130	5.13
Omega	ACIAD	Fat	13.3	Fa	3.5	15	2.8
Code	AA001	CHO	32.3	Ch	16	110	10
Energy	113	Ca	8	130	0.12	Flav	16.4

L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
Genl	104	Protein	5.1	P	95	130	5.13
Omega	AAA	Fat	13.3	Fa	3.5	15	2.8
Code	011	CHO	32.3	Ch	16	110	10
Energy	107	Ca	12	130	0.18	Flav	16.4

L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
Genl	101	Protein	4.4	P	107	130	5.13
Omega	ACIAD	Fat	13.3	Fa	3.5	15	2.8
Code	AA001	CHO	32.3	Ch	16	110	10
Energy	110	Ca	8	130	0.12	Flav	16.4

L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)		L'Espresso (L'Espresso) 100g (100g) (100g)					
Genl	101	Protein	5.1	P	11	130	5.13
Omega	ACIAD	Fat	1.6	Fa	1.0	15	2.8
Code	AA001	CHO	32.3	Ch	16	110	10
Energy	102	Ca	10	130	0.18	Flav	16.4

写真Ⅲ-1-16 カードの裏の情報

③ タペストリー

日本の小学校や中学校で、食教育授業の時にもよく使われている壁掛け型のタペストリーを作成した。黒板や壁に掲示できるように、栄養素の働きや多く含む食品群別に説明している図を、A1の大きさに防災布に印刷した。

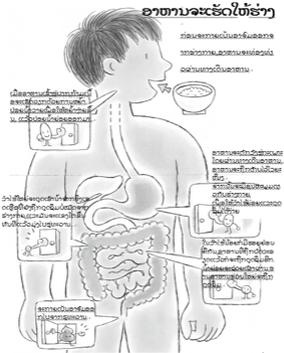
また、同じように、食品群分けにカードを載せられるような図、消化器官の働きの図、手洗いの図等を作成した。



図Ⅲ-1-2 食品群別表



図Ⅲ-1-3 カード用食品群別表



図Ⅲ-1-4 消化器官の図



図Ⅲ-1-5 手洗いの図

④手洗いチェッカー

衛生教育ツールとして、よく使われているサラヤ株式会社の「手洗いチェッカー」を教材として使用した。参加者の手に専用ローションを汚れに見立てて塗り、手洗い後、専用ライトの下に手をかざすと洗い残しが光り、適切な手洗いができているか確認できる。誰が見ても、手洗いの不十分であることがわかるのと、持ち運びが簡単で、難しい説明が要らないことがチェッカーの利点である。

⑤エプロンシアター

エプロンシアターは、低学年の小学生や幼稚園・保育園の園児を対象に使用される教材である。エプロンシアターは、児童の反応に合わせて、繰り返しの台詞や歌で児童の参加を促す。同じ題材を何度も演じる事で、児童はその内容に興味をもち、より深く理解する事が出来るようになる。今回、教材として持って行ったエプロンシアター「なんでも食べる元気なまあちゃん」は、実物大の消化器官の配置や消化器官の働きがよくわかるように制作されている。

また、エプロンのポケットから次々に様々なものが現れることで、児童の驚きと興味を引き出してくれる。今回のエプロンシアターは、消化後の便の形がいろいろ用意されており、食べるものや体調によって異なる便になることを理解できるようになっている。

エプロンシアターは布で作っているので、折りたんでどこにでも持って行くことができるのと、布の持つやわらかく、あたたかい質感は児童に好まれ、児童が触れても、安全な教材でもある。

⑥パネルシアター

パネルシアターは、あまり文字を使わず、絵をPパーパー（不織布）や和紙にカラー印刷したものを切って、付着力のよいパネル布に張り付けながら使っていく。

子どもたちに「手を洗いましょう」といっても、言うだけではなかなか「手洗い」をしてくれない。市販品ではあるが、パネルシアターの「手を洗おう。おなかの痛くなったゆうた」は、児童や手洗いの経験のない人たちにも、なぜ手を洗わなければいけないのかについて、わかりやすく理解できるように作られている。目に見えないばい菌の世界をパネルシアターで表現することで、実際には目に見えない菌の存在を、児童が理解できるようになっている。

このパネルシアターは、児童への「手洗い」を促すことで、保健衛生の大切さをわかりやすく伝

えている教材である。

⑦ 調理従事者の衛生管理チェック表

学校給食を作るにあたり、衛生管理の面からも調理従事者の身支度の点検は大切な項目である。しかし、ラオス教育省でもあまり意識していなかったのか点検表は作られていなかった。このチェック表は、簡単な項目ではあるが、調理従事者が、手洗い、爪、身支度等をチェックし確認できるように作成した。「表は給食施設の入り口に貼って、いつもチェックできるようにしておく」と説明した。

ຕາຕະລາງກວດຄວາມອາໄນະໄມຂອງຜູ້ມີອາຊີບ

ວັນທີ		11/1		11/2		11/3		11/4		11/5	
		ຊື່	A	B	A	B	A	B	A	B	A
ບ່ອນ ໃຫ້ ໝາຍ ຖືກ	ໄດ້ໃສ່ແຫວນ, ທາວເວັບມືບໍ່?										
	ໄດ້ມັດຜົມໄວ້ບໍ່?										
	ໄດ້ຕັດເວັບມືສັ້ນບໍ່?										
	ບໍ່ວາຈະເປັນພະຍາດຖອກທ້ອງ?										
ອື່ນ ໆ											

図Ⅲ-1-6 調理従事者の衛生管理チェック表

⑧ 学校給食献立事例集

すでに、2012年にオーストラリアのラオス学校給食サポート隊が作成していた学校給食用の献立例が、10例ほどあった。しかし、ほとんどの学校給食関係者がその存在を知らずにいた。また、この献立は、タイの学校給食をまねしたようで、ラオ語とタイ語が混ざった状態で、献立の栄養価計算も間違っているところが多々みられた。

そこで、WHO やユニセフのデータからラオスの児童にとって望ましい栄養価を換算し、献立の栄養計算をし直した。この献立を、児童にとっての適正值と比較し、何を過不足するとよい献立になるか説明をつけた。また、ラオスの人が一般的に作ることでできる材料や味に直せる献立は、訂正した。

しかし、開催したラオス北部では独特の食材や料理、調理法もあり、ワークショップ参加者の中には、自分たちに合った献立への変更や工夫する様子が見られた。

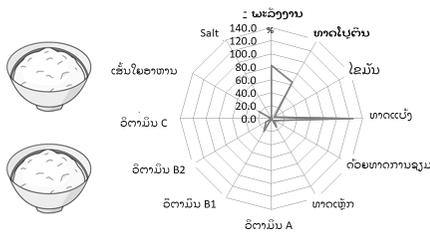


ມື້ໂພຊະນາການທີ່ຕ້ອງການສໍາລັບໂຮງຮຽນປະຖົມ

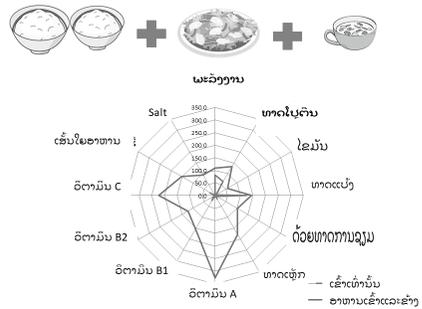
	ພະລັງງານ	ທາດໄປຼ	ໄຂມັນ	ທາດເບຼັງ	ດ້ວຍທາດກາກບອນ	ທາດເຮັກ	ວິຕາມິນ A	ວິຕາມິນ B1	ວິຕາມິນ B2	ວິຕາມິນ C	ເຕັນິນ	Salt
	kcal	g	g	g	mg	mg	µg	mg	mg	mg	g	g
ຜູ້ຊາຍ 8-9 ປີ	1850	35	51.4	266	550	6	350	0.8	0.9	50	12	5
ແມ່ຍິງ 8-9 ປີ	1700	30	47.2	244	600	8.5	350	0.8	0.9	50	10	5.5
ຜູ້ຊາຍ ຜູ້ໃຫຍ່	2300	50	63.9	331	550	6.5	650	1.2	1.3	85	20	8
ແມ່ຍິງ ຜູ້ໃຫຍ່	2000	40	55.6	288	550	9	500	0.9	1	85	18	7

图Ⅲ-1-7 学校給食献立例と小学校中学年・高学年の適正な栄養価

ເຕະບານ 2 ຈອກ (300g) ຂອງໂພຊະນາການເຂົ້າ
ເປັນເມັ່ນທຽບກັບຫນຶ່ງອາຫານຂອງ
ເດັກນ້ອຍຊາຍ ?? (8-9 ປີ)



ເມນູຂອງສົມດຸນຫນຶ່ງອາຫານ

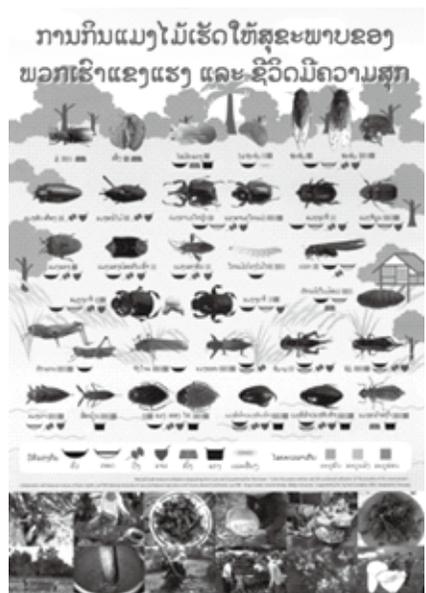


图Ⅲ-1-8 兒童の1食の栄養価の充足率について

⑨ ラオスにおける昆虫料理ポスター

ラオスでは、昆虫料理を積極的に食べる種族と全く食べない種族とがある。ラオス北部地域では、市場やナイトマーケットで昆虫料理をよく見かけた。このポスターは、トヨタ財団の研究助成で10年ほど前に作成されたものであるが、これも現地の学校給食に関する人たちには、ほとんど配布されていなかった。

ラオスの児童の栄養強化に際し、現状では動物性たんぱく質やミネラルの不足が多々見られるため、入手可能性の高い昆虫は、児童の栄養源になるのではと考える。また、昆虫食は、貴重な栄養源であるとともに、自分たちの食文化を改めて確認する意味でも、このようなポスターは、多民族が共存するラオスの学校給食現場に必要なポスターではと考える。



图Ⅲ-1-9 昆虫料理ポスター

(3) セミナー及びワークショップの評価測定について

① セミナー及びワークショップの効果測定

a. セミナー及びワークショップへの評価

教育関係者へのスキルや知識の伝達、教材作成等の開発と協働の可能性を検討するため、各回とも参加者に自記式アンケート調査を、実施した。

ワークショップ終了後、各回参加者に、「参加者自身のセミナー及びワークショップへの参加態度」「今後の活動へのワークショップの効果」「次回のセミナー及びワークショップへの参加の意思」について、質問した。

b. 食教育教材の評価

各回ともワークショップ終了後、参加者に使用した教材について「今後、自分の職域で、これらの教材が役にたつか、欲しいかどうか」を確認した

(4) 食環境調査

セミナー参加者へのインタビュー調査で、ラオス北部地域、特にウドムサイ、ルアンナムターの

学校給食の現状について把握した。また、ウドムサイ、ルアンナムターの小学校や民族学校の学校給食施設に行き、女性の給食従事者にインタビュー調査を行った。

一方、学校給食に使用する食材については、ルアンナムター及びウドムサイの公設市場で、価格調査を実施した。

3) 結果

(1) 給食献立作成に関して

第1回セミナー及びワークショップでは、各グループの課題として「自分たちの地域に合った給食献立を立ててみよう」とし、その際に、「どのような理由でこの献立を立てたのか、献立の特徴をいってみよう」を付帯した。

発表時に、魚スープを主菜としたグループは、2グループあった。「魚スープはラオス人が好きな料理であり、消化も良く、栄養価の高い料理」と報告した。もう一つのグループも、「栄養価が高いし、魚や使っている野菜は手に入りやすい」と報告した。2015年に訪問した小学校でも淡水魚を使った給食を提供しており、学校給食メニューとしては、ポピュラーな料理のようである。

鶏のスープを主菜に選んだグループは、「栄養価が高く、野菜も入っておりバランスの取れた料理」と報告していた。他のグループは、主食がもち米（カオ・チャオ）を選んでいて、このグループは、うるち米の白飯を選んでいて、それぞれの小学校に通う児童の種族によっても、主食・主菜に違いがみられるようだ。

野菜炒めを主菜に選んだグループは、「野菜は、栄養がたくさんあるし、手にはいりやすい食材」と報告していた。ただ、主菜に何もタンパク質系の食材が含まれておらず、野菜のみでは児童の成長には支障が出ることを、参加者に伝えた。

茹で野菜のサラダを主菜に選んだグループも、「野菜は、栄養がたくさんあるし、手にいりやすい食材であるし、児童の好きな献立である」と報告していた。胡麻やたくさんの山菜を使っており、野菜不足の日本の子どもたちに食べさせてみたい献立ではあるが、やはりタンパク質不足の献立であった。

献立作成時の情報提供として、献立作成前に栄養素の話をし、色々な食材からバランスよくとることが、児童の成長にとっては重要なことと伝えたが、ラオス北部の学校給食の現状では、これが精一杯の工夫なのかとも考える。

どの献立を見ても、ラオス料理には欠かせないパクチーやミント、タマリンド、生姜、苦い緑茄子、小玉ねぎといった香味野菜がたくさん使われていた。児童も幼いころから食べなれている味と考えると、伝統的な野菜や料理での食の伝承は児童にとっても大切なことと考えると、大事にしていきたいことのひとつでもある。

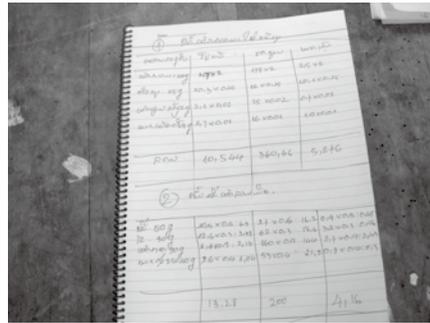
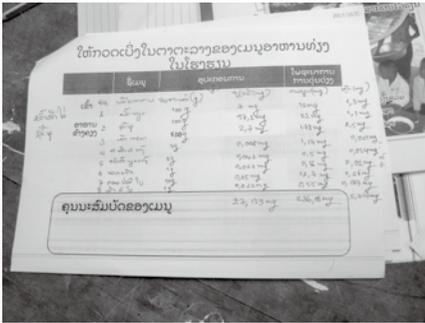
参加者に、ワークショップで提案したことのひとつに、学校菜園でも作りやすい大豆の活用である。大豆は植物性たんぱく質、脂質も豊富に含んでおり、栄養価が高い割に安価に使える食材である。ぜひ活用してもらいたい食材の1つである。

ラオスの児童の身長は、世界基準と比較しても低く、体重も軽い。また、成人の平均寿命も短いという現状を変えていくためには、もう少しタンパク質やミネラルの多い食材を学校給食献立に使用する工夫が必要であることを、何度も繰り返し、学校給食従事者に伝えていく必要があると感じた。

2回目のワークショップでの献立作成では、もう一段進めて自分たちでたてた献立の栄養価計算

をすると、特に栄養素として不足しがちなカルシウム、鉄に注目すること、という課題を行った。

しかし、一食当たりの食材の重量の把握、また栄養価のみに考えが行ってしまい給食の食材料の値段を考えながら作成すること等、日本で学校給食献立をたてる時に学習して会得するスキルが、ラオスの給食従事者の中では、今までの自分たちが経験したことのみで献立作成をする参加者のグループが多くみられた。



写真Ⅲ-1-17 第2回ワークショップ献立作成および献立計算①

栄養価計算するときが一番重要なスキルである食品成分表の使い方（掲載されている食材は100g当たりの栄養価であり、使用する重量に合わせて計算をする）ができず、食品成分表の使い方を会得するまでに、1時間以上かかった参加者が多かった。算数のパーセンテージの計算をしたことがない人がたくさんおり、各グループで理解できた人が、できない人に教えるという光景が多くみられ、少数のファシリテーターでセミナーを運営していく上で、大いに助けられた。

第1回のセミナー及びワークショップに参加していたウドムサイ県の給食担当者の人たちは、前回のワークショップの内容を理解していたので、今回もバランスの取れた給食献立を立てており、最優秀献立賞を受賞していた。このようなセミナーやワークショップに何回か参加することで、得られる情報は多いのではと感じた。

(2) セミナー及びワークショップの評価

1回目・2回目の参加者へのアンケート調査結果を表Ⅲ-1-4に示す。「参加者自身のワークショップへの参加態度」では、1回目は全体の89.3%、2回目は、95.3%の参加者が「ワークショップに積極的に参加した」と回答し、1回目よりは、2回目のほうがより積極的に参加したと回答する参加者が増えていた。

「今後の活動へのセミナー及びワークショップの効果」については、1回目は89.3%、2回目は100.0%の参加者が「効果あり」と回答した。「次回のセミナー及びワークショップへの参加の意思」については、1回目は85.7%、2回目は83.7%の参加者が、「参加したい」と回答した。

(3) 使用した食教育教材の評価

使用した食教育教材の評価について、表Ⅲ-1-5に示す。様々な教材を使いながらセミナー及びワークショップをおこなったが、参加者が一番役にたつと思った教材は、児童に分かりやすいように絵で食品を表し、食品を栄養的な働きによって分類したタペストリーで、1回目は82.1%、2回

表Ⅲ-1-4 セミナー及びワークショップに対する評価の割合

質問項目	回数	回答内容				有意確率(両側)
		積極的	やや積極的	やや消極的	消極的	
ワークショップへの参加態度	1回目(n=28)	89.3%	107.0%	0.0%	0.0%	0.075
	2回目(n=43)	95.3%	4.7%	0.0%	0.0%	
ワークショップの効果		効果あり	やや効果あり	あまり効果なし	効果なし	0.825
	1回目(n=28)	89.3%	107.0%	0.0%	0.0%	
	2回目(n=43)	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
再度参加の意思		参加したい	やや参加したい	あまり参加したくない	参加したくない	0.821
	1回目(n=28)	85.7%	14.3%	0.0%	0.0%	
	2回目(n=43)	83.7%	16.3%	0.0%	0.0%	

表Ⅲ-1-5 役に立つと思う教材の割合(複数回答)

	食品群の図	食品成分表	食品カード	献立集	消化吸収の図	エプロンシアター	衛生チェック表	手洗いキッド
1回目(n=28)	82.1%	71.4%	50.5%	53.6%	46.4%	53.7%	42.9%	71.4%
2回目(n=43)	93.0%	74.4%	74.4%	65.1%	67.4%	65.1%	67.4%	90.7%
有意確率(両側)	0.937	0.787	0.077	0.478	0.051	0.083	0.045	0.368

表Ⅲ-1-6 ぜひ欲しいと思う教材の割合(複数回答)

	栄養学習教材	栄養指導用教材	給食用教材	給食器具	その他
1回目(n=28)	3.6%	57.1%	42.9%	14.3%	50.0%
2回目(n=43)	16.3%	41.9%	40.0%	12.0%	7.0%

目は93.0%の参加者が、役に立つと回答していた。

続いて、地元の食品100g当たりの栄養価を食品の写真とともに載せた食品成分表冊子は、1回目は71.4%、2回目は74.4%、地元食品の写真と情報をカルタのようにラミネートでカード化した教材は、1回目は50.5%、2回目は74.4%の参加者が役に立つと回答していた。

また、手洗いの仕方の良し悪しをみるための手洗い検査キットは、1回目71.4%、2回目90.7%の人が役に立つと回答していた。

一方、自分の職域でぜひほしいと思う教材を、表Ⅲ-1-6に示したが、栄養指導用教材と回答した人が一番多く、続いて給食用教材であった。

(4) 食環境調査

2017年10月に、ルアンナムターの市内公設市場での価格調査の結果を表に示す。2015年10月にもウドムサイの市内公設市場で価格調査を行ったが、ウドムサイのほうがやや価格が高い食材もみられたが、ほとんどの食材がほぼ同じ位の価格であったため、2017年のルアンナムター公設市場の平均価格を記載した。

給食従事者に、食材の入手方法についてインタビュー調査を行ったところ、「学校菜園で出来た野菜を使う」「父兄が持ってきてくれた食材を使う」「政府からの支給品を使う」「市場で、その時

2015年10月ウドムサイ県学校給食施設インタビュー調査から



写真Ⅲ-1-18 ウドムサイ県ラー郡山間部小学校の調理と給食配食風景



写真Ⅲ-1-19 調理室の前に並んで順番に、



写真Ⅲ-1-20 給食の喫食風景

安いものを使う」という回答が多く聞かれた。あまり計画性のある回答は、得られなかった。

給食献立は、どの小学校や中学校も1週間分立てているとのこと、少ない予算で計画的に食材の調達をするためには、自給自足や寄付に頼るというだけでは、今後より難しくなるのではと考える。学校のある地域の公共市場で、給食に使うものがどのくらいで売られているのか、特に学校菜園や寄付に頼れない食材の入手には、必要な情報である。

ルアンナムターもウドムサイも、給食に必要な調味料や油等は、中国からの輸入のものが多くみられ、価格もやや高めであった。

MoESによる学校給食への給付金は、一人1食当たり500キップ（日本円で約7円）である。価格的に見ても、学校給食材料として市場で買える食材も限られてくる。ほとんどの小学校の学校給食は、自校の学校菜園や父兄からの寄進された食材や寄付金で賄われているのが現状である。

参加者へのインタビュー調査によれば、学校給食活動には、地域のコミュニティが無償で作業参加してくれているようだ。その内容は、給食準備・調理のほか、小学校での小規模な魚の養殖、鶏や豚の飼育、学校菜園の整備と栽培、果樹の植林などの作業を行っている。コミュニティから、学校給食のために、野菜、果物、肉、魚の食品、地元産の調理器具の提供も受けている。

ウドムサイ県ラー郡では、村の学校給食担当者のスキルアップのために、管理運営、調理、会計、菜園整備に関する勉強会を実施しており、2015・2017年のセミナー及びワークショップにも参加していた。下記の写真は、2015年10月にウドムサイ県ラー郡山間部で、学校給食を行っている小学校を訪問した時の様子である。訪問した3校の給食調理従事者は、ラオス女性同盟の人たちであった。

児童は、主食である白飯（もち米の蒸したもの）は自宅から持ってきており、おかずのスープと炒め物を学校給食として、支給されている。



写真Ⅲ-1-21 廊下に1週間の給食献立



写真Ⅲ-1-22 校庭の横に学校菜園

献立は、校長先生と女性同盟の給食担当の人とで決めるそうで、この献立を見て父兄から材料を持ってきてもらうこともあるとのことであった。

2017年10月、ルアンナムター県の少数民族の村の小・中学校の給食施設を視察した。少数民族が生活する地域は、ラオスの中でも貧しい地域が多く、小学校や寄宿舎には給食設備があったが、どこも土間でじかに、薪を燃やして直火で煮炊きを行い、雨風をやっと防げる程度の建物で、鍋・釜も1つずつという設備であった。

一方、街中の小学校は、学校給食はなく、学校の敷地内に駄菓子屋があり、お菓子やスナックの類を販売していた。貧富の差があるラオスにおいても、このような買い食いが公的に認められていてよいのかと、疑問に思った。

下記の写真は、ビエンチャン市街地にある私立ホアンカオ保育園・幼稚園・小学校の給食風景である。日本から幼稚園教育と給食を指導する専門家が派遣されており、ラオス首都ビエンチャンの私立学校ということもあり、今まで視察した小学校の施設とは段違いであった。今後、このような施設及び女性リーダーを手本として、ラオスの学校給食施設整備や給食の質の向上が行われればと考える。



写真Ⅲ-1-23 ビエンチャン市街地にある私立ホアンカオ保育園・幼稚園・小学校



この私立学校の創始者であるチャントソン女史は、日本のお茶の水大学教育学部に留学し、日本国内の大学で講師を務める傍ら、ラオスの子どもや女性を支援する活動を行っている。日本とラオ

スとを行き来しながら、ラオス女性の自立支援のためにラオスの伝統織物や染物、衣服の制作等の工房を作り、技術習得から販売までを支援しており、現在 NPO 法人「ラオスの女性とともに仕事を作る会」の代表を務めている。

彼女は、日本の教育に関しては、絶大なる信頼を持っている。ホアンカオは、ラオス語で「稲穂」という意味で、子どもたちの実りある成長を願うためにつけられた名前である。彼女の志に共感して、現在日本からベテランの保育士が在申している。そのため、日本式の厨房や、給食献立の立て方、給食に対する考え方等を、現地の給食担当者たちに伝えるとともに、協働しながらより良い給食のためのマニュアルを作りつつある。この保育園・幼稚園・小学校の給食に使われている食器は、日本から買ってきたものであり、給食に使われる食材は、担当者がタイに買い出しに行くとのことであった。理想をもったチャントソン女史の創設した私立学校だからこそ、できることかもしれない。



写真Ⅲ-1-24 小学部低学年クラスの喫食風景



写真Ⅲ-1-25 飲用のミネラルウォーター (2017年10月筆者撮影)

見学した日の献立は、アヒルのラープ、野菜スープ、カオニャオの3品であった。今まで見てきた給食の中では、一番バランスの取れた給食であった。伝統的な料理であるラープには、ラオスでよくつかわれるパクチーが使われており、3歳児クラスでは、カオニャオの丸め方を保育士が子どもたちに教えていた。

浄水設備が首都といえどもまだ整っていないので、飲料用の水は各回に置かれており、清潔感にあふれる教室や施設であった。今後、ラオスの学校給食の模範的存在になってほしいのとともに、ラオスでの学校給食に関する女性リーダーの養成施設になっていただければと考える。私立ホアンカオ保育園・幼稚園・小学校は、日本ほど学校給食施設が十分整っているわけではないが、ラオスにおける基本的な衛生管理、食材の扱い、献立作成は十分模範となるものであり、今までの日本女子大学で培ってきた情報、教材をこの施設に支援していきたいと考える。

4) 考察

(1) セミナー及びワークショップの効果測定

効果測定結果から、ほとんどのセミナー及びワークショップ参加者が、ワークショップの実施効果をみとめていると考える。ラオス北部地域では、学校給食に携わる人特に女性支援を目的としたセミナーやワークショップはあまり開催されておらず、少しでも新しい知識、情報を知りたいという意識が、1回目よりは2回目の実施時のほうがより高かったと考える。

また、「セミナーやワークショップへ積極的に参加できた」と自分なりに考える参加者が、2回目の開催時の方が増えているところからも、このような時間をかけた女性のリーダー育成のためのセミナー及びワークショップ開催の必要性がうかがえた。

2回目の開催会場を提供してくださったルアンプラバン県の学校給食担当責任者も女性であり、今回のセミナー及びワークショップを補佐してくれた MOES の担当官も女性であった。セミナー参加者のなかでは、1回目開催時よりは2回目の方が職域の女性リーダーの参加が増えていたのではと感じた。

学校給食は児童・生徒への細やかな気配りや日々の食生活を理解し経験してきている女性のほうが、献立作成や食材の買い出し、調理、配膳、給食室の管理等給食管理には向いているのではと考える。学校給食に関するプログラムをセミナーやワークショップで経験を増すことで、より実践的な女性リーダーを育成することができるのではと考える。今回も、2回目の開催時のほうが、より積極的な発言をする女性の存在が目立った。

今回使用した食育教材のレベルは、日本の小学校家庭科の教科書とほぼ同じレベルの内容であったが、様々な職域の人や2度目の参加者も含まれていたことから、参加者のニーズに合わせて、中学校レベルや高校レベルの食教育教材も必要であったのではと考える。

アンケート調査で、再度参加の意思を尋ねたところでも、2度同じ内容のセミナーやワークショップを開催するよりは、様々なレベルに対応したきめの細かいセミナーやワークショップを複数回開催することの必要性を感じた。

(2) 作成した食教育教材の評価

1回目のセミナー及びワークショップ開催時は、ラオス北部の地域で学校給食が始まって、まだ給食が軌道にのっていない時期であり、学校給食の形態をとることに精一杯の時期であった。2回目開催時はそれから2年経過し、学校給食従事者の中で、学校給食の質についても考える女性の従事者がふえてきたのではと考える。自分の職域で使いたい教材や欲しい教材を見ると、参加者が給食の献立のバリエーションを増やすなど、児童・生徒への食文化や栄養教育を行う上からも、参加者が教材の必要性を感じ始めていることが伺えた。

学校給食づくりに必要な基本的な知識である栄養学や食品学、衛生学等を学ぶ機会が、現行のラオスの教育体制ではないので、指導者向けに上記のような基礎知識を扱った教材作成が急務と考える。しかし、先駆的に欧米の支援団体、世界食糧機構等の支援で作成した教材は、ほとんど現地で使用されていなかった。現場で使える教材として、使用してもらうためには、地域の人、特に女性の目線を通して協働で地域のニーズに合わせたわかりやすい教材の作成と同時に、教材の使い方の指導書も必要であることが確認された。

(3) 食環境調査

児童の就学状況について学校給食担当者にインタビュー調査した結果、ウドムサイ県ラー郡では、2016年度は学校給食推進事業前の2009年度と比較すると、小学校入学率は全体で87.3%から97.1%に増加、女子児童だけでは86.1%から95.0%と8.9ポイントも上昇していた。卒業率は、全体で86.8%から89.0%、女子児童だけでは88.7%上昇し、児童の退学率・休学率も低下していた。特に、学校給食支援事業により、女子児童の就学状況が改善されたことが伺える。

これらの成果は、学校給食を持続させるために、郡と村の教育開発委員会やコミュニティによる

学校菜園の運営への参加、コミュニティからの米や食料の提供があったことも要因の1つではあるが、女性を含めた学校給食担当者が自身のスキルアップのため、2015年に実施したワークショップも含め、研修に積極的に参加していることも、要因のひとつと考える。

ワークショップ内で行った給食献立作成作業では、給食の栄養バランスを考えて献立を立てることができる参加者は、少なかった。ほとんどの参加者は、市場に行ってその時安いものを買ってから献立を考えたり、寄付された食材で出来るいつもの料理を作ったりしており、児童の栄養バランスを考えて献立を立てるところまでは、なかなか難しいものがあった。しかし、現場を取り仕切っている女性リーダー達が、このようなセミナーやワークショップに参加して積極的に献立作成スキルを身に着けることで、より良い食環境を児童に提供することができるのではと考える。

次のステップとして、食材の価格表を、職域内の市場等に出向いて自ら作り、食品成分表と照らし合わせるといことも、今後の望ましい給食献立を立てるためにも必要な作業を彼女たちと協働していけたらと考える。日ごろ使いなれた安価な食材から、児童のために栄養バランスの取れた給食を作ることができれば、それが児童にとって一番望ましいことといえる。

また、食品成分表の栄養評価から、より児童・生徒にとって望ましい食材を、学校菜園で栽培を行ったり、学校内で養殖・飼育したりすることも重要となってくる。

学校菜園で栽培も簡単で、児童・生徒に不足している良質なたんぱく質を得ることができる食材として、これまで大豆の栽培を提唱してきた。ラオスでも、中国の食文化の影響をうけている地域では、大豆を栽培し給食に取り入れることに可能性はあると考えるが、それはラオス北部のごく一部の地域に過ぎない。大豆を日常生活でほとんど食べない食文化圏の地域では、学校菜園での大豆栽培は難しいものがあった。しかし、セミナーやワークショップでいち早く大豆の学校給食への使用を考えてくれたのも、女性リーダー達であった。

学校給食のための食環境整備には、これまで培われてきた地域の食文化を守りながらも、新たな食文化も許容していけるような柔軟な食教育を、女性リーダーを中心とし地域のコミュニティとともに協働していくことが重要と考える。

5) 示唆

ラオス北部地域で学校給食のためのセミナー及びワークショップを実施することで、学校給食現場に従事する女性同盟員や学校教員・行政官、学校給食を管理する村落教育委員会担当者への食教育支援に効果があることが示唆された。特に、現場を任されている女性の給食関係者にとっては、セミナー及びワークショップへの参加は、より積極的に学校給食とかわるための人材育成の場として有用であったことが示唆された。

しかし、持続可能な学校給食・地域コミュニティに必要な女性リーダー育成や、資料・教材提供には、このようなセミナーやワークショップを継続的に実施するための資金調達が必要と考える。また、学校給食の質の向上には、学校菜園の管理、養殖、飼育等の技術向上等も必要となってくる。

今後の支援活動としては、女性を中心とした学校給食事業担当責任者や郡・県担当部署への情報提供や技術面でのスキルアップをするための人材育成とともに、地域産品による給食用食品加工技術の開発や学校給食による栄養改善への助言を行っていきたいと考える¹¹⁾。

2. 女性の生活時間調査を用いたワークショップ

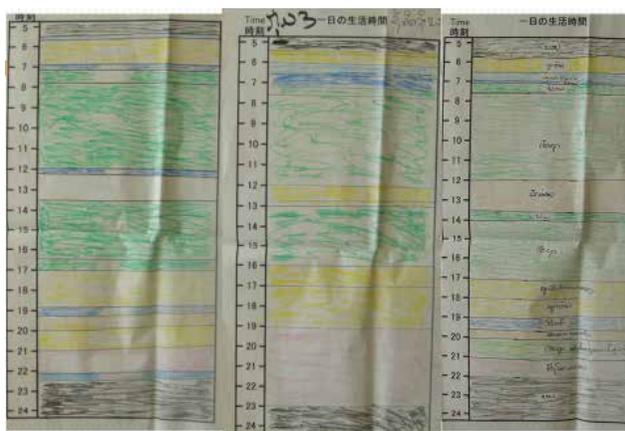
天野 晴子

これまでの調査により、ラオス国の山間部および農村部の女性の生活の課題として、生活慣習や経済的要因による貧困リスクが示されただけでなく、妊産婦、母親、働く女性などそれぞれにおいてこれらのリスクがみられることがわかった。

そこで、これらの生活課題をかかえた女性を支援するプログラムの一つとして、生活時間調査を用い、女性の生活を可視化する手法を採用し、ワークショップ形式で、アクティブラーニングの方法を用いてプログラムを試行した。実施は、前記1のラオス国北部のウドムサイ県でのセミナーの最後に行った。



写真Ⅲ-2-1 生活時間調査ワークショップの様子



図Ⅲ-2-1 作成された生活時間調査票

女性が自分の一日の生活を客観的に把握し、意識する手法として有効であったが、さらにワークショップのグループを男女混合にすることで、男性も女性の生活に関心をもつようになり、協同の大切さに対する気づきを示された。

IV 女性支援の展開と今後に向けて

1. ネパールの女性グループによるマイクロファイナンスの活動とエンパワーメントの事例から

佐々井 啓・田中 俊子

本プロジェクトでは、2018年2月27日、日本大学特任教授青木千賀子氏を招いて公開講演会を開催した。青木氏は、2007年～2008年、海外派遣研究員としてネパールに赴任されて以降、継続的に現地を訪問し、マイクロファイナンス活動のフィールドワークや調査研究を進めてこられた。ここでは、ネパールの女性グループの活動をとおした女性のエンパワーメントの事例について、青木氏による講演内容をもとに報告する。

1) ネパールの社会的・文化的背景

(1) ネパールの概況

ネパール連邦民主共和国は、11年にわたる内戦の終結後、240年間続いた王制を廃して制憲議会政治となり、選挙における留保制度（積極的差別是正制度）によって女性議員が33%を占めている。

ネパールの首都はカトマンドゥ（Kathmandu）、面積147,000km²（北海道の約1.8倍）であり、人口は2,898万人（2016年 外務省）、気候はモンスーンの影響を受ける亜熱帯的気候地域である。北部を中国に、他の三方をインドという大国に挟まれた内陸国である。

地形的には3つの地帯からなり、およそ次のような分布である。

①山岳地帯（標高2,500m以上、国土全体の約35%）

②丘陵地帯（標高300～2,500m、約42%）

③平野地帯（タライ平原、標高300m以下、約23%）

気候は雨季と乾季があり、雨季の雨量は減少している。

123の言語、125のカースト・民族が存在する多民族・多文化国家であり、文化の宝庫であるが、それらが地域格差や開発の阻害要因となっている。

ヒンドゥー文化におけるカースト制度は中央集権国家建設のため、1854年に民法典で制定されたが1959年に廃止された。ヒンドゥー教徒が81.3%を占め、カースト制度が法として105年間存続していたことが現在でも影響を与えている。

(2) ネパール独自のカースト制度とダリット女性

カースト制度（caste system）とは、生まれつきの世襲的な身分による厳格な階層制である。1990年の民主化運動後、新憲法ではカーストに基づく身分差別を禁止しているが、カースト制度は容認している。ダリット（人口13.5% 2011年国勢調査）はカースト最底辺に置かれた被差別集団であるが、以下のような制約がある。

*結婚は、カースト内での結婚（内婚制）が原則。

*ダリットは、不浄、穢れた存在として差別されている。（インドの古代・中世において、山間部族民の一部が動物の皮剥ぎや解体、皮なめし、皮革細工に従事し、不可触民階層を形成）。

- * 社会の底辺労働一皮なめし加工、清掃業、糞尿や動物の死体処理、売春等。
- * 水場への接触や接近の禁止、井戸の制限、住居の隔離。
- * 一夫多妻婚、寡婦再婚禁止。
- * 祝宴で高位カーストとの同席禁止。

表Ⅳ-1-1 ネパール独自のカースト制度（民法典）の社会構造

	身分階層		カースト/エスニック・グループ	従来の 四種姓(ヴァルナ)
浄 カ ー ス ト の グ ル ー プ	<第1階層> タガダリ(Tagadhari) 「聖紐を身に付けたもの」または 「2度誕生するカースト」		バフン(ブラーマン司祭) ラージプート チェトリ(クシャトリア 軍人) 他のネワール高位カースト ☆	ブラーマン クシャトリア
	<第2階層> マトワリ(Matwali) 「酒を飲むもの」	カーストを失うこと のないマトワリ	ネワールの諸カースト ☆ マガル ☆ グルン ☆	リンプー ☆ シェルバ ☆ チェパン ☆ マジ(漁師) ☆ クマール(壺作り) ☆
カーストを失いうる マトワリ				
不 浄 カ ー ス ト の グ ル ー プ	<第3階層> 水を受け取ることはできないが、接触しても清める 必要のないカースト(不浄なれど可触)		ムスリム ☆ ドビ(タイの洗濯屋) ☆ カサイ(ネワールの食肉処理) ☆	カースト外 (ダリット)
	<第4階層> 水を受け取ることはできなく、接触すれば 聖水で清める必要のあるカースト (不浄で不可触のカースト)		カミ(鉄鍛冶) ☆ サルキー(皮革職人) ☆ ダマイ(仕立屋) ☆ ガイネ(薬師) ☆ チャメ(ネワールの掃除人) ☆ パディ(売春)	

☆ ネワールのカースト、★ エスニック・グループ
出所：「ネパールのカースト/エスニック・グループについて」より
Khanna, K. N. & Sudarshan, K. N. "Encyclopedia of South Asia: Nepal"
(一部、名和、石井論文を参照)

表Ⅳ-1-1は、ネパールのカースト制度を階層別にまとめたものである。

ヒンドゥー教は、侵入民族のアーリア人が定着し、社会の上層階級として統治を進める過程で形成されたものである。生活様式の全般にわたって規制をする点が特色であり、カルマ(karma:業、行為)という、持って生まれた義務を果たさなければならない。輪廻思想の成立とともに、因果応報思想が理論化されるにいたった。また、息子が唯一、両親の死後の宗教的儀式を取り仕切れるので、娘よりも息子を重んじる価値観が強い。さらに、女性に貞節、従順、純潔を求める伝統的な女性観があり、チャウパディ(Chhaupadi)という生理中の女性を隔離するしきたりがあった(2017年8月禁止)。避妊や出産に関する適切な指導の立ち遅れ等もみられ、子宮脱の罹患者が多い(多産・未妊婦健診・産後の重労働のため)。

2) 研究の目的と方法

(1) 研究目的

ネパールの「ダリット(Dalit:抑圧された者の意)」とよばれる、不可触民としてカースト制度の最底辺に置かれた被差別集団の女性たちの①社会的地位向上と、宗教や慣習に基づく社会規範による社会的差別構造を解消するべく②社会システムや、生活文化の再構築の必要性に着目した。

ダリット女性たちによるマイクロファイナンス（Microfinance：MF、少額金融）の活動を通して、ソーシャル・キャピタル（Social Capital：SC、社会関係資本）による人々の協調行動を活発にすることによって、地域住民志向のコミュニティ協働モデルの構築と活用を明らかにする。

すなわち、以下の視点において考察をおこなう。

- ◇ダリットの女性たちが、経済的な「所得貧困」のみならず、人間の基本的な権利や機会が保障されていない「人間貧困」から脱却し、自らの地位向上を目指すための課題について考察する。
- ◇フィールドワークを通して、「女性グループによるMF活動とSCとのシナジー（協働、相乗）効果」が、女性たちに「内発的発展」や「エンパワーメント」をもたらすことにどのように役立っているのか、実証的な考察により、明らかにする。
- ◇国民の約8割がヒンドゥー教徒であり、地理的、文化的、民族的な多様性をもつ社会の中で、ダリットの解放運動から見えてくるネパールの社会的な歪、ジェンダーに基づく複合差別、職業などに起因した社会構造を分析し、人間開発、社会開発について知見を得ることを目的としている。

（2）研究方法

ネパールの女性グループによるマイクロファイナンス活動の聞き取り調査のフィールドワークをおこなう。

- ①調査対象：ダリット女性を中心とした女性グループのメンバー
- ②調査地域：極西部、中西部、西部、中央部、東部
- ③調査期間：2009年3月～2016年9月
- ④調査方法：聞き取り調査、NGOのサポート（コーディネート）
- ⑤調査内容：マイクロファイナンスの活動を中心に、職業、労働、教育、健康、保健衛生、差別・暴力の問題等について

3）女性グループによるマイクロファイナンスの活動とソーシャル・キャピタルのシナジー効果

マイクロファイナンスの基礎となるのは、貧困からの脱却、女性の自立支援、生活環境の改善として1976年にバングラデシュのムハマドユヌス氏が始めたマイクロクレジット（Microcredit：MC、小額融資）である。

マイクロファイナンス（MF、少額金融）は、貯蓄、保険などを含め参加型開発の中で女性グループを中心に成長したものであり、ネパールでも90年代から一般的になった。女性の貧困層が自助組織を作り、貯蓄による資金からの貸し出し制度を活用し、所得向上効果、病気や天災等不慮の災難時の応急処置効果、生活にかかわる諸事に利用するものである。例えば、ヤギや牛の家畜の飼育、野菜栽培等で収入向上、病気や怪我、診療費の支払い、食糧や文具類等の購入、海外出稼ぎの支度金、冠婚葬祭費用などに利用されている。

ソーシャル・キャピタル（SC、社会関係資本）とは、人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「互酬性の規範」「ネットワーク（絆）」といった社会組織の特徴と定義される。

（1）女性グループとマイクロファイナンス（MF）の活動について

所得向上よりも、子どもの学用品の購入、診療費の支払い、冠婚葬祭や海外出稼ぎの支度金など、

生活にかかわる諸事の利用が多い。所得向上を目的としてMFを利用しているところは、山岳地帯よりはインドとの国境に近い平野地帯の都市部が多い。

MFのためのミーティングは集金だけでなく、定期的集まること自体、悩みや問題を話し合う情報交換の場としての意義がある。MFの活動を通して、メンバーの女性の多くが、家庭や地域で一人前の人間として扱われ、自信と尊厳を獲得しつつあると感じ、メンバー同士の横のつながりが人間関係を豊かにし、女性を精神的、経済的に支え、女性の家庭や地域の地位向上と自立の支援にも大きく貢献している。

(2) 職業、労働について

各カーストの固有の伝統的職業を継承している者は、現在1～2割程度であり、高位カーストも多くは農民である。低位カーストも土地の所有の有無にかかわらず、他人の農地で日雇い労働者として働く。年1回の収穫だけでは家族の食糧を自給できず、男性の大半が11月～3月の農閑期にマレーシア、ドバイ、インドや国内の都市部に出稼ぎに行く。女性は農作業や家事労働の大半を担う。日雇い労働者や家事労働者としても働く。(1日、田植えで働くと20～25ルピー (23～29円))

(3) 教育の格差

女性グループのメンバーは平均して小学校4～5年生の学力である。識字率は地域格差があり、東部地区63.3%、西部地区46.0%である。また、都市部(カトマンドゥ、ポカラ)72.3%、山岳地帯(ジウムラ郡平均)32.4%、(ドティ郡の平均)42.6%である。

男女格差では、男女差の平均は23.0ポイントであり、男女格差大はジウムラ郡の男性48.1%に対して女性16.7%、ドティ郡の男性60.0%、女性25.2%である。男女格差小はモラン郡の男性56.8%、女性56.6%である。

ジウムラ郡、ドティ郡では日々の生活に必要な水やマキ、家畜の飼料運びは女性の仕事とされ、毎日徒歩で運搬するため、学校に行けず、長時間労働のため、女性の教育を受ける時間が著しく制限されている。

(4) 健康、保健衛生について

トイレがない地域が多く、ジャングルや川で用をたす。トイレがあってもその維持・管理費に窮している。女性の重労働が目立つところで、子宮脱の罹患者が多い。原因は、①多産であること、②妊婦検診に行けないこと、③出産後すぐに重労働をするためといわれている。

チャウパディ・システム(チャウは娘、パディは外を意味する)とは、生理期間中の女性を、穢れゆえに戸外に隔離するという慣習である。そのため、凍死や脱水症状による死亡が報告されている。

2017年7月：月経小屋で少女が毒蛇にかまれ死亡。

2017年8月：チャウパディ禁止の法

2018年1月：暖をとって煙にまかれ窒息死

(5) 差別、暴力について

社会の底辺労働を担っているダリットに対する差別構造がある。ダリット同士の間にも職業別による階層化、差別化構造があり、結婚はカースト外結婚をタブー視している。ダウリー(結婚時

の持参金)や幼児婚、ベールの義務づけがみられ、タライ平野(ネパール南部、インドとの国境付近)のダリットや、マデシ(タライ平野に住むインド系の出自集団に属する人々の総称)の貧困層の間の慣習である。夫の飲酒時や飲酒後にDVが多い。また、少女の売春目的による人身売買問題があり、貧困と絡んだジェンダーの問題も深刻である。

(6) Mudha (ムラ) バディコミュニティ調査結果

①バディカーストを対象として調査

ダリットの中でも最も低い位置にあるバディカーストとは、ネパールの極西部、中西部の郡に住居し、売春を職業としているカーストである。150年程前、国王や藩主、地主の子供たちの出生や結婚にまつわる儀式の際、彼らの家で歌を歌ったり、踊ったりして娯楽を提供していた。おもな仕事は、マーダルという太鼓づくりや漁の網などを作って行商し、その傍ら歌や踊りをするのである。

彼らは支配的立場にある者から宴席で性的暴力を受けるようになり、政治的、教育的な権利や機会が得られぬまま、歌や踊りの裏に性的搾取されていた。ラジオやテレビの普及でバディの歌や踊りの仕事は下火となり、女性は収入のため自宅で性労働をすることになる。父親を特定できない子供は、出生届を出せず、市民権を得られないため、学校に入学できない問題が起きていたが、現在は、母親のみでも出生届が受理されるようになった。

②調査地域

Mudha (ムラ) のバディコミュニティは、幹線道路沿いに位置し、55軒の家の300~500人の大人、250人の子供(1家族、平均4~15人)からなる。

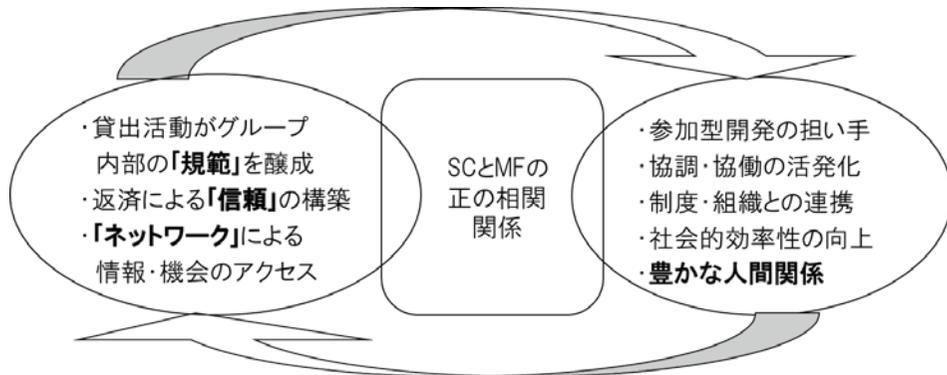
2010年9月に、政府から売春禁止勧告が出されたが、それ以前はコミュニティ女性の75%が性労働を職業としていた。当時はUSAID(米国国際開発庁)が1か月に1回、8000個のコンドームをコミュニティに届けていた。

男性は穢れているという理由で、高位カーストの農地も触らせてもらえず、魚釣りも政府の許可が得られないため、インドに出稼ぎに行っている。約半分の子供が学校に行っていない。制服、文具が買えず、制服の生地があっても縫い賃がない。年1回、何人かに奨学金として250Rs(約290円)が与えられている。

4) 結果

(1) ソーシャル・キャピタルとマイクロファイナンスとの関係

ソーシャル・キャピタルとマイクロファイナンスとの関係を図式化すると、図1のように表すことができる。図1の左側は、女性グループによるMFの活動が、貯蓄活動を基盤にした貸出・返済のルールにより、グループ内の規範の醸成や信頼関係を構築し、ネットワークによる情報・機会のつながり(絆)を拡げていることを示している。一方、右側はこれらのことが、女性たちに参加型開発の担い手としての自覚をもたらし、協調・協働を活発にしてコミュニティ活動の効率性を高め、制度を作り、他の組織、行政との連携を深めて、しいては豊かな人間関係の構築につながることを示している。こうした豊かな人間関係によるMF活動の活性化が、SCを培養するという相互補完的な関係にあるといえる。すなわち、互いに他を高めていくシナジー(協働、相乗)関係が存在することを指摘できた。



図Ⅳ-1-1 ソーシャル・キャピタルとマイクロファイナンスとの関係（青木作成）

(2) マイクロファイナンスの活動による社会参加とエンパワーメント

エンパワーメントとは、個人、あるいは社会集団として意思決定過程に参画し、潜在能力を発揮し、社会に進出していけることである。

マイクロファイナンスの活動により、①から⑤の段階へと社会参加とエンパワーメントの変化が認められた。

- ①女性グループの活動を開始するにあたり、はじめ妻は夫の許可なく外出することが禁止されており、グループ結成すら困難であった。
- ②ミーティングに参加することを夫から阻止され、暴力を振るわれたが、グループのメンバーが説得にきてくれた。
- ③家畜の飼育や野菜栽培で得たお金を子供の教育費に充てることができるようになってから、夫が協力的になった。
- ④家庭や地域で一人前の人間として扱われ、意思決定や活動のルール作成に関与し、実行できるようになった。
- ⑤定期的集まる機会を得て、グループ以外の集団、NGOや行政機関等の組織と連携し、外部の情報、機会へのアクセスを増加し、グループの交渉能力が向上した。

5) まとめ

以上の結果、次のようにまとめることができる。

(1) 女性グループの活動

- ①ネパールのコミュニティと社会構造の問題は、カースト制度による階層性や、ジェンダーに基づく排除、差別や貧困の問題と深く関連している。
- ②マイクロファイナンスの活動は、社会参加の機会を開き、社会的課題の緩和や解決に取り組み、政策立案を通して、権利の行使や資源のアクセスを可能とした。
- ③他のカーストと一緒に研修を受けることで、カースト間差別が改善した。

(2) エンパワーメント

- ①国際NGO・現地NGOのサポートや、行政機関（村落開発委員会、郡行政事務所等）との連携、

協働を通して、能力構築（capacity building）を推進し、一人ひとりの潜在能力が発揮できる社会、平等で公平な社会の構築を行っている。

- ② 貧困ゆえグループに所属できない人からの借入の申し出にも、応じている。
- ③ 持続的なグループ活動には「内部結束型の SC」と「橋渡し型の SC」が特に重要である。

（3）社会的包摂に向けて

- ① グループ内のネットワークを起動させるキーパーソンの存在が必須であり、リーダーの資質が組織強化の上でも鍵を握るため、リーダーシップを発揮できる人材の育成が重要である。
- ② 教育の充実を図り、人権意識の向上を図るとともに「排除される人をつくらぬ社会」、社会的包摂の実現に向けた開発の道が切り拓かれようとしている。

2. 今後に向けて

天野 晴子

本研究は、開発途上国における女性の生活の状況を把握し、貧困に陥りやすい女性の生活を支援するためのプログラムの検討を行うものである。事例としてラオス国を対象とし、ワークショップ及びセミナーの開催を通して、プログラムの試行をおこなった。我々の過去の現地訪問調査等から、ラオス国の山間部および農村部の貧困リスクが高い地域の女性の生活状況を把握した際に、女性の生活課題として、生活習慣や経済的要因による貧困リスクが示された。リスクは、妊産婦、母親、働く女性などそれぞれにおいてみられた。これらの生活課題をかかえた女性を支援するプログラムの一つとして、学校給食プログラムにおけるセミナー・ワークショップの開催および生活時間調査を用いた女性の生活を可視化する手法を試みた。

学校給食プログラムにおいて、県からの助成金等の管理や、食材の調達、献立作成、調理、配膳など、一連の給食管理過程に女性同盟が果たす役割は大きかった。したがって、学校給食プログラムを契機としたセミナー・ワークショップは、政策決定、経済的参加、健康、教育につながる女性の能力開発としての効果が期待できるものであった。また、これらにかかわる新たな知識と情報の共有は、地域における女性リーダー育成としての機能も果たし得ることがわかった。一連のプログラムは、女性の社会参加の機会を開いたり、あるいは発展させ、地域の社会的課題の緩和や解決に取り組む意義がみられた。また、前項の青木氏が指摘されたように、「グループ内のネットワークを軌道させるキーパーソンの存在が必須」であり、「リーダーの資質が組織強化の上でも鍵を握る」とすれば、リーダーシップを発揮できる女性の人材育成に重点を置き、今後の展開をはかっていきたい。

注

- 1) 図Ⅱ-1-1～図Ⅱ-1-4は、2016年6月9日、本プロジェクトの公開講演会におけるラオス国教育スポーツ省 Yangxia LEE 氏による講演「The relationship with Lao Women Union (LWU) for implementing school meals programme and girls' education」資料による。
- 2) Education for All-Fast Track Initiative. World Bank（世界銀行）からの資金提供による事業のこと。
- 3) Early Childhood Education. 世界銀行からの資金提供による事業。
- 4) 5つの教育理念とは、ラオス国教育スポーツ省が1991年に発表した「ラオス国の理念と一般教育開発計画」の中で提唱した理念。「5つの重要点」または、「5つの局面」ともいわれる。5つとは、1) 知

- 力の発達、2) 身体の発育、3) 芸術性の発達、4) 道徳的発達、5) 職業的発達である。
- 5) 1,000キープ=12.9円 (2016年6月23日交換レート)
 - 6) JICA『ラオス技術協力プロジェクト報告』(2017年)。https://www.jica.go.jp/laos/ (参照2018-6-2)。
 - 7) MoES, *National Strategy on Nutrition up to 2025 & National Action Plan on Nutrition 2016-2020*, 2015.
 - 8) MoES, *Policy on Promoting School Lunch 2014*, 2014.
 - 9) MoES, *NUTRITIONAL STATUS SURVEY 2011-2014 : Department of Pre-Primary and Primary Education*, 2012.
 - 10) AAR Japan「ラオス：子どもたちの学びと成長を支える」2017年。https://www.jica.go.jp/laos/ (参照2018-6-2)。
 - 11) III-1、2については、全体を通して下記の文献を参考にした。①秋道智彌編『図録メコンの世界—歴史と生態』(弘文堂、2007)、94頁②秋道智彌監修『編集モンスーンアジアの生態史第3巻』(弘文堂、2008)③The Lao food book project, “The Lao food book for dietary assessment” (2008)④神谷祐介他「ラオス農村部における伝統的な生活様式の変容が子どもの健康に与える影響」『豊かな高齢社会の探究調査研究報告書』24、1-19、2016年 巻頭1頁⑤神谷祐介「ラオス農村部における食文化と価値観の変容が子どもの健康に与える影響：実験・行動経済学的考察」『食生活科学・文化及び環境に関する研究助成研究紀要』30号、2015年、111-123頁⑥今津屋 直子「ラオスの若者の食を営む力の育成に関する研究」『日本家政学会研究発表要旨集』68号、2016年、187頁⑦寺島幸生他「ラオス人民民主共和国における理科教育の改善に向けた協働プロジェクト」『鳴門教育大学国際教育協力研究』10号、2016年、79-85頁⑧高増雅子「ラオスにおける学校給食プログラムへの支援」『日本家政学会誌』66号、2015年、538-540頁。

日本女子大学における学生を主体とした 地域連携活動の活性化のための調査・研究

Stimulating Student-Oriented Activities in Cooperation with Local Communities:

A Case Study of Japan Women's University

田 部 俊 充 TABE Toshimitsu
(研究代表者、日本女子大学人間社会学部教育学科教授)

久 東 光 代 KUTO Mitsuyo
(日本女子大学人間社会学部心理学科准教授)

星 名 由 美 HOSHINA Yumi
(元 日本女子大学人間社会学部心理学科助教)

薬 袋 奈美子 MINAI Namiko
(日本女子大学家政学部住居学科教授)

黒 岩 亮 子 KUROIWA Ryoko
(日本女子大学人間社会学部社会福祉学科准教授)

小 川 賀 代 Ogawa Kayo
(日本女子大学理学部数物科学科教授)

小 山 高 正 KOYAMA Takamasa
(元 日本女子大学人間社会学部心理学科教授)

藤 田 武 志 FUJITA Takeshi
(日本女子大学人間社会学部教育学科教授)

山 下 絢 YAMASHITA Jyun
(日本女子大学人間社会学部教育学科准教授)

加 藤 美由紀 KATO Miyuki
(川村学園女子大学教育学部児童教育学科准教授)

請 川 滋 大 UKEGAWA Shigehiro
(日本女子大学家政学部児童学科准教授)

依 田 浩 美 YODA Hiromi
(日本女子大学附属豊明幼稚園教諭)

目 次

1. はじめに
—本研究課題の目的・研究の経緯— 田部 俊充

2. 学校研究協力事業と出前授業による教員を目指す学生支援
—横浜市教育委員会との中大連携事業の取り組み— 田部 俊充

3. 川崎・多摩区をフィールドとした学生による地域連携活動の成果と課題
—2015～2017サクラボの活動を中心として— 久東 光代・星名 由美

4. 地域連携活動による学習環境の検討 薬袋奈美子

5. 多世代交流を促進するための地域イベントの実施
—寺尾台団地を事例として— 黒岩 亮子

1 はじめに

—本研究課題の目的・研究の経緯—

田部 俊充

総合研究所研究課題61「日本女子大学における学生を主体とした地域連携活動の活性化のための調査・研究」の目的は、日本女子大学の学生たちがより主体的な活動を行うための核となる地域連携活動を活性化するための調査・研究である。具体的には1～3の3点であった。

1. 研究課題54の①～④の活動を継続し、引き続き協力して進める。
2. 「地域連携センター（仮）」の設立に向けて調査・研究を進める。
3. 学生を主体とした地域連携活動の活性化のためのeポートフォリオの導入の検討

研究課題61においても研究課題54「大学の総合力を発揮した地域連携活動の試み」の①～④の活動を核にしてさらに充実を図ることができた。

①学校研究協力事業は、学校サポート事業として「学校インターンシップ」の授業科目を中心として川崎市多摩区、東京都狛江市、附属幼小、私立幼稚園を対象に進展を見せた。研究協力事業として教育学科田部ゼミでは横浜市立中学校、附属豊明小学校等との教材開発、出前授業を通じた連携を進めた。

②西生田地区地域交流事業は情報教育研究室を中心に各地域連携団体のインターネット上での公開、学生主体の地域交流組織SAKU LABO および単位化した授業「ICT活用とプロジェクト演習」における、地域とのコラボ商品、地域イベント企画などの取り組みのサポートを進めた。

③目白地区地域交流事業として住居学科薬袋ゼミでは雑司が谷地区の地域活動の研究及び振興を図ると共に、これまでの成果をまとめた。

④地域コミュニティ活性化事業として社会福祉学科黒岩ゼミでは西生田地区の近隣の寺尾台団地においては、試行的に行ったコミュニティカフェやイベントを、団地内の各組織（理事会、子ども会、高齢者の会等）において実施し、継続的に実施するための仕組みづくりを考えた。

さらに、①～④の事業に加えて、21世紀型スキル、教育の質の向上、学びのイノベーションといったエビデンスに基づく教育の質保証をめざすために注目されていて、学生を主体とした地域連携活動の活性化を図るために、eポートフォリオ事業を加え、その可能性の調査・研究も行った。基本的には個々の活動を中心に実施されたが、以下は全体で行った活動である。

□総合研究所主催の公開研究会（2016年12月3日）では、2016年度の研究成果の中間発表を行った。

□公開研究会（2017年2月21日）では、「地域連携活動の活性化のための調査・報告会」（場所：西生田キャンパス九十年館27番教室、13:00～15:00）として2017年度研究成果の中間発表を行った。視察に伺った他大学の現状の報告、本大学における地域連携活動の問題点と展望について討議を行った。また念願である地域連携センター（仮）設立に向けての展望・課題点等について討議した。

①「相模原市保育園・附属豊明小学校・横浜市立市ヶ尾中学校への学生との出前授業の中間発表」

田部俊充

②「学生主体の地域課題解決への支援体制の構築—京都女子大学を参考に」黒岩亮子

- ③「自発創成型学習を促す活動環境の在り方～京都光華女子大学 他～」葉袋美奈子
④「学生の地域連携活動を効率的に支援する教育・学習環境の考察～立命館大学など他」

久東光代・星名由美

以下は公開研究会の際の質疑の記録の概要である。

Q 1 : eポートフォリオの自分の分野で使える可能性について、教えてほしい。

A 1 : LMS が来年度からマダマというシステムに替わるが、eポートフォリオの機能はついていて聞いている。重点化資金の方で語学教育のためのeポートフォリオの構築も行って、活動の一部、全学的なことにも使っていくことも可能ではないかと個人的には思っている。

Q 2 : 近いうちにキャンパスが目白地区に移るが、川崎市との連携が今後フェイドアウトということになるのか。物理的な距離がやはり大きくなると思うので、それはどのように考えているか。

A 2 : 目白キャンパスの方が大半の川崎市内の主要な場所へのアクセスは良い。川崎との連携は、川崎での存在感を高めるために今できることを取り組んできた。(中略)川崎市との連携協定を結ぶときもそのような話になったが、目白のキャンパスと一体になることによって各学部との連携をより強固、拡大していくような方向で考えている。

□公開シンポジウム(2017年7月15日)では課題61ファイナルシンポジウム「日本女子大学地域連携センター(仮称)(JWUCCR = Japan Women's University Center for Community Relations)の設立を考える」(目白キャンパス百年館低層棟102教室)として下記の3つのテーマで実施した。

テーマ1 : 日本女子大学地域連携センター(仮称)の設立を考える

テーマ2 : 地域連携活動の成果と課題

テーマ3 : 地域連携活動の展望

- ①「企画趣旨・学校研究協力事業と出前授業による教員を目指す学生支援」(教育学科 田部俊充)
・コメンテーター①藤田武志(教育学科)
②「多世代をキーワードとした学生主体活動への支援体制の構築」(社会福祉学科 黒岩亮子)
・コメンテーター②増田幸弘(社会福祉学科)
③「自発創成型学習を促す活動環境の在り方」家政学部住居学科 葉袋美奈子(スカイプでイギリスより参加)・コメンテーター③篠原聡子(住居学科)
④「学生の地域連携活動を効率的に支援する教育・学習環境の考察」人間社会学部心理学科 久東光代・星名由美・コメンテーター④小山高正(心理学科)
⑤「地域連携活動を支援するeポートフォリオ設計」(数物科学科 小川賀代)
・大場昌子学長代行コメント
・総括(コアメンバーより一言)

次頁からの報告は、田部、葉袋、久東・星名、黒岩各研究室の取り組みである。各取り組みは現在進行形であり、この報告書を作成した時点でのものである。研究課題54、研究課題61と2期にわたり「地域連携センター(仮称)(JWUCCR = Japan Women's University Center for Community Relations)」の設立に向けて学科を超え、互いに刺激を受けながら力を合わせてきたことを添えたい。

多くの方々のご協力に心より感謝申し上げます。

2 学校研究協力事業と出前授業による教員を目指す学生支援 —横浜市教育委員会との中大連携事業の取り組み—

田部 俊充

1 はじめに—大学と学校との連携事業の経緯—

西生田キャンパスではキャンパスの所在する川崎市多摩区における「多摩区・3大学連携事業」(2005年～)を中心にして当初は「学校教育ボランティア」を展開し、学生が多摩区内の小・中学校で指導補助等の協力を行った¹⁾。2011年7月には、本学と川崎市との間で「連携・協力に関する基本協定」を締結したことを契機に、幼稚園、小学校の教職を目指す学部1年生、2年生を対象として「学校インターンシップ」事業を開始した²⁾。さらに、近接している東京都狛江市教育委員会との間で2013年3月に連携協定を結び覚書を交わし、狛江市の小学校とも「学校インターンシップ」事業を開始した。総合研究所の研究課題54(2012年4月1日～2015年3月31日)として「大学の総合力を発揮した地域連携活動の試み」に取り組み、狛江市立A小学校との「総合的な学習の時間」における環境教育授業の実践、授業分析、考察を学生との協力で行った³⁾。

大学としては、学生たちに早い段階で教職の魅力を知ってもらい、在学中の教職課程の授業も教職に就いた場合を想定した問題解決能力を身に付けさせ、卒業して実際に教職に就いたら初任者の段階から一人前の教員として活躍できるような、多様化する児童・生徒や保護者に適切な対応ができる「教職実践力」を付けて学校現場に送り出したい、という願いがある。そのためには学校現場に密着した参加型学習プログラムを導入する必要がある。

今までは幼稚園や小学校との連携、小大連携事業を行ってきたが、研究課題61で研究対象として中学校との連携事業を検討したのは以下の3点の理由である。

①横浜市教育委員会の担当者の熱心な提案があった。大学との連携により中学校現場の研究水準、学生たちの教職実践力、研究者の研究開発、そして何より生徒の教育環境、それぞれを高めたという熱意に感銘を受けた。

②中学校、高等学校との研究協力の必要性を感じた。附属豊明小や狛江市立A小学校との研究協力を進めていくなかで、幼稚園、小学校との研究協力は一定の成果をあげた。近年の学力重視の動向から、幼小連携とともに中大連携事業の必要性を感じた。

小学校社会科の場合も、中学校社会科、高等学校地理歴史科との系統性が求められている⁴⁾。文部科学省社会・地理歴史・公民ワーキンググループは、小学校第3学年から高等学校までの社会科、地理歴史科、公民科における「社会的な見方・考え方」のイメージを図1のように整理した。小学校教育からはじまり、中学校教育を通じて身に付けるべき資質・能力を明確化し、その育成を高等学校教育等のその後の学びに円滑に接続させていくことが意識されている。詳細は高校地理歴史科新科目「地理総合」の課題と方向性についてGISへの取り組みを中心に言及した田部(2018)を参照されたい⁵⁾。

③人間社会学部として中学校社会科、高等学校公民科、地理歴史科の免許を長年出し続けているのに中学校の教員採用試験の現役合格者がいないなかで、中学校社会科合格の実績を出したかった。昨今の二次試験重視のなかで本人の努力とともに教育委員会との連携が有効であると判断した。4年ゼミ生のMさんが本人の希望と努力が実り見事に合格を果たした。

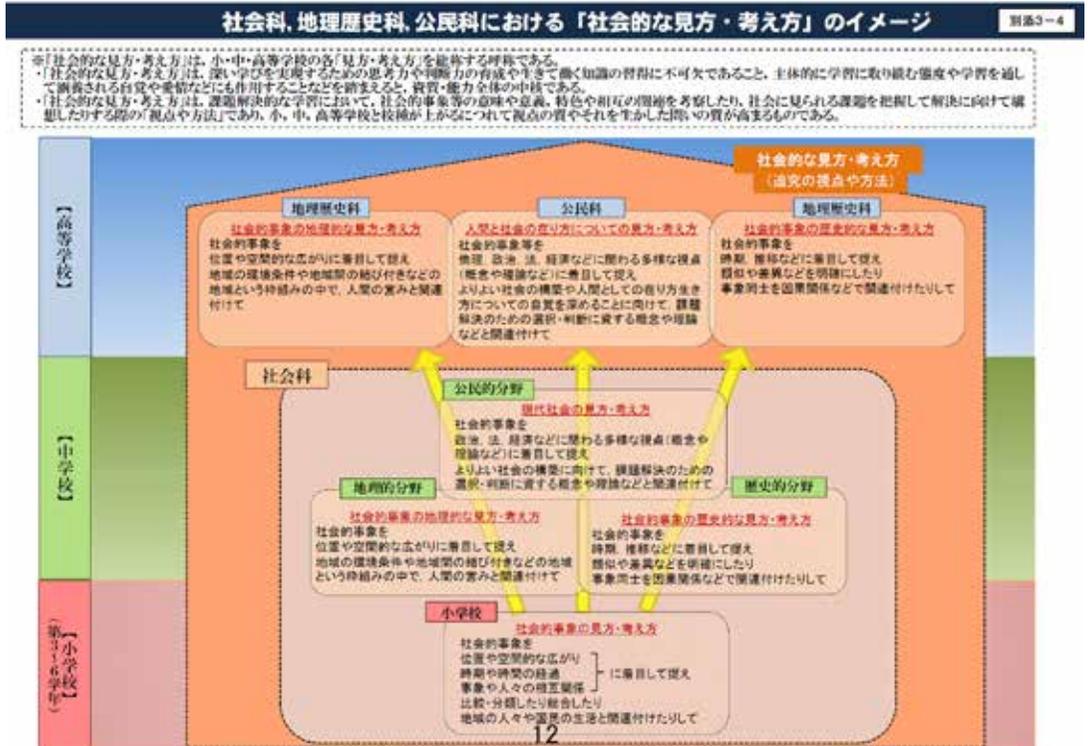


図1 社会科、地理歴史科、公民科における「社会的な見方・考え方」のイメージ 出典：中央教育審議会（2016）

本稿では、第2節で横浜市旭区A中学校との研究協力の実績（2015年度）について、第3節で横浜市青葉区B中学校との研究協力の実績（2016年度）について、第4節で中学校との中大連携の意義について、第5節でおわりとして、今後への方向性について言及した。

2 横浜市旭区A中学校との研究協力の実績（2015年度）

2.1 A中学校との大学連携事業（相互交流事業）の経緯

2015年度、横浜市教育委員会は全国初の教員の養成から育成に至るまで関わる大学連携事業を推進することになり日本女子大学も提携大学として協定を締結した。教育委員会から研究室に連絡があり、協力することとなった。2015年度は旭区A中学校、2016年度は青葉区B中学校との相互交流事業を重ねた。

2015年度にA中学校で協力していただいたK教諭は10年経験者対象の「人材育成マネジメント研修」を受講しており、意欲のある協力的な教員であった。校長先生も社会科が専門的理解のある方だった。大学と中学校での何回かの打ち合わせを経て、2015年11月2日に中学校で授業見学を行った。学生とともに中学校の様子とK教諭の授業スタイルを知る。2016年1月5日に大学で打ち合わせを行う。K教諭が過去に行った「身近な地域の調査」の授業を説明していただき、田部が構想している授業とすり合わせ、具体的な単元計画を練る。大学の授業との関係で、単元の前半を1月にK教諭が行い、後半を2月に2回にわたって田部とK教諭が共同で行うことにする。1月26日に前半がどのように行われているかを見学し、後半の田部との授業へどのようにつなげるのかの

打ち合わせを実施した。

同時に中学校の所在する横浜市旭区や地域の地形図や統計等の資料収集を始める。また地図指導を発展させ、GISにつながる地図教材として、OHPフィルムで作成したTPシートを作成する。共同授業では田部が全体説明を行い、要所でK教諭が指示をだし、学生も巡回して参加する形態をとる。

2.2 2月22日の出前授業の概要（写真1）

導入ではまず本授業の核となるA中学校周辺の地図が描かれた模造紙（拡大地形図）（写真2）を見ながら、「これ何だと思う？」「どこの地図だと思う？」「どこの地名でわかった？」と問いかける。生徒は自分の住むA地域の地図であることに気づく。生徒全員が自分の住む地域の地図だと気づけるように、徐々に細かく問いかけで導くことで、全員が授業に参加する準備を整えた。さらに、ワークシートで「A地域はどのような特色をもった地域か」について考えさせた後に、学級全体で出されたA地域へのイメージを全員で共有した。次にA地域の特色に対して「公園が多い」という生徒の発言に「公園が多いってことは、緑も多いのかもしれないね」と緑を意識させた後、紙で印刷された2013年版のA中学校周辺の地形図を配布した。そして、「道路・鉄道」の色塗りとして、地域に通っている鉄道をはじめとし、大きな道路や目立つ道路などを茶色で塗るよう指示した。また、生徒の色塗りと同時に、黒板に貼った地形図が印刷されてある拡大した模造紙に大学生が色塗りを行い、生徒が全体で共有できるように配慮した。

色塗りが終わるころOHPフィルムを配布した。「道路・鉄道」（図2）が茶色、「建物」（図3）が赤色、「畑・針葉樹林・広葉樹林」（図4）が緑色に色塗りされている。それぞれ、1932年版（上）、1967年版（左下）、2013年版（右下）の地形図が印刷してある。OHPフィルムを重ねたり、透かして見たりする活動が行われた。地形図を見て気づいたことをワークシートに記入するよう指示したところ、OHPフィルムと紙の地形図を活用しながらワークシートに記入する姿が見られた（写真3、写真4、写真5）。

展開2では、1967年版の地形図を、2013年版の地形図と同様に色塗りをしていく。1967年を「お父さんお母さんが子どもの頃の地図」と表現することで、時代をわかりやすく比較し捉えることが



写真1 旭区A中学校での出前授業の様子
（2016年2月22日）

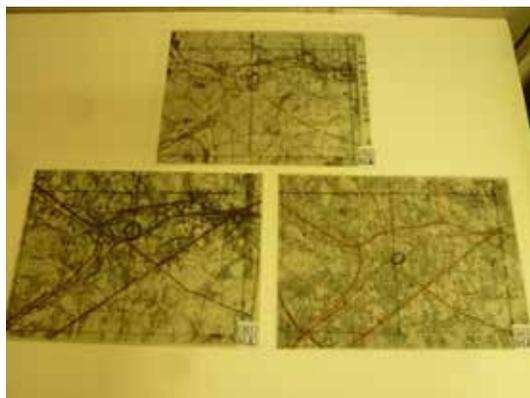


図2 A地域の道路・鉄道（上が1932年、左下が1967年、
右下が2013年の地形図で作成したTPシート）

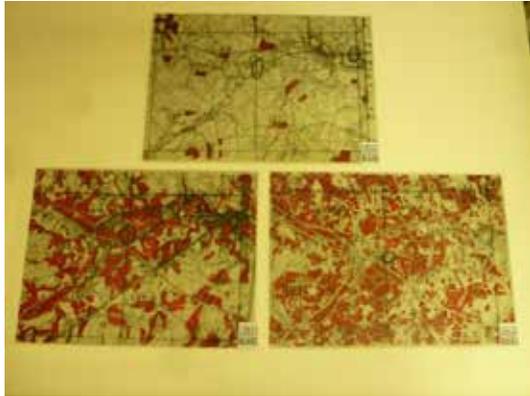


図3 建物（上が1932年、左下が1967年、右下が2013年の地形図で作成したTPシート）



図4 畑・針葉樹林・広葉樹林（上が1932年、左下が1967年、右下が2013年の地形図で作成したTPシート）



写真2 黒板に掲示された拡大地形図



写真3 1932年と1967年の地形図の比較（鉄道）



写真4 1932年と1967年の地形図の比較（都市）

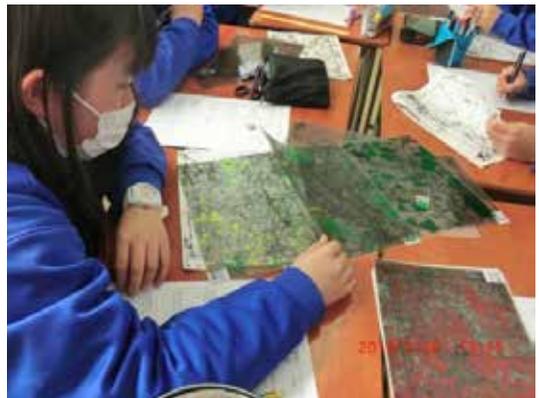


写真5 1932年と1967年の地形図の比較（緑）

できていた。色塗りをしながら、生徒から「2013年と全然違う」という呟きが聞こえた。

ワークシートに2枚の地図を比べて気づいたことを記入するよう指示する際、「変化しているもの、変化していないものがありますね」と声掛けをしたことで、比べる視点が明確になり、活動に

取り組みやすくなった。グループでどんなことがわかったか発表し合った後、各グループの1名に気づいたことを前で発表してもらい、学級全体で2枚の地図の違いを共有した。生徒一人ひとりの発表の後に必ずあいづちや称賛を入れることで、生徒も次第に緊張がほぐれていった。また、川幅が小さくなり、樹林だったところが住宅地に変わったという意見を尊重して、自然面での変化を意識できるようにしていた。

最後のまとめに、次時の学習の確認として、A地域の魅力や、これからのA地域をどうするかについて考えていくことを伝え、これからの学習の見通しを立てた。

2.3 2月26日（木）の出前授業の概要

まず前回とったアンケート結果を生徒に口頭で提示した。生徒たちは、住宅の町、緑・自然の町、という回答結果に納得していた。そしてパワーポイントの「ロマンの町 A 地域」という部分が必要になっている様子であった。発表が終わった後、パワーポイントを指しながら、「じゃあこの2番目はどういうことでしょうか…?」と問うとロマンという言葉に一気にクラスで反応があった。

地域の歴史的史跡を題材とした舞台の公演広告の写真と実際の駕籠塚の写真を用いて駕籠塚にまつわる島山重忠と菊の前の悲恋の物語を生徒に聞かせ、重忠がどんな武将だったのかを軽く説明した。A地域の持つ深い歴史の話、ロマンの町の説明を終え、前回の復習に入る。地形図を2枚比べたこと、今回はもっと昔の地形図も使うことを伝えた。この際、お父さんお母さん、次におじいちゃんおばあちゃんが子どもの頃、という表現をして具体的な時代のイメージを生徒にわかりやすく伝えられたのではないかと思う。

グループで地形図の読み取りのテーマを提示しながらくり返す。使う地図は2種類で、黒板に貼る大きな拡大地図（写真2）とOHPシートに印刷された3年代の地図である。OHPシートは各班に2セット渡す。交通・緑・住宅が色塗りされた3枚が3年代分あるため、9枚のOHPシートを約3人で見る、という形になる。1セットで9枚あるため、余裕をもってそれぞれの作業ができる様子であった。項目ごとによく見つけたね、よく気付いたね、などの声掛けをして、生徒のやる気を引き出す工夫がされていた。

まず1932年の3つの要素の地図を見て気づいたことを発表してもらった。グループの話し合いの後、挙手させてそれぞれ発表していき、友達の意見に「え、そんなのある?」といった質問が出るなど、かなりしっかり地図を確認しながら互いの意見交換ができていた。

次に1967年の地図と1932年の地図を見比べ、気づいたことを発表させた。変化に注目して考察する。これは、1回目の授業で行った1967年と2013年を比べた作業と似ている。しかし、またどのように見ればいいのかわからないという声があり、年代の記している箇所と見方比べ方を一度全員に向け説明した。3世代になると比較が難しくなるようだ。考察自体はしっかりとらえられ、道や緑や住宅の変化に気づいていた。桑畑について、なくなったという生徒に対して、なくなったのか減ったのか問い、あいまいだった意見を「なくなった」と自信を持って言えるようにしっかり読み込むことを促していた。あいまいそうなところはそのままにせず、もう一度しっかり見させ確認し確かな情報とすると、生徒も納得している様子であった。あまり意見が出なかったが、「家が増えたのはどこ?」と聞くと、何が住宅地になったのか考えながら地図を見るようになった。3枚を重ねることで見えてくる変化の過程に気づくには、声掛けや視点の提案をしなくては難しそうであった。

最後に「地図を重ねること」で見えてくるものはなにかを考えさせた。「緑が減って、住宅や道がその場所にできたこと」が挙げられていた。抽象的な「地図を重ねることの意義」を多少なりと

も考えることができたようだ。

今まで過去と現在の A 地域についてみてきたが、最終的なまとめとしては、それを踏まえた未来の A 地域について考えることとした。荒地等の未開拓地を、自分たちならどのように使うのかを考えさせた。未来の A 地域がどんな地であってほしいか、そのために何が必要なのか生徒たちなりに考えて発表することができたと思う。理由も一緒にこたえよう、としたので、自分たちの考えやその答えに至った過程を大事にできてよかった。「自分たちの A 地域」という視点、これからは自分たちが受け継がれた A 地域を未来に託すというメッセージを、授業を通して伝えられたのではないだろうか。前々回の K 教諭の授業の中にあつた「みんなが宝だ」という言葉をうまく使って生徒に深いメッセージを送ることができたのではないだろうか。

2.4 横浜市教育委員会の評価

2015年度の旭区 A 中学校との研究協力の様子を教職員育成課の発行している大学連携だより第 1 号に掲載していただき、市内全校への配布をしていただいた（図 5）。

大学連携だより 第1号
平成 28 年 5 月 13 日発行
横浜市教育委員会事務局 教職員育成課

大学との相互交流をしてみませんか？

今年 2 月に鶴ヶ島中学校で日本女子大学教授の田部俊充先生が社会科の授業を 2 回行いました。この授業は人材育成マネジメント研修を受講している 10 年経験者の教員が授業実践力向上の一環として、相互交流システムを利用したものです。

この授業を行うにあたっては、田部先生が中学校の授業を見学した後に何度も打ち合わせを重ね、単元を設定しました。授業は「身近な地域の調査」の単元を扱いましたが、ここで活躍したのが、田部先生のもとで学んでいる教員志望の大学生と大学院生でした。田部先生の専門的な指示を受けながら旭区の地理・歴史資料を集め、教材を作成して授業にも参加しました。田部先生が構想を練った授業ですが、当日は要所で 10 年経験者の教員が指示をだし、時間管理や学習環境の整理を行いました。

「教師にとっては専門的な知識を得ることができる」「大学教授にとっては実際の中学校の様子や中学生の反応を知ることができる」「教員を目指す学生にとっては多くの経験ができる」「そして、なによりも、児童・生徒が一番の恩恵を受ける」— このように、大学との相互交流はみんなが幸せになる事業です。ぜひ一度ってみませんか。

打ち合わせの様子 授業の様子 大学生もお手伝い

●その他の相互交流事例紹介●

事例 1：大学の教員に、国語科の授業を見ていただき、指導、助言を依頼

とてもわかりやすく、具体的に指導していただき参考になりました。特に経験の深い教員にとっては有効な時間でした。
（菊名小学校 【講師】明治学院大学教授 中村教雄先生）

事例 2：聴覚障害の児童が入学するため、4月に大学の専門教員に職員向けの研修を依頼

聴覚障害の理解と教職員が気を付けることや周りの児童への指導等のあり方を丁寧に教えていただき、教職員で情報を共有することができました。現在、児童は安心して学校に通っています。（仏向小学校 【講師】横浜国立大学教授 中川辰男先生）

※記載してある学校等の情報は、あらかじめ各学校や関係する大学や保護者等の了承を得た上で掲載しています。

図 5 横浜市教育委員会大学連携だより第 1 号（2016年 5 月13日発行）

大学連携だより 第3号

平成 28 年 7 月 13 日発行
横浜市教育委員会事務局 教職員育成課

横浜市大学連携・協働協議会に 120 人が参加

6月 22 日(水)横浜花咲ビルにて、通算6回目(平成 26 年から)の「大学連携・協働協議会」を開催しました。当日は 43 大学の教職員、本市の全校種の代表者、教育長はじめ教育委員会事務局各課・室の代表者の総勢 120 人が集まり、今後の教員養成・育成について協議を行いました。今回の協議会は「教育実習の質の向上」と「相互交流の促進」をテーマに2部構成で実施しました。第1部全体会は、教育長挨拶の後、次の3つの発表が行われました。

- ①「協議会を軸にした取組の進捗と今後の方向性」について松原教職員育成課長からの報告
- ② 横浜国立大学の和田教授から教育実習ワーキンググループの進捗報告
- ③ 市立中学校と大学との相互交流の事例を、日本女子大学の田部教授、同大学学生、鎌ヶ谷中学校黒木教諭によるミニシンポジウムの形での紹介(大学連携だより第1号にも掲載)

教育次長からのお礼の挨拶の後、第2部はグループ協議の形で、大学教職員、学校代表、教育委員会事務局代表が各テーブルを囲み、「教育実習の事前・事後指導の充実」、「教育実習の内容の充実」、「相互交流の有効活用」について活発な協議が行われました。



教育長の挨拶



ミニシンポジウム



グループ協議

✿ 「教育実習を希望する学生への事前指導」についての協議 ✿

グループ協議の中で、実習の事前指導についての話題が多くありました。特に「一括方式」で申請する場合は各大学で、より慎重に学生を指導しているようです。主な指導方法は、「教職に強く意欲を確証し一括方式への承認前には面接を行っている」、「教職担当の教職員がほぼ毎日学生を呼び指導している」、「試験や単位取得状況で一定の制限をしている」などだそうです。また、インターンシップや学校体験の段階で自身の適性を見極めさせ、教員を目指す学生を絞り込んでいる、という大学もいくつかありました。学校からは「教員を第一志望とする学生を受け入れたい」という意見がありました。一方で大学からは「他の道路との選択に悩んでいる学生や、実習申請後に気持ちが変わる学生もいるため指導に苦慮している」という話もありました。中には、何度の挫折しながらも、最終的には教員になり活躍している方もいるようです。多くの大学が、この協議会を「情報交換の貴重な機会」と捉えているようです。「魅力ある教員を養成したい」という気持ちは大学も本市も同じです。今後も更に連携を深め、教員候補となる学生の養成と本市教員の育成の円滑な接続を図り、協働して教員の資質・能力を育てていければと考えています。

図6 横浜市教育委員会大学連携だより第3号(2016年7月13日発行)

また、横浜市教育委員会の推進する相互交流事業のモデル例と高く評価していただき、2016(平成28)年6月22日の第1回大学連携・協働協議会で、教育長をはじめ市教育委員会幹部、市内学校関係者、協定大学関係者等約120名の前で、田部、A中学校のK教諭、田部ゼミ4年生で横浜市の教員志望のNさんとともに発表の機会を得た。

大学との連携事業のメリットについてK教諭は、①専門的な知識・教材についての見識を深めることができた、②専門的な準備を学生も含めて協力して行えた、の2点をあげていた。今後は、教育委員会、学校、大学、学生の役割や児童・生徒の反応等も検証されねばならない。この学連携・協働協議会の様子も大学連携だより第3号に、③大学との市内交流事業の事例として掲載していただいた(図6)。

3 横浜市青葉区B中学校との研究協力の実際(2016年度)

2016年度は青葉区B中学校との研究協力を重ねた。B中学校は2016年度の横浜市教育委員会の

OJT 推進事業の推進校になっており、S 校長を中心として大学との連携を一つの柱として OJT を推進し、人材育成を図っていた。また、ユネスコスクールとして取り組んでいる ESD（持続可能な開発のための教育）を積極的に推進するために大学との連携が効果的であると判断した、ということだった。その後、横浜市教育委員会が田部を紹介して下さり、8月にB中学校で打ち合わせが行われ、田部はT教諭とI教諭の二人の社会科教員と協働して地理的分野でESDに関連した授業づくりをすることになった。

まず、T教諭が11月に「南アフリカ州」の単元で「環境保全と産業発展の両立を考えさせる」の授業を行った。授業後には田部、S校長、I教諭、K指導主事、大学院生、学部ゼミ生を交えた協議を行い、授業を振り返った。協議の後半には、次に行うI教諭の授業の検討も行い、田部は2月に「身近な地域の調査」の単元で「防災」の視点を取り入れた授業をすることを決めた。

3.1 2016年度青葉区B中学校の実践の様子

2017年2月に実際に行われた授業は、2時間扱いの単元になった。1時間目は田部がB地域の地形図を読み取る授業を行い、2時間目はI教諭が読み取った地域の特色から防災について考える授業を行った。

田部の行った授業は2017年2月13日（月）13：10-14：00にB中学校第2学年C学級において、課題は「B地域の過去・現在・未来を考えよう」とした。授業には大学院生1名、学部3年生2名、学部2年生3名の教職を目指す学生も参加し、授業をサポートしてくれた。授業後の14：10-15：00には中学校の先生方と意見交換会を行った。

展開1として「B地域はどのような特色をもった地域だろうか」として、最新の地形図を見て気づいたことを発表させた。次にB中周辺の地形図（2008年版）とTPシート（色塗り）、拡大図（2008年版）から読み取れることを発表し、クラスで共有した。B地域で読み取った要素としては、鉄道・道路、地名・施設、自然・住宅、交通が便利、住宅が多い、緑が少ない、等であった。

展開2として旧地形図（1982年版）、TPシート（色塗り）、拡大図（1982年版）を見て気づいたことを発表させた。生徒からは、交通は不便、住宅は少ない、緑が多い等の意見が出た。

展開3として映像「狛江水害」で多摩川の氾濫で家が流れる様子を見て、B地域の水害について考えさせた。最後に展開4として「未来のB地域を考える」という発問を行った。それに対しては、緑がなくなる、洪水への対応が必要、といった反応がでた。

授業後の振り返りには学生も参加し、活発な意見交換が行われ有意義な時間となった。2016年度の取り組みも「大学連携だより第11号（2017年4月発行）」に掲載された（図7）。

4 横浜市の中学校との中大連携の意義

教材開発を進めていく上での教育委員会との協力により中学校現場での実態や課題を把握しつつ、改善を考える研究を進めることができた。

横浜市教育委員会の要請で連携を進めて2年間が経過したが、以下の成果をあげることができた。

①大学教員、学生と教育現場の双方の理解が進んだ。横浜市の教員採用を目指す学生が多い中で、市教育委員会の方針などを担当者とのプロジェクトを通して知ることができ、有益であった。

②研究協力による授業研究や教材開発が進んだ。横浜市との連携のメリットとして各学校との研究協力があげられる。旭区A中学校、青葉区B中学校における出前授業とその前後の先生方との

大学連携だより 第11号

平成29年4月10日発行
横浜市教育委員会事務局 教職員育成課

OJT推進事業と連携した継続的な相互交流

今回は市ケ尾中学校で継続的に行われた相互交流の取組について紹介します。市ケ尾中学校は平成28年度のOJT推進事業の推進校です。市ケ尾中学校校長の坂村 謙先生は大学との連携を一つの柱として、OJTを推進し人材育成を図りたいと考えました。また、ユネスコスクールとして取り組んでいるESD（持続可能な開発のための教育）を推進するために効果的であると判断したからです。

そこで教職員育成課は、この分野に専門知識が高い日本女子大学教授の田部 俊充先生を紹介しました。8月に市ケ尾中学校で打ち合わせが行われ、田部先生は二人の社会科教員と協働して地理的分野でESDに関連した授業づくりをすることになりました。

授業を行うのは部甲 道貴先生と石井 翔太先生です。まず、部甲先生が11月に「南アフリカ州」の単元で「環境保全と産業発展の両立を考えさせる」授業を行いました。授業後には日本女子大学の田部先生、校長の坂村先生、石井先生を交えた協議を行い、授業を振り返りました。



協議の後半には、次に行う石井先生の授業の検討も行い、2月に「身近な地域の調査」の単元で「防災」の視点を取り入れた授業をすることが決定しました。実際に行われた授業は、2時間限りの単元になりました。

1時間目は、日本女子大学の田部先生が専門性を生かし、市ケ尾地区の地形図を読み取る授業を行い、2時間目は、石井先生が読み取った地域の特色から防災について考える授業を行いました。

田部先生の授業には教諭を目指す学生も参加し、授業をサポートしました。授業後の振り返りには学生も参加し、活発な意見交換が行われました。学生にとっても、とても有意義な時間になりました。



図7 横浜市教育委員会大学連携だより第11号（2017年4月10日発行）

研究交流により、学生の卒業論文作成の質も向上した。

成果の背景として考えられるのは、①意欲的で専門性の高い教育委員会担当者、②理解のある校長、③力量の高い協力的な教諭と生徒たち、④横浜市の教諭を目指す意欲的な学生、⑤研究能力の高い大学院生、⑥専門家としての大学教員、の6点である。

5 おわりに 今後への方向性

今後の課題と方向性としては以下の点があげられる。

①学校段階を超えた幼稚園・保育園、小学校、中学校、高等学校と大学との連携が必要であると感じた。今回テーマとした中学校社会科地理的分野の「身近な地域の学習」については、小学校社会科、中学校社会科地理的分野、次期学習指導要領において新設となる高等学校地理総合との系統性が求められており、各学校段階における研究の連携が望まれ、大学がその研究協力のコアになると嬉しい。

②大学において、専門的な内容に関して各学科との密接な連携が望まれる。例えば日本大学工学部では福島県葛尾村と地域再生にドローン（小型無人機）を活用する協定を結んでいる（日本経済新聞2017年11月1日）。葛尾村は東京電力福島原発事故により全村避難が続いている。このような中で工学部と連携し、ドローンを使い野生動物や橋の実態調査を進め村の復興につなげる計画である。医療や防災分野での実証研究に取り組み、ドローンの操縦士を育成する。2018年春に再開をめざす小中学校の学習で、ドローンを活かすことを考えている。このような最先端の内容を本学の地域連携でも積極的に取り入れ、共同研究が必要であると考え。今後に向けて、GIS（地理情報システム）や関連科学、そして附属校園、関係教育委員会と協力して、ハード、ソフト両面の整備を進めていく必要であると感じる。

最後に横浜市教育委員会 K 指導主事、横浜市立中学校の先生方をはじめ、連携協力していただいた横浜市教育委員会、教職員の皆様、日本女子大学教育学科、西生田地区教職課程委員会、教職支援室、学務部、をはじめ皆様のご理解と協力を得ました。心より感謝を申し上げます。

文献

- 1) 日本女子大学人間社会学部（2007）『平成18年度多摩区3大学連携事業学校教育ボランティア学校サポート事業報告書』。
- 2) 日本女子大学人間社会学部（2012）『平成23年度教育学科学校インターンシップ報告書』。
- 3) 田部俊充（2015）「学校支援事業・研究協力の実際の概要」『日本女子大学総合研究所紀要』第18号、pp. 134-143。
- 4) 中央教育審議会（2016）：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm（2017年11月3日閲覧）
- 5) 田部俊充（2018）：高校地理歴史科新科目「地理総合」の課題と方向性—GISへの取り組み—。日本女子大学人間社会学部紀要、28、pp. 71-85。

3. 川崎・多摩区をフィールドとした学生による地域連携活動の成果と課題 —2015～2017サクラボの活動を中心として—

久東 光代・星名 由美

1 はじめに

筆者らは2009年から自主的に地域連携・貢献活動を実践する「サクラボ (SAKU LABO)」の学生たちを支援してきた。また、プロジェクトマネジメントのノウハウや問題解決力、ICT 活用力などの体系的な指導の必要を感じて、2012年より科目「ICT 活用とプロジェクト演習」(展開科目、キャリア女性学副専攻コア科目)を開講し担当している。この科目は前後期を通してキャンパス周辺地域をフィールドとしてイベント企画やコラボ商品開発などのプロジェクト活動に関する知識・技術と実践力の育成を目的としている。学生の地域貢献活動は自主的な任意の活動であれ授業実践であれ、「ただ、やらせるだけ」では十分な成果を上げることは難しく、学生のプロジェクト推進力、問題解決力、ICT (Information and Communication Technology) 活用力などの体系的な指導法として、具体的に次の6つの事項を検討している。

1. 活動を維持・推進するために必要なマネジメントに関する知識やノウハウ
2. 円滑で効率の良いチームワーク、コミュニケーション、情報共有の方法
3. 企画の前提となる効率の良い情報の収集・分析法
4. 企画や宣伝、報告用媒体・コンテンツづくりのための ICT の活用法と表現技能
5. 活動への意欲や動機づけを高め維持するための介入方法
6. 汎用性が高く多様な場面で対応できる問題解決のコツや技法、手順

総合研究所課題54では2012年度～2014年度の「サクラボ」と「ICT 活用とプロジェクト演習」における学生の地域活動の内容および成果と課題を報告したが(久東・星名, 2015)、総合研究所課題61では、2015年度～2017年度のサクラボの学生たちの多岐にわたる地域連携活動の実態について報告する。特に、2016年度、2017年度の2年間にわたり、この課題研究に加えて多摩区3大学連携事業に選定されたことに伴い、学生たちは、「誰もが元気になる街・ピクニックタウン多摩区の魅力の探求と発信!～生田緑地と西生田キャンパスをフィールドとしたコラボ商品開発とイベント企画から～」のテーマで精力的に活動し地域のことをより深く知ることになった。さらに、2017年度は、川崎市役所の担当者の勧めで、8名の学生が「大学生観光まちづくりコンテスト2017 多摩川ステージ」にエントリーし、活動の質、量の両面で大きく進展した。本報告では、主に、それらの成果と、また、同時に浮かび上がった課題について取り上げたい。



図1 サクラボのロゴ

2 「サクラボ」の地域連携活動の実態報告 (2015～2017)

この3年間はこの課題61の支援の他に、外部資金として「多摩区3大学連携事業委託費」を得たり、学生が希望して外部開催で多くの官公庁や地方自治体、企業の協賛や後援を得て行われている「大学生観光まちづくりコンテスト」(<http://gaku-machi.jp/>)にエントリーするなど活動が広がったとともに深化した。

2-1 2015年度の活動

サクラボの学生たちは、表1に示すように、4月の新入生歓迎会からスタートし、主に、多摩区役所、生田緑地、川崎市内の小学校と地域の取組である「寺子屋事業」と連携しながら、それまで実施してきた地域の店舗とコラボレーションで開発した商品の販売や子ども向けのものづくりのワークショップ企画を中心に活動を継続した。

表1 2015年度：サクラボの主な活動内容 表中の①②・・は写真・画像の番号と対応

日程	活動内容
4月	新入生歓迎会企画（ポスター掲示・チラシ配布・説明会実施）
6月6日（土）	多摩☆まちカフェ参加（多摩区役所、（サクラボの活動紹介発表と子どもたちとのミニ体験交流）
6月12日（金）	コラボ商品開発のための試食会（新宿高島屋「大学は美味しい！」視察を含め、大学コラボ商品と地域商店のスイーツなどの試食会）
6月21日（日）	①生田緑地イベント（電子絵本の読み聞かせとあじさいドーム作り）
7月16日（木）・ 24日（金）・ 8月1日（土）	学食取材＆お祭取材（専修大学かわさきワンセグの番組制作のため）
8月下旬	山形大学主催の大地連携WSへの参加（山形・真室川、北海道・阿寒）
10月2日	日女祭のための試食会
10月17日（土） ～18日（日）	②日女祭テント販売&カフェ（手作りアクセサリ販売、選べる米バーガー販売など）
11月28日（土）	寺子屋事業（中野島小学校、スノードーム作りと西生田写真クラブの学生が撮影した完成作品の写真を利用したクリスマスカード作り）
12月23日（水）	③生田緑地クリスマスイベント（万華鏡作り・松ぼっくりツリー作り・森のアトリエを開催）
その他	サクラボWebページリニューアル・サクラボキャラ製作、コラボ商品開発・電子絵本読み聞かせプロジェクト など



① 6/21 生田緑地イベントポスター



② 10/17-18 日女祭コラボ商品・手作りアクセサリの販売



2-2 2016年度の活動

2016年度のサクラボの活動内容を表2に示す。この年は多摩区3大学連携事業に選定された1年目で、委託費を受け、多摩区が掲げる「ピクニックタウン多摩区」構想を活性化する取組を目的として、これまでコラボ企画として開発した「選べる米バーガー」をランチボックスとして商品化することと関連した地域イベント企画を中心として活動を行った。



③12/23 生田緑地クリスマスイベントのポスター・手順書及び実施風景

表2 2016年度：サクラボの主な活動内容 表中の④⑤・・は写真・画像の番号と対応

日程	活動内容
4月	YY ランチミーティングの継続的な実施
	多摩区3大学連携事業1年目で、「ピクニックタウン多摩区」を活性化する取組を推進する活動を開始
	8月主催のFDつばさ・大地連携「かわさきワークショップ」に向け、学生サポーター7名と教職員で企画開始
8月	FDつばさ・大地連携ワークショップ参加・主催（山形大学主催、山形・真室川WS：2名参加、かわさきWS（8/30-9/2）：学生サポーター7名と教職員で主催）
10月15日（土）～16日（日）	④日女祭テント販売&「We ♥ 多摩区」フォトコンテスト（選べる米バーガー・手作りアクセサリー販売、地域住民の写真募集）
11月20日（土）	⑤登戸・ニヶ領せせらぎ館「秋の収穫祭」イベント（選べる米バーガー販売、電子絵本読み聞かせ）
11月26日（土）	寺子屋事業（中野島小学校、飛び出すピクニックカードづくり）
その他	⑥イベント時に着用するTシャツデザイン SAKU LABO ニュース、⑦リーフレット制作



④10/15-16 日女祭「選べる米バーガー」販売会



⑤11/20 ニヶ領・せせらぎ館「秋の収穫祭」にて「選べる米(マイ)バーガー」販売会



⑥イベント時に着用するTシャツをデザイン
(多摩区3大学事業費にて制作)

ピクニックタウン多摩区 × SAKU LABO

2016年度は、多摩区の大学・地域連携事業の助成を受け、私たちSAKU LABOの学生たちは、屋外でゆったりひびと酒と過ごせる環境を午し魅力あるまちづくりを目指す「ピクニックタウン多摩区」の活性化構想に巧みで、ピクニックファンボックス、食品開発をメインに、「We♡多摩区・フォトコンテスト」や子どもを対象にした「ピクニックカーづくり」のワークショップなどの企画を進めてきました。今年度は、「ファンボックス」商品開発のスタートとして、これまで学内で地域店舗とコラボで作った「選べる米バーガー」のワークショップを主催しました。

「選べる米バーガー」とは？

2012年から行っている大学と地域を結び提供する活動のひとつです。コンセプトは、「パンの味と、中に挟む野菜を自分で好きのように」に選べることです。地域のお店をいくつ回り、米粉パンや具材を吟味・相談しながら見た目や味はもちろんです。アレンジにもこだわっています。



米粉パンと野菜

2016 SAKU LABOの開発活動

2016年度は、学内で試食会を開催し、日女祭やせせらぎ館での「秋の収穫祭」では販売・アンケート調査を行い地域の皆様から意見をいただきながら改良を重ねています。パズについて、いろいろな評価をもとにハンズさんと相談した結果、より大きく、よりしっかりとしたものになりました！また、私たちの「日女大らしく可愛い見た目にした」という要望により、パンの形もおじり型と、お花型の2種類を用意していただきました。それぞれ良さがあり、また改良の余地があると考えています。



おじり型＆お花型
どちらが好き？

～普段の活動～



毎月
Y-Yランチミーティング



週1-2回、お休みの時間に、今行っている活動についての報告や打ち合わせを行っています！



多摩川グリーンアップ活動

年に数回実施したイベントや学内のプロジェクトなどの活動も必ず定期的に開催を行っています。



イベント当日の準備



打ち合わせの様子



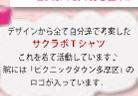
地域の方々と打ち合わせ、イベント準備から終わった後の打ち上げまで、みんなで楽しく活動しています！



日女祭の後の打ち上げ！



デザインから自分で考えて考えた
SAKUラボTシャツ
これを見て活動しています。現在は「ピクニックタウン多摩区」のロゴが入っています。



デザインから自分で考えて考えた
SAKUラボTシャツ
これを見て活動しています。現在は「ピクニックタウン多摩区」のロゴが入っています。

Design main: M. Ushifusa (文化3年), Y. Amano (理2年), sus.s. Komukai (文化1年), Y. Guni (文化2年)
SAKU LABO & ICT活用とプロジェクト演習 監修: 菅野 匠
| 日女子大学人間社会学部心理学・発達教育開発系 | 久野 友一 | 専任主査 sakulabo@tcjwu.ac.jp, http://mcn-www.jwu.ac.jp/~sakulabo/

日本女子大学

地域と大学をつなぐ プロジェクト活動 2015・2016

日本女子大学人間社会学部
SAKU LABO×ICT活用とプロジェクト演習

SAKU LABOとは

日女子に地域交流活動を目指す学生たちにより2009年に発足した団体で、これまでに、絵本の読み聞かせなどの子ども向けイベントの企画や地域コロナ商品の開発などを行って来ました。2010年度「社会人基礎力育成プログラム」関東地区大会優勝賞状、新卒生「大学は美味しい!!」に参加しました。2016年度は、これまでの企画に加え、「ピクニックタウン多摩区」の魅力発信企画として、ピクニックファンボックス開発や「We♡多摩区」イベント企画などを行いました。

ICT活用とプロジェクト演習とは

プロジェクト活動を通して「情報活用能力」と「社会人基礎力」問題解決力、学ぶための学習共通語まで、2012年度に開講しました。実際にイベントを実施する中で、企画力やコミュニケーション力の向上を目指しています。2015年度は午田緑地で親子対象の「モッコロ宮だるまづくり」などのワークショップを企画・実施しました。2016年度は、中野島小学校で「スノーモービルづくり」や「アドベンチャーゲーム」、午田緑地では「ジメキランドづくり」を行い大変好評でした。

SAKU LABO×ICT活用とプロジェクト演習 たくさんの地域の方々とコラボしました！

「We♡多摩区」フォトコンテスト
日女祭にて「ピクニックタウン多摩区」とコラボし「We♡多摩区」をテーマに公募。地域の皆様から協力ある多摩区の写真もたくさん集まりました！さらに多摩区役所「ニッ紛せせらぎ館」にて全作品の展示を行い、地域の方々の協力のもと大成功を収めました。
(2016年10月～12月)



日女祭にて...との写真展！

大地連携ワークショップ in かわさき

本学主催の「大地連携ワークショップ」を川崎市で開催！東日本大学から10名の学生が集まりました。サクラホから16名の学生も参加して参加しました。4日間のプログラムの中で、環境をテーマに川崎市企業家の研修（千代田工業建設・塚の系南・西東空）をしました。また、多摩川のクリーンアップ活動や「かわさきマスター」の活動などの体験を通して、次世代の川崎の未来と現在を学び、自分たちの未来を探りました。サポートとして、前年から外部との打ち合わせを兼ね、下見や交流会の企画、しりとり作成まで、ワークショップ全体の企画から関わりました。当日は参加学生と一緒に体験活動を楽しんだり、熱心に発表準備に打ち込んだり、とて充実した貴重な経験をすることができました。
(2016年11月10日開催 | 2016年11月20日(日) | 1日開催)



千代田化工にて、はい、チーズ！

高島サブツブリに挑戦！

京王線
よみうりランド遊園地
Polaris パズル

南武線
薬圃 はしはし米姫
中野島小学校
東晋小学校

人間社会学部
SAKU LABO
人間社会学部
読売ランド前
モンタナ 米彦

生田
小田急線
生田緑地
生田緑地にて子ども向けイベント開催

生田緑地にて～地域コロナ商品の販売～
大学付近の商店とコラボした「選べる米バーガー」や「米彦」「米姫」、学生が楽しく手作りした手作りのアクセサリを販売！大学内外で大好評です！毎年、コロナ商品を運んで地域交流や新発見を提供する場として活動しています。
(毎年10月半ば)

選べる米バーガー
青森・絆つたの「つがのロマン」とキヤンパ(丸沼3店舗とのコラボ商品！)

寺子屋事業 (川崎市教育委員会)
中野島小学校、東晋小学校でイベントを開催しました。さくらトムづくりや校庭でのアドベンチャーゲーム、とびだすピクニックカードなど女子大生らしい企画を考え、好評にまわりました。参加者にも毎回好評で、イベント中はずっと笑顔であってくれています。この活動を通して多摩区の発展や美意識を大切に育んでいきたいと思えます！
(2015年11月・2016年3月・11月開催)



みんな、なにを
つくっているのかな？

ニッ紛せせらぎ館 秋の収穫祭
「ニッ紛せせらぎ館」にて、地元の農産物や手作り食品を販売するイベントを開催しました！「選べる米バーガー」は1時間販売で完売し、学生が「ハロウィン」で作成した「電子絵本」を使った読み聞かせも、たくさんの方にお聴きいただき大盛況でした。(2016年11月20日開催)

親子向けイベントを開催！「動く電子絵本」の読み聞かせや、松ぼっくり作り、万華鏡、スノードーム、ジェルクッキング、モッコロ宮だるまなどの手作りワークショップを企画、回を重ねるたびに新たな発見や学びがありました。完成した9組の子供たちの笑顔がハワーンと、多くの笑顔ももたらせるイベントを企画してこうと思えます！
(2015年6-12月/2016年11月開催)



お昼寝の準備中！

読売ランド前での様子

ニッ紛せせらぎ館 秋の収穫祭
「ニッ紛せせらぎ館」にて、地元の農産物や手作り食品を販売するイベントを開催しました！「選べる米バーガー」は1時間販売で完売し、学生が「ハロウィン」で作成した「電子絵本」を使った読み聞かせも、たくさんの方にお聴きいただき大盛況でした。(2016年11月20日開催)



たくさんの方が来てくれました～

多摩川
多摩川にて～子ども向けイベント開催

生田緑地にて子ども向けイベント開催
親子向けイベントを開催！「動く電子絵本」の読み聞かせや、松ぼっくり作り、万華鏡、スノードーム、ジェルクッキング、モッコロ宮だるまなどの手作りワークショップを企画、回を重ねるたびに新たな発見や学びがありました。完成した9組の子供たちの笑顔がハワーンと、多くの笑顔ももたらせるイベントを企画してこうと思えます！
(2015年6-12月/2016年11月開催)



お昼寝の準備中！

読売ランド前での様子

⑦2015年度・2016年度地域連携活動報告リーフレット (総合研究所課題G1助成金により制作)

2-3 2017年度の活動

この年は、多摩区3大学連携事業の2年目となり、「ピクニックタウン多摩区」活性化構想に呼応して「誰もが元気になる街・ピクニックタウン多摩区の魅力の探求と発信！」に基づき学生の主体的な力を活かした企画・提案型の地域貢献活動を継続した。さらに、川崎市役所の後押しで、サクラボの学生8名が「大学生観光まちづくりコンテスト2017・多摩川ステージ」に初めて参加した。主な学外のフィールドとし、生田緑地、二ヶ領・せせらぎ館、多摩区内の小学校での寺子屋事業などであった。また、「ICT活用とプロジェクト演習」の授業の課題として、学内のフィールドとし、自然豊かな本学西生田キャンパスに地域住民を招く取組を行った。

表3 2017年度：サクラボの主な活動内容 表中の⑧⑨・・は写真・画像と対応

日程	活動内容
6月24日(土)	⑧生田緑地・ピクニックデー：選べる米(マイ)バーガー販売・親子対象地域交流イベント開催
6月23日(金)～ 9月12日(火)	⑨大学生観光まちづくりコンテスト2017・多摩川ステージ参加 ポスターセッションに選出され「イメージくると！TAMAくるプラン」提案・発表
8月5日(土)	⑩二ヶ領せせらぎ館：多摩川エコ★カップいかにだり
10月4日(水)	大学生観光まちコン 川崎市役所主催発表会
10月21日(土) ～22日(日)	⑪日女祭：選べる米(マイ)バーガー、コラボスイーツ、TAMA-Kawa-iiブランド・アクセサリ制作・販売、「We♥多摩区」フォトコンテスト開催
11月11日(土)	⑫寺子屋事業：東菅小学校 ひらひらカラフルスノードーム作り・ぺたぺた手形アート
11月19日(土)	⑬登戸・二ヶ領せせらぎ館：「秋の収穫祭」イベント(選べる米バーガー販売、電子絵本読み聞かせ、アクセサリ販売)
12月6日(水)～ 1月12日(金)	二ヶ領・せせらぎ館：「We♥多摩区」フォトコンテスト作品展示
12月23日(土)	⑭生田緑地クリスマスイベント
その他	SAKU LABO ニュース、⑮リーフレット制作



⑧ 6/24 生田緑地：ピクニックデー
みんなでぺたぺた手形アートとピクニックカードづくり

チーム名	SAKU LABO	大学・学部	日本女子大学・人間社会学部	多摩川ステージ
プラン名称	イメージくらっと！「TAMAくるプラン」	テーマ	かまちづくりを推進した「観光まちづくりプラン」	
リーダー名				事務局記入欄
指導教員名				
メンバー名				

多摩区・多摩川を活性化させる『TAMAくる』プロジェクト By SAKU LABO

★ 対象者 多摩川の周辺と課題認識 ★

- ・多摩川沿い(多摩川工業地帯)は古いイメージが強い。
- ・豊かな自然環境を観光資源として活用。SNSで発信して多世代の人々が遊び、学び、交流する多摩川沿いの観光(多摩川16.18区)とA区(多摩川)を軸として、多摩川沿いの観光資源として発信が求められる。100%がA区(多摩川)1区(多摩川)に限定して発信が求められる。
- ・多摩川沿いの観光資源を、多摩川沿いの観光資源として発信が求められる。
- ・1区(多摩川)に限定して発信が求められる。

★ 課題の解決策とターゲット ★

- ・世代や性別問わず(1区)楽しめる人々がターゲットに、発信につなげる。
- ・1区(多摩川)に限定して発信が求められる。

★ 提案 ★

かまちづくりを推進した「観光まちづくりプラン」

- ・多摩川沿いの観光資源を、多摩川沿いの観光資源として発信が求められる。
- ・1区(多摩川)に限定して発信が求められる。

書いてあげよう！

写真をあげよう！

- ・多摩川沿いの観光資源を、多摩川沿いの観光資源として発信が求められる。
- ・1区(多摩川)に限定して発信が求められる。

多摩区・多摩川を活性化させるTAMAくるのコンセプト

多摩川沿いの観光資源を、多摩川沿いの観光資源として発信が求められる。

多摩川沿いの観光資源を、多摩川沿いの観光資源として発信が求められる。

★ 効果・可能性 ★

- ・SNSによる口コミで観光客のさらなる集客を期待⇒観光客の増加による多摩川沿いの活性化。
- ・TAMAくるプランによって多摩川沿いの観光資源が活かし、健康促進につながる。
- ・住んで良かった！
- ・商品開発による地元企業への経済効果

促進連携



⑨ 9/12大学生観光まちづくりコンテスト
2017 多摩川ステージ参加
ポスターセッションにて発表

学内での練習風景



⑩ 8/5 ニヶ領・せせらぎ館：多摩川 エコ★カップいかだ下り
サクラボ、学内サークル管弦楽団有志学生が参加

大学生観光まちづくりコンテストへの参加を機に、サクラボでは、この提案の中心となる「TAMA くる」「川のまち」「森のまち」をキーワードとして「まちコン企画」を進め、「TAMA ☆ Kawa-ii」ブランドのアクセサリ制作・販売した。「TAMA ☆ Kawa-ii」ブランドとは、“キュート・可愛い”と“川、良い”をコンセプトとして学生たちが考えたブランド名で、多摩区と多摩川、生田緑地などをイメージした商品開発を目指すことになった。



⑪⑬⑭ ⑨の大学生観光まちづくりコンテストで提案した「TAMA ☆ Kawa-ii」ブランドの手作りアクセサリ販売
日女祭（左）、ニヶ領・せせらぎ館で「川」バージョン、生田緑地（右）で「森」バージョンを販売



⑩11/11寺子屋事業：東菅小学校 ひらひらカラフルスノードーム作り・ぺたぺた手形アート



⑪11/19ニヶ領・せせらぎ館「秋の収穫祭」動く電子絵本読み聞かせ・ぺたぺた手形アート・多摩川のおさかなぺたぺた



⑭12/23 生田緑地：クリスマスイベント 松ぼっくりツリー作り・おおきなハンドアートツリー・ハンドスタンプアートプロジェクト

また、このプランの中でプランのロゴマークやシンボルデザインを考案し、イベントやコラボ商品販売にこのデザインを活用した（図2）。



図2 「TAMAくる」のロゴマーク、「川のまち」「森のまち」、キッチンカーをモチーフにデザインしたシンボルマーク

3 活動の継続から何が得られたか？～指導・支援の方法と内容に着目して～

サクラボの活動は9年目を迎えたが、年々活動の質・量とも高まり（表4-1、4-2）、それぞれの活動は準備から実行、まとめにいたるまで活動の継続性およびチームとしての協力が求められるようになった。ここでは継続性により何が得られたかを検討したい。

表4-1 2016年度：サクラボの諸活動の実施経過

2016年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
活動												
選べる米バーガー開発												
ランチボックス開発	←アイデア創出→		試作会議	←地域への相談→		←販売会準備、宣伝、アンケート実施・分析、店舗打ち合わせ、商品改善→						
日女祭(学園祭)販売		←店舗打ち合わせ・宣伝・ラベルデザイン・準備→					10/15-16					
せせらぎ館にて販売							準備	11/20				
紅葉狩りにて試食会								準備	12/10			
レシビコンテスト審査											レシビ審査・集計作業	
「We♥多摩区」フォトコンテスト												
日女祭にてコンテスト		←作品募集・宣伝・準備→					10/15-16					
多摩区役所にて展示									11/16-23			
せせらぎ館にて展示										12/1-1/6		
地域交流イベント												
動く絵本の読み聞かせ(せせらぎ館)								準備	11/20			
ピクニックカードづくり(中野島小学校)								準備	11/26			
ジェルキャンドルづくり(生田緑地)				←情報収集・企画・交渉・宣伝・準備→					11/27			
日本女子大学で紅葉狩り								準備	12/10			

表4-2 2017年度：サクラボの主な活動内容

2017年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
活動												
大学生観光まちづくりコンテスト・多摩川ステージ参加												
準備：フィールドワーク、企画、提案書・プレゼン提出		5/30 説明会	6/23 エントリー	フィールド ワーク	8/22 提出							
発表会当日：ポスターセッション						9/12 本番	←継続的な取組へ→					
川崎市発表会							10/4 本番					
まもコン企画「TAMAくる」プランの継続的な取組												
選べる米バーガー・ランチボックスへ深化・販売	←アイデア創出→		試作会議	←販売会準備、宣伝、店舗打ち合わせ、商品改善→								
生田緑地・ピクニックにて	←アイデア創出→		6/24									
日女祭(学園祭)にて	←店舗打ち合わせ・宣伝・ラベルデザイン・準備→					10/21-22						
せせらぎ館・秋の収穫祭にて(川のまち)						準備	11/19					
TAMA-Kawa-iiブランド・アクセサリー制作・販売	←アイデア創出・コンテスト準備→		試作・準備	販売	改良・試作・準備・販売							
日女祭(学園祭)にて						準備	10/21-22					
せせらぎ館・秋の収穫祭にて(川のまち)						準備	11/19					
生田緑地・クリスマスデーにて(森のまち)						準備	12/23					
「We♥多摩区」フォトコンテスト開催・展示												
日女祭にて展示・コンテスト	←作品募集・宣伝・準備→					10/21-22	受賞者発表					
せせらぎ館にて展示									12/6-1/12			
地域交流イベント企画・主催	←情報収集・企画・交渉・宣伝・準備・当日の運営→											
生田緑地・ピクニックデー		準備	6/24									
ニヶ領・せせらぎ館							準備	11/19				
東菅小学校							準備	11/11				
生田緑地・クリスマスデー							準備	12/23				
その他の地域連携活動												
ニヶ領・せせらぎ館 エコ★カップいかだ下り				準備	8/5							
※日本女子大学で紅葉狩り							準備	12/2				
※中野島小学校							準備	12/9				
※生田緑地・イベント							準備	11/26				
サクラボニュース・リーフレット・報告集制作・発行												
サクラボニュース第3号							発行					
サクラボニュース第4号												発行
2017 三つ折りリーフレット												発行
2017 報告集												発行

※ ICT活用とプロジェクト演習で実施 その他はサクラボで実施

多くの取組を
実現！

3-1 コラボ商品「選べる米バーガー」→「ピクニックランチボックス」への深化過程

2012年に学生により地域の複数の店舗と青森・鯉ヶ沢での農業体験で出会ったお米（つがるロマン）の米粉をつなげて考案されたコラボ商品「選べる米バーガー」をブラッシュアップし、「ピクニックタウン多摩区」に呼応して「ピクニックランチボックス」として商品化を目指す取り組みが

表5-1 2016年度「選べる米（マイ）バーガー」ランチボックスへの商品化に関する活動

2016年 4月～7月	SAKU LABO YYランチミーティングにてアイデア出し
6月14日(火)	学内で「選べる米バーガー」商品化に向けた試食会実施、川崎育ちの野菜を使ったレシピなどの試作
7月12日(火)	川崎市JAせせらぎサモス宮前店に「米バーガー」の商品化の可能性について学生が相談に伺う
10月15日(土) 16日(日)	「日女祭」にて「米バーガー」の販売会と調査実施
11月20日(日)	ニヶ領・せせらぎ館「秋の収穫祭」にて「米バーガー」販売会(NPO法人多摩川エコミュージアムのご支援により)
12月10日(土)	「日本女子大学で紅葉狩り！」イベント開催、地域の来場者53名に「米バーガー」を試食していただき調査実施
2017年 1月～2月	多摩区役所・カイト主催「サンドレシコンテスト」に審査協力



図3 選べる米（マイ）バーガー商品化に向けた取組
 ・6/14 試食会とアイデア出し・ラベルデザイン
 ・11/20 せせらぎ館での販売

進められた。その経緯をふり返りたい。

2016年度は新入生を対象にこれまでの商品の試食会を行い、アイデア出しや商品のラベルデザインなどを行い、改良作業を行った（表5-1、図3）。

また、地域住民対象の試食会を行い、商品化に向けて市場調査的なアンケートを行った。その結果を図4に示すが、商品のおいしさや外観、食べやすさなど様々な側面で一定の質の良さが判明し、また、選択や好みにはばらつきがあることがわかった。

調査作成・実施者：サクラボ学生・情報教育研究室

調査時期：2016年12月10日（土）

調査対象者：「日本女子大学で紅葉狩り！」にご参加いただいた地域住民の皆様50名

有効回答数：39名（男性15名、女性23名、未回答1名）

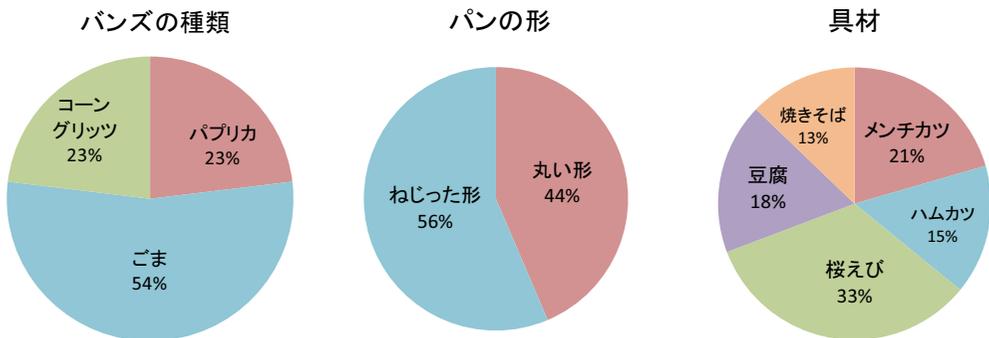
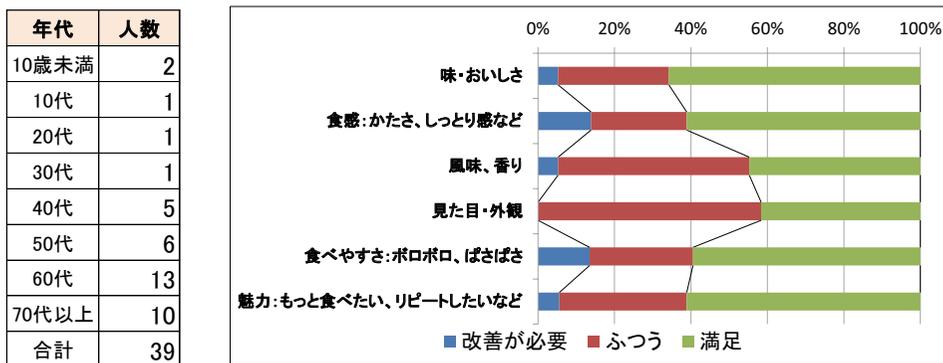


図4 「選べる米(マイ)バーガー」試食者による評価・選択結果

2017年度は、米バーガーのランチボックス化に向けて、主にバンズパンをよりカラフルで野菜テイストに変えてヘルシーなものにしたり米粉の質を上げたり、商品のシールをより良いデザインにグレードアップし、いくつかのイベントで販売したが、商品化には至っていない（表5-2、図5-1、図5-2を参照）。

表 5 - 2 2017年度の「選べる米バーガー」商品化に関する活動

2017年4月～5月	SAKU LABO YYランチミーティングにてアイデア出し	
5月19日(金)	学内で「選べる米バーガー」商品化に向けた試作会議 →米粉パンズと新しい具材の検討	新入生も一緒に試作会に参加!
6月24日(土)	生田緑地ピクニックデーにて、「選べる米バーガー」販売会	
10月3日(火)	学内で「選べる米バーガー」商品化に向けた試作会議 →米粉パンズの改善案、新しい具材の検討	米粉をコシヒカリにして、モチモチ感アップ!
10月10日(火)	学内で「選べる米バーガー」商品化に向けた試作会議 →米粉パンズの再改善(10月3日の試作会議のアイデアを試作)	
10月21日(土) 22日(日)	「日女祭」にて「選べる米バーガー」、カラフル米ベジパンの販売会	野菜をコンセプトに、カラフル米ベジパン誕生!
11月19日(日)	ニヶ領・せせらぎ館「秋の収穫祭」にて「選べる米バーガー」販売会	



図 5 - 1 「選べる米 (マイ) バーガー」学生がデザインした商品ラベル



図5-2 選べる米（マイ）バーガー販売会：生田緑地（上）、日女祭（下左）、二ヶ領・せせらぎ館（下右）

3-2 「We ♥ 多摩区」フォトコンテスト開催から

キャンパスが立地する川崎市多摩区の魅力を探り、また、地域住民と本学の学生たちが交流することを目的にして、2016年度、2017年度の2回にわたって、地域住民の皆様から多摩区の魅力あふれる風景を撮影した写真を募集し、日女祭でフォトコンテストを実施した。コンテストの方法は、来場した皆様に、良い評価の作品3点の番号にシールを貼っていただく形式で行い、「金賞」「銀賞」「銅賞」など賞を設けて、女子大グッズなどの賞品をお送りした。また、2回目の2017年度のコンテストでは、部門別で写真を募集した。

写真の募集、当日の展示、賞の集計と賞品の発送など作業に手間取ったが、地域の皆様に喜んでいただけたこと、学生たちが地域の魅力を知ることができたことが大きな成果であった。その後、多摩区役所、二ヶ領・せせらぎ館にて展示を行い、好評であった（図6参照）。

WE ♥ 多摩区

作品募集

日本女子大学と多摩区の We Love Tama-Ku

フォトコンテスト

あなたは多摩区のとこが、好き？
わたしは多摩区のとこが、好き。

2016年8月1日(月)～10月7日(金)

日本女子大学 日女祭
10月15日(土)・16日(日)
10:00～16:00

日本女子大学 西生田キャンパス



WE ♥ 多摩区

第2回!!

日本女子大学と多摩区の We Love Tama-Ku

フォトコンテスト

あなたは多摩区のとこが、好き？
わたしは多摩区のとこが、好き。

2017年7月26日(水)～10月16日(月)

第27回 日本女子大学 日女祭
10月21日(土)・22日(日) 10:00～16:00

西生田キャンパス 44番教室



図6 「We ♥ 多摩区」フォトコンテスト
・2016年度 日女祭、多摩区役所アトリウムにて(上)
・2017年度 日女祭にて(下)

3-3 ものづくりワークショップイベント開催のコンテンツ作成の過程から

学生たちに「ただ、やらせているだけ」では、活動の楽しさや満足感は得られるが、学びの側面も重視したいと考え、いくつか指導を工夫し実践している。

下の図7-1、7-2に示すように、「ICT活用とプロジェクト演習」の授業におけるポスター制作、サクラボの活動で子どもに作らせるカードのデザインの過程で、ターゲット(子ども)や情報の見やすさ、アピール度などに意識を向けさせることと情報技術を活用の仕方も含めて指導を繰り返し、より良い成果物になるよう指導し改善が得られた。



図 7-1 ICT 活用とプロジェクト演習：ポスターデザインの制作過程と完成版



図 7-2 サクララボ：クリスマスカードデザインの制作過程と完成版

4 まとめ・成果と課題

この課題研究では、サクララボの学生を中心として多摩区の活性化、魅力を探る趣旨に沿った活動を継続して追ってきた。コラボ商品「選べる米（マイ）バーガー」の改善を試み一定の成果を得たが商品化に向けては課題が残っている。また、2017年度は、学生たちが新たに「大学生観光まちづくりコンテスト・多摩川ステージ」に参加し、フィールドワークで多摩区の魅力を深く知り、「イ

メージくると！TAMA くる」プラン、「Tama★Kawa-ii」ブランドなど発信力の高いキャッチコピーやロゴを考案し、プレゼンテーション力を向上させたことは大きな成果であるといえる。

学生たちに時間を費やすだけの成果、すなわち活動の質が高まり社会に出てから必要な実践力を習得することが期待されるが、「ただ、やらせているだけ」では成果を実感できないことも多い。また、より良い活動のためにはPDCAサイクル（企画→試行→評価→再試行）のプロセスが必要であるが、時間的、人的な制約があり達成が難しい。さらに成果を得るには汎用的な問題解決力を育成する必要であり、現在、筆者らは問題解決力育成型の「地域連携型プロジェクト演習」の指導法の検討に着手している。

地域連携活動では必ず学外のステークホルダーを意識することが重要で、ターゲットの想定や分析などに広い視野や多様な見方・考え方と情報発信やコミュニケーション活動の質を高める必要があり、多様な知識・技能、ICTなどの活用力が求められる。具体的には、情報収集力や学生同士のチームワーク力の向上、学生たちが成果を適切に言語化、文章化する能力を習得してほしい。指導法を検討し学習の成果を測るには、継続的な評価の実施が必要である。サクラボの学生たちは任意の活動であるため追跡が難しく、「ICT活用とプロジェクト演習」の授業で実施した評価結果を図8-1、8-2に示す。自己評価であるがどの評価観点でも一定の向上がみられる。

前回の総合研課題研究54の紀要でも述べたが、学生の地域連携活動、プロジェクト演習による学習は、昨今求められているアクティブラーニングでの到達目標の達成に有効であると考えられる。しかしその目標達成を促進するには、①環境面、②組織面の充実も不可欠であると考え。それらの側面での課題をここに述べておきたい。

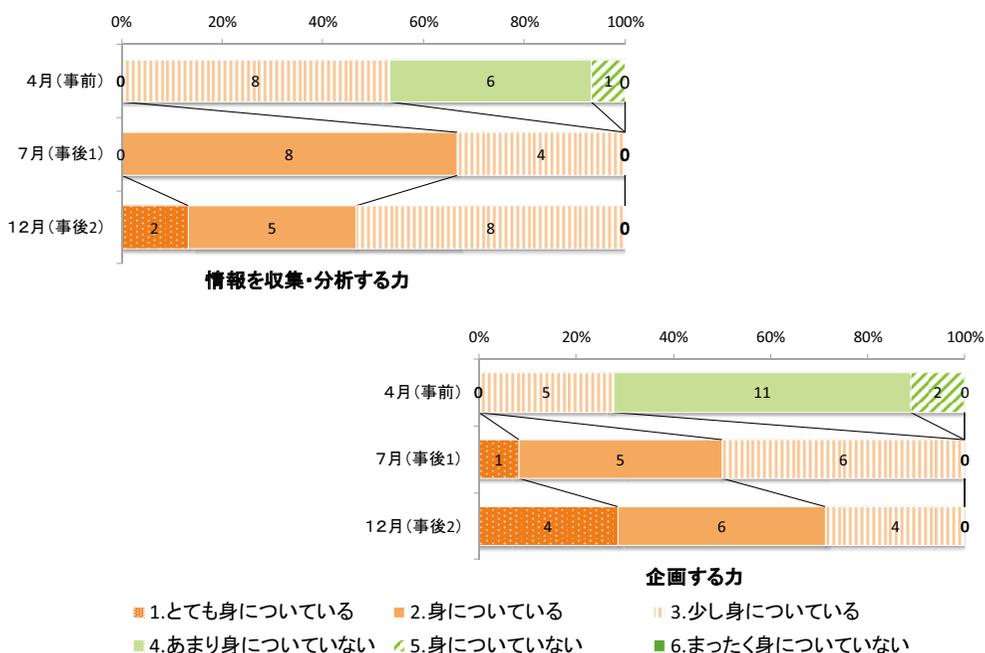


図8-1 ICT活用とプロジェクト演習：各学習目標に対する習得度合いの評価結果（1）

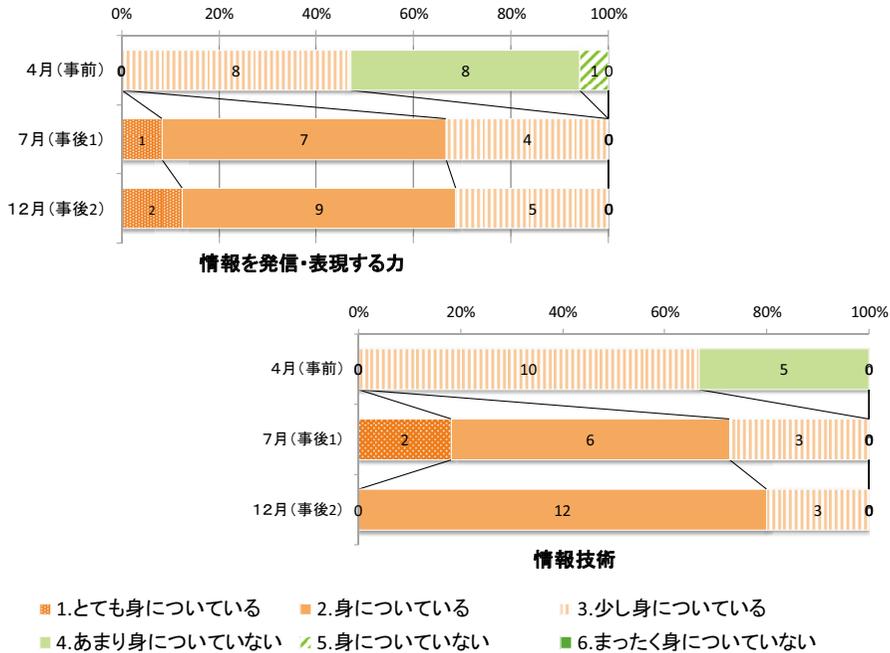


図8-2 ICT活用とプロジェクト演習：各学習目標に対する習得度合いの評価結果（2）

①環境・スペース面

2009年10月に読売ランド前駅近くの商店街にある空き店舗を学生たちがリフォームして地域交流スペース「SAKU LABO」を設立したが、2016年3月に老朽化・建て直しのため継続利用できなくなった。それ以降、学生たちは、学内に十分な活動スペースが得られないまま、筆者らの狭い研究室（情報教育研究室兼個人研究室）で不自由な活動を強いられ、常に活動スペースの不足の問題に直面せざるを得ない。いずれも本学では未整備で不十分であり、今後のプロジェクト学習やアクティブラーニングを推進するためには学修環境の整備や構築が期待される。筆者が2014年12月に公立はこだて未来大学を視察した時に体験した利点を、再度、挙げておく。

1. 学生の学修状況が見渡しやすいグループワークが気軽にできるスペース
2. プレゼンテーションや発表会を開催できるスペース
3. 建物内すべてに無線LAN環境が完備
4. 学修環境が可変的である（机や椅子、備品などが可動式）

②組織面 ～地域連携センター（仮称）の構築を～

2016年度、2017年度の2年にわたり「多摩区大学連携事業」に携わったが、西生田総務課が大変協力的で「いつもこうあってほしい」という思いを抱いた。学生を主体とした地域連携活動では地域活性化と学生の学びが両輪で実現する win-win の関係が成立するには、一部の教職員の奮闘・努力では限界がある。学生指導や地域の方々の大学と学生への期待に対応するための連絡作業、活動時間のずれの調整など、作業が多様・多岐にわたる。行政（川崎市、多摩区）との協力体制も有効であり、学内の組織化や適切なスタッフ配置を検討していただき、将来的には、図9に示すような

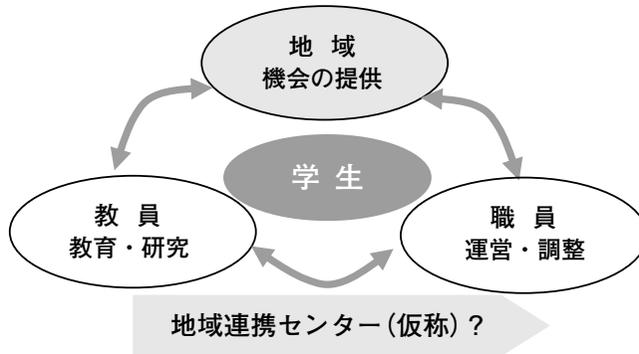


図9 大学における地域連携センターの将来構想

地域連携センター組織が構築されることを願っている。

※本稿は、2016年2月と12月に行われた総合研課題61の公開発表会と2018年3月に行われた多摩区「大学・地域連携事業」報告会の発表資料（久東・星名）の内容を中心にまとめ加筆した。ご協力いただいた地域の皆様に心より謝意を表したい。

<参考文献>

- [1] 久東光代・星名由美 (2012)、「かわさき宙と緑の科学館」リニューアル記念商店街の要望で3種の米粉スイーツ. 産学官連携ジャーナル、Vol. 8 No. 10、14-15
- [2] 久東光代・星名由美 (2013)、問題解決力を育成する表現技能の指導法の検討～「ICT活用とプロジェクト演習」科目における地域連携活動の事例より～. 日本女子大学紀要人間社会学部、vol. 23、45-63
- [3] 久東光代・星名由美・小山高正 (2015a)、日本女子大学における学生主体の地域連携活動～「サクララボ」と科目「ICT活用とプロジェクト演習」の取り組みと成果～. 政策情報かわさき第32号、70-73
- [4] 久東光代・星名由美 (2015b)、学生のプロジェクト学習の支援と指導における成果と課題～自主的活動と授業の2場面での情報活用能力・表現技能の育成に着目して～. 日本女子大学紀要人間社会学部、25、65-78
- [5] 久東光代・星名由美 (2015c)、川崎をフィールドとした学生による地域連携活動指導の成果と課題、日本女子大学総合研究所紀要、18、144-161
- [6] ～サクララボと科目「ICT活用とプロジェクト演習の間で～
- [7] 久東光代・松田稔樹 (2011)、「情動的な見方・考え方」の観点を取り入れた表計算の指導法と課題解決型ゲーミング教材の検討、日本教育工学研究報告集、JSET11-5
- [8] 星名由美 (2013)、プロジェクト型演習におけるチーム活動の成果～科目『ICT活用とプロジェクト演習』の年間活動報告と社会人基礎力の変化～. 日本女子大学人間社会学部 地域と大学をつなぐプロジェクト活動 成果報告集2012、85-91
- [9] 星名由美・久東光代 (2013)、プロジェクト型演習におけるチーム活動指導法の考察 ～科目「ICT活用とプロジェクト演習」の事例から～. 日本女子大学人間社会学部紀要 vol. 23、65-74
- [10] 星名由美・久東光代 (2015)、プロジェクト型演習におけるチーム活動指導法の考察(2)～社会人基礎力の変化とコミュニケーション行動の分析～. 日本女子大学人間社会学部紀要、25、79-92

4 地域連携活動による学習環境の検討

葉袋奈美子

1 はじめに

良い環境で学ぶことは、良い学習成果を得るために欠かせないものである。どのような環境でも、本人の努力次第で様々な学びは可能となるが、適切な環境が整うことで、より効果的な学習成果が得られる。殊に、文献研究のような資料を中心とした学習、実験室を中心とした学習、或いは単に知識を定着するための暗記作業をするといった所謂従来型のテスト勉強のような学びではなく、地域・友達と連携をした学び、更にはモノを作り出す活動であれば、学習環境が、成果の質に密接に結びつく。本稿では、地域連携に基づく学習を実現するために必要である学習環境を検討するために、課外に「ぞうしがやがやたんけん」の自主的な制作活動の機会を提供し、必要な学習環境を確かめるとともに、地域連携に基づく学習を導入し、かつそのための空間整備に力を入れた大学の空間を考察することで、地域連携に基づく学習環境に関する知見を整理することを目的とする。

「ぞうしがやがやたんけん」の制作を通じた地域連携活動に関する調査は、日本女子大学総合研究所研究課題54からの継続的な取り組みである。研究課題54においては、冊子制作の有意性について、取り組みを行った学生及び読者となった学生へのアンケート及びヒアリング調査より、製作の意義と製作における課題について明らかにした。制作に携わった学生からは、パソコンのソフト利用についての技術向上、紙面構成における技術の向上、更にはリーダーシップをとり作業をまとめる経験の機会を得られたこと等が学習成果として示された。また制作された冊子を手にとり読んだ学生からは、大学の周辺環境に目が行くようになるばかりでなく、友達が行っている取り組みを見ることで、自らの学習意欲を高める契機となっていることが確かめられた。一方で、制作を行った学生からは、学内での冊子制作のための環境についての課題が数多く挙げられた。3年間の調査・研究機関中に改善された点もあるが、より効果的な環境について検討をするために、研究課題61では、学習環境の改善についての考察を行うこととした。

2 「ぞうしがやがやたんけん」の制作環境についての考察

2.1 制作の概況

本冊子の制作は、授業とは関係なく実施したため、継続的に参加する学生と、1回のみ参加学生とがいた。表1は、最終的に制作作業に最後まで携わった学生の人数であるが、打ち合わせに数回のみ参加した学生、途中で授業等の課題が忙しくなり参加をやめた学生は含まれない。取り組みを始めた当初は、“口コミ”的な拡がり携わる学生を確保したが冊子の存在が定着し、入学前からオープンキャンパスなどを通して目にしていた学生を中心に、1年生から継続的に携わり、経験を深めていく学生も見られるようになった。またパソコンの使い方、地域の方へのコンタクトの取り方などが、上級生から下級生に引き継がれるようになり、教員による手取り足取りの作業ではなく、自律的に活動が展開されるようになっていった。

表1 「そうしがやがやたんけん」作成に携わった学生数

版	年度	当該年度の学年毎の人数			
		1	2	3	4
3丁目	2012	2	2		1
2丁目	2013		5	4	
1丁目	2013		4	2	
旧4丁目	2014		10	4	
旧5丁目	2014		11		
旧6丁目	2015	6		10	
旧7丁目	2015	6		11	
飛び地	2016	13	9		
雑司ヶ谷町	2016	13	7	2	
都電荒川線	2017	8	15	6	1

冊子に掲載される内容は、日本女子大学の学生による雑司ヶ谷の観察を発信することを目的としているため、実際に町歩きをして見聞きしてきた事柄、日本女子大学の学生が雑司ヶ谷を利用して実施した学習成果が掲載されてきた。6年目の都電荒川線号においては、制作に携わった学生自らの発案で町でのアンケート調査を実施した成果を掲載するなど、前号までの内容を継承しつつも、携わる学生の挑戦してみたい事柄が少しずつ盛り込まれ毎号異なる様子の紙面構成となっている。学生の知りたい、やってみたいという学習の芽を育てることが可能となった。この背景には、教員が主導で学習目標が明確化されている授業での課題とは異なり、学生間で活動が継続するための自律的な運営に近い形態をとったことで、自由な発想に基づく活動が可能になったものといえよう。

更に2017年度においては、冊子を手にした地域住民の方との対話の中から、雑司ヶ谷の地形の模型を制作する取り組みが行われた。坂の多い地域であるものの、普段はビルに囲まれて地形を意識しづらい町となっている。冊子で取り上げた場所を地形模型で紹介するとともに、子供たちにも豊かな雑司ヶ谷の地形に目を向けてもらいたいという学生の意識から実現した取り組みである。これまでの活動の積み上げ、そして地域と学生の対話から生まれた新たな学びの創生である。

2.2 活動のための空間に関する課題

1) 打ち合わせ空間

グループ活動に欠かせない打ち合わせは、大きく全体での打ち合わせと、各記事の担当グループの打ち合わせと二種類が行われていた。全体の打ち合わせについては、開始当初は不定期な開催であったが、次第に定期的集まるほうが良いと学生が判断するようになり、2016年度からは毎週から隔週で、同じ曜日・時間集まる方法がとられた。各学期にお互いに時間割を確認し、最も集まりやすい曜日の昼休みに集まり、昼食を食べながら顔合わせ、町歩きの日程調整、全体の方針の検討などが行われた。こういった継続的なミーティングは、参加した学生からの他学年の交流を期待していた以上に深められたというアンケート調査結果にも繋がったと考えられる。社会人になって仕事をする上でもホウ・レン・ソウ（報告・連絡・相談）が重要といわれるが、困ったことがあった時に相談する仲間を見つけることができ、そして解決をともに考えることができたというポジティブな経験をすることが、社会人になってからも相談をする習慣をつけることに繋がる。学外の

表2 学年別、学外の方とのやり取りの際に困った場合の相談相手

全17名中複数回答あり

	学年	1	2	3	4	他	計
教員と相談をして解決することができた。			1	1			2
少し感じたこともあったが、何とか自分でマネージできた。			1		2		3
先輩と相談をして、解決することができた。		2	2		1		5
仲間と相談をして解決することができた。		1	4	2			7
特になかった。			3			1	4
両親、編集委員以外の友達や先輩、等に相談をして解決した。		1					1

方との対応で困ったことのある経験のある学生が、表2に示すように17名中12名が仲間や先輩と相談をして解決をしたと回答しており、定期的な打ち合わせと散策での交流が、地域連携活動で特に重要となる相談する機会を持つことに繋がった。

一方で、学生は、毎回20名以上集まるこのような全体の打ち合わせ空間の確保について、苦勞した。サークル活動ではないために、サークル関連の施設は使えず、授業でもなく教員が同席するわけではないために教室の確保もできずに困ったことが何度かあったという。昼休み明けの授業で使う教室を主として使っていたようであるが、大学主催の行事などが入っていることもあり、急遽新たな場所を見つけなくてはいけないこともあったという。

グループごとの打ち合わせも17名中15名が教室を利用したと回答している。しかし、中には場所の確保に苦勞したという意見もある。グループごとの打ち合わせは、放課後或いは放課後の現地見学やインタビュー後に実施することもあり、このような場合に、学内施設が時間の制約面から使いづらく、安価で長居のできる喫茶店を利用していたという声もある。喫茶店等を好んで使うという場合には問題はないが、今回のアンケートでは、学内施設（メディアセンター）の閉室時間後にも作業を継続するために喫茶店を利用する状況も確認され、望ましいとは言えない。学内施設で打ち合わせがしやすい場所は教室のような空間、或いは食堂であるが、教室は授業のない時間には冷暖房が入らず快適な居場所とはならない。

また食堂についても東日本大震災以降照明を十分に明るくしていないことが多く、打ち合わせに適した環境とはなっていない。昼休み等は非常に人が多く、騒がしい空間となるため打ち合わせをするような環境とはなっていない。人間交流室や研究室内で打ち合わせをしたと言う学生もいるが、研究室は本来研究を目的とした部屋であり学部学生の作業空間ではないため、望ましいことではない。

更にインターネットに繋いで情報収集をしながら打ち合わせを行うことは、情報がウェブ上に多くある現代では当然の作業であるが、WIFIの使える空間、パソコンの使える空間が学内では限定的であることによる作業効率の悪さも指摘された。

人間交流室を利用したという学生の回答もあった。人間交流室は、開室時間内であれば、WIFIも利用でき、飲食しながらの打ち合わせが可能である。この部屋の存在はあまり学生に知られていないが、このような場所が学内に増えることが求められている。

また、長期休暇中の大学の利用には事前申請が必要であるが、それが学生には周知されていなく、大学へ来たにも係わらず作業ができなかったという学生もいた。長期休暇中に事前に活動日を決めて活動をすることは困難なこともある。大学の安全管理、冷暖房の効率的な稼働と、休暇中の学生

の学びの場の継続的な確保について、検討の余地がある。

2) 作業空間

冊子制作にあたっては、文章の推敲、写真や図の加工、そして印刷用原稿のレイアウト作業等様々な作業がある。主としてパソコンを用いた作業が多いが、文章の作成は教室や自宅を利用したという学生が大半である。しかし特に図の制作や印刷原稿のレイアウトにあたっては、Adobe Illustrator の使用が欠かせず、このソフトを利用できるパソコンのある場所で行かれないことも多い。個人で購入するには高価であるため、この作業を行った学生は、1名を除いて全員がメディアセンター内パソコンを利用した。

メディアセンター内パソコンは数が多くて使いやすいこともあるものの、授業や講習などが優先されるために使えず、授業の合間の共同作業時間を漸く確保しても、作業が進められなかったこともあると言う。この点については、この活動を開始した当初からの課題であり、メディアセンターと相談をしたことで、授業意外の講習もウェブの空室状況確認欄に明記されるようになり、学生がメディアセンターでの作業のために大学に来たにも係わらず講習があつてつかなかつたという事態は避けられるようになった。しかしそれでも、そもそも学生の作業を希望する時間とメディアセンターの空室状況とが合わずに作業が進められないという問題は残っている。また、本活動を開始した当初は、メディアセンター内で Adobe Illustrator のライセンスを入れたパソコンが一つの部屋に集中していたが、これを他の部屋にも分散して配するようメンテナンスの際に配慮していただいたために、以前よりは使用がしやすくなった。それでも全室が授業等で使われていることがあったり、そもそもメディアセンターの閉室時間との兼ね合いで、特に授業の履修数の多い1・2年生にとっては、作業空間の確保が大きな課題として残された。

また、メディアセンター内では私語を慎むように言われるため、グループでのディスカッションをしながらの作業を難しくしている。打ち合わせ同様、話し合いをしながら、IT 機器を使うことは当然の作業方法であり、そういったことができる環境を整えることが、地域連携活動には欠かせない。学生からは、図書館にもパソコンがあると良いという声も挙がっている。資料がある場所の

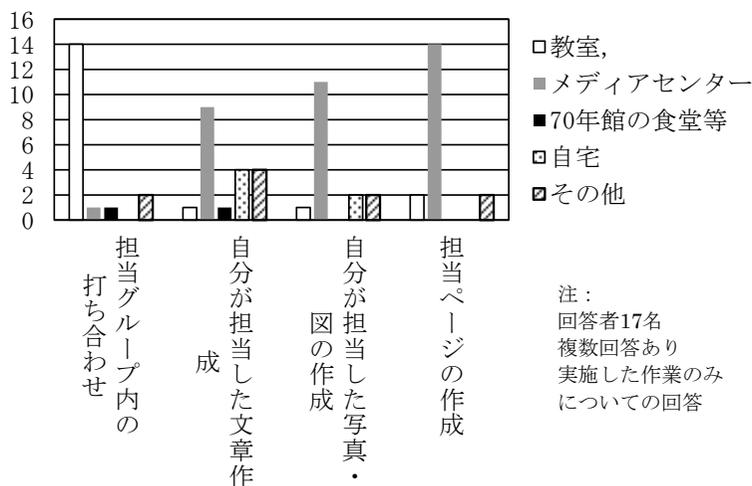


図1 冊子作成作業に使用した作業空間

近くで作業できる、或いは更にディスカッションもできる環境が望まれている。

3) 模型の制作作業空間

地域の方に触発されて始まった学生の自発的活動としての地形模型は、住居学科の製図室を利用して行われた。この場所はカッターを使用した作業等がしやすい大きな机と大きなカッティングマットがあり大変良い空間であるが、教員の通常いる場所からは離れており、気軽な作業状況の確認がしにくい場所となる。また、作業に関連する材料、道具、製作物の保管場所も鍵などをかけて保管できる場所はないために、学科内で他の授業の妨げにならないように、予め柵の利用を申し出た上で、了解を得る必要があった。更にそれでも施錠できる状況ではないために、誰も作品・材料を持っていかないという信頼関係のうえに保管が成り立つ状況となっている。

3 他校における地域連携活動を行う学習環境

1) 必要な作業が適切にできる空間

学生の地域連携活動の実践からは、打ち合わせ空間、パソコンを利用したグループ作業空間、そして作業道具の保管場所・作業場所の確保といった課題が見えてきた。地域連携活動が活発な他大学では、どういった工夫がされているのか、現地見学及び担当教員へのインタビュー等を踏まえて整理する。

京都光華女子大学では、学内の中心部に学習ステーションを設け、夜9時までは冷暖房された、明るい空間で、飲食をしながらでも作業できる空間を用意している(図2)。文房具、パソコン等を借りることもでき、日中は学習をサポートする専門のスタッフもいる。プレゼンテーションルームも用意されており、多様な活動を支える空間となっている。実習を終えた学生が立ち寄りて日誌を書いたり、実習先での経験を語り合う場でもあり、学外の人と学生が接するにあたって一人で問題を抱え込まないバックアップの場ともなっている。

Oxford Brookes 大学では、図3に施設配置関係を示すとおり、図書館と食堂を兼ねる学習スペースとが一体の空間となっている。学生・教員が頻繁に軽食販売コーナー(Starbucks)に立ち寄り、打ち合わせをしたり作業をしたりしている。ソファは打ち合わせが行いやすいような形状のものが多く、多くのグループが相談しながら勉強をしたり、話し合いを進めている。それ以外にもパソコン・プリンターも設置されているほか、ITサポートセンター、学習支援員コーナーもあり、技術的な面で作業が滞らない環境が整っている。飲食しながら、パソコンを使いながらの打ち合わせが可能であり、プリンターも設置されているため、いつでも印刷して確認をしながら作業が可能である。さらにこの大学では、教室前の廊下にも随所にベンチ、パソコン(立ったまま使用するものも多い)も用意されており、学生、教職員が気軽に利用をしている姿が見られる。

図2右側の写真は、U. C. Berkleyの学習スペースの一つである。教室ではなく廊下などのスペースで気軽な作業ができる机が設置されている。Oxford Brookes 大学では、廊下に数多くのパソコンが設置されており、多くの学生が利用している。日本では、立命館大学で類似した空間が整備されており、廊下が単なる通路空間ではなく、作業の場でもあり、また通りがかった友達や教員が声をかけやすい環境での作業が実現している。

学習空間以外にも、学生の交流を深める機会を学内の随所で設けられる。暖かい地域では、BBQコーナーの用意されている大学もある。こういったことが大学の滞在時間の長さにも繋がり、新たな活動のきっかけにもなる。逆に寒冷地域では、屋外に出なくても建物間を移動できる工夫



図2 他大学の学習空間の様子

	4階	通路	書架・閲覧室		書架・閲覧室	
	3階	大教室・通路	書架・閲覧室	<吹き抜け>	書架・閲覧室・会議室	
	2階	通路	ライブラリアン	軽食販売・ソファ・パソコン・プリンター・学習支援	大学総合受付	屋外
屋外	1階	通路	図書館入り口のみ	員・パソコン貸し出しロッカー・アマゾンロッカー	ITサポート、学生支援課	

図3 Oxford Brookes 大学における学習空間と支援空間の関係（断面イメージ図）

がされている等、学内の環境を存分に使い、交流を深めるための工夫が見られる。

必要なものを置いておかれる空間も重要である。はこだて未来大学では、ロッカー室空間の棚を利用して、地域連携活動、グループ活動での作業用具、成果物、材料の保管場所は欠かせない。日常動線から遠くない場所に、適切に管理のできる保管場所の確保は課題の一つであろう。

2) 利用する状況づくり

空間を用意しても実際に使われるようにしなくてはならない。つまり課題等があり取り組む必然性が発生しないと、実際には利用されない空間となってしまう。共愛学園前橋国際大学は、学生コモンの素晴らしさで知られるが、この空間を創る以前から、学生のアクティブラーニングを課内・課外で奨励してきた。図書館での本の紹介や読書イベント、学生広報活動等、その経験から得られたことが、実際の空間づくりの際に役立っているのであろう。また、関心のある全ての学生や教職員等利用する人の意見を存分に取り入れた空間づくりも、利用しやすさの背景にある。

公立はこだて未来大学においては、基礎的なことを1-2年生でコース毎に学んだ後の3年生で、コース横断的に自由にグループに別れて、地域連携型のものを含むプロジェクト学習を行っている(図4)。学習の柱として位置づけられているからこそ、実際に利用される。更に活動場所の多くは担当教員近くのスペースである。専門的なことを学んだ上での分野横断的活動、そして教員がしっかり携わることで地域の期待に専門的に応えることのできる環境となっており、地域からの手ごたえがあるからこそ、学生の継続的な活動意欲の維持にも繋がっている。

用意された活動空間が、日常生活の動線上から離れない気軽に利用できる場所にあることも大事である。活発に活動空間が利用されている大学は、いずれも教室移動などの学生の動線上にあり、

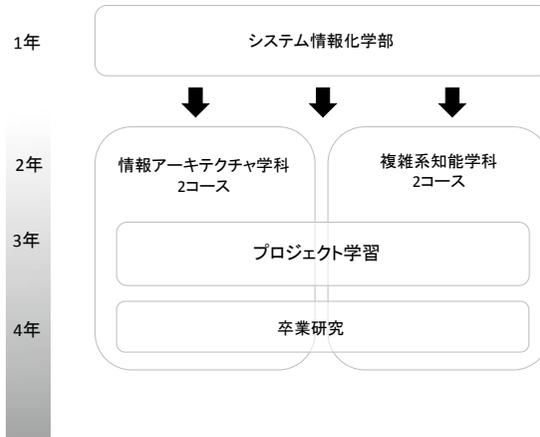


図4 公立はこだて未来大学 プロジェクト学習の位置づけ

教室から遠くなく場合には授業時間を延長して作業する場合にも屋外などを通らずに気軽に荷物を移動できる場所に共同作業空間が用意されている。長時間の作業をする際に特に大事なものは飲食も可能なことであろう。話し合いをしながら、半日或いは一日に及ぶ作業をするのにあたって、飲食不可、或いは飲食物を購入できる場所から遠いというのは、作業の中断に繋がり学生には不評である。

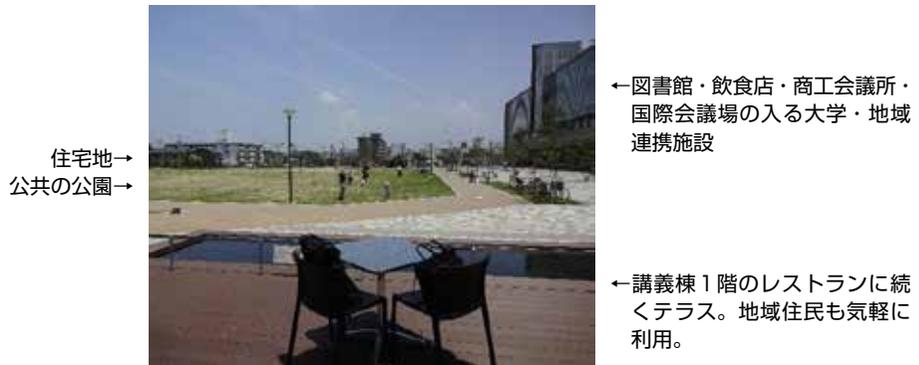
地域連携活動では、教員の注意深い係わりが大切である。それは地域と学生の橋渡し役として、また大学の看板を背負って出て行く学生が、住民に迷惑をかけずまた大学生らしい質の成果を地域に還元するのを応援するためにも、教員が十分に作業内容を把握していることが重要である。教員の動線からも遠くない場所で、気軽に相談できる、或いは教員が気軽に作業内容を確認できる状況づくりも重要である。

3) 地域連携活動特有の学修支援

学外の人であっても大学に気軽に相談・話題提供しに来られる雰囲気があることは、地域連携活動の継続的なアイデアとプロジェクト探しのために大切である。継続的に地域の求める課題を見出し、かつ地域に受け入れてもらうことは容易ではない。授業等にも地域連携活動を組み込みそれを継続的に実施するためには、地域連携担当が常駐し、学外からの相談が気軽に受けつけられる空間は欠かせない。また事故等への予防も含め、教員だけが学生の世話をするのではなく、事務職員や地域連携の専門家が学生を見守ることも重要である。

京都女子大学では、学生の地域連携活動の際には職員が車で荷物を運んだり、イベント保険の手続きを行う。地域連携の形は多様であり、求められる支援方法の把握・検討のためには、自治体・民間企業とも連携した土地施設利用の工夫で学修空間が豊かになった。学生と地域連携担当職員とが気軽に信頼関係を築き、相談・指導できる出会いをつくる空間も必要である。担当職員の席近くに学生の使える打ち合わせ空間や、有益な資料の置き場があることも一つの方法である。

立命館大学では、地域に開いた図書館、食堂を用意したことで、学生の日常生活空間の中に、高齢者、子供連れといった学生生活では出会う機会が少ない可能性のある年齢層の人が出入りする。こういった人を身近に見ることは、学生の課題発見のチャンスを創り出す。また地域住民から大学



住宅地→
公共の公園→

←図書館・飲食店・商工会議所・
国際会議場の入る大学・地域
連携施設

←講義棟1階のレストランに続
くテラス。地域住民も気軽に
利用。

図5 立命館大学の地域と繋がるキャンパス

に地域連携の相談へのバリアを低くすることにもなる。

福井大学では「ふくい地域創生士」「地域創生アワード」という認定制度を設け、指定された科目の履修や地域連携活動の奨励を始めた。福井大学は大企業にこだわらない中小の優良企業への就職と、そこでの専門的な仕事を行う人材排出で知られる。幅広い視野を学生のうちから培うことで、こういった企業で活躍できる人材を育てるためにも、有意義な学びに繋がるであろう。立命館大学では、学生の地域連携活動に「立命館大学課外自主活動団体助成制度」を設けて奨励金を支出したり、「Rな人」というウェブ上のサイトをつくり学生活動を紹介している。こういった活動は、学生のやる気を高めると同時に、必要な経費を支出することで、経済的な面でのバリアを低くしている。やる気を認め、伸ばす仕掛けが様々な形で用意されている。

4 地域連携活動を支える空間

図6に地域連携活動に求められる空間の特徴、そして活動を促し質を高めるための環境についてまとめた。快適に使える空間が必要は当然であるが、そこには飲食ができる、話し合いをしながら作業がインターネットを利用できる、プレゼンの練習ができるような空間も求められる。イベント等の準備にあたっては、大判紙に印刷できるプリンター、カッター等が使える空間、モノを保管できる空間等様々な場が必要となる。また、空間が用意されてもそれを効果的に利用するための授業・課題がなくては活用されない。更に、そして地域連携活動の質を高めたりトラブルを予防するための教員や職員との接点を十分に持つことができるようにしておく等の配慮も必要である。本稿の検討をもとに、未来を担う学生の力を伸ばす環境のありようを、実践的に検討することが今後求められることであろう。

このように活動環境を改善させることは、社会で活躍する人材を作り出す日本女子大学の教育理念にも近づく。図7に三綱領との関係を示す。冊子作成活動を通して築き上げる自発創生の意思とそれを達成する技術、また協力しあって取り組む経験は、学科での専門的な授業・卒業論文のための調査や大学院進学で習得した確かな知識・考え方にに基づき得られる信念を合わせることで、豊かな社会を築き上げるための人材となるであろう。

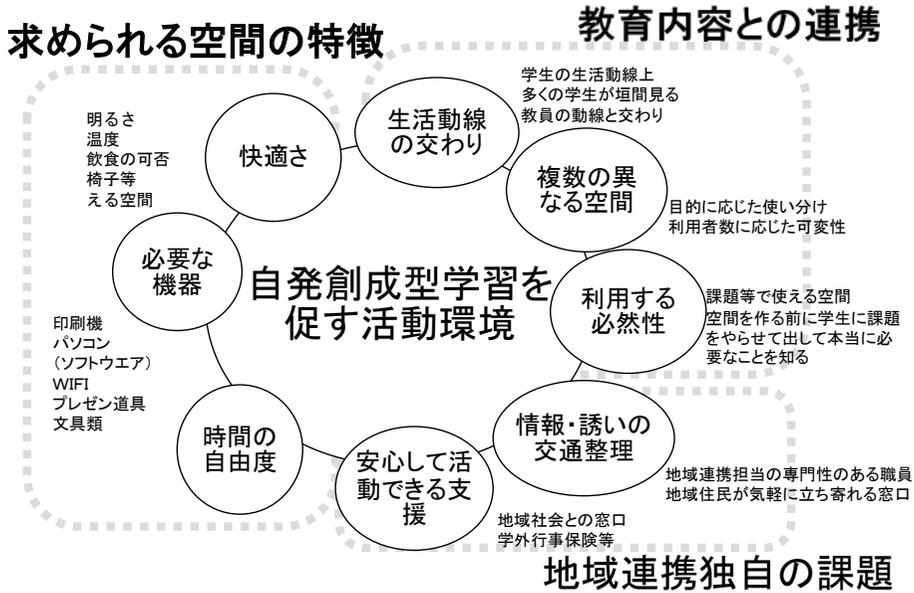


図6 地域連携活動を促す活動環境

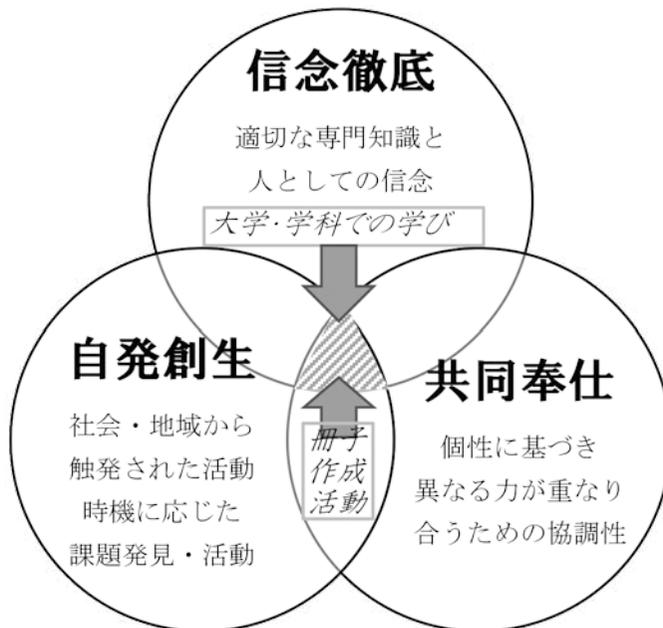


図7 日本女子大学三綱領と「ぞうしがやがやたんけん」冊子作成

5 多世代交流を促進するための地域イベントの実施 —寺尾台団地を事例として—

黒岩 亮子

1 はじめに

本稿は、2015年度より3年間にわたり総合研究所課題61「日本女子大学における学生を主体とした地域連携活動の活性化のための調査・研究」の中で実施された社会福祉学科黒岩（地域福祉）ゼミの活動をまとめたものである。

社会福祉学科黒岩ゼミでは、2012年12月、多摩区3大学連携事業（現多摩区地域課題解決事業）の一環として、大学に近い寺尾台団地（川崎市多摩区寺尾台2丁目。全20棟412戸）全世帯を対象としたアンケート調査（「寺尾台団地における生活課題とニーズ把握のためのアンケート調査」）や団地住民へのインタビュー、団地内で実施されている活動への参与観察などを実施した。その後、これらの結果をヒントに、地域活性化を目的とする活動をスタートさせた。2013年度、2014年度は総合研究所課題56として、また2015年度からは前述したように総合研究所課題61として、活動を継続させてきた。地域活性化を目的とする活動とは、具体的には毎年10月に実施している、ハロウィンカフェおよびハロウィンパレードのことである。2013年度から始まったこれらの活動（＝ハロウィンイベント）は、2017年度まで5回開催され、100名を超す参加者が集う一大イベントとなった。ハロウィンイベントは、寺尾台住宅管理組合や寺尾台団地子ども会の方々の多大なる協力により実施することが出来ている。毎年6月くらいから学生と団地住民との話し合いが行われ、毎月第四土曜日に開催されている団地カフェにおいて学生企画のハロウィンカフェを実施し、そこでハロウィンパレードに必要なものをつくったり、配布するお菓子詰めをした上で、10月最終週の木曜日午後ハロウィンパレードを実施する、という流れも定着してきた。

前述したように、ハロウィンイベントの目的はもちろん地域活性化であるが、とくに意識しているのが「多世代交流」である。寺尾台団地は、1970年7月に旧日本住宅公団により開発・分譲された比較的小規模な団地である。高度経済成長期に開発された郊外の団地の多くは、現在、高齢化が進展し、孤独死の発生など深刻な状況ともなっているが、寺尾台団地もそれは同様である。しかし、坂道ではあるが読売ランド前駅まで徒歩15分程度であること（1時間に2～3本あるバスでは5分程度）、緑が豊かであること、抜け道になっておらず安全な環境であること等の理由から、寺尾台団地には子育て世帯の入居も多い。また、高齢化同様、多くの団地において課題となっている空き家率も低い。そのため、寺尾台団地では子ども会（小学生対象）が活発に活動をしており、さらに高齢者のための自由の会、毎週2回の公園体操などの活動も行われている。しかし、寺尾台団地の大きな課題は、それらが個々バラバラに活動していることであり、世代を超えた活動や交流がないことが、前述の調査などによって明らかになった。そこで、「多世代交流」を意識して学生がハロウィンイベントを企画し、団地住民の協力のもとこれまで継続してきたのである。

多くの参加者が集うハロウィンイベントであるが、実はこの5年間で様々な活動上の課題が浮かび上がってきた。「多世代交流」は、パレードに参加する子ども達が、団地内に3～5つほどつくったスポットにお菓子を配布するために集ってくれた団地住民と触れ合うことで実現できると考えていた。また、スポットには誰でも自由に来られるため、そこでの交流も期待していた。実際、子ど

も達との触れ合いを楽しみにしてくれる団地住民も多く、パレードが来るまでの待ち時間に話に花が咲いて楽しかったという感想もある。しかし、団地外の子どもの参加も増えてきたこと、子ども達はお菓子をもらうことで満足してしまうこと、スポットに来てくれる人も固定化してきたこと等の課題が、毎年、反省点として挙げられるようになったのである。また、パレードは誰もが気軽に集える半面、とくに名前も分からない団地外の子どもの安全をどこまで保障できるのか、といった課題も出てくるようになった。こうした課題に対応するために、ハロウィンイベントの内容ややり方にも工夫が積み重ねられてきた。

本稿では、2013年度からのハロウィンイベントの概要について確認し、とくに2015年度以降、どのような課題に対してどのような変更が加えられてハロウィンイベントが実施されてきたのかを整理してみたい。さらに、2016年度と2017年度の学生のレポートを通して、ハロウィンイベントの意義や限界について考えてみたい。

2 ハロウィンイベントをめぐる活動の概要

2013年度から開始されたハロウィンイベントの概要について、その内容を確認してみよう（図表1）。

まず、どの年度においてもハロウィンイベントの主体（企画・実施）は、黒岩ゼミの3年生である。2013年度は12名、2014年度は13名、2015年度は10名、2016年度は9名、2017年度は12名である。

はじめに、でも述べたように毎年6月に学生と寺尾台団地のフィールドワークを行い、そこで寺尾台住宅管理組合の理事の方々との話し合いを行う。2014年度からは団地カフェが開催されるようになったが、その代表Oさん（女性）が窓口となり、理事の方々や子ども会の親に声をかけてくれるようになった。Oさんは2013年度のハロウィンイベントに積極的に関わって下さり、その後にこの団地カフェを立ち上げるなど、寺尾台団地の地域活性化のキーマンでもある。ちなみに、Oさんは長いこと公園体操の世話人もしており、2017年12月から団地で1名選出される民生委員ともなっている。

2013年度は「多世代交流」は意識していたものの、まだ何をすべきかが具体的に決まっていなかったこともあり、教員も団地住民に複数回にわたり話を聞いたり、学生たちが手分けをして、子ども会・自由の会・自主保育・公園体操等に参加し、団地のニーズを把握することに努めた。ハロウィンイベントのあり方についても、まず学生を知ってもらうことが必要と、ハロウィンカフェを実施してイベントの目的を発表したり、ハロウィンを楽しむための仮装をやってみたりした。こう

図表1 ハロウィンイベントをめぐる活動の概要

2013年度	2014年度～2016年度	2017年度
フィールドワーク 理事会との話し合い 地域活動参加 子ども会・自由の会 自主保育・公園体操 ハロウィンカフェ ハロウィンパレード ハロウィンパーティー 2014年3月 カフェ実施	フィールドワーク 理事会との話し合い 地域活動参加 団地カフェ ハロウィンカフェ ハロウィンパレード 反省会	フィールドワーク 理事会との話し合い ハロウィンカフェ ハロウィンパレード ハロウィンパーティー

したカフェを実施した後（約一週間から10日後）にハロウィンパレードとハロウィンパーティーを実施するという流れを創り、その後も継続している。

前述したように、2014年度からは10月の団地カフェをハロウィンカフェと銘打って、その中で学生が「多世代交流」を意識した工作やカルタなどを企画するようになっている。この点については次項にて詳述するが、2014年度のハロウィンカフェからは、普段から団地カフェに集っている10数名の方々にパレードで配布するお菓子詰めと、それに添付する一言メッセージを書いてもらうことにした（写真1）。その背景には、団地カフェに集っているのは70代、80代の方が多く、パレードにおいてスポットでお菓子を配布することが難しいことが明らかになったことがある。こうした方々にもパレードに何らかの形で参加してもらいたい、子ども達にメッセージを送ることを通して「多世代交流」ができれば、という思いからであった。また、パレードでは何名くらいの方がスポットに集まってくれるかは分からない。そのため、ハロウィンカフェである程度お菓子を準備することで、子ども達に必ず1～2つはお菓子を配布できるという安心感にもつながり、このお菓子詰め+メッセージ書きは継続している。なお、各スポットに均等にお菓子を配布する人が配置できるように、団地カフェのスタッフや子ども会の親、さらにOさんの声かけにより公園体操に参加している人にも協力してもらっている。すなわち、あらかじめ各スポットに人が配置できるようにしておき、それ以外に当日に自由にスポットに集ってもらうようなスタイルが徐々に出来上がっていったのである。

また、ハロウィンカフェは2時間～3時間ほどの開催時間で、普段から団地カフェに集っている人に加えて、子どもやその親が20名～30名ほど参加してくれるようになった。土曜日に開催されるハロウィンカフェには来れても、木曜日の夕方に開催されるパレードには塾や習い事で参加できない、という子ども達もいた。この子ども達も何らかの形で参加してもらえるよう、子ども達にパレードで使用する看板を作成してもらうようになった。たとえば、スタートやスポット1と書いた画用紙に子ども達が自由に絵を描いたり、ハロウィンカフェで折ったかぼちゃ型の折紙を張り付けたり、といった具合である（写真2）。このような準備をすることで、当日参加できない人も団地内で開催されるパレードを楽しんでももらいたい、と考えたのである。

このように、団地住民の様々な協力のもと、2013年度から一貫して行われているのがハロウィン



写真1 ハロウィンカフェにおけるお菓子詰め
(2016年度団地カフェと子ども会親との交流)



写真2 ハロウィンカフェにおける看板づくり
(団地カフェの高齢者と子どもとが一緒に作成)



写真3 パレードの様子（2016年度）



写真4 2015年度の反省会の様子

パレードである。ハロウィンパレードはハロウィンイベントのメインであるということが出来るだろう。毎年スポットの数や場所を見直しているが、子ども達が団地内に設けられた各スポットを周り、スポットに来てくれた団地住民からお菓子をもらうというスタイルは変わっていない（写真3）。パレードの内容については次項にて詳述する。

ハロウィンパレードの後に、スポットに来てくれた団地住民とパレードに参加した子ども達とのより直接的な交流を目的として企画したのが、団地内の集会所で行われるハロウィンパーティーである。しかし、第一回目、2013年度のハロウィンパーティーには狭い集会所に100名近い人がすし詰め状態になってしまったこともあり、2014年度から2016年度までは、Oさんをはじめとする団地カフェのスタッフ、子ども会の親の有志、寺尾台住宅管理組合の理事（コミュニティ担当）と学生による、反省会と称した軽食つきの交流が行われるようになった（写真4）。2017年度は、団地住民の多世代交流という当初の目的に立ち返り、子ども会の子ども達（30数名）とその親、団地カフェスタッフや寺尾台住宅管理組合の理事、そして学生にメンバーを限定したハロウィンパーティーを実施した。2013年度のハロウィンパーティーではパレードに参加した子ども達なら誰でも参加OKとしたために、人数も多く、また名前や人数の把握も十分でなかった。そこで2017年度は、子ども会名簿で出席確認を徹底するなど、メンバーを明確にした交流を行えるようにした。

3 ハロウィンイベントの内容の変遷

ここからは、2015年度の活動を基本形とし、その後どのような課題（反省点）に対して、どのような対応をしてきたのか、といった視点からハロウィンイベントの内容の変遷についてみていきたい（図表2）。

1) 2015年度のハロウィンイベント

2013年度、2014年度の反省点の1つは、パレード後半に設置されたスポットにおける待ち時間の長さであった。また、お菓子を配布してくれる団地住民と子どもとのスポットでの交流が短時間では難しいという意見があった。そこで、2015年度からは、パレードにかかる時間、スポットに到着する時間をあらかじめポスターに明記しておき、その時間を目途に各スポットに集まってもらうようにした（写真5）。また、お菓子を配布し終わった人にゴールに来てもらい、ジュースを飲みな

図表2 ハロウィンイベントの内容の変遷

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
カフェ	写真・工作	お菓子詰め 看板づくり	お菓子詰め 看板づくり	お菓子詰め 看板づくり 多世代交流カルタ	お菓子詰め ハロウィン工作 多世代交流カルタ
宣伝	全戸配布	ポスター貼り	ポスター貼り	ポスター貼り	ポスター貼り
スポット	5つ 15名強	4つ 15名強 明るい場所	3つ (+1つ) 20名強 時間指定 スタンプラリー	4つ 25名強 時間指定 ハイタッチ ランタンで照らす	4つ 20名強 時間指定 ※時間差2パレード ハイタッチ&シール ランタンで照らす
ゴール	集会所	公園 飲み物・メダル	公園 飲み物	公園 飲み物・メダル カード・おせんべい	公園 おせんべい
時間	1時間弱	30分弱	45分	45分	35分
参加者	70名強	70名強	90名強	90名強 (120名)	100名強
学生	活動費あり	活動費なし	活動費なし	活動費なし	活動費なし、1年ボラ

がら子ども達を待ち、そこで最後の交流をすることにした。

交流という点では、各スポットでお菓子をもらった後にシールを貼ってもらうなどしたら交流の時間も取れるのではないかということで、スタンプラリー形式のパレードを試みた。子ども達はスタート時に、学生が作成した首からぶら下げるスタンプラリー用のカードをもらい、各スポットでシールを貼ってもらいながらパレードを行った。

実際にパレードを開始してみると、スポットの時間を指定したことで、以前のようにいつ来るか分からないといった混乱も、長く待ちすぎるといったこともなく、それはおおむね成功したと考えられる。一方、スタンプラリー形式については、子ども達にはワクワク感が強く好評だったが、シール貼付に思いがけず多くの時間がとられてしまう結果となった。もともと、シールを誰が貼るかといった問題があった。当初、お菓子をあげた人がその子どものカードにシールを貼ってあげることが交流につながると考えたが、暗がりの中、さらに大量の子ども達が押し寄せると、お菓子を

あげてシールを貼るといったことは困難であった。そこで、スポット担当の学生がシール貼付の対応



写真5 ハロウィンポスター裏面のマップ

をすることになったが、小さめかつ可愛い形のシールをそろえてしまったこともあり、シール貼付に時間がかかってしまったのである。また、誰にシールを貼ったのかも暗がりの中で確認が難しかったというのも後で出てきた反省点であった。

こうした事情から、2015年度のパレードは予想以上に時間がかかってしまった。当初は4つのスポットを想定していたが、4つめのスポットはもともと学生中心にお菓子の配布を予定していたこともあり、シール貼付をせずにゴール地点である公園に向かう結果となった。45分ほどのパレードとなってしまったため、早い段階でお菓子を配り終えて、ゴールでジュースを飲みながら子ども達を待っていていた人達の中には、子どもがゴールする前に帰宅してしまった人もいた。ゴールで再度、交流が出来ないかと考えていたが、お菓子をもらい、ジュースを飲み終わった子ども達はそれで十分満足してしまうことから、そもそも交流は難しかったのでは、という反省点も出た。

また、パレードは17時に公園をスタートするが、その時点ではまだ明るく、仮装した子ども達の写真撮影や、パレード担当の学生が子ども達の顔を見ながらパレードの注意点などの説明をすることも可能である。しかし、一つ目のスポットを過ぎるあたりからはかなり暗くなってしまふ。暗がりへの対応は当初から大きな課題であり、各スポットを街灯の下に設けたり、大量のランタンで照らすといったことをしてきた。また、パレード担当の学生は光るスティックでパレードを先導するなど工夫するようにした。暗がりの中でケガをしないように、寺尾台住宅管理組合の理事の方や、子ども会のお母さん方がパレードのルートに立ち、安全管理の協力をしてくれなかったら、パレードを実施することはできなかつたであろう。

2) 2016年度のハロウィンイベント

3回のハロウィンイベントを実施する中で、パレードにおける「多世代交流」がいかに難しいか、を痛感してきた。また、2015年度もパレード（70名程度）、スポット（20名程度）と合わせて90名強の参加者があつたが、パレードに参加する半分以上は団地外の子もやその親たちとなつていた。地域のイベントである以上、団地住民に限らず出来るだけ多くの人に楽しんでもらいたい、というのが私たちの願いではあつたものの、当初の目的であつた団地内での交流ということがなかなか出来ないことが大きな課題であつた。

そこで、2016年度は匿名性が高く大人数が参加するパレードではなく、団地内の集会所で、ほとんどが団地住民の参加で実施されるハロウィンカフェにおいて、多世代交流を実現する方法を考えることになった。そして学生によって提案されたのが「多世代交流カルタ」である。

カルタは札を取り合つて遊ぶという要素以外にも、たとえば群馬県の上毛カルタのように、地域の情報をふんだんに入れて愛郷心を高めるといった要素もある。また、子どもから高齢者まで皆で楽しめるのがカルタの良いところである。そこで、どのような世代もが楽しめるようなテーマで手作りのカルタを作成することになったのである。学生は知恵を絞り、どのような世代も知っている童謡をカルタのテーマとすることにした。さらに、高齢者世代で流行つた歌、子ども世代に人気の歌、今どきの流行りの歌やキャラクターを加えることで、「へえ、そうなんだ」とお互いの世代を知るキッカケにしたいとも考えた。こうして、学生が分担してアイデアを出し合い、読み札も絵札も自分たちで作成して「多世代交流カルタ」が完成した。

当日のハロウィンカフェでは、2グループに分かれてカルタ遊びを楽しんだ（写真6、写真7）。カフェのテーブルの設定を始めから2グループにしておき、大人世代・高齢者世代と子ども世代とがうまく混じるように席の誘導を行った。それでも、いつも団地カフェに参加しているメンバーの



写真6 ハロウィンカフェ看板



写真7 多世代カルタ遊びの様子 (2016年)



写真8 スポットでの交流



写真9 ゴールで配布したメダルとハガキ

中には、「いつも〇〇さんと隣に座っているのよ」と戸惑う声もあった。カルタが始まると、子どもも大人も大いに盛り上がった。札を取れなくて泣く子どもに、高齢者が優しく「ここにあるよ」と教えてあげるようなほほえましい光景も見られた。また、札を読む学生が、「この歌は〇〇ですね」などちょっとした解説を入れたり、場を盛り上げるように工夫した。この「多世代交流カルタ」は好評で、「お正月の団地カフェでもやりたい」などの希望もあった。

ハロウィンパレードにおける変更点は、スタンプラリー形式をやめて、お菓子をもらうための約束として「ハイタッチ」を導入したことである。ただお菓子をもらうだけではない交流ということで導入した「ハイタッチ」であるが、子ども達もその約束をしっかりと守り、楽しく交流できたように感じられた(写真8)。子ども達は首にかけるカードやメダルなどを喜んでくれていたこともあり、2016年度ではゴールにてジュースに加えてメダルを配布、さらに女子大せんべいと学生が手書きのメッセージを書き込んだ女子大ハガキを渡すことにした(写真9)。各スポットでお菓子を



写真10 カチューシャをつけた学生たち



写真11 スポットにて説明

配布してくれた人にもこれらのものをプレゼントし、とても喜ばれた。2015年度と同様、ゴールでの子どもとの交流を目的としてはいたが、結果的にお菓子を配布した人への学生からのお礼としての意味を持つことができたかもしれない。

また、暗がりへの対応については、学生全員が光るカチューシャをつけたことで、明るくもなり、誰が学生なのか、といったことも分かりやすくなった（写真10）。交流という点では、スポット担当の学生は、ハイタッチのやり方や、やってくる子ども達にどのようにお菓子を配布するかを説明するようにした。また、スポットに来てくれた人にも仮装をしてもらうなど雰囲気づくりにも努めた（写真11）。

3) 2017年度のハロウィンイベント

2017年度の大きな課題は、主催する学生側にあった。社会福祉学科ではそれまで4年次で実施していた社会福祉士実習が3年次へと変更になったため、ハロウィンイベントの準備期間である9月10月に、12名の学生中半数近くが実習となってしまった。そのため、当日のスポット設営やパレードの補助をするためのボランティアを学科の学生に募ったところ17名の1年生が集まってくれた。ボランティアを募るからには、ハロウィンイベントの目的や内容をはっきりしておく必要がある。これまではゼミ生だけで関わっていたために、なんとなく目的などを共有していたようなところもあった。そこで、2017年度は、ハロウィンイベントのコンセプトを十分に話し合い、キャッチフレーズで示すことにした。やはり目的は「多世代交流」であるとして、「世代を超えた友達づくり」をキャッチフレーズとした（写真12）。団地外の子供達をどこまで把握し、どこまで安全を保障できるかといった点は引き続きの大きな課題であったため、議論した末に団地外からの参加は事前予約制とした。参加費をとれば人数が制限できるのではないかという意見もあったが、これまで無料でやっていたものを有料化するには、明確な根拠やこれまでとの違いが必要になるということで、今回は見送った。また、前述したように、団地内の多世代交流を重視するために30数名をメンバーとする子ども会（小学生対象）と団地カフェスタッフなどの有志でパレード後、集会室でハロウィンパーティーを開催することとし、これには100円の参加費を集めることにした。

子ども達の安全を守るためには、大人数でのパレードを二つに分ける必要があるのではないかという声もあがった。例年、大きな子ども達と就学前の幼児あるいは赤ちゃん連れの人たちの歩くス



写真12 2017年度のハロウィンポスター



写真13 ハロウィンカフェでの工作

ピードが違い、列が長くなってしまうことが課題となっていた。また、大きな子ども達が先にたかさんのお菓子をもらってしまうなど、お菓子の配布に差が生じてしまうことにもなっていた。そこで、年齢の違い（小学2年生までと小学3年生以上）により二つにパレードを分けて、スタート時間を15分ずらすことにした。それにより、スポットに来てくれる団地住民の拘束時間が長くなってしまうことが懸念されたが、1年生のボランティアを含めた学生スタッフがそこでの交流をリードできればいいのではないかということになった。そこでパレードを二つに分け、受付時間とスタート時間も15分ずらした上で2015年度と同様のスタンプラリー形式を再度試みることに決定した。

ハロウィンカフェについても変更があった。まず、ハロウィンカフェにも前述の理由で少人数の学生しか集えなかったため、2016年度の「多世代交流カルタ」を活用することとした。と同時に、しっかり準備さえしておけば少人数でもできるのではと、牛乳パックをベースにしたランタンづくりの工作をすることにした（写真13）。ここでつくったランタンをパレード当日に持参してくれた子どもも多く、ハロウィンカフェとハロウィンパレードが一体的に実施されていることを学生自身が実感することができたことは思わぬ成果であった。また、工作は子どもを対象とすることを想定していたが、高齢者世代、親世代の人たちも「是非つくりたい」と子ども達と共にランタンづくりに参加してくれたことで良い交流の時ともなった。

このように、実習がなかったり期間が重ならなかった学生が中心となって、工作の準備や子ども達に配布するスタンプラリー用のカード、装飾やパーティーで実施するビンゴの景品の買い物などを行った。後で学生の感想でも示すように、やはり特定の学生への負担が大きくなってしまったことは大きな反省点であった。

ハロウィンパレードの予約については、それほど事前の申し込みは多くなく、当日に直接参加した人もいたが、受付で名簿をチェックしたり名前を書いてもらい対応した。これまで子ども会の子供達については、子ども会の親たちが名簿で出欠を確認し、それが安全管理にも寄与していたが、それ以外の参加者の名前を聞いたことはなく名簿も作成していなかった。誰でも気軽に参加できる



写真14 パレードの説明をする学生



写真15 スポットでの一コマ

ことをモットーにしていたため、参加者の匿名性が高いのがこれまでのパレードの特徴であった。しかし、匿名性は無責任ということと表裏一体でもある。繰り返しになるが、団地外の子どもの安全を守れるのか、といった問いかけがこれまで寺尾台住宅管理組合からもたびたびなされてきた。団地外の子どもの半数以上いることから、ハロウィンイベントの後援を寺尾台住宅管理組合とするのも違うだろうと、そのような明記もしなくなってきた。今回は、多くなる一方の参加者に対して、予約制にすることや名前を書いてもらうということで、初めてハードルを設けたとも言える。実際に、なぜ名前を書かなければならないのか、といった参加者からの質問もあった。それでも、安全を守るという点からもこうしたことは必要であったと考える。

2017年度は受付での名簿チェックの他に、子ども達にサイリウムを渡す、ということも行った。これも暗がり対策の一つである。また、受付ではスタンプラリー用のカードを子ども達に配布した。こうしたことから受付の混雑も予想されたため、受付時間も小学校2年生までと小学校3年生以上と15分差で二つに分けて設定したが、これはあまり効果がなかったようである。なかなかそれが周知されていないようであるし、小さい兄弟と一緒に来る子ども、ハロウィンパレードが待ちきれない子どもなど、その理由は様々である。それでも、パレード出発までの待ち時間用に準備したフォトプロップを楽しむ姿も見られ、子ども達はそれなりに待ち時間を楽しんでいたようである。

2つのパレードの先頭にはそれぞれ2名ずつ学生がつき、別々にパレード前の説明を行った。パレードは2列で歩くこと、交流ということを重視するためにお菓子をもらう人とハイタッチをすること、お菓子をもらったならシールを貼ってくれる人のところに行ってシールを貼ってもらい、パレードが再出発するまで待っていること、などを約束として説明した。この背景には、毎年、前述したように1つのスポットでお菓子を何回ももらってしまう子どもがおり、最終的にお菓子が多い子ども、少ない子どもが出てしまうことをなんとか解決したいという思いがあった。お菓子を配布する人にも、シールが貼ってある子どもにはお菓子をあげないように、といったことを説明した。なお、この説明は参加者が二分されて小規模になったため、子ども達もよく聞いていたようである(写真14)。

一方、パレードを二つに分けたことでの反省点は大きく2つあげられる。1つ目は、小学校3年生以上の子ども達のパレードが出発するまでの待ち時間をどうするか、ということである。今回は



写真16 パーティーの様子



写真17 学生によるビンゴ

パレードの先頭を担当する学生2名が手話ができたので、その手話をとっさに披露したということだったが、そうした時間に何をするかについても十分準備する必要があった。2つ目は、各スポットでのお菓子の配分である。これは例年の課題ではあるが、パレードが二つに分かれたことで配分がより複雑化してしまった。学生はLINEなどで情報をやり取りし、パレードの人数なども把握して各スポットに伝達していた。しかし、実際に子ども達が押し寄せるようにやってきて「トリックオアトリート」とハイタッチを交わすと、手元をあまり見れずにどんどんお菓子をあげてしまうこともある。後のパレードまでの間隔は10分間ほどであったが、その間にお菓子の補充をするなどする必要が生じてしまった。それでも、各スポットでは学生と団地住民、さらに団地住民同士の良い交流がなされたようである(写真15)。

このようにパレードの反省点はあるものの、学生が担当したシール貼付もなんとかスムーズにでき、予定どおり30分強のちょうど良い長さのパレードをすることができた。ゴールでは、その後にパーティーが開催されるということもありジュースのサービスをしなかったが、スポットに集ってくれた人には女子大せんべいを渡すことができた。

集会所でのハロウィンパーティーはポスターなどでは公にせず、団地住民の交流を目的としたものとした。参加者は前述したように、子ども会のメンバーや親、団地カフェのスタッフや寺尾台住宅管理組合の理事、1年生のボランティア、3年生のゼミ学生たちで約60名である(写真16)。パーティーのメニューやスタイルについては様々アイデアがあったが、夕ご飯をきちんと食べさせたいという親たちの希望や会場の狭さもあり、頼んだお弁当を着席して食べることになった。そして、皆が着席しても楽しめるもの、として実施したのがビンゴである(写真17)。3年ゼミ学生のリードにより、大いに盛り上がった。

4 学生の感想からみるハロウィンイベントの意義

ここまで、ハロウィンイベントがどのような課題に対して、どのように対応してきたのか、という視点から、とくに2015年度以降のハロウィンイベントの内容についてみてきた。ここでは、2016

年度と2017年度の学生のレポートを通して、学生が捉えたハロウィンイベントの意義（成功の鍵）や限界（超えるのが難しい課題）について考えてみたい。

1) ハロウィンイベントの意義（成功の鍵）

①地域住民の主体性・協力

地縁の希薄化が進むなかで地域のつながりをつくるために多世代交流は大切だと考えていたが、何をするか・どのようにするか・どこでするかなどの課題があり簡単に実施できないものだと考えていた。地域の方が積極的で一緒に地域活動を創っていると感じた。地域活動は学生が主体的になるだけでなく、地域の方の協力があるからこそできるものだと改めて考えるようになった。

地域活動に関しては、活動を行う際に皆が賛成して、同じ意見を持っている訳でもないと感じた。地域の中には嫌がる人や迷惑だと思ふ人々がいることを知り、そこで改めて地域活動の難しさを感じた。同時に、一緒に創りあげていく人達との協力は欠かせないと思った。地域の人へのアプローチは地域の暮らしている人の方が効果的であるし、地域の特性を知っているのもそのような人たちであると思うので、情報を共有し住民たちのニーズを把握することが地域活動に必要であると感じた。

②地域住民が多世代交流を実感すること

小さい子どもを持つお母さんや高齢の夫婦など、幅広い世代が集まり、空き時間には談笑し、団地内の交流の懸け橋となることが出来た瞬間だった。お菓子を全て配り終え、片づけをしていると、高齢の夫婦の方が私のもとへやってきた。「普段はあまり話す機会がないから、このようなイベントがあって嬉しいです。ありがとう。」と話して下さった。私はこの言葉を聞いて、本来の目的であった多世代交流を達成することが出来たのではないかと考えた。

（ハロウィンカフェにおいて）当日名前やあだ名を聞き私たちがガムテープに書いたものを貼ってもらったのだが、その場面でもあだ名がないから苗字を書いてという方に別の方が「こんなあだ名がいいんじゃないか」と提案したりして会話が生まれたり、名前と呼ぶことができたりとコミュニケーションのきっかけづくりになったのではないと思う。また、工作をする場面では、子ども達と会話する中で「○○ちゃん、上手だね」と名前を呼んでコミュニケーションが取れた。

③媒介としての学生の存在

“よそ者”である私達が出しゃばったことをして良いのか…。団地の方々にどう思われるだろう（迷惑に思う人もいるのでは…）、私自身、1人暮らしをしていて、他の住人とあまり関わりたくないという思いを持っていたので、交流の動きを嫌に思う人もいると思っていた。…昔は草むしりを一緒にしたり、顔のみえる交流が多かったこと、団地カフェのみなさんや子ども会が協力したいと感じていたことを知り、更に団地カフェのみなさんの立場上の動きづらさ等を知った。その状況で“女子大のみなさんの企画”というクッションがあるおかげで動けるのは助かるとおっしゃっていただき、私達は役立っていると実感したし、今年から子ども会が協力してくださったり、団地外からも参加したいと思ったださっている人がいることを知り、ハロウィンパレードの可能性を感じた。

子ども会のお母さんの世代も、高齢者の方々も「何かをやりたい」という意欲的な気持ちと、一方で「何をやっていいのかわからない、私が声を上げたら批判されるかもしれない」という消極的な気持ちの双方を抱えていることが分かり、仲介する第三者の存在のようなワンクッションおける役割の重要性を感じた。「多世代交流」と聞くと漠然として一般の人には固く感じられてしまうかもしれないが、高齢者と子どもとのお母さんが同じ時間を共有しあえる空間づくりを整えることができれば、会話やコミュニケーションなどは自然に生まれてくるものだと感じた。

自分たちの団地をより良くしたいという思いを持った方々が行動してイベントを盛り上げて行うのに、私達が介入していく意義を感じた。地域活動や多世代交流が住民のためになっていると考えた。

Oさんを中心とした管理組合の方は多世代交流について積極的に考えてくれていたが、何より私たち学生（ヨソモノ）がそれに携わることで刺激になるのではと考えてくれていると感じた。

④ボランティアの存在

何よりも人手の面で1年生のボランティアが17人来てくれたのは大変心強く、助かった部分が大きかった。パレードは子どもの大移動のため、その分人手が必要であることを改めて感じた。

私たちだけでは十分な準備をすることが難しく、パレードもボランティアの方が手伝ってくれたためにある程度の秩序を保ちながらできたと思う。

(下線 筆者)

2) ハロウィンイベントの限界

①多世代交流の難しさ

「多世代交流」ということであったが、実際は「地域に住んでいる人を知ろう！」だったのではないか。

今回の寺尾台団地ハロウィンパレードを自分なりに一言で表してみると「親子で楽しむお菓子パレード」であると思う。…ポスターを見てお菓子配りに来てくれた人はほんのわずかで、子ども会や管理組合など、既に顔見知りの人との交流という印象が強かった。

同じ学年どうしや親御さんどうしでの交流は見られたが多世代ということに関しては難しかったようである。ボランティアとして地域の様々な年代の人や、中には男性の方も協力してくれたのだが、待ち時間の公園内やお菓子配布の時に何かもっと多世代で絡める、友達づくりをすることができればよかった。

カルタに関して、お年寄りの方々が子ども達に遠慮し参加が中途半場になってしまったことに対しても何等かの配慮が必要と感じた。…お年寄りの方々子ども達との接点を持てるよう事前に得意なこと、子ども達に教えられること等をリサーチし、カフェのイベント内容に盛り込むべきだと考えた。…お年寄り子ども達がお互いに全力で取り組めるよう、チーム対抗等のイベントを取

り入れることといったことも可能ではないかと考えた。

子ども達だけで行うハロウィンになってしまったように感じた。学年を分けることもよかった点もあったと思うが、多世代交流の面では小学生同士で上の学年と下の学年との交流があまりできなかったのではないかと思った。

ハロウィンパレードという形だと子ども達がお菓子をもらうことがメインになってしまうため、多世代交流はおまけのような形になってしまったことである。また、交流は子どもと大学生の間では多かったが、高齢者と子どもの交流という場面はあまり見かけなかったように思える。

多くの団地の人々が参加したがコミュニケーションの質はあまりよくなかった。また世代も親子連れや子ども達が中心で、多世代で交流する困難さを感じた。背景に平日の夕方に参加し元気で余裕のある人が対象など、大人や高齢者の方が参加するには難しい雰囲気があると考えられた。

今回のイベントの大きな目的として「世代を超えた友達づくり」ということを挙げたが…お菓子をもらうことが子どもたちや参加者の目的となってしまう…この目的意識の差が課題の一つだと考えた。

子ども同士の交流と言っても、子どもも自分の友達や知り合いと来ている子が多かったので、結局はいつも一緒にいる子と関わるだけになったような…子どものニーズに合っていると思うが、地域に住んでいる人を知るということや、子どもと大人、学生との交流はそれほどできなかったような気がする。

②参加者の置かれた状況—子どもの忙しさ・高齢化

課題としてお菓子配り等をしてくださる団地の方の高齢化が進んでいること、子ども側の忙しさが挙げられると思う。…子ども側の方も習い事や塾で忙しい、またはその保護者が働いているため、今回は子ども会の協力でたくさん参加して下さって良かったが、今後参加者を集めていくとき、スケジュールを合わせる時に課題になっていくのではないかと思った。

ボランティアが高齢化してきたことに伴い、このような大規模なイベントを主催することは難しいと考える。また、理事会もイベントごとには参加しない意向を示しているためボランティア不足も深刻化している。そして、若い世代や子育て世代は忙しいためなかなかボランティアに参加することが難しい。

高齢化が進んでいるため若い人の力が必要なので子ども会を卒業した団地の中学生・高校生・大学生を募り、企画などを願うするのもいいのではないか。ボランティアやインターンとして募集すれば集まってくれる人もいるのではないか。

団地内の高齢化がすすんでいるためか、今年が高齢の方のボランティアが少ないと団地の子ども会の方がおっしゃっていた。参加したくても家からなかなか出れない方が増えているのではないか。

今後担い手の不足や高齢化などにより冬の夜に外でハロウィンパレードを行うことが難しくなってくると考えられる。…パレードを通した多世代交流を目的とする際には、高齢の方々に対する配慮（たとえば椅子の使用、懐炉の配布等）が必要となってくるだろう。

団地の方々も高齢化しており、何時間も立っているのは辛く、また経済的問題も上がってきていると感じた。無理に連れ出すこともできないため、これから先高齢者の方々をハロウィンパレードに巻き込んでいくのは難しいように感じた。

③学生の置かれた状況—準備の不十分さ

実習の学生が多かったため、担当を振り分けるのが遅くなり、各個人が何を担当していつまでにつくるなどといった管理をしていなかった。しっかりと全員がパレード全体を把握していなかった。

高学年の子たちが待っている間に何をするかを事前に考えておくべきだった。

言うのは簡単。でも実際にやってみると想像していたこととは違って、うまくいかないこともあり、計画性と余裕を持って準備することの大切さを感じた。しかし、計画しても、変更があり臨機応変な対応が必要だと分かった。

④子どもの統率の難しさ

子どもが思った以上に自由で、いろんなことを知っていて、想像できない行動をするため、自身自身の小学生時代を少し思い返して向き合おうと思ったぐらいだった。

子ども達をまとめることが難しかったことである。危ないから2列になるように言ってもいやだという子がいたり、シールをもらわなければお菓子を何回ももらえと言っている子がいた…マニュアルみたいなものを配ってもよかったのではないかと思った。

⑤個人情報の管理

受付名簿を人数の把握以外に活用できなかった。そのため名前を書かない人も出てきてしまったのではないかと考え、個人情報の配慮もすべきだった。

受付側としても、何のために受付を設けるのか、また本当に安全性を確保できるようにチェックを実行できると言い切れるかなどの考えから、受付設置の理由をうまく説明できなかった。受付担当者の口頭のみならず、紙にも参加者の名前を書いてください等の記載をしておくべきだった。

5 おわりに

前項では、おもに2016年度学生によるハロウィンイベントの意義（成功の鍵）、2017年度学生によるハロウィンイベントの限界（超えるのが難しい課題）について考えてみた。2016年度のハロウィンイベントは、ゼミ生9名全員がハロウィンカフェに参加し、自分たちが夏休みを使って作成した「多世代交流」カルタを実施し、地域住民の交流やナマの声を直接聞くことができた。パレードも

含めたこうした経験を通して、「多世代交流」の持つ可能性や学生が介入することのプラス面を強く意識することにつながったとも言える。もちろん、これまでの変遷で述べてきたように、そこで浮かび上がった課題も多々あった。

そこで、2017年度の学生には、先輩たちのレポートをよく読んでもらい、一番の課題である「多世代交流」をいかに質の高いものとして提供できるか、ということにチャレンジしてもらった。しかし、これまでとは違う、人不足による準備の不十分さ、イベント内容の把握や役割分担の不十分さなどの学生自身の課題や、質の高い「多世代交流」の困難に直面し、その限界についての感想が多く語られたということが言えるだろう。とくに2016年度には全員参加できていたハロウィンカフェに、4名の学生しか参加できなかった違いは大きい。すなわち、ハロウィンカフェが、団地内の集会所において団地住民同士が密に関わる＝「多世代交流」をある程度可能にさせていたものだからである。匿名性の高い大人数が参加するパレードは、イベント性こそあるけれども、「多世代交流」をすることは難しいということが明らかになったとも言える。

ある学生が「コミュニケーションの質」という言葉で、パレードについての反省を述べたように、私たちの目的が質の高い「多世代交流」であったにも関わらず、それは達成できなかったのではないかという感想を多くの学生が持ったことは重く受け止める必要がある。もちろん、それがパレードにおいて全くなかったというわけではなく、スポットで初めてお菓子を配付した団地住民から「普段はあまり話す機会がないから、このようなイベントがあって嬉しいです。ありがとうございます」という言葉をもらい、「多世代交流」を実感できたという学生もいる。そこで行われていたことは、実はカフェと同様に、「固定化された空間での少人数による密なコミュニケーション」であったと言えるのではないだろうか。一方で、パレードは「移動を伴う空間での大人数による匿名性の高いコミュニケーション」と言うことができるだろう。パレードには多くの人が気軽に参加できるという意義があり、「密なコミュニケーションの出来る場にも参加してみよう」というようなきっかけにもなり得る。カフェにおいて、名札をつけたことでコミュニケーションが密になったという感想もあった。匿名性というよりも、どこの誰かが分かる方が密なコミュニケーションには必要である。どちらがいいのか、ということではなくどちらのコミュニケーションにも意義があり、私たちがどのようなコミュニケーションを創り出したいか、という目的を明確にした上で、そのあり方（カフェなのかパレードなのか）を選択する必要があるだろう。

団地内での「多世代交流」には、やはり「固定化された空間での少人数による密なコミュニケーション」が必要である、というのがこれまで5年間ハロウィンイベントを実施した上での結論である。そこで、2018年度の活動においては、カフェ活動に力を入れていく方針で話し合いが進められている。しかし、団地カフェのメンバーの固定化、新しい人が団地の集会所に足を運ぶことはハードルが高い等、既にそこにも大きな課題が明確になっている。これらの課題を団地住民と学生が共有すること、地域イベントを企画する際には目的を明確にし、参加者全員がその目的を理解し一致して活動すること等が、これからの地域活動において重要になってくるだろう。

イギリスのファッションに見る
「女性らしさ」の規範
—フランス、日本との比較を通して

Defining the Feminine Body in Modern British Fashion:

A Comparison between French and Japanese Modes

坂井 妙子 SAKAI Taeko
(日本女子大学人間社会学部文化学科教授)

三神 和子 MIKAMI Yasuko
(日本女子大学文学部英文学科教授)

桑 和沙 KUME Kazusa
(日本女子大学人間社会学部文化学科助教 2017年度まで)

佐々井 啓 SASAI Kei
(日本女子大学家政学部名誉教授)

徳井 淑子 TOKUI Yoshiko
(お茶の水女子大学名誉教授)

米 今由希子 KOMIIMA Yukiko
(日本女子大学家政学部被服学科非常勤講師、学術研究員)

佐藤 恭子 SATO Kyoto
(岩手県立大学盛岡短期大学部講師)

目 次

近代イギリスのファッションに見る「女性らしさ」の規範 —フランス、日本との比較を通して	坂井 妙子
I イギリスのファッション	
サフラジェットとく女らしさ	三神 和子
ヴィクトリア朝後期の女性用レインコートに関する考察	坂井 妙子
イギリスの室内装飾における「女性的な」趣味とジャポニスム	糸和 紗
II 日本のファッション	
廣岡浅子の洋装にみる女性の生き方	佐々井 啓
イギリスの日本風演劇の舞台衣裳にみる女性らしさ	米今由希子
III フランスのファッション	
20世紀初頭東洋趣味モードにみるフランスの女性らしさ	佐藤 恭子
1870年代近代都市パリの黒いモード	徳井 淑子

近代イギリスのファッションに見る「女性らしさ」の規範 —フランス、日本との比較を通して

Defining Feminine Body in Modern British Fashion:
with a Comparison to French and Japanese Mode

坂井 妙子

2017年度末までの三年間、上記の研究を続けてきた。タイトルのはじめにある「近代」とは、本研究では19世紀後半から1920年代頃までを指す。この時期、イギリスをはじめとする先進国では、政治、経済、文化のすべての面で近代化が進み、新しい女性らしさが規定されつつあった。本研究では近代化を様々なレベルから測るために、女性参政権運動、新しい芸術思想、女性の高等教育機関への進学、大衆娯楽や異国趣味の発達、都市文化、社会階級制度の揺らぎ、男性らしさとの比較を主要な考察事項とした。以下、研究成果を記すが、それぞれの分野で特徴的なファッション、またはファッション観を見出し、女性らしさと関係付けることで、女性たちが極めて多様な考えをファッションに投影していたことがわかるだろう。近代化と女性ファッションをあまりにも多角的に捉えているために、一見混沌としているが、すべてがより自由に、活動的に、自分の意思で行動する女性を作ること貢献していることが明らかになった。

サフラジェットとく女らしさ

Suffragettes and Womanliness

三神 和子

I

イギリスにおいて女性に国政レベルの参政権が付与されるのは1918年のことである。財産の条件を満たした30歳以上の女性に投票権が与えられ、1928年にすべての女性に男性と同等の参政権が認められた。女性参政権の要求は18世紀末になされ、それ以後もずっと要求されてきたが、女性たちの組織だった活動としてなされ始めたのは、1897年のミリセント・フォーセット (Millicent Fawcett, 1847-1929) が主導する女性参政権協会全国同盟 (National Union of Women's Suffrage Society) である。この組織の中にのちに女性社会政治同盟 (Women's Social Political Union) を打ち立てるエメリン・パンクハースト (Emmeline Pankhurst, 1858-1928) も、その娘たちであるクリスタベル・パンクハースト (Christabel Pankhurst, 1880-1958) もシルビア・パンクハースト (Sylvia Pankhurst, 1882-1960) も入っていた。しかしながら、合憲派と言われ、穏健な活動に終始するこの団体の戦法に業を煮やして、パンクハーストとその仲間はこの団体を出て、1903年女性社会政治同盟を結成した。前者をサフラジスト (suffragist)、後者をサフラジェット (suffragette) と呼んで区別するのがふつうである。彼女たちの戦法は過激な活動をして、マスコミに取り上げられ、世間を騒がせ、注目を引くことであった。郵便ポストに火のついた瓶を投げ込んだり、窓を割ったり、協会を爆破したり、放火したり、絵画を引き裂いたり、大蔵大臣であったロイド・ジョージ (David Lloyd George, 1863-1945) の新築の家に放火したりした。逮捕され、収監されると、政治犯として扱われないことに抵抗し、ハンガーストライキを行った。このハンガーストライキに対して、政府は問題の強制摂食 (forced feeding) を行った。この好戦的な活動を行うサフラジェットたちは「女性らしくない」(unwomanly) と言われた。この言葉を投げつけることが、彼女たちを傷つける攻撃手段の一つであった。エルシー・クルーズ・パーソンズ (Elsie Clews Parsons) によれば、ヴィクトリア朝から20世紀初頭にかけて、そしてその後も、「女性らしくない」と言われることは、鞭打たれるに等しいほどの厳しい社会的批判を受けることであり (in Tickner, 217)、どの女性も「女性らしくない」といわれることを恐れた時代であった。また、当時は「女らしさ」という言葉がジャーナリズムや小説などの中で飛び交い、人々が「女らしさ」について考えた時代でもあった。それほど「女らしい」という事は重要なことであった。「女らしくない」ということは、社会からのけ者にされる、つまり、落ちこぼれを意味したからである。

一方、サフラジェットたちは「女らしく」であろうとしたし、自分たちは「女らしい」と思っていた。見かけの上では、服装もフェミニンな洋服を着るように心がけていた。女性らしいきちんとした身なりをすることは、サフラジェットたちにたいして世間一般が持っている「男勝り」のイメージを払拭するためであり、投票権を持つことが男性と同じになるという意味ではないことを強調するためでもあり、また、レースやフリルの多くついた洋服を着て闘争の準備がないことを知らせるためであった (Vicinus 263)。そして何よりも、心の中で、彼女たちは自分たちが女性であることを誇りにしていた。彼女たちにとって「女らしさ」とはどのようなものであり、それをどう発揮し

たのか、この問題を考察するのが本稿の目的である。まず、「女らしさ」とサフラジェットたちの関係を整理した後、サフラジェットの「女らしさ」の問題を真っ向から取り扱ったガートルード・コルモア (Gertrude Colmore, 1855-1926) の『サフラジェット サリー』 (*Suffragette Sally*, 1911) を取り上げ、この作品を分析することで、サフラジェットと「女らしさ」の関係を考察してみる。

II

「女らしさ」(womanliness) というものは生物学的な理由から生まれたものではなく、文化的、歴史的イデオロギーとして社会の中に根付き、行動や考え方、服装などの規範となって表れてきた。

「女性らしさ」の定義は時代によって変容するが、19世紀ヴィクトリア朝から20世紀初頭にかけて社会に浸透していた「女性らしさ」がどのようなものかと言えば、1868年『サタデーレビュー』 (*The Saturday Review*) に「当世の娘たち」 (“The Girl of the Period”) を発表し、1891年に「政治家としての野蛮な娘たち」 (“The Wild Women as Politicians”) を発表したアンチ・サフラジストで19世紀後半の女性の生き方のご意見番エリザ・リン・リントン夫人 (Eliza Lynn Linton, 1822-1898) の「女らしさの」の定義が参考になる。

We call it womanliness when a lady of refinement and culture over comes the natural shrinking of sense, and voluntarily enters into the circumstances of sickness and poverty, that she may help the suffering in their hour of need; when she can bravely go through some of the most shocking experiences of humanity for the sake of the higher law of charity; and we call it womanliness when she removes from herself every suspicion of grossness, coarseness, or ugliness, and makes her life as dainty as a picture, as lovely as a poem. She is womanly when she asserts her own dignity; womanly when her highest pride is the sweetest humanity, the tenderest self-suppression; womanly when she submits to the stronger. (Eliza Lynn Linton, Vol. II, 110; in Tickner 213)

リントン夫人にとって、勇気を出してチャリティ活動をすることは「女らしさ」の主要要素である一方、謙虚で、自己抑制することも「女らしさ」の要素である。自分よりも弱い者を保護する一方で、強い者には従うことが「女らしさ」の要素となっている。相反する要素が入っているが、「女性の領域」、つまり家庭の中では積極的に活動し、それ以外の世界、つまり「男性の領域」では謙虚にしていることが必要ということである。「女性の領域」(women's sphere) と「男性の領域」(men's sphere) とはくっきりと分けられ、女性の領域は家庭であり、その家庭の領域の延長としてチャリティ活動がおこなわれていた。「弱者を保護し」、「病人や貧者の面倒をみて、困って苦しんでいる者を助ける」ことは家庭の中と同じく、女性の優しさが発揮される場所であった。そして政治は「男性の領域」に属すると考えられ、その男性の領域に入り込もうとする女性は、「女性らしくない」と考えられたのである。

One finds no argument so persistently raised against the movement for Woman's Enfranchisement, and more particularly against the 'militant' methods, as the assertion they are 'unwomanly'... (Laurence Houseman, 38; in Tickner 213)

女性参政権を要求することは「女らしくない」と映り、「女らしさ」が生物学的な意味で使われていないにもかかわらず、「女らしくない」女性は、「生理学的に異常な状態の病的な兆候」と映った (Tickner 213)。とくに20世紀初頭に最も過激に活動した女性社会同盟 (Women Social and Political Union: WSPU) の女性活動家たちは破壊行動を含む大胆な活動のために「女らしくない」女性と言われ、「ヒステリーで非理論的、叫び続ける女たち」と捉えられた ((Laurence Houseman, 38; in Tickner 213)。

しかし WSPU の女性たちは「女性らしくない」つもりはなかった。サフラジェットたちは自信をもって自分たちは「女らしい」と考えていたし、「女らしさ」の中に自分のアイデンティティーと参政権運動の基盤を置いていた。もちろん、それは古い「女らしさ」ではない。男性の考え方を至上とする「はにかみ屋で、他人を頼り、男性に絡みつく蕁のような」「女らしさ」ではなく (Tickner 217)、自分で考え、決断し、行動する、しかしながら女性の属性と言われているものの中のいくつかのものを踏襲し、それらを発揮する、変容した「女らしさ」である。

彼女たちは古い「女らしさ」を完全に否定し捨て去ったのではなく、古い「女らしさ」が示していた女性の特徴のいくつかを踏襲し、それを「女らしさ」の原点とした。そして、それらを参政権運動の大義名分とした。その「女らしさ」で社会を改善するというのを、彼女たちが参政権獲得を目指す理由とした (Tickner 216)。その「女らしさ」の属性とは、具体的には、精神性が高い点、つまり、道徳的に優れている点、言い換えるなら、性的情熱がなく、貞節であるという点、また、困っている人たち、苦しんでいる人たちを助けるというチャリティ精神が強いという点などである。

彼女たちの目指した改革分野は、大きくいって、三つある。一つは女性の領分である家庭内の領域 (domestic sphere) に関する分野、たとえば結婚、離婚、相続、子育て、教育に関する事柄は男性政治家は専門外であるので、それらの立法化の際に力を発揮したいというものである (Alison Lee 13)。もう一つは女性の性道徳の高さを社会浄化に役立てたいというものである。男性によって腐敗し墮落した社会を改善しなければならない。男性の放埒な性関係から引き起こされた性病の蔓延によって退化した社会を女性の精神性を政治に役立てることで、社会全体を浄化しないとならない。クリスタベル・パンクハーストの『大災害、どうやって終わらせるか』 (*The Great Scourge and How to End it*) (1913) には性病の蔓延は男女平等、つまり女性の参政権獲得によって直されることが述べられている。WSPU の標語「女性に参政権を、男性に貞節を」にもこの「女性らしさ」と参政権の結びつきが表れている。三つ目は、虐げられている人々、とくに女性を救うことである。男性の物質欲と思いやりのなさから経済的苦境に追い込まれている人々、とりわけ、男性よりも賃金の低い女性たち、そしてその苦境の一時凌ぎのために身を売り男性に性の搾取を受けている女性たちを救わないとならない。女性の属性である「感受性」 (sensibility) と「思いやり」 (compassion) によって (Tickner 216)、社会を人にやさしいものにしなければならない (Tickner 217)。これは女性の得意分野であるチャリティの仕事である。そのためには女性たちはもっと強くなり、自分たちの意見を発信し、何よりも国政レベルの参政権が必要なのである。産む性であるという点、すなわち、母親であるという点も強調され、未来の世代のために社会改革が必要だと彼女たちは主張した。まさしく女性参政権運動は「女らしい」女性の社会浄化のための聖戦 (crusade) であるとして (Tickner 223)、女性たちは仲間の女性を募った。彼女たちは女性を救うことも目指したが、社会全体を女性の力で変えようとした (Vicinus 252)。ここにはヴィクトリア時代のイデオロギーにおいて女性は精神性を重視し、思いやり深い性質をもち、一方男性は肉体という物質重視で、競争に

生きるという対立構図がある。彼女たちはこの構図をうまく利用した。

慕られる女性たちは中流階級の女性たちばかりではない。「女らしさ」は中流階級の女性たちに求められる美德であり、行動規範であるが、参政権運動の女性たちは、労働者階級の女性たちも仲間として迎え入れた。「女らしい」中流階級の女性たちも労働者階級の女性たちも、男性によって搾取され、男性の性的放埒と抑圧に苦しむ点では共通している。とくに労働者階級の女性たちは経済的な苦しさから自分の性によって暮らしをたてる可能性を抱えていた。彼女たちの性は男性の性的放埒さによって需要があった。もちろん、参政権運動に参加した大部分の女性たちは教育のある／中流階級以上の女性たちであり、労働者階級の女性たちは少数派であった。労働者階級の女性たちは活動の時間が十分とれなかったし、活動にとられることで稼ぐお金が減少した。収監されればなおさらである (Vicinus 257)。リサ・ティックナー (Lisa Tickner) は、参政権運動の仲間に労働者階級の女性を入れた意識の中には中産階級の女性たちの博愛主義のへりくだり、つまりわざわざ身を下げてやったという階級意識があると言うが (225)、「女らしさ」が中流階級の女性的美徳であり、その美德の中にチャリティの精神がある以上、上の階級から下の階級への視線があるのはやむを得ないのかもしれない。この点、貴族でありながら労働者階級に変装して逮捕され、ホロウェイ監獄で労働者階級と同じ手荒な扱いを受けたレイディ コンスタンス・リットン (Lady Constance Bulwer-Lytton, 1869-1923) は階級を超えて同志として共に苦闘するという心構えを貫いたと言える。

III

ガートルード・コルモア (Gertrude Colmore, 1855-1826) の『サフラジェット サリー』 (*Suffragette Sally*, 1911) はサフラジェットと「女らしさ」とが結びつくことを説明した作品である。この作品の狙いはまだ女性参政権に関心のない人びとの関心を引き、サフラジェットに偏見のある女性の偏見を解くことにある。こうすることによってサフラジェットにより多くの女性を勧誘し、多くの人々の理解を得ようとしたのである。したがって、この物語の中には当時の人々のサフラジェットに対する疑問が取り上げられており、その一つが「女らしさ」の問題である。また、なぜ闘争的な (militant) 手段を取るのかという疑問に対して、闘争的手段に走った経緯も説明されており、やむを得ない事情であったことが解る仕掛けになっている。さらに刑務所で女性たちがどのように過酷な扱いを受けているかが具体的に説明されており、殉教した女性の心の描写と合わせて、今まで関心のなかった人々の感情を揺さぶり、同情を引くように作られている。作者のガートルード・コルモア自身もサフラジェットであったことから、より真実味をもって、具体的に、サフラジェットの女性たちの心情や経験が穏やかで淡々とした文体によって語られている。

この作品は三人の女性たちが主人公として登場する。労働者階級のサリー・シモンズ (Sally Simmons)、中産階級のエディス・カーステアズ (Edith Carstairs)、貴族のレイディ ジェラルディン・ヒル (Lady Geraldine Hill) である。三人の女性はそれぞれ知り合い、サフラジェット運動にかかわっていく。物語は三人の心の中や行動がそれぞれ展開し、その線が編まれる形で構成されている。この三人の登場人物が織りなすテーマは大きく分けて3つある。一つは階級の問題であり、二つ目は殉教であり、三つ目が「女らしさ」の問題である。この3つのテーマを順に見ていく。

<階級>

サリー・シモンズはロンドン北部でホロウェイ監獄近くに暮らすビルクスという中流家族の若い

女中である。食事の支度から子供の面倒まで見る何でも屋の女中であり、「階級低く、教育もなく」(243)、下町訛りを話し、作品内もその訛りで話すので、何を言っているか理解するのに苦労するときがある女性である。子供たちにやさしく、仕事もきちんとこなし、誠実に暮らしているが、低賃金で、過重労働、そして主のビルクス氏からセクシュアルハラスメントを受けている。ある日の午後の休日に彼女はめったに行くことのないウエスト・エンドのリージェント ストリートに行き、人々が入っていく公会堂 (Queen's Hall) に、入り口の女の子が彼女と同じ労働者階級の言葉をしゃべったので入ってみる。そこでは壇上に上がっている人々が何かを演説し、そのほとんどを彼女は理解できなかったのであるが、たった一人理解できる、というより理解できると思った演説があった。優雅な身のこなしで優雅な服装をした背の高い女の人の平易な言葉のスピーチで、その人はレイディ ヘンリー・ヒルと呼ばれていた。彼女にはレイディ ヒルが歌っているように聞こえた。レイディ ヒルは「自由の歌」を歌っていた (50)。

その歌は彼女の「心の奥の鳥」に共鳴した。そして公会堂を出た時、彼女は今聞いたのは「戦いの叫び」であり、「戦いへの招集」の声であると感じた。

And through them all went the song; yes, and the battle-cry. Fore there had been a call to arms—was it only in the voice, or in the words, of the speaker?—a call to all women: to stand together; to be full of courage; to fight for themselves and for each other; most ardently for the poorest, the most oppressed of all. To stand together; she and Lady 'Ennery 'Ill! To stand up for the all the women that were put upon! She hardly knew for what she was fight; what was the liberty, what the rights, of which the speaker spoke. But the bird in her breast knew. (51)

ここはサリーがレイディ ヒルに魅了されて、参政権運動に目覚めていく場面であるが、ここには一つ目のテーマ、階級の問題が提出されており、レイディ ヒルの考えによって表わされている。サフラジェットたちは参政権獲得のために、そして男性から虐げられている点において、みな同じで、階級はないことが強調されている。しかしながらこれは、レイディ ヒルの考え方である。実際には、WSPU においてもミリセント・フォーセットの率いる女性参政権運動全国同盟 (NUWSS) においても階級は難しい問題であった。アリソン・リー (Alison Lee) によれば (23)、たとえば、マンチェスターから立ち上がった WSPU は最初は工場で働く女工さんたちの支持を受け、パンクハースト母娘たちは労働者階級と一体になってきた。それが1906年に本部をロンドンに移した後から、過激なサフラジストも加わり、また、参政権獲得を少額ながら財産を条件にしたことから、労働者階級の女性たちが離れていった時期もあった。しかし、労働者階級の支持を失うことは参政権獲得運動を妨げる。WSPU の中にはこの運動は中産階級の女性のためのものではないと言う女性たちがいる一方で (たとえば、シルビア・パンクハースト)、労働者階級の女性との連帯を強調する女性たちも多くいたという (たとえば、エメリン・ペーシック = ロレンス)。

しかしながら、WSPU の中に労働者階級の活発な活動家で指導者的存在のアニー・ケニー (Annie Kenney, 1879-1953) がいたことを考えると、マーサ・ヴィシナスが言うように (Vicinus 257)、労働者階級出身者を排除していたというわけではなく、少数派にせよ、仲間になっていた。アニー・ケニーはこの物語では、アニー・カーニー (Annie Carnie) として登場しているのだが、10歳から15歳まで紡績工場で働いた後、独学し、1905年にクリスタベル・パンクハーストとテレサ・ピリン

グトン＝クレイグ (Teresa Billington-Greig) の演説を聞いて WSPU に馳せ参じた。WSPU の主力メンバーとなった彼女はクリスタベル・パンクハーストと組んで1905年のマンチェスターのフリー トレード ホールで開催されていた民主党の大会に出向き、出席していたウィンストン・チャーチルとサー エドワード・グレイに向かって「あなた方の政府は女性に参政権を与えますか」と叫んで WSPU の旗を振り回し、会場から引きずり出された後、サー エドワード・グレイを侮辱し逮捕され、罰金を払うよりも、禁固刑を選んだ女性である。

そして作者のコルモアはあらゆる階級の女性たちの団結を強調した。集会会場を出た時サリーが感じ取った闘いへの招集の叫び、すべての女性たちへの呼びかけはコルモアのものであり、前述したように、コルモアの代弁者であるレイディ ジェラルディン・ヒルの叫びである。

サリーたち労働者階級の女性たちに呼びかけたレイディ ヒルのもともとの動機は、チャリティである。

A vote? What did she[lady Hill] want with a vote? Why, nothing, of course. The possession of it was no importance either to her happiness or her dignity. The woman who was her husband's wife had all a woman could want in the way of consideration, happiness, and, if she would, influence. But she belonged to the ranks of the privileged few: the mass of the women had little freedom, scant consideration, an influence limited to that of sex or charm or personality. (68)

レイディ ヒルは少数の特権階級に属し、彼女自身が自由や影響力にそれほど困ることはない。しかし少数の特権階級に属さない大勢の女性たちには自由も影響力もない。ここには自分たちは困っていないのだけれど、困っている「哀れな姉妹たち」を救い出さなくてはならないというヴィクトリア朝の中流階級以上の女性が抱えていたチャリティの精神がある。しかしながら、チャリティ精神が原動力になっているにせよ、コルモアはレイディ ヒルをとおして労働者階級の女性たちをもうチャリティ活動だけでは救い出せないことを強調する。

But the women!—the women who had to keep themselves, and often themselves and their children, on wages half and less than half, the wages accorded to men, how were they to be helped, how heartened, how urged to struggle on their own behalf? Not by philanthropy of Aunt Margaret and her kindly kind; not certainly by soup kitchens or district-visiting or pounds of tea or club. They must be individualized, turned from toiling animals, working like animals, just for food and shelter, into women. … How were the raising of wages and improved conditions to be brought about? (67)

当時、女性の給料は同じ仕事内容の男性の三分の一から三分の二以下しか支払われないのがふつうであった。結婚すると雇い止めになることも頻繁にあった (Vicinus 247)。このような状況の彼女たちを救い出すには、彼女たちが参政権を持つこと以外にない。もう、恵まれた者の慈善活動では限界がある。「政治的存在を与えられて、国家の中の自主性を持った存在」になること以外 (68)、つまり参政権以外、困っている女性たちを救うことはできない。そして「女性によってのみ、大部分の／庶民の女性の状況は改善される」とレイディ ヒルは結論を出す (67)。女性たちが参政権

活動をし、全員が参政権を持つことによって、特権を持たない大部分の女性たちの状況は改善される。

このようにレイディ ヒルは女性参政権への関心の動機はチャリティ精神である。参政権を持つことは女性が男性と平等だという事を要求することではないと言い切っていることにも示されているように (99)、彼女の参政権要求は、男性とは異なる存在である女性の使命を果たすこと、つまり、ここではチャリティを行うことである (99)。しかしながら、彼女は参政権獲得運動において特権を持った恵まれた女性だけが運動をすればよいとは思わない。日々の暮らしに追われて何も考えていない女性たちに、参政権の意味を知ってもらいたいのだ。そしてともに闘いたいと思っている。彼女が「教育のある聴衆の関心ばかりでなく、サリー・シモンズのようなタイプの聴衆にも声が届き喚起したいと思うのは」このためである (68)。

そして彼女はチャリティという階級の上から下への階級意識を超えて、女性同士の絆、シスターフッドを形成しようとする。彼女が二度も刑務所に入るのは、このためである。まず、最初に刑務所に、入ったとき、レイディ ジェラルディン・ヒルは逮捕後収監されてはじめて囚人服を着た時、次のように感じる。

It was wonderful how class distinction fell away, or rather how naturally she adopted the attitude of the class to which she now belonged: the class of prisoners. She was no longer Lady Henry Hill, but one of a body of women, at the command of another woman, absolutely subject to the prison authorities. (126)

参政権への闘いのためには社会階級というものはいらぬ。ただの囚人という一括りの団体の中にいることにレイディ ヒルは安らぎを覚え、かつ「仲間同士」の絆を感じる。女性たちは階級を超えて一つにならなければならない。貴族であることで強制摂食を受けずに解放されてしまったレイディ ヒルは、この団結のために、アン・ヒーリー (Anne Heely) と名を変え、眼鏡をかけた労働者階級の女性に変装して逮捕され収監される。刑務所でのサリーに対する扱いに腹をたて、かつ労働者階級と同じ苦しみを味わうことで、サフラジェット的女性たちの団結心を強めることが狙いであった。貴族であると知られているときには、3人の医師から心臓が悪くて強制摂食に耐えられないと診断されたにもかかわらず、労働者階級の女性に変装して入獄した時には、体調が悪かったにもかかわらず、医師から心臓は異常がないと診断され、強制摂食を受けることになる。このレイディ ヒルのエピソードは他ならぬレイディ コンスタンス・リットン (Lady Constance Georgina Bulwer-Lytton, 1869-1923) の実話と重なる。レイディ ヒルはガートルード・コルモアとレイディ コンスタンス・リットンとを併せ持っており、コルモアは自分の代弁者として具現化しながらも、レイディ コンスタンス・リットンの実話を下敷きにして物語を展開している。レイディ リットンはお針子に変装してわざと闘争の際に逮捕され、刑務所で労働者階級の女性として手荒な扱いを受け、強制摂食を受ける。その自分の体験を講演で話し1910年『タイムズ』紙に書いたことから、彼女の体験はWPSUのメンバーにはよく知られていたし、この作品の執筆当時はすでにWPSUを離脱して女性自由同盟(WFL)で活躍していたコルモアも当然知っていたと考えられる。女性自由同盟も過激で戦闘的な手段をとるグループであった。コルモアはレイディ コンスタンス・リットンの実例を意図的に使用したと思われる。レイディ コンスタンス・リットン同様、コルモアには刑務所内の実態を世に知らせる意図と目的のために同じ苦しみを味わうというサフラ

ジェットの女性たちの階級を超えた絆の強さを示す意図があったと思われる。

ここにはチャリティ精神から発したものにせよ、共に闘う者同志としてチャリティの階級意識を超えた姉妹としての絆 (sisterhood) がある。

<殉教>

もう一つのテーマは殉教というテーマであり、これはサリーとレイディ ヒルによって表わされている。サリーは参政権運動のために職もボーイフレンドも失い、結局は命を落としてしまう。もちろん彼女は刑務所内で死ぬのではない。ブラック フライデイの闘争で逮捕され、刑務所であまりにも身体が衰弱したために、釈放後カールトン夫人の労働者の女性と少女のための休養ホームで回復を待っていた時、息絶えるのである。毎日見舞いに来ていたレイディ ヒルに女性参政権獲得の波が押し寄せてきているといういつも喜んで聞く話を聞いた後のことであった。刑務所でサリーのハンガーストライキと強制摂食そして虐待と死の過程はキリストの磔までの受難の過程と重ねられ、サリーの死は「殉教」のイメージで捉えられる (287)。サリーは「カエルの行進」(frog-marching) という4人の看守によって両手足を掴まれて顔を床に押し付ける形で階段や廊下を引きずられる虐待を受けた (236)。1913年6月4日エブソムダービーでジョージ5世の馬の前に飛び込み、重傷を負い、4日後に亡くなったエミリー・ワイルディング・デイヴィソン (Emily Wilding Davison, 1872-1913) は有名であるが、彼女の死は当時も現在も女性参政権獲得という大義のための殉教と捉えられる。しかし実際にサリーのように平のサフラジェットたちの中にも殉教と捉えることのできる死を迎えた女性はいた。強制摂食でチューブが肺に入り、肺炎を起こして、慌てて釈放されたものの、亡くなった女性が一人や二人でなかったことは事実である。物語ではブラック フライデイの闘争で送還された女性の最後の釈放が行われたとき、「何人かの者は仕事に戻ったが、二人は死に戻った」(288) という説明がある。その二人とはレイチェル・クラン (Rachel Cullen) とサリーである。

さらに、レイディ ヒルにおいては強制摂食の場面において、彼女の苦しみが人類の罪を背負って磔になったイエス キリストと重ねられている。強制摂食を何回か受けているある晩、外の光を反射する三枚の窓ガラスに三つの十字架の形を彼女は見て取り、その十字架の一つは罪びとのために死んでいったキリスト、もう一つは親切な罪びと、そしてもう一つは親切になることをまだ学んでいない罪びとのためのものであると感じる (259)。

In that window were three panes of clear glasses, and on them, as the light fell, there came shadows of the moulding, that looked like three crosses. They brought to Geraldine's mind the familiar scene of Calvary, and she thought, "What did they stand for?" And after the thought in the question came a thought in answer. "One for the Lord Christ who died for sinners, and one for the sinner who was kind, and one for the sinner who had not yet learnt to be kind." (258-59)

そしてそれらの十字架の後ろに刑務所や外の世界で不当な行為や不正を行なうお役人たちの顔が浮かび、「キリストが死んだのは、依然として死んでいるのは、彼らにものが解るまでこれからも死ななければならないのは、こういう人たちのためなのだ」と悟る (259)。彼女は自分が苦しむのは世の中の不正を行なう罪びとを救うためなのだと感じるのである。キリストが罪びとを救うため

に死んでいったように、自分もここで女性参政権の意味が解らない罪びとを救うためなのだと感じる。自分の苦しみを受難と捉えるのだ。すると彼らへの憎しみはあっという間に消え失せていった。この十字架のイメージを見て取ることもレイディ コンスタンス・リットンの実話からきている。レイディ コンスタンス・リットンは強制摂食の最中に光に満ちた十字架を見て、自分の苦しみを受難と捉えるのである。これらの殉教は女性の属性であり美徳である自己犠牲と重なる。

<「女らしさ」>

「女らしさ」はサフラジェットは「女らしくないか」否かについて、エディス・カーステアズ、彼女の弟モンティ (Monty)、彼女の幼馴染ロビー (Robby) によって議論され、レイディ ヒルによって具現されている。物語全体がサフラジェットは「女らしくないか」否かの議論で埋め尽くされているといっても過言ではないほど、「女らしい」、「女らしくない」の言葉が飛び交っている。その中心にあるのは穏健派のサフラジストであるエディス・カーステアズが、レイディ ヒルと知り合い、「女らしくない」と思っていたサフラジェットを是認し、サフラジェットと「女らしさ」が両立することを知る過程である。彼女はもともと男女は異なるので、女性も参政権を持つべきと考えているが (151)、サフラジェットは「女らしくない」と考えて賛成していない。その彼女が海辺でレイディ ヒルに出会い、その優雅で「女らしい」彼女がサフラジェットであることに驚き、また、彼女の話聞くことによって、サフラジェットへの偏見を解き始める。レイディ ヒルはエディスが今まで思っていたようなサフラジェット像の女性ではない。いわゆる「去勢された」(unsexed)、「女らしくなく」(unwomanly)、「ヒステリーの」(hysterical) (130) といったところが全くなく、優雅で上品である。そしてレイディ ヒルは女性参政権獲得が沖の潮のように穏やかであるときには、誰にも達成できず岸にたどり着くことはできない。しかし岸に打ち寄せる波が砕け散るように、達成させるには波は激しさを増さなければならないと話す (73)。サフラジェットの過激な戦闘活動を岸辺近くで砕け散る波に例えるのである。「攻撃性がないと何もできない？」と尋ねるエディスに対して、レイディ ヒルは「九分どおり、そう思うところがあるわ」と答える (74)。戦闘性が必要だと答えるのである。

この攻撃性こそがサフラジェットの女性たちを「女らしくない」と世間の人々に言わせる最大の理由である。エディスの友人のアガサ・ブランド (Agatha Brand) はサフラジェットに偏見を持っていて、彼女たちの戦法は「女らしさ」に対して罪を犯していることだと言う。

To my mind, these tactics, as they call the, sin against the very essentials of womanliness; and for my part, I think that womanliness of women is much greater value—greater to themselves and to the community—than the vote. (143)

また、エディスの弟モンティ (Monty) はサフラジェットになることは女性をやめることだと言う (195)。そしてパバリアチロルでブラウン夫人と名乗ったレイディ ヒルにあったモンティは彼女に大いに惹かれ、彼女をサフラジェット像に正反対の女性だと思う (193)。

For Mrs. Brown, it appeared, was very antithesis of a suffragette, or Monty's conception of a suffragette. She was charming to look at, very well turned out, but was willing, and indeed eager, to listen to a man's views on the questions of the day. (193)

彼女を「きれいであるばかりでなく、身だしなみもよく、おまけに、よい聞き手であるという最高の長所を持っている」と評価する(194)。彼女がサフラジェットのシンボルカラーである紫、白、グリーン編み物をしていても、彼女をサフラジェットの様な「去勢された男勝り」、「アンフェミニン」な生き物と結び付けることはできない(195)。彼はエディスに彼女のような穏当に男性を魅了する女性に会ってほしいと思う(208)。

しかし、ロンドンに帰った彼はブラウン夫人とある集會場で会う約束をするが、そのサフラジェットの講演会で、なんと、壇上に立ってスピーチをしたのはブラウン夫人／レイディ ヒルであった。彼はブラウン夫人がレイディ ヒルであることを知り、裏切られた思いで腹をたてながらも、優雅で女性らしい魅力に抵抗できず、最後にはサフラジェットの主義に転向する。サフラジェットが「女らしい」魅力と両立することを彼は認識するのである。

一方、エディスと幼馴染である国会議員のロビー・コルクホーン(Robbie Colquhoun)は、サフラジェットの女性とは絶対に結婚しないと宣言して憚らない男性たちがいるなか、サフラジェットの女性で結婚したい女性がいると宣言する男性である(238)。彼はアガサ・ブランドがサフラジェットが「女らしくない」と言ったとき、次のように言い、サフラジェットは普通の女性と変わらないと言う(143)。

“Of course a woman must be a woman,” he said. “If she isn’t, she’s generally a beast. At least that’s my experience. But suffragettes aren’t beasts; they’re much like any other women, expect they’ve got their backs against the wall, which makes a difference to everybody. (143)

サフラジェットも普通の女性であり、「女らしさ」に欠けるわけではない。ましてや、獣ではない。ただ、現在、彼女たちは窮地に追い込まれていて、その点が普通の女性と変わっているだけであると言う。彼にとってサフラジェットであるからといって、女性の魅力は減少しないのである。

彼はエディスのことをおもっているのに、幼馴染であるためか、相手にされない。彼女はハンサムで人当たりのよい国会議員のシビル・レイス(Cyril Race)に惹かれている。ロビーは、自由党の議員として、女性に参政権を付与することが正しいのなら、ぐずぐずせずに潔く賦与すべきと考えている。女性に闘わせるべきではないと主張する(144)。女性参政権(財産のある女性に付与する)はH. H. アスキス首相によって議會会期中に提出することが確約され、1910年の女性参政権付与を確約した調停法案(Conciliation Bill)の第一次読解及び第二読解は無事通過した(272)。ロビーの名は賛成者の最初のリストに載るが、エディスは見向きもしない。レイスの名前がないことを気にするばかりである。しかし、予算案が頓挫したことから議會の解散をアスキス首相は宣言し、総選挙に入ることになった。それ以上調停法案は議會にかけられることはなく、事実上女性参政権法案は見送られることになった。サフラジェットたちはこれをアスキスの裏切りと感じ、暴動を起こす。サフラジェットたちと警官、見物していた男性たちと乱闘が繰り返される。これがブラックフライデーの闘争である。ロビーはエディスに頼まれて、ブラックフライデーの闘争にエディスと出かけ、エディスと同様にデリケートな体つきの女性たちが次々と警官たちに殴られ傷つけられているのを見ると、怒りにかられ、彼女たちを助けたり逃がしたりし、エディスを手伝う。彼はこれらはすべて権力のある男性が権力のない女性たちの声を聞かないからだと思う(281)。そしてある公開の會合でシビル・レイス(Cyril Race)が女性参政権に反対の内容のことを言ったと

き、ロビーはシ ril・レイスの頭を殴り (285)、逮捕され、収監される。彼が後から言うには、レイスの言ったことに彼は我慢がなかったからである (285)。彼が収監されているとき、彼のことを案じたエディスは彼の魅力に気付く。そして「彼とともにあるときに幸せと自信と強さを感じることができる」と解ったエディスはロビーと結ばれる (288)。

IV

このようにこの物語において女性参政権運動は女性の特質と密接に結びついている。動機となっているのはチャリティ精神であり、その戦法、ハンガーストライキと強制摂食を受け、また命を落とすことは、女性の属性であり、かつ美德と考えられている自己犠牲である。彼女たちは大義のために自ら進んで犠牲になった。そして、闘争的な手段をとってさえ、彼女たちは「女らしく」女性として魅力的である。レイディ ヒルはモンティを惹きつけ、エディスはロビーを惹きつけ続ける。この物語をとおしてガートルード・コルモアが示すように、サフラジェット的女性たちは自分たちの行動を「女らしさ」と結びつけ、自分たちを「女らしい」と思っていたと推測できる。彼女たちにとって参政権運動は女性ならではの目的と方法の運動なのである。

引用文献

Colmore, Gertrude. *Suffragette Sally*. Toronto: Broadview Editions, 2008.

Houseman, Laurence. "What is Womanly" *Articles of Faith in the Freedom of Women*. Museum of London. *The Spectacle of Women: Imagery of the Suffrage Campaign 1907-14*. 213.

Lee, Alison. "Introduction" *Suffragette Sally*.

Linton, Eliza Lynn. *The Girl of the Period and Other Social Essays*. "vols. London: Richard Bentley & Sons, 1883, *The Spectacle of Women: Imagery of the Suffrage Campaign 1907-14*. 213.

Tickner, Lisa. *The Spectacle of Women: Imagery of the Suffrage Campaign 1907-14*. Chicago: University of Chicago Press, 1988.

Vicinus, Martha. *Independent Women*. Chicago: University of Chicago Press, 1985.

ヴィクトリア朝後期の女性用レインコートに関する考察

Women's Raincoats in Late Victorian Britain

坂井 妙子

1. はじめに

19世紀後半のイギリスでは、女性たちは様々な活動に加わり、行動範囲を広げていった。このことに最も貢献したのは、おそらくテーラードのスーツであり、スポーツ着であろう。スポーツ着の中でも、特に乗馬服のスカートには様々な改良が施され、「女性らしさ」と機能性、安全性との両立が目指された。これらについては、拙論“Conceptualizing the Riding Habit in Late Victorian and Edwardian Periods: the emergence of middle-class horsemanship in Britain”¹⁾で考察した。本稿では、女性の活動範囲の拡張に貢献したもう一つの重要な衣服として、女性用レインコート（特に乗馬用）を考察する。

雨の多いイギリスでは、防水加工された外着はアウトドア・スポーツの必需品である。マッキントッシュのゴム引きコート²⁾にはじまり、バーバリー³⁾とアクアスキュータムの防水性コート⁴⁾は、現在でもイギリスを代表する衣類と考えられている。しかし、これらの洋品店は元々、男性服を専門とし、ヴィクトリア朝期に防水性コートを開発、または、大幅に改良し、その名をイギリス国内のみならず世界中に知らしめた。では、いつ頃から女性用のレインコートは開発され、どのように「女性らしさ」を発展させたのだろうか。雑誌の記述と販売カタログから探る。

2. 女性用レインコートの開発

テイラーによると、早くも1860年代には女性用の防水服が存在したと言う⁵⁾。同様の指摘はアドバーガムもしており、ロンドンにあったマントの卸売店、セリンコート・アンド・コールマンの「防水クロークのための新しいデザインブック」を著書の中で紹介している。このカタログの中では、生地は「無地、ツイード、またはチェック」としか記されていないので、特殊な生地というよりも、織りが細かいという意味で防水効果があったのだろう。値段は、「防水チェック」と名付けられたフード付きのクロークが52インチ丈で19シリング6ペンス、56インチ丈のものは21シリング6ペンスだった⁶⁾。その後、1870年代になると、特許を取得した商品も多数現れ⁷⁾、質素なミドルクラスを対象読者にした雑誌、『イングリッシュウーマンズ・ドメスティック・マガジン』の連載小説にさえ、防水コートが登場するようになる⁸⁾。同誌の新商品を紹介するコラムでは、様々な生地屋が防水コートの開発に取り組んだことも伝えている。例えば、1870年代末には、通気性を確保することで、従来のマッキントッシュでもたらされる「不健康な結果」を回避する「ヴェンティラトリウム」(Ventilatorium)⁹⁾や、「もっとも繊細でシルクのようなアルパカに似た」生地のできた防水性コート「センパーセッコ」(SEMPRE SECCO)¹⁰⁾が紹介された。マッキントッシュのゴム引きコートは1820年代から存在し、防水に優れるが、通気性が悪いために蒸れて、不健康とされた。加えて、ゴムは肌触りが悪く、高温ではベタベタし、低温では固まってしまうという欠点もあった。それを「ヴェンティラトリウム」や、「繊細でシルクのような」風合いの「センパーセッコ」が補うという

**THE NEW LADIES' COVERT COAT
AND REGISTERED APRON,**

Designed for wearing over the habit in bad weather. The Apron fits closely over the knee, and forms with the Covert Coat a perfect protection from the rain. When not in use they pack up into a small case for attachment to the saddle.

図1 「登録エプロン」の広告(1884年)

趣向である。前者は「通風」の意、後者は「常に乾いた」の意をラテン語風に表記することで、学識に元づいて開発された格調高い製品であることをアピールしている。さらに、「シルクのような」風合いであることを強調することで、実用性のみならず、ファッション性を重視した商品であることを示している。

参考までに付け加えれば、先に挙げたイギリスを代表する洋品店が女性服や女性用防水コートを手がけるようになったのはかなり遅い。バーバリーが女性用スーツの広告をファッション誌に掲載したのは、第一次世界大戦中であるし¹¹⁾、女性用乗馬服(防水)がアクアスキュータムのカタログに現れたのは、さらにその後だった¹²⁾。女性用のマッキントッシュがバラエティー豊かになったのも、1880年代以降である¹³⁾。

注目すべきは、ミドルクラスの女性の間で乗馬が流行するようになると、乗馬専用のレインコートが開発されたことである。乗馬服は通常、ウールでできているため、ある程度は雨よけになる。その上にわざわざ羽織るレインコートとは、どのようなものだろうか。また、なぜ必要だったのか? 図1は、1884年に雑誌『クイーン』に掲載された乗馬用防水性「登録エプロン」¹⁴⁾の広告である。無名の洋品店から発売された。説明書きによると、「悪天候時に乗馬服の上から着用するため」のもので、「膝にぴったりフィットし」、「カバート・コート」とともに着用すれば「雨を完全に防ぐ」。使用しないときは、「小さなケースに入れて、サドルにつける」という。「カバート・コート」とは、カバート・クロス(同色で色の濃さが異なる2種類の糸であや織りにした、ややまだらがかった目の詰まった丈夫な生地)でできたコートで、乗馬や狩の時に着用する。「登録エプロン」は使用しない時にはコンパクトに折りたためるようなので、素材はゴムではないだろう。しかし、雨を防ぐためには、「カバート・コート」だけで十分であろうに、なぜ「膝にぴったりフィット」する「登録エプロン」が必要なのだろうか。

これには、女性用の鞍の改良が関係したと思われる。当時、女性は馬に跨がらずに、横乗りをした。そのために女性専用の鞍(サイド・サドル)が存在した。世紀半ばごろ、この鞍に三つ目のボンメルがつき、安定した横乗りが実現する。改良された鞍は1860年代までには一般的になり、女性が安全にギャロップしたり、ジャンプしたりできるようになったという¹⁵⁾。つまり、女性も本格的に乗馬を楽しむことができるようになったのだ。一方、ボンメルが一つ余分についた鞍では、従来のスカートでは危険、かつ、見苦しかった。従来のスカートとは、乗馬時にも足が見えないように、数ヤード長く仕立てられたもので、裾をうまくつまみあげたまま乗馬する必要があった。新しい鞍では、右膝を三つ目のボンメルに掛けて乗るため、曲げた膝にフィットするように袋状の突起を前スカートの膝付近につける必要が生じ、スカートの形が非常に複雑になった¹⁶⁾。そうすることで、

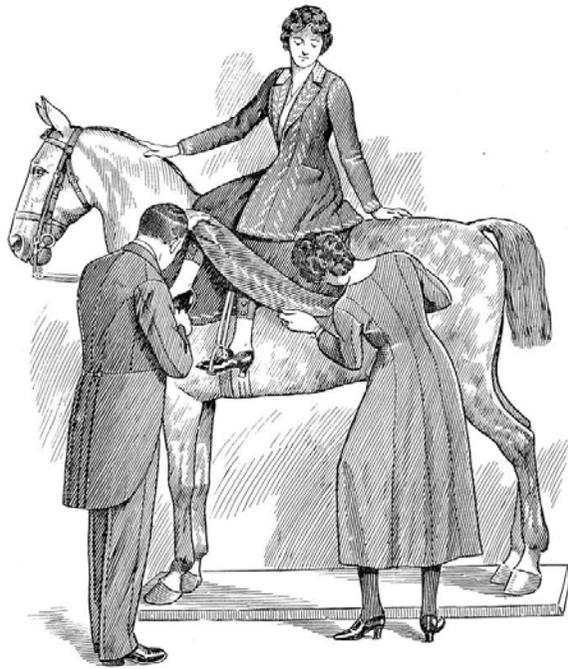


図2 改良された乗馬用スカートの裾線を揃える (1920年ごろ)

乗馬時にスカートの裾線が乱れないのである (図2)。その後も、安全面と美的な改良がスカートに施されるが、袋状の突起はキュロット・スカートが現れる1900年代まで残った。

「登録エプロン」はこの袋状の突起に「ぴったりフィット」させることで、改良された乗馬服が実現した実用の美—乗馬時にスカートの裾線が乱れず、万一落馬した時にはスカートが馬に引っかかる危険を回避できる—を強化したと考えられる。「エプロン」という名前自体、改良された乗馬用スカートを強く連想させる。「登録エプロン」が広告されたのと時を同じくして、「エプロン・スカート」と呼ばれる乗馬用スカート (袋状の突起あり) が開発されたからである。これはスカートの後ろ側が開いていることから、その名がつけられた。乗馬したときには、スカートの右側が脚を包むように通るために、反対側から見ると、スカートのように見える。下馬したときには、開いた右スカート後ろ部分を左側とボタン留めする仕組みだった。「登録エプロン」は、このエプロン・スカートに対応した雨具であり、悪天候の乗馬でも、「膝にぴったりフィット」することで、下に着用したエプロン・スカートを美しくさばき、雨に濡れずに女性らしい所作の洗練を図ったのである。

この種のエプロン型乗馬用レインコートは、急ピッチで開発が進んだようだ。翌年には、ロンドンのウエストエンド、コンデユイト・ストリートに店を構えるベンジャミン・アンド・サンズ商会も、乗馬用防水エプロン「ノーパ」(Norpa) を発売したからである。紹介文によると、以下のような画期的な商品である。

乗馬とトライサイクルのための防水性エプロンで、公衆の関心を引くに価する唯一の衣類です。着用者を危険にさらさず、激しい雨から足を完全に守り、乾いたままにしておくのです。

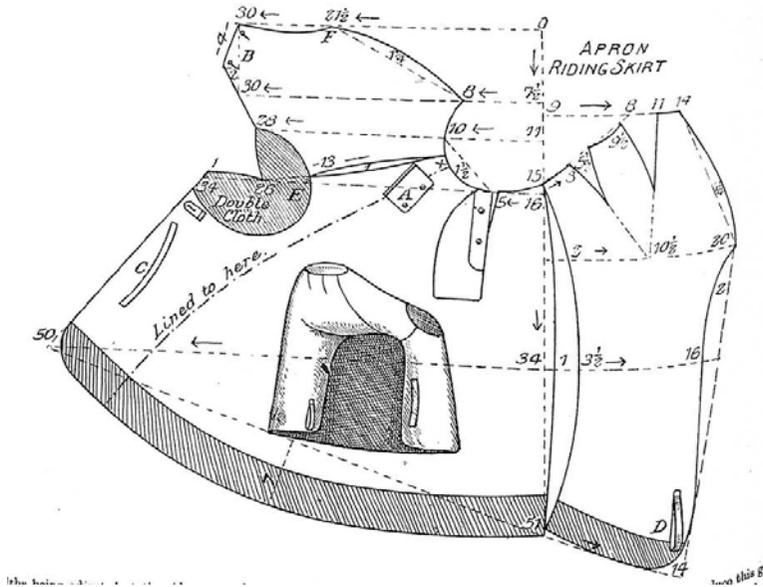


図3 エプロン・スカートの型紙 (1903年)

このエプロンは全く新しい原理で製作され、エプロンについたスプリングのフックによって、サドルの前の外側にしっかり固定します。それゆえ、強い風でも乱れず、中に雨水が入ることもありません。三つの「自動リリースフック」によって着用者のウエストにつけ、中央のフックは乗馬服の前ボタンに容易につけることができ、両端のボタンは後ろにつけます。これらのフックは体が通常の乗馬位置から逸れると、すぐに外れ、それゆえ、事故の場合には、乗馬者を自由にします。使用しない時は、ノーパはバンドとボタンできっちりたたみ、サドルの前につけても一向に見苦しくありません¹⁷⁾。

ノーパというネーミングは、apron を逆さ読みにしただけなので、ラテン語風の「ヴェンティラトリウム」や「センパーセッコ」よりも稚拙である。しかし、先の「登録エプロン」と比較すると、乗馬だけでなく自転車（トライサイクル）でも着用できるので汎用性があり、複数のフックがついている点で、安全面の向上が見られる。フックやボタン、ゴム紐などは「エプロン・スカート」にも見られる工夫であり（図3）、「ノーパ」がこれに対応していることを示す。また、使用しない時の見栄えの良さにも配慮が見られ、洗練された乗馬服の一部を構成しているようだ。これに類似した商品の広告、および、紹介はファッション誌に多く見られる。

総じて、乗馬用レインコートは、様々な工夫を伴う実用的なディテールを強調することで、雨天時に乗馬をするイギリス人女性の身体の安全と、ファッション性、馬上での慎みを確保したと言えよう。

3. レインコートの需要と女性らしさ

では、このような乗馬用のレインコートの需要はどの程度あったのだろうか。19世紀後半のイギリスでは、中産階級の女性を中心に大いにもてはやされたと考えられる。世紀半ば以降、乗馬は都市に住む中産階級の女性の娯楽と教養と見なされるようになったからである。詳しくは、冒頭に挙

げた拙論を参照いただきたいが、世紀末までには、乗馬の基礎をマスターするために必要な時間と費用を記す家政本まで現れ¹⁸⁾、女性の乗馬は大衆化した。

だが、乗馬が中産階級の女性の間で普及する際に、「教養」が重視された点は強調しておきたい。このことは、女性初心者向けのハンドブックの記述に明らかである。レディー・グレヴィルは、著書『レディー・イン・ザ・フィールド』（1894年）の中で、乗馬は「気性、士気、食欲を向上させ、精神から黒い影と病的な空想を取り払う」効果があると説く。そして、馬術を「技を隠す優美さであり、自制、落ち着き、乗っている馬を完璧に知ること」¹⁹⁾と主張する。クラークも同様に、乗馬を「エレガントな科学」と評し、目指すべき乗り手を次のように定義した。

どんなペースであれ、馬にきちんと座り、しっかり、だが優しく、その落ち着きのないクルベットを御し、急ぎ足の馬を恐れることなく、しかし、エレガントに統御し、しっかりした手さばきでも軽快に着実に、しかし、優美に鞍に腰を落ち着け、バランスを楽々と、気にも留めない風にとり、馬を完全に服従させ、あたかも共通の知性が吹き込まれているかのように、乗り手の心は馬の気質と競い合い、勇気と優しさが結合し、優美さを犠牲にすることなく、活力を費やす。これが淑女にふさわしく、洗練されたホースウーマンの真の属性です²⁰⁾。

つまり、乗馬は気高い大型の動物を扱う「技」と、自己の肉体と精神の修養を合わせた芸術であり、それゆえ、レディーの教養 (accomplishments) と考えられたのである。このために、本物のレディーを目指す中産階級の女性たちが真剣に取り組んだのであり、乗馬用スカートが幾重にも改良され、安全性、機能性の向上と美しい所作の実現の両方を目指したのだ。乗馬用レインコートは、乗馬服が実現した活動的で優雅な女性らしさを、いかなる天候／条件でも可能にした点で注目に値する。

4. まとめ

レインコートの現存例は極めて少なく、2015年度から17年度末までの研究期間中に19世紀に制作された女性用を見つけることはできなかった。同様に、乗馬用レインコートの現存例も見つからない。これは女性用乗馬服の現存例が非常に多いこと²¹⁾とは対照的である。したがって、直接の証拠となる資料は雑誌の記述のみだが、2016年度に行った女性用乗馬服の研究と合わせて考察することで、今まで「女性らしさ」と関連づけて論じられることがなかったレインコートの新たな側面を明らかにすることができたと考える。総合研究所からの研究費のご援助に深く御礼申し上げる。

図版出所一覧

図1 “Advertisements”, *The Queen*, Jun. 28, 1884, n.p.

図2 W. D. F. Vincent, *The Cutters' Practical Guide to the Cutting and Making of all kinds of trousers, breeches and knickers* (The John Williamson Co. Ltd., c 1920), p. 29.

図3 *The Tailor and Cutter*, Jul. 3, 1903, p. 407.

引用

- 1) Taeko Sakai, “Conceptualizing the Riding Habit in Late Victorian and Edwardian Periods: the emergence of middle-class horsemanship in Britain,” *Journal of Home Economics of Japan*. vol. 67.

- 2016, pp. 9-17.
- 2) マッキントッシュに関しては、以下参照。Nick Foulkes, *The Trench Book* (Assouline, 2007). Sarah Levitt, “Manchester Mackintoshes: A History of the Rubberized Garment Trade in Manchester,” *Textile History*, vol. 17, 1986, pp. 51-69.
 - 3) バーバリーに関しては以下参照。Jane Tynan, “Military Dress and Men’s Outdoor Leisurewear: Burberry’s Trench Coat in First World War Britain,” *Journal of Design History*, vol. 24, 2011, p. 144. Nick Foulkes, *The Trench Book* (Assouline, 2007). Hywel Davies, *British Fashion Designers* (ブルース・インターアクション、2010).
 - 4) アクアスキュータムに関しては、以下参照。Patrick Cambell, *The Aquascutum Story* (1976). *Coat Bible* (Gritzdesign, 2014). 林勝太郎『プリティッシュ・スタイル』(平凡社1984年)。
 - 5) Lou Taylor, “Wool cloth and gender: the use of woollen cloth in women’s dress in Britain, 1865-85”, Amy de la Haya and Elizabeth Wilson eds., *Defining Dress* (Manchester U.P., 1999), p. 31.
 - 6) Alison Adburgham, *Shops and Shopping 1800-1914* (London: George Allen and Unwin Ltd., 1964), pp. 85, 124.
 - 7) Sarah Levitt, *Victorian Unbuttoned* (London: George Allen & Unwin, 1986), p. 190.
 - 8) “Christian Hazell’s Married Life”, *The Englishwoman’s Domestic Magazine*, (May 1878), p. 236. (Jun. 1878), p. 126.
 - 9) “Flittings”, *The Englishwoman’s Domestic Magazine*, (Sept. 1878), p. 146.
 - 10) “Flittings”, *The Englishwoman’s Domestic Magazine*, (Mar. 1879), p. 150.
 - 11) “Advertisements”, *The Queen*, (Mar. 17, 1917), n.p.
 - 12) *Coat Bible*, op. cit., p. 93.
 - 13) Levitte, *Textile History*, op. cit., p. 58.
 - 14) “Advertisements”, *The Queen*, (Jun. 28, 1884), n.p.
 - 15) Anne Grimshaw, *The Horse* (The Library Association. 1982), p. 15.
 - 16) Phillis Cunnington and Alan Mansfield, *English Costume for Sports and Outdoor Recreation* (Adam & Charles Black, 1969), pp. 119-120.
 - 17) “Round the Shops”, *The Lady’s Gazette of Fashion*, vol. 2. (1885), p. 146.
 - 18) *Cassell’s Books of the Household*, special edition. (London, 1890), p. 46.
 - 19) Lady Greville, *Ladies in the Field* (Ward & Downey, 1894), pp. 3, 5.
 - 20) Mrs. J. S. Clarke, *The Habit and the Horse* (Smith Elder, 1857), p. 3.
 - 21) Victoria and Albert Museumのほか、Fashion Museum (Bath), Walker Art Gallery (Liverpool), Gallery of Costume (Manchester) などにも現存例は豊富にある。

廣岡淺子の洋装にみる女性の生き方

Asako Hirooka's Western Clothes and Her Way of Life

佐々井 啓

1. 日本の洋風文化の導入と洋装

文明開化の主要な目的の一つに洋風文化の導入がある。とりわけ洋装は外見から欧米に近づく手段として、皇族・華族から洋装化が推進されたが、一般庶民にはほとんど影響がなかった。

当時の参議伊藤博文は女子の服制改革を推進する立場をとり、男子の洋装化に伴った女子服の洋装化を目指した。実際には皇后や女官たちは伝統的な桂袴を着装していたが、明治17(1884)年9月、11月には宮内省から勅任官、奉任官夫人には西洋服の着装が認められることとなった。このような状況において明治18(1885)年11月の鹿鳴館の夜会では、当時のヨーロッパのドレスに身をまとった婦人たちが多く参加していたという。当時のドレスは後ろ腰に詰め物をしてスカートを膨らませたバussル・スタイルであった(図1)¹⁾。

明治19(1886)年6月には皇后の西洋服用及び皇族、大臣以下の夫人たちにも儀式的折の西洋服用を認める内容が公布され、女子の服装として大礼服、中礼服、小礼服、通常礼服が制定された。大礼服は新年の拝賀、宮中諸儀に用い、マント・ド・クールというトレーンを曳き、袖なしまたは短い袖のドレスである。中礼服・小礼服は参賀や夜会晩餐に用いるローブ・デコルテで、襟を大きく開けて曳き裾のないドレスである。通常礼服は拝謁や饗宴に用いられるローブ・モンタントであり、長袖で襟は詰まっている形のドレスである。皇后は同年7月に華族女学校行啓の折に初めて洋服を着用したという。

明治20(1887)年の新年朝拝には、皇后が大礼服を着装され、「婦女服制のことに付て皇后陛下思食書」が出されて西洋服の利点が述べられたため、以後、華族の夫人たちも洋服の着用がみられるようになった。

当時の夫人たちの写真をみていこう。鍋島直大夫人(図2)、伊藤博文夫人と令嬢(図3)、井上馨夫人(図4)など、鹿鳴館の舞踏会に参加している当時の上流階級の夫人・令嬢である。それぞ



図1a バussル・スタイルのドレス



図1b 明治の舞踏会 明治21年



図2 鍋島直大夫人



図3 伊藤博文夫人と令嬢



図4 井上馨夫人



図5 新島襄夫人八重 明治21年



図6 平塚光沢 明治21年頃



図7 大隈重信夫人 明治40年

れバスル・スタイルのドレスの特徴がみられる。また同志社大学創立者新島襄夫人八重の写真(明治21(1888)年)には、鍋島夫人と同様のデザインのドレスがみられる(図5)。さらに平塚らいてうの母光沢は、当時のバスル・スタイルのドレスを着ており(明治21(1888)年ごろ)(図6)、らいてうと姉は当時ではまだ珍しかったお揃いのワンピースを着ていることがわかる。いっぽう、明治40(1907)年の大隈重信夫人はアール・ヌーボー調のドレスを用いており、欧米の女性のドレスの流行がきちんと伝えられていることが明らかである(図7)。

2. 女子学生の洋装化

明治19(1886)年4月には文部大臣森有礼が女子学生の運動に適した洋服の着用を認めることとした。また、それに先立って全国の師範学校女子部で明治18(1885)年に洋服が取り入れられるようになった。図8は明治19(1886)年7月の東京高等師範学校女子部の卒業写真である。ここではジャケットとスカートからなるバスル・スタイルの衣服の胸もとにリボンをつけ、帽子、靴が組み合わされている。スカートはオーバースカートがたくし上げられている点が特徴である。

一方、華族女学校では明治18(1885)年に洋服着用が認められたが(図9)、明治23(1890)年



図8 東京高等師範学校女子部
明治19年



図9 華族女学校 明治18年



図10 女学生 明治39年

には儀式の折にも和服着用が認められ、洋服は姿を消す²⁾。

このように華族女学校が和服に戻ったことによって一時的に洋装が下火となったが、和洋折衷による洋風文化の摂取がなされるようになった。とりわけ日本各地に設置された女学校では、きものに女袴をあわせたスタイルが流行する。袴にはカシミアやウールといった洋風の素材を用いたり、草履ではなく靴を履いたり、洋風の傘とショール、手袋、ブローチやペンダント、指輪といったアクセサリーが組みあわされたりした女学生スタイルが一世を風靡した(図10)。

また、従来の日本髪では洋服に合わないということと、結髪の簡素化のために束髪が考案され、明治18(1885)年には「婦人束髪会」が結成されたのである。束髪は結髪が簡単であり、衛生的であることなどから徐々に広まっていくが、全体としてはそれほど多くはなかった。しかし、前述の女学生にはリボンをつける髪型などがみられるようになり、和洋折衷の独特のスタイルが完成した³⁾。

3. 改良服の登場

洋服着用が試みられている一方、当時の洋装の問題点が指摘されて和装の不便さを補う改良服の発案がさまざまな形でなされてくる。当時の洋装は日本人女性には着こなせないということと、洋服を仕立てることは費用がかかることなどがあげられ、和服を改良して用いる服装改良の提案がなされてくる。束髪の発案はいち早く取り入れられ、リボンや生花などを飾ることも流行した。また改良服には上下二部式の形が多く、上衣は腰丈にして袖は袂のある形と筒袖にしたものがある。下半身にはスカート状の女袴の下にズボン状の下衣をつけるものが多い。これらは活動的であると同時に裾が乱れず、女子学生には適したものとして積極的に取り入れた女学校や専門学校もある。『女学世界』には明治35(1902)年4月に和裁の技術と和服の反物を用いた女学生の改良服が掲載されている(図11)。ほぼ和裁の知識で作成できる形であるが、袖は洋服の形となっていることがわかる⁴⁾。

日本女子大学校でも改良服の提案がなされ、明治39(1906)年1月の『家庭週報』には長井長義博士の評として服装改良について詳しく記されている⁵⁾。

改良服、たとへ拙なりと雖、真面目に研究した結果なるを喜ぶ。もし全然失敗のものたりと



図11 改良服
『女学世界』明治35年



図12 改良服
『家庭週報』明治39年



図13 バスケットボール 明治37年

も、服装改良に実行の端緒を開きたるを喜ぶなり。

ここには井上秀、手塚かねほか1名の教員が改良服を着た写真が掲載されている。それによれば、上衣の衿付けや打ち合わせは和服の構成と同じであるが、肩にタックが入り、袖にはギャザーがとってある。スカートは後ろ中心に二重のボックスプリーツが入り、左右にもプリーツがとられている。「スマート嬢の協力により考案」と説明があり、改良服のなかでは洗練されたものであると思われる(図12)。次いで改良下着として「カンピネーションスート」「アンダーウエスト」「ブルーマー」「ペティコート」が提案され、洋服に適した下着が必要であることが述べられている。

このような状況を日本女子大学卒業生の永島信子は次のように述べている⁶⁾。

男子は洋服制度にて服装上の問題は解決せられましたけれ共、婦人児童にはその勢及ばず、痛切に衣服改良の声が叫ばれました。何分洋装といえば雲の上人か乃至は家庭生活以外の職業婦人かの服装とみなされ、中堅主婦階級の之に赴くこと其実容易でないもので有りました。然るに高等女学校教育の大凡所行き亘りました日露戦後の頃より、従来の伝統にとらはれざる智識婦人は和服の上下一連、其の長き袖、其の大なる帯、細き裾まわしに意外の費用のかゝる点などをあげて其の不合理的を攻撃してあます所なく、明日にも其衣服改良の実をあげ得る如く、或は新案された改良衣服を提出するに至らしめたもので有ります。其の急先鋒は日本女子大学家政本科部長の井上秀子女史などが其の一人で有りました。

ここでは世間一般の衣服改良についての見方を読み取ることができ、また、日本女子大学校では衣服改良に積極的に取り組んでいたことが示されている。

さらに名物であった運動会には、いろいろな演技に洋風の衣装が用いられた。明治37(1904)年10月の『家庭週報』には次のような記事がある⁷⁾。

なほ我校運動会は単に体育の一斑を公にするに止まらず、之を機として学び、之を機として改むる事なきにあらざるなり。(中略) 更らに運動を最も便ならしめむが為、いささか

にても衣服の改良に資せん事を計る。(中略)なほ華美に流れ驕奢に走るを戒めんが為め、其の色合を撰び、其の服装を調ふ。一見、華美、なるが如くとも、経済を脱したる事は決して許さざるべく、たゞ趣向、努力を盡したる結果と見るをうべきなり。

成瀬校長の批評では、「服装に於ても、美術的、経済的、衛生的の考へ自然にあらはれたり。(中略)バスケットボールの扮装等、昨年比すれば、更らに一步をすゝめたりといふべし。」とあり、大学において服装改良の実践がなされていたことがわかる。

バスケットボールのユニホームは、「軽快なる水兵形の運動服に、襟と腕飾とに紅と白との布をつけて、両軍の区別とす」とある。当時の女子学生の通学服が着物に袴であったことから考えると運動に適した洋服となっており、以後の女子学生の服装に影響を与えるものであるといえよう⁸⁾(図13)。

4. 浅子の洋装

ここでは廣岡浅子の写真から装いの変遷を辿ってみたい。

まず、最も古い写真には、和装の浅子の姿が見られる(図14)。そのほかにも和装の写真はあるが、公的な場での和装は明治37(1904)年の日本女子大学校卒業式の写真にみられるが、その後の写真



図14 浅子和装



図15 浅子バツスル・スタイル



図16 明治38年 新校舎建設現場



図17 浅子 ブラウスとスカート



図18 明治43年 軽井沢三泉寮



図19 明治39年 三泉寮

では浅子はほとんどが洋装である。

浅子の最初の洋装の写真はバスル・スタイルのドレスを着装している（図15）。これは、新島八重や平塚光沢の写真とよく似ているため、明治21（1888）年頃ではないかと推察される。その後、後出の『婦女新聞』の浅子の言葉によると、明治35年ごろから洋装をするようになったとあり、明治38（1905）年4月の卒業写真や8月の新校舎建設現場の写真ではブラウスとスカートの姿がみられる（図16）。これは図17の肖像写真と同じようであり、図18の明治43（1910）年の軽井沢三泉寮の写真にもみられる。また、明治39（1906）年の軽井沢三泉寮開寮式兼閉寮式では、テニスのラケットを持って白っぽいドレスを着装している姿がみられ（図19）、帽子の色は異なっているが、同様のドレスが明治40（1907）年の三泉寮の写真にもみられる（図20）。

図21はボレロ風の短い上衣を羽織ったドレスで、アクセントに上衣の縁取りとスカートの前裾に刺繍らしい技法で装飾がなされている。明治43（1910）年の三泉寮でも同じ服装をしていることがわかる（図22）。図23は、やや濃い色のドレスのウェストには幅の広いベルトがあり、フレンチスリーブの上衣の上にベルトを締めているようにみられる。これも明治43（1910）年の三泉寮の写真にみられるものである（図24）。図25のドレスは衿ぐりにレースをあしらったもので、袖やスカートにはタックやフリル状の装飾がみられる。これは同年の写真（図26）にみられ、以上のドレスは夏の装いとして少なくとも明治43（1910）年には着装されていたといえる。このドレスは明治40



図20 明治40年 三泉寮



図21 浅子 ボレロ風の上着とドレス



図22 明治43年 三泉寮



図23 浅子 濃い色のドレス



図24 明治43年 三泉寮



図25 浅子 白いドレス



図26 明治43年 三泉寮



図27 明治42年卒業写真



図28 明治43年創立記念日



図29 浅子 濃い色のドレス
明治42年頃



図30 浅子 レースの衿
のついたドレス



図31 浅子
テーラード・スーツ



図32 浅子
アール・ヌーボー風ドレス



図33 大正2年 YMCAで
ストレートなデザインの
ドレス

(1907)年の大隈重信夫人のドレスと似ており、アール・ヌーボー調が終わるころのヨーロッパの流行であるといえよう。

また、明治42(1909)年の卒業式(図27)、明治43(1910)年の創立記念日の写真(図28)では、

形ははっきりしないが濃い色のドレスを着装している姿がみられる。図29は前面にレースのついた短い袖の濃い色のドレスであり、おそらく夏用のものだろうと思われる。しかし、明治42（1909）年12月の『婦女新聞』の記事にこの写真が用いられている。図30は、図29とよく似たデザインであり、大きなレースのヨーク状の衿が付き、袖には肘からレースのフリルが付けられている。

図31は、年代はわからないが浅子が机で読書をしている写真である。テーラード・スーツにブラウスを着ているように見える。他のドレスが当時の盛装に近いものであるのに対して、テーラード・スーツは実用的な仕事用の衣服であることから、このスーツを着装している公的な場での浅子の写真は現在では見出せなかった。図32はデザイン的には明治30年代後半のオール・ヌーボー風ドレスではないかと思われる。また図33は大正2（1913）年のYMCAの会合での写真である。1910年代には、ストレートなデザインのドレスが欧米の流行になることから、浅子の衣裳もこれまでとは異なるドレスであるといえよう。

5. 浅子の洋装についての考え

『婦女新聞』明治42年12月17日号に、「眞我を知りて婦人自ら立て（二）」と題した記事に、浅子の洋装についての考えが述べられている⁹⁾。

此の三大要素は眞我を悟る要素である。此の眞我を悟る為めに、私の経験を極く平たく、お話してみたいと思います。さて、私は、七年前から常に洋服を着けて居りますので、他人から見ると、老人の癖にハイカラを気取って、洋装をして居ると云ふ風に批評されますが、之れには私の主義があるのです。元来日本服を着けて端座する時は自然不規則になり勝であって、寒さが来れば、火桶に離れ難く、自ら立ち居が不活発となり、暑中は又浴衣着の儘、手には団扇を離さず、動ともすれば横臥したり、甚しきは昼寝に耽り、些細な事でも自分の手足を動かさず、手を叩いて他人を煩わすの弊に陥るのです。

この如き悪習慣は、生理上に於いては非常に健康を害するのみならず、精神上に於いては奮闘力を失ひ、四圍の誘惑に陥り易き弊を生み出すのである。それに反して洋装は生理上に於いても、運動自由なるが為に自ら健康を増進し、老いて益々壮んらしむるのである。又、精神上に於いても秩序正しく克己心を増すの効果がある。私は漫りに西洋風を真似るのではない。偶々晩餐会に西洋人と共に招かるゝ時に於いても、私は詰襟の相當なる衣服を着けて出るのを常として居る。然るに或る人は、そんな衣服は失礼では無いかと往々注意をされた事があるけれども、私は決してかまわぬと思います。西洋の礼儀は胸を半分現はすのであるけれども西洋に於いて礼儀となす半裸体は吾々日本人の目には決して快くはない。私は反って野蛮時代に退化するの感じがするのです。それ故私は、失礼でない範囲内の詰襟で、いつでも平気で同席するのです。かういふ事は些細な様であるけれども、是れ即ち自己を認める眞我である。

仮令、西洋人が如何に着飾るとも、又他人が如何に批評すると、自己が善しと認むる主義を以て一貫せねばならぬと思ふ。他人を標準として行動する人は、世の毀誉褒貶に陥って昨日は東、今日は西に、明日は又東へ戻り、終に其の行くべき方向を失ひ、価値なき生涯に終わるのである。是れ眞我を認めざる弊であると云わねばならぬ。故に吾人は此の宿弊を、一時も早く打破して眞我を認めねばならぬ。一旦自己が善也と確信したる事は、仮令百万の敵が前に立ち塞がるとも、断じて猛進するだけの自信と、勇気とが出来なければ、此の貧しき日本国を背負うて、世界列強の競争場裡に馳駆する事は出来ません。故に人として、国民として、女子と

して、この義務を覚醒する事は第一の急務と考えるのであります。(後略)

ここでは、七年前から常に洋服を着けていること、他人から見ると、老人の癖にハイカラを気取っていると批評されていること、しかし自分の主義で用いていることが述べられている。すなわち、日本服は自然不規則になり勝であり、寒い時には火鉢から離れず、立ち居が不活発となり、暑い時には浴衣着のまま、団扇を離さずに横臥したり、昼寝したりしてしまう、という。しかし、洋装は生理上にも、運動が自由であるために健康を増進するし、精神上にも秩序正しく克己心を増す効果がある、といい、いたずらに西洋風を真似るのではないことを述べている。すなわち、晩餐会の夜会服のような胸や腕をむき出しにするデザインは日本人にはふさわしくない、とし、衿の詰まった、袖の長いドレスを常に用いて、「自己が善しと認むる主義を以て一貫せねばならぬと思ふ。」ともいう。

このように、浅子は洋装を取り入れることを例としながら、自己を基準として善悪を見極めることが「人として、国民として、女子として」の義務であるという考えを述べているのである。

6. おわりに

浅子は洋装の実用性に着目し、生理上、精神上的の効果を十分に知り、自己が良いと判断して洋装を用いていたことが明らかとなった。浅子は他人にどう批評されようとも、よいと自ら判断したことは貫いていたことを示している。

浅子は伝統的な和装を時として用いてはいるが、洋装は浅子にとって、自らの生き方を示す手段であったのではないかと考えられる。しかし、浅子は単に新しい装いに飛びついたわけではなく和装と洋装との比較を冷静に行い、従来の慣習にとらわれない判断をして洋装を取り入れていたのである。浅子は、洋装の導入について他国の文化を取り入れる場合の基本的な考えとなるべき、という見解を示している。

以上のように、浅子は実業家としての活動を行う上で洋装は健康的、行動的であると考えていることが確認できた。洋装は上流階級のものだけでなく、女性教員や女子学生など、働く女性やスポーツをする女性たちに広まっていった。一時的に着用の機会を狭めたのであるが、洋装は社会で活躍する女性の表象としてしだいに女性たちに用いられるようになっていった。浅子の洋装には女性たち自らが生き方を選んでいくべき、という思いが込められていたといえるのではないだろうか。

註

- 1) 刑部芳則『洋服・散髪・脱刀一服制の明治維新』(講談社、2010年)、168-184頁。
なお、刑部芳則「鹿鳴館時代の女子華族と洋装化」『風俗史学』37号(2007年)、2-27頁も参照した。
- 2) 前掲書、183-184頁、195-198頁。
- 3) 前掲書、184-6頁。
- 4) 『女学世界』第2巻5号、明治35年4月5日。
- 5) 『家庭週報』48号、明治39年1月27日。
- 6) 永島信子『日本衣服史』(芸艸堂、昭和49年)684-5頁。
- 7) 『家庭週報』号外、明治37年10月22日。
- 8) 『家庭週報』10号、明治37年11月3日。
- 9) 廣岡浅子「真我を知りて婦人自ら立て(二)」、『婦女新聞』501号、明治42年12月17日。

図版出典

遠藤武・石山彰『写真に見る日本洋装史』（文化出版局、1980年）。

小西四郎ほか編『日本学生の歴史』（講談社、1970年）。

中山千代『日本婦人洋装史』（吉川弘文館、1987年）。

『広岡浅子徹底ガイド』（主婦と生活社、2015年）。

『新島八重』（同志社女子大学、2013年）。

『廣岡浅子関係資料目録』（日本女子大学成瀬記念館、2016年）。

『女学世界』明治35年、明治39年。

イギリスの日本風演劇の舞台衣裳にみる女性らしさ

Femininity in Stage Costumes in British Plays Featuring Japan

米今 由希子

I. はじめに

19世紀末から20世紀にかけて、西欧では日本を題材とした作品が次々に発表され、そのうちのいくつかは演劇として上演され人気を博していた。イギリスでは1885年にコミック・オペラ『ミカド』が初演され、96年に『ゲイシャ』が初演される。フランスでは87年にピエール・ロチが『お菊さん』を発表し、93年にオペラとしてパリ公演がなされている¹⁾。そこでイギリスの日本風演劇の舞台衣裳にみる女性らしさを解明するために、『ミカド』と『ゲイシャ』をとりあげ、資料として台本、オペラの歌詞の他、新聞・雑誌に掲載された紹介記事、挿絵、およびビクトリア・アンド・アルバート博物館に所蔵されている写真を用いて、舞台衣裳の実態を明らかにし、舞台上で演じられる女性と衣裳の関わりから女性らしさについて考察した²⁾。

II. 『ミカド』の舞台衣裳にみる女性らしさ

1. 『ミカド』について

『ミカド』は劇作家ギルバートが脚本を書き、サリヴァンが音楽を作曲したコミックオペラで、1885年3月14日にロンドンのサヴォイ劇場で初演された。この脚本と音楽の組み合わせは、「ギルバート・アンド・サリヴァン」と通称されるほど人気を誇っており、その中でも『ミカド』は初演当初から人気を博し、初演時から672日間に渡って上演されている³⁾。

舞台は日本の「ティティブ」という架空の村の設定で、主な登場人物としては、ミカド、ミカドの息子だが身分を偽り放浪の吟遊詩人を装っているナンキ・プー、ティティブの最高執政官ココ、ココが後見人を務める三人娘のヤム・ヤム、ピッティ・シン、ピープ・ポー、ナンキ・プーの婚約者でナンキ・プーをミカドと探しているカティシャが挙げられる。

2. 『ミカド』の舞台衣裳

『ミカド』についての記事は『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』、『レディズ・ピクトリアル』、『イラストレイテッド・スポーティング・アンド・ドラマティック・ニューズ』にみられた⁴⁾。また、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館にも当時の写真が残されている。ここでは女性の登場人物である三人娘とカティシャの舞台衣裳について述べる。

①三人娘

『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』では、「学校帰りの三人の乙女」と紹介され、中央にヤム・ヤムが描かれている。三人ともキモノを身に纏っており、ヤム・ヤムは松の枝の様な柄で、左の娘は御所解文様かと思われるような柄が描かれている。三人とも扇を手にし、簪を用いており、足には草履と足袋を着用しているように見える。『レディズ・ピクトリアル』のイラストでも同じく「学校帰りの三人の小さな乙女」と紹介され、三人とも扇や袖で顔を隠した姿で描かれている(図

1)。キモノと帯は本来のキモノと同じように着装されていることが分かり、さらに中央の娘は草履を履いているように見える。簪も同様に飾られている。記事には「三人で歌われる最初の歌はこのオペラで最も魅力的である」として、次のように紹介している。

日本の衣裳を身に纏った少女の風変わりなポーズや、扇を使ったしぐさや、とても馬鹿げて見えるうわべの上品さの中に、女子学生特有のふざけた恥じらいや、声を潜めた笑いや、意味のないくすくす笑いがみとれる。さらに古風な衣装と舞台によってより面白さが付け加わっている。⁵⁾

記事で少女たちのしぐさに触れているように、扇で顔を隠しくすくす笑うしぐさが印象的に描かれている。『イラストレイテッド・スポーティング・アンド・ドラマティック・ニュース』では記事に次のような記載がある。

ごく普通のコーラス隊に、日本女性の大きな外観上の特徴である奇妙なすり足をそろえて続けさせることに舞台監督は非常に苦勞した。そこで、ハイヒールの靴を脱がせ、つま先とかかとの低いサンダルとストッキングに変えさせる努力をした。このようにして、サヴォイシアターの少女たちは日本人のすり足を成し遂げた。⁶⁾

この記事から、やはり三人娘のしぐさに興味をひかれていることが分かり、さらに少女たちは足袋と草履を履いていたと考えられる。さらにそれは踊りやしぐさから日本人らしさを演出するための工夫であったこともわかる。さらに記事には3人娘を演じた女優の名前を挙げ「彼女たちは、すべてのしぐさや態度の細部にわたるまで、アルバート・ゲートに設置された手本へこだわることによって、驚くべき模倣の可能性を示してくれた。そして、このオペラの初めから終わりまでとても人目を引いて魅力的だった」と書かれている。このアルバート・ゲートの手本というのはナイツ・ブリッジに開設されている「日本人村」のことであると考えられ、「日本人村」との関連がみとれる。また、ピクトリア・アルバート博物館に保存されている写真をみると、挿絵同様に、キモノをほぼ本来と変わらない様子で着装していることが分かる（図2）。

②カティシャ

カティシャについては『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』のイラストでは振りの長い小袖に帯を締め草履を履いていることが分かるが、小袖の柄は判然としない。『レディズ・ピクトリアル』のイラストでも振りの長い小袖と草履を着装していることがみとれる（図3）。さらに『イラストレイテッド・スポーティング・アンド・ドラマティック・ニュース』にはナンキ・プーとヤムヤムの間に割って入るしぐさのカティシャが描かれているが（図4）、ここでの描写も同様に小袖を着用していることは分かるが、足元は草履を履いているようには描かれていない。記事には「彼女は共演者よりも少しばかり激しすぎて、そして完璧な日本人とは言い難かった」と書かれている。

これらのことから、ヤムヤムを中心とする三人娘の衣裳については、ほぼ日本人同様の着装をしており、日本人らしい仕草を演出するために草履や足袋を着用したことが分かった。また、そこには「日本人村」の協力があつたことも分かった。

Ⅲ. 『ゲイシャ』の舞台衣装にみる女性らしさ

1. 『ゲイシャ』について

『ゲイシャ』は1896年4月25日にダリーズ・シアターで初演され、脚本はオーウェン・ホール、ハリー・グリーンバンク、作曲はシドニー・ジョーンズが行っている。連続760回の公演がなされ、9月にはニューヨークで、さらに翌年にはベルリンやウィーンでも上演されたという⁷⁾。

舞台は日本の長崎で、そこにイギリス船のタートル号が寄港して海軍士官が上陸し、日本の茶屋を舞台として、ゲイシャとの交流が行われるというものである。主な登場人物はゲイシャのオミモザサン、海軍士官でオミモザサンに夢中になってしまうフェアファックス、フェアファックスの婚約者で彼の気を引こうとしてゲイシャに扮するモリー、自分のヨットで世界を旅している自立したイギリス人女性のレディ・コンスタンス、茶屋で通訳として雇われているフランス人娘のジュリエットなどである。

2. 『ゲイシャ』の舞台衣裳

舞台衣裳について言及しているものとして、『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』、『グラフィック』、『レディズ・ピクトリアル』、『スケッチ』に記事、挿絵、写真が掲載されている⁸⁾。また、ヴィクトリア・アルバート博物館にはオミモザサンに扮したマリー・テンペストとモリーに扮したレティ・リンドの写真が残されている。ここでは、女性の登場人物である、オミモザサン、モリー、ジュリエット、レディ・コンスタンスの舞台衣裳について、キモノを着た女性と、ドレスを着た女性に分けて述べる。

(1) キモノを着た女性

①オミモザサン

まずオミモザサン役のマリー・テンペストについての記述を挙げる。

マリー・テンペストは淡いグレーの日本のドレス、鮮やかで美しい青い裏地が付き、全面にピンクと青と白の花の刺繍が施され、白い蝶がその上を飛び回り緋色と白の羽の足の長い鳥がそこに重々しく止まっている。彼女のこの場にふさわしくとても美しい赤金色の髪の毛は、古風に装われ、金の短剣と鎖で結ばれていたのは小さな驚きだった。⁹⁾

この衣裳は日本から取りよせた生地で作られており、グレーの地にピンク・青・白の刺繍が施された淡い色調のキモノである。

また、ヴィクトリア・アルバート博物館所蔵の写真では(図5)、左は帯の辺りまで襟を重ねず着装し、頭や襟もとに花を飾り、三味線を弾いている姿である。上半身は無地のように見えるが、袂の下部や裾には刺繍が施されている。右は同じ衣裳かと思われるが、花飾りが多く、頭には簪のような飾りををさし、扇を手にしている。この簪のような飾りが「金の短剣と鎖」という表現になったとも考えられる。

また、『スケッチ』5月20日号には4枚の写真が掲載され(図6)、それぞれに舞台上で歌われる歌の歌詞が添えられている。おそらく雑誌掲載のために撮られた写真であると考えられ、黒地に刺繍が施されたキモノを身につけポーズをとっている。左下には「ゲイシャの生活は何もかもが魅力的なバラ色に包まれていると思うでしょう」という“A Geisha’s Life”の歌詞の一部が添えられてい

る。この歌は第1幕でゲイシャになりすましたモリーを見て、オミモザサンがゲイシャの生活を嘆く場面で歌われる歌で、「しかし、世間で考えられるほど美しいものではありません。(中略)一日中、歌って踊ることがどれほど辛い仕事かご存じないでしょう。」と続く。ゲイシャの不自由な生活を嘆く場面が、自転車という新しい女を象徴するようなアイテムとともに表現されていることは興味深い。

②モリー・シーモア

モリー役のレティ・リンドについては、一幕の終わりにゲイシャになりすます場面の衣裳について次のように述べられている。

ピンクの花びらの花と若草色の葉、堂々とした銀色の羽の鳥が精巧に刺繍された白いサテンのローブで、彼女の踊りは薄水色の裏地と白いゴーズの透けるように薄いアンダードレスを見せる、ゲイシャに変装するのだ。また、彼女の黒髪の鬘はたくさんの金のピンが留められ、レティ・リンドは最も愉快的なゲイシャ・ガールを作りだす。¹⁰⁾

白地に草花と鳥の刺繍が施されたキモノで、黒髪の鬘が用いられていたことが書かれている。この衣裳はヴィクトリア・アルバート博物館所蔵の写真(図7)と一致するものである。オミモザサンの衣裳と同じように胸元に花の飾りがつけられているが、衿は深く合わされている。

さらに『スケッチ』5月13日号には、写真が掲載されている(図8)。右下と左下の写真には、第1幕のゲイシャになりすましたモリーが競売にかけられる場面で歌われる“Chon Kina”という歌の歌詞が添えられている。右下には「私は素敵な小さな日本のゲイシャです」、左下は「私はどのような派手な踊り方でも踊ることができます」と書かれており、歌詞は「夢のようなファッションであちらこちらに揺れ動く」と続いている。さらに自分を売り込み「チョンキナ、チョンキナ、チョンチョン、キナキナ、ナガサキ、ヨコハマ、ハコダテ、ホイ」と日本語でうたわれる。「チョンキナ」は実際に日本の茶屋で外国人男性客に好まれていたゲイシャ遊びの歌であり、“Chon Kina”はその歌をもとにしたものである。

③ジュリエット

ジュリエット役ジュリエット・ネービルについては、次のように述べられている。

彼女は、とても刺激的で魅力的なかわいらしい姿で、金とゼラニウムピンクの刺繍が施された古風で趣のあるとても薄い紫のローブを着用し、ゼラニウムの花が暗色の髪の中に見え隠れしている。¹¹⁾

ジュリエットの衣裳も、この後に登場するイマリ侯爵にゲイシャと間違えられることから、キモノであったと考えられる。薄紫地に金とピンクの刺繍が施され、淡い色調のキモノである。

(2) ドレスを着た女性

①モリー・シーモア

第一幕で登場する場面ではモリーはドレスを着ている。その衣裳については次のように述べられている。

レティー・リンドが、最も魅力的なヨット服で—これはメゾン・ジェイで作られた—登場する。白いサージのスカートで、ステッチの列と空色の布のボレロで完成され、白いピケで縁どられている。薄水色の衿飾りのあるストライプの青いシャツの前面は、ウエストに白い革のベルトが締められている。レティーの美しい髪には、彼女の友達のヨットの船名が記された青い絹の一般的な水夫帽がかぶせられ（略）¹²⁾

この衣裳については、『スケッチ』5月13日号の表紙の写真（図9）がこれに当たると考えられる。日傘をさして人力車に乗っており、衣裳は記事の描写と一致している。イギリス人女性一行はレディ・コンスタンスのヨットで日本に来たという設定であるため、ヨット服が衣裳として採用されているのであろう。テラー・メイド・コスチュームが女性のスポーツ服として普及し、「新しい女」を象徴することはすでに指摘されている通りである¹³⁾。メゾン・ジェイは当時ロンドンで人気の店であり、とくにテラー・メイドのドレスで有名であったが、そこでつくられた、ヨット服というスポーツ服を着用していることは、「新しい女」を表象していると考えられるのではないだろうか。

②レディ・コンスタンス

レディ・コンスタンス役のモード・ホブソンの衣裳については、第一幕で登場する場面について、挿絵（図10）とともに衣裳が詳細に描写されていた。記事の内容からも挿絵からも、テラー・メイド・コスチュームであると考えられる。レディ・コンスタンス一行には女性ジャーナリストも含まれ、人物設定としても自立した女性という設定であるが、衣裳もテラー・メイド・コスチュームとみられる。

また、舞台で採用されたドレスが、多くの人に模倣され流行したことから、ドレスメーカーにとっても舞台は良い宣伝の場となっており、さらに雑誌との関係についても「劇の衣裳は劇場での観察によるだけでなく、雑誌を通して素早く読者に伝えられている。そして読者はそれらの衣裳やアクセサリーを手に入れることが可能であるという、19世紀の消費社会の一つの現象を見ることが出来る。」と先行研究によって指摘されている¹⁴⁾。この指摘通り、同じスタイルのドレスは同時期の雑誌広告に多く見られ、流行のドレスを舞台衣裳として採用し、それが雑誌記事に詳細に紹介されていることが分かる。

(3) キモノとドレスの対比効果

キモノとドレスの対比効果について言及している記述もみられた。第一幕の最初に登場する茶屋のゲイシャたちについて、「楽しげなかわいい日本のゲイシャ・ガールが色とりどりの衣装を着て光に満ちた庭園を飛び回っており、そこには薄紫の花が美しく茶屋の玄関まで連なっている。」と書かれ、その様子は「かわいらしい絵のよう」と述べられている。そこに、前述のレディ・コンスタンス一行がドレス姿で登場するが、その場面について、次のように述べられている。

そしてついには妖精のような愛らしさの場面は数人の女性の訪問者の出現によって破られる。彼女たちは最近の最高のモードに身を包んでおり、その結果は想像通り、印象的なコントラストとなっている。¹⁵⁾

舞台の演出効果として、それまでのキモノを着た女性たちの「かわいらしい絵」のような場面に、実際に当時流行のドレスでイギリス女性が登場することで、衣裳による対比効果を狙っていると考

えられる。これは単に視覚的な対比効果にとどまらず、登場する女性像を対比して表現していると考えられ、舞台上で描かれる女性像を表象するものであったと考えられる。

最新のドレスを着ている女性は、レディ・コンスタンスを中心とするイギリス人女性であり、婚約者を取り戻そうと日本にやってくるモリーである。レディ・コンスタンスの一行には女性ジャーナリストも含まれ、いずれも自分の主張を持った自立した女性として描かれている。それと対比して描かれるキモノを着た女性は、純粹無垢で従順な日本人女性のイメージであると考えたくなる。しかしオミモザサンは、ゲイシャは年季が明けけるまでの勤めと割り切っており、フェアファックスはビジネスの相手で、年季があげたのちにはカタナと結婚しようと考えている。決して従順だけの自分の考えが無い女性とは描かれていない。茶屋の通訳であるジュリエットは、かわいらしく振舞っているが、何とかして地位と富を手に入れようとイマリ侯爵との結婚をたくらむ女性として描かれている。モリーがキモノを着た際も、自分をゲイシャと偽ってフェアファックスを取り戻そうとする女性である。

このように考えると、キモノを着ている女性は純粹無垢で従順な女性ではなく、自分の意思を持って能動的に行動する女性として描かれていることが分かる。『ゲイシャ』の舞台衣裳として用いられたとき、キモノは従順な女性のイメージを持つことから、その下に存在する自分の意思を隠すための隠れ蓑として利用されたと考えられるのではないだろうか。

IV. 舞台衣裳からみる女性らしさ

19世紀イギリスの日本を主題とした演劇として『ミカド』と『ゲイシャ』について女性の登場人物についてまとめると、『ミカド』には、一般の女学生として恋人と結ばれるヤム・ヤムを主とした三人娘と、婚約者を探しているカティシャが描かれている。それに対して、『ゲイシャ』には、多様な女性像が描かれており、日本人ゲイシャで最後は許婚と結ばれるオミモザサン、婚約者を取り戻そうとゲイシャに扮するイギリス人女性モリー、茶屋で通訳をしながら地位と富を手に入れようとイマリ侯爵との結婚をたくらむフランス人女性のジュリエット、自分のヨットで世界を旅している自立したイギリス人女性のレディ・コンスタンスである。

まず『ミカド』についてみると、ヤム・ヤムは扇で顔を隠すしぐさに表されるように従順な女性の表象のように見えるが、女学生という設定からは自分を持たない人形のような女性ではなく、教育を受けた自立した女性として描かれていることが分かる。また、『ゲイシャ』では、ドレスを着た女性とキモノを着た女性との対比がみられ、そこにはテラー・メード・コスチュームに表象される新しい女性と、キモノに表象される従順な日本人女性のイメージとの女性らしさが対比されていることが分かった。しかし、キモノを着た女性も、自分の意思を持って能動的に行動する女性として描かれており、『ゲイシャ』の舞台衣裳として用いられたとき、キモノは従順な女性のイメージを持つことから、その下に存在する自分の意思を隠すための隠れ蓑として利用されたと考えられる。オミモザサンがキモノを着て自転車にまたがった姿で撮影されているのは、『ゲイシャ』の舞台上で演じられるキモノ姿のオミモザサンに新しい女性との共通性を表現したかったのであろうか。新しい女とは程遠いが、イギリス人男性が望む従順な女性ではない、という点では一致するのも知れない。このことを自転車というアイテムで比喻しているとも考えられる。このように考えると、従順な女性を表象するはずのキモノにも、「新しい女」が内包されているのである。ここに、近代イギリスの「女性らしさ」の価値観の変容を読み取ることができる。

注

- 1) 渡辺俊夫・佐藤智子監修：JAPANと英吉利西—日本美術の交流 1850-1930、世田谷美術館、東京（1992）。
- 2) 『ゲイシャ』の舞台衣装については拙著において研究成果を発表した。
米今由希子「19世紀末のイギリスにおける日本風演劇の舞台衣裳—『ゲイシャ』を中心に—」、国際服飾学会誌、53、（2018.6）。
- 3) 倉田善弘：一八八五年ロンドン日本人村、朝日新聞社、東京、（1983）157。
- 4) *Illustrated London News*, April 4, 343-4 (1885) “The Mikado at the Savoy Theatre”.
Lady's Pictorial, March 21, 269-270, “The Mikado” at the Savoy, May 30 (1885).
The Illustrated Sporting and Dramatic News, March 21, 4, 22, March 28, 36, 45, “The Mikado at the Savoy”, June 27 (1885).
- 5) *Lady's Pictorial*, op. cit.
- 6) *The Illustrated Sporting and Dramatic News*, March 21 (1885).
- 7) 倉田善弘：海外公演事始、東書選書、東京書籍、東京、（1994）、175。
- 8) *Illustrated London News*, May 2, 572 (1896).
The Graphic, May 2, 530 (1896).
Lady's Pictorial, May 2, 595, 649 (1896) ““The Geisha” at Daly's Theatre”.
The Sketch, April 29, 42 (1896) “Dress at the play”.
- 9) *The Sketch*, op. cit.
- 10) *Ibid.*
- 11) *Ibid.*
- 12) *Ibid.*
- 13) 佐々井啓：ヴィクトリアン・ダンディ オスカー・ワイルドの服飾観と「新しい女」、勁草書房、東京、225-228（2015）。
好田由佳：女性用テラーメイド・コスチュームの流行—19世紀末イギリスを中心に—、国際服飾学会誌、22、22-32（2002）。
山村明子：十九世紀末から二十世紀初頭のレジャースポーツにおけるイギリス女性服飾の転換：ゴルフを中心に、服飾美学、62、77-95（2016）。
山村明子：19世紀末イギリスにおけるイートンジャケットの流行に関する一考察、日本家政学会誌、62（2011）7、445-456。
- 14) 佐々井 前掲書 64。
- 15) *The Sketch*, op. cit.



図1 三人娘 「サヴォイ劇場のミカド」
Lady's Pictorial, March 21, 1885



図2 三人娘
Victoria and Albert
Museum Picture Library



図3 カティシャ
「サヴォイ劇場のミカド」
Lady's Pictorial, March 21, 1885



図4 カティシャ (中央)
「サヴォイ劇場のミカド」
*The Illustrated Sporting and
Dramatic News*, March 28, 1885



図5 ダリズ劇場の『ゲイシャ』でのオミモザサン役のマリー・テンベスト
Victoria and Albert Museum Picture Library



図6 ダリーズ劇場の『ゲイシャ』でのオミモザサン役のマリー・テンペスト
The Sketch, May 20, 139 (1896)



図7 ダリーズ劇場の『ゲイシャ』でのモリー役のレティエ・リンド
 Victoria and Albert Museum Picture Library

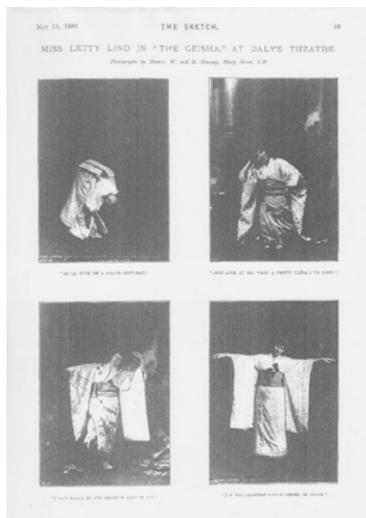


図8 ダリーズ劇場の『ゲイシャ』でのモリー・シーモア役のレティエ・リンド
The Sketch, May 13, 99 (1896)



図9 ダリーズ劇場の『ゲイシャ』でのモリー・シーモア役のレティエ・リンド
The Sketch, May 13 (1896)



図10 『ゲイシャ』でのモード・ホブソン
The Sketch, April 29, 41 (1896)

20世紀初頭東洋趣味モードにみるフランスの女性らしさ

Expressions of Femininity in the Oriental Fashion of Early 20th Century France

佐藤 恭子

1. はじめに

20世紀初頭フランスでは、現代服飾産業の原型が成立するとともに、クチュリエと呼ばれるデザイナーの地位が確立した。イギリス、アメリカの婦人へ向けて最新の流行を発信していたパリ・モード界は、クチュリエを中心に、伝統的なスタイルからの脱皮を図っていた。一方、モードの選択者である女性の意識にも、フェミニズムの思想や女子高等教育が注目されるなどの変革が起きていた。この新時代を象徴するモード界の出来事といえば、コルセットから身体を解放したことである。しかし、この転換期に生まれたモードは、まさに試行錯誤という言葉がふさわしい、混沌とした時期を迎えていたともいえる。なぜなら、伝統的な女性の象徴ともいえるコルセットを手放すことを目指したものの、仕事やレジャーに適した「新しい女性」のための服飾へと、単純に意向したわけではなかったからだ。例えば、同時期の流行に、東洋からの影響を受けたスタイルがある。当時、絵画などに登場する東洋女性の表象には、西欧女性の厳しい道徳的規律社会に対して「奔放さ」、「性的女性らしさ」など、見せ物的要素がしばしば含まれていた。しかし、この東洋趣味モードは、モードの指南書ともいえる婦人雑誌にしばしば登場し、モード欄の中で一定の地位を確立している。一見、新時代に逆行するようなこの現象は、フランスにおける「解放」が男女の相違を縮めることのみを目的にしていたわけではなかったことが窺える。

本研究では、この東洋趣味モードの受容の様子をとおして、パリの「新しい女性」が求めたフランス的「新しい女性らしさ」について考察する。本論では、東洋趣味モードの中でも、特にキモノ風スタイルとパンタロン風スタイルの2つの事例を取り上げて検証していく。また、一次資料として同時代に刊行された婦人雑誌と挿絵入り新聞イリュストラシオンを使用した。今回使用した婦人雑誌は、比較的発刊部数の多いレ・モードや、フェミナ、ラ・モード・プラティックなどである。上流階級からモードの受容層が広がりはじめた時代、婦人雑誌のモード欄は、おしゃれな装いを求める女性にとって貴重な情報ツールである。そこで、婦人雑誌のモード欄にみられる東洋趣味モードのスタイルや批評を検証し、女性の求めるスタイルの傾向を探り、20世紀初頭パリジェンヌの「女性らしさ」を考察する。

2. 黎明期の女性とパリ・モード

革命後のフランスは、政治体制が目まぐるしく変化した。本研究における20世紀初頭は、政治的には、1870年から第二次世界大戦まで続く第三共和政時代の最中であり、文化的には、政治的混乱が一段落した19世紀末から第一次世界大戦までの好況期、ベル・エポックと呼ばれる時代にあたる。フランスにおいて、女性解放問題を取り上げる社会主義的フェミニズムの思想が体型的に形成され、盛り上がりを見せるのは、第二共和政期まで遡る。以降第二帝政期を経て第三共和政時代までの間には、女性の大学入学資格が承認されるなど、徐々に成果が見られていく。しかし、女性参政権獲得においては、イギリスが1919年、アメリカが1920年に獲得しているのに対し、フランスは、

1945年まで待たなければならなかった。次に引用する1935年の演説は、その歩みの遅れについて象徴しているといえる。社会党のブラッグ議員らが女性の権利を力説したのに対して、上院の報告者ベラール議員は、「女性の手は、選挙広報に触るためより、接吻されるためにある」「男たちは、カフェに集まるとまず女の話をして、次には政治の話をするが、女たちはおしゃれの話をするしか能がない」という演説をした¹⁾。この演説内容は、大衆女性の政治的無関心を皮肉めいた表現で示したものである。一方で、フランスの女性解放運動の遅れについて林も、「大革命期から第三共和制にいたる女性参政権運動が、一部のフェミニストには支持されたものの、一般大衆に受け入れられなかったことが指摘できる。」「『女性は家庭に』という性的役割分担論の根強さ」などを指摘している²⁾。つまり女性側の参政権への関心は低く、女性の興味は「おしゃれ」などであり、他者から女性に求められていたことも「家庭」的要素だったことが推測できる。また、パイヤールは、19世紀後半以降のフランス女性について、「社会における女性の役割について二つの概念が対立し合っていてゆく、一方は、男性社会への対等な統合を要求する。他方は女性の特殊性を守り、発展させることを求める。一方は女性拡張論的運動を誕生させる。…他方は、婦人向け出版物に支えられて、『女らしい』女の原型的、貴族主義的イメージをふりまくことになる³⁾。」と述べている。前者は女性解放運動に邁進するフェミニスト、そしてこの後者の女性が、まさにフェミニストの立場で女性の権利を主張することには興味を持たず、「おしゃれ」に関心を持った女性を指しているといえる。これらの言説より、ベル・エポック期の女性運動を概観すると、フェミニストとは異なる立場をとる女性が、女性解放運動の推進を遮るに足る力を持っており、まさにその立場の婦人たちによって20世紀初頭のパリ・モードが支えられていたことが窺える。

3. 20世紀初頭の異国趣味モード

では、20世紀初頭のパリ・モードを支えた女性は、保守的だったのだろうか。必ずしもそうとはいえない。19世紀までの西洋女性の伝統的なスタイルの必需品、コルセットは、身体を成形し、女性らしい曲線美を作っていた。このスタイルは、20世紀に入っても続いてはいたものの、1908年頃より婦人雑誌のモード欄からは、少しずつ消えていく。ブリュノは、この1908年を「ソフトなモードを生んだ年⁴⁾」と述べている。これまでの身体に密着し、女性の活動を妨げてきたSカーヴを描くラインは、身体を成形しない、Iラインへと移行していった。さらに19世紀末からは、より実用性を兼ね備えたテーラードスーツがイギリスの服飾から影響を受けて登場し、働く女性中心に着用されるようになる。モードは確実に「新しい女性」向けへと変化を遂げようとしていた。このような新しい時代を迎える中で、華やかな流行のスタイルとしてモード欄に発表されたのが異国趣味スタイルであった(表1)。19世紀中頃から、相次ぐ万国博覧会の開催、異国への関心を描写したオリエンタリズム画家の登場、上流階級を中心とした異国への旅人気などを背景に、古代ギリシャやローマの懐古趣味、トルコやペルシア、ロシア、そして中国、日本などの異国趣味の影響が文化全般に見られるようになる(図1)。モードにおいても、クチュリエであるポール・ポワレが、東洋風コートや古代ギリシア風ドレス、トルコ風パンツスタイルなどを発表し、先駆的な役割を果たした。さらに同じ頃、婦人の娯楽の一つとして流行した舞台鑑賞において、バレエ・リュスの人気が高まったことが東洋趣味モードに拍車をかけた。バレエ・リュスの演目のうち、特に婦人雑誌で取り上げられたのは、レオン・バクストが舞台や衣裳デザインを担当した作品であり、東洋の世界観を華やかに作り上げた「シエラザード」や古代ギリシアの神々を古代ローブ風衣裳で表現した「牧神の午後」などであった。舞台鑑賞や記事を目にし、バレエ・リュスの世界観に影響を受けた婦人

表1 主な東洋趣味モードデザインの登場年代

登場年代	服飾デザイン
1901年頃～	着物風コート
1904年頃～	袖付きの直線的なコート
1905年頃～	ラップコート
1906年頃～	直線的なラインのシングルコート
1906年～	コルセット追放（ボワレ）
1906年～1911年	古代ギリシア風ドレープドレス
1909年頃～	ターバン
1910年～	ローブ・アントラベ（ボワレ）
1911年～	ハーレムパンツ（ボワレの千一夜物語）
1912年～	ペルシア風モード（バレエ・リュス）
1912年～	古代ギリシア風モード（バクスト・パキャン）
1911年～	ジュップ・キュロット
1913年～	ランプシェード（ミナレ）チュニック



図1 着物のお引きずり風中国シルクのローブと
東洋風家具
Journal des dames et des modes, 1912



図2 バクストによるプレート
「ディオネ（女神）、パキャンによるローブ」
Journal des dames et des modes, 1913

らによって異国趣味モードはますます広まって行った。また、バクストは、モード・デザインにも参入するなど大きく異国趣味モード人気に貢献した（図2）。そして、1912年には、絶頂期を迎え、モード欄にオリエンタルスタイルが大きく紙面をとるようになる⁵⁾。異国趣味の流行は、新しいスタイルとしてだけでなく、仮装パーティの衣装など、婦人雑誌を賑わせる題材となっていった。

4. 東洋趣味モードにみる新しい女性らしさ

(1) キモノスタイルと「ゆとり」

東洋趣味モードの中でも日本に影響を受けた服飾は数多く登場している。今日では、モードのジャポニズムとして研究が進められ、パリ・モードに日本の影響があったことは明らかにされてい

る。著名なグラン・クチュリエのデザインにみられる着物の影響は高級モード誌の挿絵の中でしばしば確認することができる。ここでは、広がりを見ていくという目的で、中流女性向けに広く刊行された婦人雑誌のモード欄から、「キモノ (kimono)」または「日本風 (japonais)」という言葉で解説されている服飾品の図像を抽出し、着物のフランス的解釈によるデザインを検証することで、日本の着物のどの部分に着目していたのかに注目し、女性の服飾に求める需要を探る。

着物の影響を受けた服飾は、19世紀後半頃からモード欄にしばしば登場し、20世紀に入ってから、「日本風」「キモノ (風)」などの言葉が、流行のスタイルの解説の中に見られるようになる。1906年には、ラ・モード・プラティック12月号で、「日本風の形状をしたジャケット」が登場している。袖をはじめ全体的にゆったりとしたデザインになっている。同誌1907年6月号では、「日本風袖」を見ることができる。この頃になると、「日本風袖」がしばしば登場する。これらは、袖山のラインが肩から袖側に下がったり、アームホールが大きくルーズなところが特徴である。「日本風の形」と解説されたスタイルは、日本の着物のような袖丈が長く大きな袖を指している。また、1911年頃になると“kimono”という言葉が頻繁に登場する。「キモノ上着」、「キモノブラウス」、「キモノ肩掛け」、「キモノスカーフ」など、もはや、日本の着物の形が跡形もないほどに応用されたデザインである。パリ・モード全般に、重ね着のチュニックスタイルが流行する1913年ごろには、「キモノチュニック」も登場している。表現においても「日本風 (japonais (e))」「キモノ (kimono)」の二種類の表現が使われていく。19世紀末以降、「キモノ」という言葉を単一に用いた場合、室内着や仮装衣装をさす事がほとんどであったが、この頃になると、フランス風に解釈された様々な服飾品に対して形容詞としての「キモノ～」が使われるようになっていく。それらの多くは、袖周りにゆとりのあるものに使われている傾向がある。これらの「キモノ～」という名が受容され、流行した理由には、当時の服飾が身体の解放を求める傾向があり、その動きに呼応した「ゆとり」あるデザインであったことが考えられる。また、“kimono”、“japonais”の登場回数の多さからも、東洋趣味モード、特に日本風の服飾品には需要があり、ある程度流通、定着していった様子を窺うことができる。

(2) パンタロン風スタイルにみるパリジェンヌらしさ

次に、東洋趣味モードのひとつとして登場したパンタロン風スタイルについて考察していく。婦人のパンツスタイルの登場は、20世紀初頭に限ったものではない。例えば1799年11月17日施行の条例では、パリの女性は公共の場でのズボン着用が禁止されており、男性のように装いたいと思うすべての女性は県庁の許可を得なくてはならなかった。次に1892年に乗馬服は例外として改訂され、1909年に更なる改訂が行われ、女性のズボン着用は、自転車のハンドルや馬の手綱を握っている時は許されるようになる。このような決まりごとがパンツスタイルにあったことから、フランスでは服飾表現においても、性の別に関して厳格であったといえる。しかし、まさに同時代に、東洋趣味モードの服飾品のひとつとしてパンタロン風スタイルが登場したのである。

フランスのクチュリエにとって、このパンツをまねてつくることはそう簡単な事ではなかった。だからポワレをはじめ、しなやかなドレスの踝を絞ることでよしとしたのである。こうすることで、東洋風のパンツの外観を一応ものにする事が出来た⁶⁾。

とあるように、このスタイルについては、トルコのハレムパンツに着想を得て作られたことから、

パンタロンの一部、フェミニスト運動との連動と解釈されることもしばしばあり、批評や、風刺画などにおいては、男性服を着た女性という揶揄が見られた。しかし、婦人雑誌などに登場する際の名称は、ジュップ・アントラベや、ローブ・アントラベ、ジュップ・キュロットやローブ・キュロット、あるいはジュップ・パンタロンなど、スカートやドレスの意味を指すジュップやローブと共に用いられていることから、男性を象徴するパンツとはやや異なるものとして登場したと考えられる。なお、以後本論では、これらのスタイルを総じて述べる際には、パンタロン風スタイルと呼ぶこととする。

1910年、パンタロン風スタイルの第1段階として、ジュップ・アントラベが登場する。先の引用にあるように、初めは、踝を絞ることでパンツのようなまっすぐなラインを出そうとしていた。流行のシルエットも、SカーブラインからスリムなIラインに移行していた時期であり、足枷をはめたようなこのジュップ・アントラベは、スリムスカートの様相も表現できていた⁷⁾(図3)。しかし、この究極のIラインドレスは、風刺的となり、女性の動きを妨げる滑稽なスタイルとして世に広まることとなった(図4)。

その後、1911年2月18日、ブルジョワ階層に向けられた挿絵入り新聞イリュストラシオンでは、ポワレのパンタロン風スタイル、ジュップ・キュロットの発表が特集を組まれて紹介されている。記事の内容には、「女性のための4種のパンツデザイン」という見出しで、足枷をはかせることなく、女性にパンタロン風のスタイルをさせるためのデザインが紹介されている。また、記事には、次のようにも書かれている。

動きの自由さは好ましい状態で、足かせスカートよりも、自然に柔らかく歩くことができる。しかし、エレガントなご婦人は、野暮ったくなることを避けなければと思うでしょう。初めの頃は、このデザインを着用するのは難しく、選りすぐりの洒落者に限られるでしょう⁸⁾。

この記事の内容から、ジュップ・アントラベが改良されたデザインであり、おしゃれなデザインにはなっているが、エレガントに着用するのは、難易度が高いことが窺える。また、このスタイルについて婦人雑誌では、次のような批評がある。

…いくつかのデザイナーのアトリエは、アルカイック(古典的な)奴隷の象徴であるスカートから、女性を解放させ、“パンタロン”に名前を移行して、フェミニスト運動とともに進展して行くのだろうと信じていた。なぜなら、…独立を強く望んでいる人々に強制的にはかせたい、まさに“キュロット(下着のショーツの意)”スカートという表現がそこに使われているからだ。

柔らかいシルエットラインになればなるほど、より魅力的であり、裨が長くなればより優美になり、上品ではつらつとした詩的な魅力を導きださせる。故に、ギャザースカートや、ストレートラインのスカート…そして昨夏の足枷のスカートでさえも、流行遅れではあるが、今もなお、女性らしさは残る⁹⁾。

このモード批評は、フランス革命の際に、革命家が貴族の下衣であるキュロットを否定し、パンタロンをはいていたように、ジュップ・キュロットが、ジュップ・パンタロンと名称を変え、フェミニスト運動と連動して、ブルーマー婦人や合理服協会のように、服装が女性の権利拡張運動に拍車

をかけると想定している。事実、ポワレが発表したジュップ・キュロットは、ジュップ・パンタロンと呼ばれたりもしていた。しかし引用の後半部分では、このスタイルの影響は、女性運動とは異なる様相を示し、むしろ、「女性らしさ」を表現していたことを読み取ることができる。

そもそも、パンタロン風スタイルの流行は、このスタイルの原点がハレムの女性のはくパンタロンに着想を得ていることから、西欧社会の考え方である男性的な「権力（あるいは権利）」などの意味合いが薄いことは推測できる。異国の地で女性がいっているパンタロンを西欧社会に導入することにより、スキャンダルに近い流行が登場したわけだが、実際には、フェミニズムの思想が念頭にあったとは考えにくい。その理由は、西欧の決まりでは測れない異国の女性の服装が原点であること、そして、パンタロンをパリジェンヌの占有物ともいえるモードあるいは「おしゃれ」に組み



図3 最新モードスナップ写真より、
“特異なスリムスカート”
L'illustration, 1910 Jun. 11

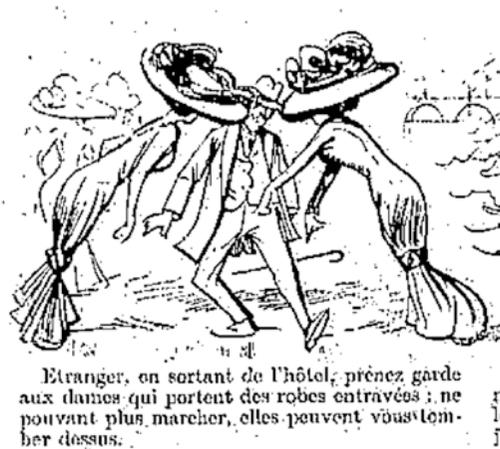


図4 風刺画
L'illustration, 1910 Oct. 8



図5 女性のための4種のパンツデザイン
L'illustration, 1911 Fev. 18



図6 大きな格子柄のズアープ風
ウォーキングパンツ
L'illustration, 1911 Fev. 18

込んでしまっていることがあげられる。モードの立役者たちが創意工夫をした結果、もはやパンツスタイルではなく、一つの新しいデザインとして婦人たちに受け入れられたスタイルであったといえるだろう。そして、足枷スカートから改良されたジュップ・キュロットに至っては、「動くことを可能とした」、つまり旅行や、車などにも乗り降りする動きやすさがある。権利を主張するまでは至らず、新時代の女性の活動範囲が広がる中、「活動的女性のおしゃれなスタイル」にとどまっていたのではないかと考えられる。賛否両論であったことは確かだが、たとえ、滑稽なものとして揶揄されようとも、衣服における平等を極端なまでに主張することはなく、「女性らしさ」を内包した流行スタイルであったと考えられる。

5. おわりに

19世紀中頃から見られるオリエンタリズムは、西洋植民地支配から生まれた考え方であり、東洋は「西洋より劣っているもの」と認識されていた¹⁰⁾。異国の物を戦利品のように取り入れることによって優位性を得ることは、文学、美術など様々な形で繰り返されてきた。しかし、東洋趣味モードは、そのような枠組みで収めることは難しく、なぜ、当時の女性は、植民地同様に「劣っているもの」である東洋の要素を自らの装いに取入れたのかという疑問が残る。女性が社会的地位を獲得しようとしている時代に、この流行現象は、逆効果とも考えられる。異国の衣装を取り入れることによって、優位性を出そうとしたのかもしれないが、その目的であれば、異国の衣装をそのまま着用する仮装衣装などで事足りるだろう。しかし、パリ・モード界は、東洋の衣服の要素をフランス的解釈を加えながら取り入れて東洋趣味モードを作り出したのである。その理由として考えられるのが、2章で触れたように、パリ・モードを牽引する女性たちは、政治への強い関心を示していなかったことである。つまりモードにおいては、東洋<西欧という構図がそれほど重要ではなかったと考えられ、異国の衣装文化の物珍しさや、奔放な女性像は、女性的なあるいは性的魅力のある服飾表現の中に活用されたといえる。そして4章で検証してきた二つの東洋趣味モードの事例から、20世紀初頭のパリ女性が、着物の特色である「ゆとり」や、パンタロン風スタイルの「歩きやすさ」を好んだことからわかるように、装いに「動きやすさ」を求めたことも、東洋趣味モードが広く浸透していった要因と考えられる。つまり、東洋趣味モードは、「女性的な・性的魅力のある服飾表現」であり、同時に活動的女性が求める「動きやすさ」が含まれたスタイルだったのである。以上のことから、東洋趣味モードの受容を検証することにより、パリ・モードの基盤には、フランスの中流的な女性らしさの存在があったといえる。

引用

- 1) 林瑞枝『いま女の権利』(学陽書房、1989年)、33頁。
- 2) 前掲書、35-36頁。
- 3) N. Benoit, E. Morin, B. Paillard. (1973) *La Femme majeure : Nouvelle Féminité, Nouveau Féminisme*, Paris, éd. du Seuil. (古田幸男訳「女らしさと女権拡張論、ユートピアから危機へ」『大いなる女性—フランスの婦人解放運動』法政大学出版、1977年、21頁。)
- 4) Bruno du Roselle. (1980) *La mode, Paris*, Imprimerie nationale. (西村愛子訳『20世紀モード史』、平凡社、1995年、164頁。)
- 5) 佐藤恭子「20世紀初頭モード転換期におけるバクストの役割」『国際服飾学会誌』No. 45、2014年6月。
- 6) Du Roselle, op.cit. (同訳書、180頁。)
- 7) *L'illustration*, 11 Juin 1910, p. 538

8) *L'illustration*, 18 Fevrier 1911, p. 104

9) *La mode illustrée*, 19 Mars 1911

10) W. Said, Edward (1978). *Orientalism*. Pantheon Books. (今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1993年。)

1870年代近代都市パリの黒いモード

Black Fashion in 1870s Paris

徳井 淑子

序：色とジェンダー

産業社会と市民社会が本格化した19世紀は、男女の性差による服飾の差異がもっとも大きくなった時代であると指摘されることがある。市民社会が定着し、階級による服装の差異は小さくなった一方で、男女の生活空間の乖離により性差による服装の差異が顕著になったからである。そしてその性差による差異がもっともはっきり現れたのが色である。すなわち、勤労にはげむ男性の黒服に対し、家庭の天使たる女性の白い衣裳、あるいは夫の経済力の表示ともなる豪華な衣裳という色彩の対照である。セクシュアリティの側面から服飾を論じたアン・ホランダーのことは借りれば、「近代社会を迎えるまで、男女の服装がかたちの上でどんなにかけ離れていようとも、両性間の視覚的なバランスは保持されていた」¹⁾。すなわち色や素材だけは男女に共有されていたのだが、近代社会を迎えると、男性は等しく黒い燕尾服やフロックコートを着用し、一方の女性は、ナポレオン治世下では簡素な白いシュミーズ・ドレスを、そして復古王政とともに、かつての貴族階級の奢侈の復活ともいえるべく、素材・色彩・装飾・形態のいずれにあっても豪華を競うドレスを着ることになる。ここに、男の黒とは対照的な華やかな色が女性性のシンボルとして認識されるようになる。

近代社会の男の黒服が、プロテスタントの色彩倫理に由来することは、パストゥローが既に指摘した通りである²⁾。あるいはペローが論じたように、ブルジョア社会の男性は、勤労によって財をなすことはよしとされても、得られた財力をこれみよがしに示す豪華な服装は避けなければならなかった³⁾。男性は勤労の美德を黒という色で示し、勤労の結果である財力を妻の身体の豪華な衣裳によって示す。ゆえに男性の黒に対し、色をまとった女性という対立の図式が成り立ち、そこにヨーロッパ特有の女性蔑視の観念が重ねられたとき、色は女性的なものとして嫌悪されることになる。

ルノワールの《都会の踊り》と《田舎の踊り》(1883年、パリ、オルセー美術館)は、男性の黒と、都会の女性の白いドレス、田舎の女性の赤い模様のドレスによって、19世紀の色のジェンダーを凝縮している。ジャン・ペローの《夜会》(1878年、パリ、オルセー美術館)もまた、男性の黒と、女性の白あるいはパステル調の色との対比が印象的で、こうした色の対照が19世紀の社交場の風景である⁴⁾。そのようななか、当時の女性モード誌が示しているように黒いドレスが流行したのが1870年代、印象派の画家はこぞって黒いドレスの女性を描いた。印象派の画家が好んで黒いドレスを描いたとするなら、おそらく近代社会の表象として黒は意味をもったのではないか。以下、黒という色を女性が使うことがいかに特異だったかを確認した上で、印象派の作品を通して黒いモードの意味を考えてみたい。

色を女性的なものとして劣視する観念が顕著に記されて興味深いのが、第二共和制下で美術長官の職にあり、『ガゼット・デ・ボザール』誌の刊行など、美術行政と啓蒙に貢献したシャルル・ブラン(1813~82年)の美術論である。芸術創作におけるかたちと色の優劣を語りながら、これを男女の優劣に喩える彼の論法には、今日なおヨーロッパ人に特徴的な色を嫌う観念「クロモフォビア」

が明快に示されている⁵⁾。そのひとつ1867年刊行の『デッサン芸術文法』は、建築・彫刻・絵画の三分野の美を、秩序・均衡・統一という古典的な美の規範によって解く大著である。色彩への軽視はまず、色が彫刻には不要であり、建築においても重要ではなく、ただ絵画においてのみ必要であるという指摘から始まる。そして絵画はデッサンと色の結合で成り立つとする観点を、なぜか男女の結合に喩えるのだが、それはデッサンが優れ、色が付随的なものであることを主張するためである。色はデッサンに魅力と優美さを加えるが、しかし色を欠いてもデッサンは思想を表現できる、ゆえにデッサンは色に勝るという主張である。

「絵が思想だけを表出するのであるなら、デッサンと陰影のモノクロで十分だろう。(中略) 色の役割は心を動かすものを我々に伝えること。一方デッサンはむしろ精神に起ることを我々に示すこと。(中略) デッサンは芸術の男性性、色は芸術の女性性」⁶⁾。

この美術論に、1871年刊行の『装いと衣服における芸術』を重ね合わせると、色を女のものとすクロモフォビアの観念はより鮮明になる。思想や観念が男性性として認識されるのに対し、女性性として認識されるのは感情であり、要するに男性が観念的であるのに対し、女性は感情的であるという言説である。

「それぞれの民族において色に結び付けられる地域的かつ特殊な意味について述べるまでもなく、色は観念と一致するよりも、さらにこころの情愛や情熱と一致する。そういうわけで、感情のままに行動する女性には我々(男性)よりも色がいっそう重要なのである」⁷⁾。

ゆえに女性は色の付いた衣裳をまとうのだというのが彼の主張である。ところで精神活動による思想・観念に対し、こころや気持ちの状態である感情は、色を劣視する根拠として常に使われることばである。すなわち、原初の段階にある民族も、同じように感情によって動くがゆえに色を好むと、男女の対比は文明と非文明との対比に置き換えられる。

「プリミティブな人たちは、より自然に近く、またより若く、そして感情に支配されているから、女性とほとんど同じように色を好む。野蛮人は、自らがあまりにモノクロであるのに気が付くと入れ墨をして美しくなろうとする。アメリカ原住民の酋長は、けばけばしい色の羽根でかぶり物をつくる。モロッコ人、黒人、アラビア人、インド人は、派手な色調で身を飾る。しかし文明が複雑になり発展すると、どこでも男は色を女に委ねる。男には色がなくなり、既にヨーロッパ中で男は黒い服を着ている」⁸⁾。

世界をヨーロッパ文明と、それ以外の非文明にわけ、文明は色を好まず、非文明は色を好むという図式であり、その対立に男女の優劣が置き換えられ、前者は黒、後者は色という対比である。要するに非文明と等価であるとする女性観が、彼女たちに華やかな衣裳を着せる理由である⁹⁾。色の性差の背景には、近代産業社会という環境のなかで生まれ変わったキリスト教文化に根差すミゾジニーがある。

印象派と黒いモード

このような色のジェンダーの浸透している時代、1870年代を中心に印象派の画家の作品には、街着と晴着の双方で黒い服の女性が多く現れる。ルノワールの《女性と鸚鵡》(1871年、ニューヨーク、グーゲンハイム美術館)は早い例であり、ジャン・ペローの《コンコルド広場のパリジェンヌ》(制作年不明、パリ、カルナバレ博物館、図1)、そしてマネの《パリジェンヌ》(1875年、ストックホルム美術館、図2)は欠かせない。右手に日傘をもっているように見え、帽子の様子からも外出の姿であろう。一方ベルト・モリゾの《観劇の前》(1875年頃、個人蔵)は、明らかに社交の場のドレスである。

作品に描かれた女性たちがまとう黒い布地は、ファイユ (faïlle) という張りのある絹織物であろう。経糸の密度を大きくすることによって扁平で大きな畝が現れるこの織物は、プティ＝フィス・ドゥ・クロード・ジョゼフ・ボネ商店で生産され、優美な絹地として、当時のフランス絹織物の輸出の半分を占める勢いで全世界に輸出されていた。実際、当時のモード誌『ラ・モード・イリュストレ』によれば、季節にかかわらず、またカジュアル、フォーマルを問わず、女性の衣裳はほぼファイユ地に尽きるといってもよいほどである¹⁰⁾。たとえば1875年5月30日号の表紙には四人の女性と一人の少女が外出の姿で紹介されているが、女性四人はいずれも黒の外套を着用、カシミア、シシリアンヌとともにファイユ地に言及がある(図3)¹¹⁾。同年7月18日号には、秋のドレスとしてなにを準備したらよいかという読者の質問に答えるかたちで、黒がもっとも好ましいと述べる記事があり¹²⁾、ただしここではアルパガもしくはカシミアを勧めているのは寒い季節になるからだろう。黒いドレスは、控えめで節度ある印象を与えたようで、同年10月3日号には、黒やグレーのファイユ地のドレスは、略装にふさわしいが、二メートルの裾を引かせれば盛装にもなると述べている¹³⁾。

ルノワールの《シャルパンティエ夫人と子どもたち》(1878年、ニューヨーク、メトロポリタン美術館、図4)において、黒いドレスの夫人は、これから夜会に招かれているのかもしれないし、観劇に出かけるのかもしれない。夫は、ゾラやモーパッサンの作品の出版で知られたシャルパンティエ書店の経営者であり、ブルジョア出身の夫人は作家や画家の集う文学サロンを主宰していたから、客を迎えるところなのかもしれない。シャルパンティエ家はルノワールのパトロンのような存在で、夫妻は、1875年以降彼の作品を購入したり制作を依頼したり、親しく交流していた¹⁴⁾。

ルノワールが黒いモードを描いたのは、仕立て職人の父とお針子の母という環境ゆえの関心によるのかもしれないが、黒を好む画法上の別の理由もあった。そもそも印象派は、黒は色ではないとして、そのパレットからこの色を追放したが、ルノワールは黒を色の女王とまで言い、黒を巧みに使うマネを評価していた。マネはスペインの画家ベラスケスに私淑していたといわれ、スペインの色である黒への好尚があった。代表作《フォーリーベルジェールの酒場》(1882年、ロンドン、コートールド・ギャラリー)においても、女給の黒い胴着と襟まわりの白い飾り、鏡に映された彼女の背の黒、黒と白を主調とする色彩が特筆される。黒は素晴らしい色であるが、これを使うのは難しく、若いひとには使えないし、黒が使えなければ画家にはなれないとルノワールは言う¹⁵⁾。先に触れたシャルル・ブランも黒をスペイン貴族の色とし、黒が貴族の矜持のしるしであるなら、それは聖職者のような宗教的謙譲と人間的誇りを示しているだろうと、この色の印象を語っている¹⁶⁾。彼が男性服にふさわしいとした黒も、このような色彩感情のなかで理解できるだろう。黒はやはり文明の色であり、そして矜持の色なのである。

モディストと消費文化

世紀後半から世紀末にしばしば風俗画の対象となったのは、モディスト (modiste) と呼ばれた女性労働者である。モディストという呼称は、本来は帽子の製作・販売にかかわる女性を指したが、衣服の製作をする女工やお針子、洋品店の売り子、さらに商品を客に届ける使い走りの女性も含まれた。彼女たちは黒い服を着て描かれるのが常である。

モディストを多く描いた画家が上述のジャン・ペローであり、《シャンゼリゼのモディスト》(1888年、個人蔵、図5) は特に印象深い作品である。女性は黒いドレスの上に焦げ茶のジャケットを着用し、雨に濡れた道に裾が汚れるのを嫌うように、左手で黒いスカートを持ち上げて白いペチコートを見せている。彼女が右手に持つ丸いふたつの箱は帽子入れで、客に届けに行くところである。そして彼女の後方にひとりの男性がたたずみ、その視線が明らかに彼女に向けられているのは、彼女との接触の機会をうかがっているからである。女性の仕事が限られた時代、モディストの低賃金では生活はたちゆかず、彼女たちが男性と愛人関係を結ぶのは日常茶飯のことだった。女性の置かれたこのような境遇は、百貨店で働く売り子たちも同様で、パリでもっとも早く創業した百貨店ボン・マルシェに取材したゾラの小説『ボヌール・デ・ダム百貨店』によれば、売り子が10人いれば9人までが愛人をもち、就業の終る時刻には愛人たちが列をなして彼女たちを待つのだと述べている¹⁷⁾。ジャン・ペローがモディストの背後に男性の姿を描き込むのはこうした事情による。

モディストを描いた作品はルノワールにもマネにもあるが、いずれも黒い装いが印象的な作品である。少女のように素朴なルノワールのモディスト (1877年、ニューヨーク、メトロポリタン美術館、図6) は、背後のウィンドウに見える帽子のようなものの鮮やかな色彩に彼女の黒い服が沈み込み、わずかに髪と胸に赤い飾りがみえるのが哀れを誘う。彼女の黒服とウィンドウの鮮やかな帽子の対照は、貧しいモディストが自らは手にできない贅沢品に囲まれて日々を過ごしていることを示しており、これも彼女たちが愛人をもつ理由になる。一方マネのモディスト (1881年、サンフランシスコ美術館、図7) は、肩まで露出させたデコルテの大きな剥きから輝くような白い肌を見せる妖艶な女性である。ショールかと思われる黒い布地で胸を被ったその下には白いドレスが透けてみえる。そしてやや年配の落ち着いた表情からも、彼女は娼婦の顔をもつモディストではなかったかと思われる。それは次に引用するティソの描く洋品店が、売春を行う偽装店舗の可能性があると指摘されているからである。

ジェイムズ・ティソの《売り子》(1883-85年、トロント、オンタリオ・アートギャラリー、図8) に描かれた人物については詳細な分析がなされているが¹⁸⁾、ここでは黒い服の二人の女性店員と、通りに面したウィンドウ越しに店内をのぞいている男にのみ注目しよう。男の視線は左側の売り子の女性に向けられ、眼があっているようにもみえる。男性が見ているのは店内の洋品ではなく、店員の女性であり、すなわちこの店は売春を介する偽装店舗かもしれないとアラン・コルバンは言う¹⁹⁾。売春婦を娼家に囲い込み、警察の監視下に置く公娼制の政策はこのころ破綻していた。もぐりの娼婦が街路に氾濫した時代、闇の売春の供給源となったのが、縫子やお針子などのモディストであり、洋品店の売り子や酒場の女給、そして召使いとして働く女性たちである。1870年代には、手袋店、紳士洋品店、煙草店が偽装店舗として機能し、世紀末にはさらに店舗の種類が増えたという。ティソの描いた洋品店が売春を介する場であり、視線を交わした売り子と男性の間で交渉が成立したとするなら、彼女は店に並ぶ品ものと同様に自身も商品と化したといえる。これが性もまた商品化したといわれる近代経済社会の一面である。

19世紀末に画家が好んでモディストを描いたのは、もちろん時代の風俗の一断面を切りとるため

であったが、根底には経済社会の進展と消費文化の展開というこの時代ゆえの意味がある。かつての古着市場が衰退し、大量の既製服が百貨店の棚に並び、一方で高級服仕立てのオートクチュールが誕生した時代、このような時代の服飾産業を支えたのがモディストである。そしてモディスト自身が性を売る商品と化したことには、第二帝政下（1853～70年）で整備されたパリの街の開放性が背景にあるだろうとコルバンは考えている。セーヌ県知事を務めたジョルジュ＝ウジェーヌ・オスマンの指揮のもと、パリは街の四割を越える地域の整備が行われ、衛生的で機能的、かつ美的配慮の行き届いた街へと変貌した²⁰⁾。狭い通りや貧民街を取り潰し、広く直線的な街路を貫通させ、道路はそれまでの五倍に延伸した。公園の設置とともに街路樹による緑化が行われ、街路灯も格段に増えた。上水道は二倍以上に、下水道も三倍以上に延伸した。近代都市として生まれ変わったパリは、人びとを街中へと誘う空間となり、その開放性ゆえに闇の売春が増加し、公娼性は役目を失う。そして性的欲求の処理にとどまらない、疑似恋愛としての新しいかたちの売春がこの時代には望まれたというコルバンの指摘は興味深い。誘惑し誘惑される風情、あるいは情の交流といった心情的な側面が重視され、そうであればこそモディストを追う男の姿が絵になるのである。

近代都市とグリザイユ

黒は近代社会の諸事象と結びついている。モディストが描かれたのは、彼女たちが近代消費文化のシンボリック的存在として認識されたからであり、黒服がその表象を担っている。そのような近代社会の断面を描いた画家にとって、黒はやはり時代の色である。マネやルノワールにとって黒は近代都市パリの色である。シャルル・ブランが黒を文明の色としたことも、黒が近代社会を表象するからである。マネを評価した詩人・美術批評家のボードレールが黒い燕尾服を好み、その黒に時代の憂愁感を重ねたのも、黒が近代の色であることを示している²¹⁾。

近代社会の表象として黒服を読むには、ギュスターヴ・カイユボットの作品が饒舌である。代表作《パリの通り、雨》（1877年、シカゴ美術館、図9）は、パリの改造をつぶさに観察してきた画家が、近代都市に生まれ変わったパリを描いた作品である²²⁾。画面には整然とした街並みが続き、広々とした交差点の敷石は雨水を浴びて輝き、もはやぬかるみの街ではない。その街並を背景に前景の男女は、いずれも黒い服装で、そろって視線を横に流して歩いてくる。その色調はグレーの街の風景に見事に溶け込んでいる。ふたりの黒服もまた、建物や道路の風景とともに近代都市パリを表象しているだろう。1876年代にロンドンで刊行された雑誌には、歩道のほこりや壁の石材のなかで目立たない色を着て街に溶け込むよう女性に勧められ、当時の評論家の言説から近代生活がグリザイユという印象と密接に結びついていることが指摘されている²³⁾。空は青くても街はグレー、電や雨や雪に見舞われる壁も敷石も、そして霧や煙の立ちこめる空気も、すべてがグレーである。このような近代都市の印象を描いたのがカイユボットの作品である。

カイユボットのもうひとつの作品《ヨーロッパ橋》（1876年、ジェネーヴ、プティ・パレ美術館、図10）もまた示唆に富む。場所はパリのサン＝ラザール駅の近く、陸橋の下には、その駅から伸びる線路が通っている。ここでもまた人物は黒やグレーの服装であり、かたわらの男性と話を交わしながら歩いて来る女性も黒衣に身を包んでいる²⁴⁾。ここで注目したいのは陸橋の鋼のグレーあるいは黒という色である。時代は、鉄とガラスの建造物が最先端の素材として注目された頃である。イギリスでは既に1850～54年に鉄とガラスを使ったパディントン駅が建造され、フランスではパリのエッフェル塔が完成するのは1889年である。鋼鉄製の汽車が白い煙をはいて走るのも近代の風景であり、マネの《鉄道》、モネの《サン＝ラザール駅》など、鉄道に関連した風景は印象派の画家に

好まれたテーマであった²⁵⁾。

鉄道が近代生活の風景として捉えられるのは、鉄という素材の先端性ばかりが理由なのではない。鉄道網の整備が当時のブルジョア階級のレジャー・ブームに重ねられるからである。フランスでは鉄道の開業は1832年で、1857年までに規模の大きな鉄道会社が六社そろい、1860年までにはパリから東西南北の各地に伸びる鉄道網の大枠が完成している。印象派の時代、汽車の旅が娯楽のかなりを占めていたらしいことは、1874年に象徴派の詩人マラルメが編集・出版したモード誌『最新流行』の情報欄を見ればわかる。雑誌は9月から12月まで8巻を数えて廃刊となったが、毎号10頁の冊子の8頁目は娯楽情報に当てられ、そこには「書籍と展覧会」「演劇」という見出しに並んで「駅」という括りで旅の案内がある。たとえば9月6日号には、西線を使ったノルマンディーやブルターニュでの海水浴の案内、9月20日号には、ノルマンディーやブルターニュの旅のほか、オルレアン線と南線を使ったドフィネ、スイス、ブルゴーニュ周遊、北線を使ったオランダ、ベルギー周遊、あるいはライン地方周遊などが勧められ、一ヶ月有効の往復割引切符の情報が掲載されている²⁶⁾。

グリザイユの街の風景は最先端の文化を想起させ、女性の黒服もその一端を担う。

「鉄の灰色」と「鋼の真珠」

黒い衣裳と同じようにモード誌に頻出するのがグレーの衣裳であるが、ドガの《コンコルド広場》(1875年、サントペテルブルク、エルミタージュ美術館)が示しているように、グレーは少女や男性の服の色でもある。世紀末のダンディと称されるロベール・ド・モンテスキュー伯が、「鉄のグレー」のフロックコートに「はつかねずみのグレー」のずぼんと「真珠のグレー」の胴着を合わせ、「モーヴ色がかったグレーの手袋と「雉鳩のグレー」のネクタイを巻いたと伝えられているが、これらのグレーはすべて女性ファッションの色でもある²⁷⁾。

たとえば『ラ・モード・イリュストレ』誌、1875年5月20日号には、「ロシア・グレー」gris russeのインド・カシミア製のドレスに組み合わせて、ウールの「明るいグレー」gris clairのマントウレやグレーのドルマンが紹介されている。ロシア・グレーは色刷りのプレートによれば青に近い色調だが、同誌に散見されるほか、マラルメの『最新流行』誌にも夜の招待に応じる際、また客を迎える際のドレスとして登場し、この色の流行がうかがえる。『ラ・モード・イリュストレ』誌の1875年6月13日号には、黒いファイユ地のスカートに、「はつかねずみのグレー」gris sourisのワトー・ブラウスが、7月18日号には、8歳から11歳の少女のドレスとして、「青味がかったグレー」gris bleuの縞の入ったウール・ポップリンのドレスがある。翌年の4月23日号には、「銀色がかったグレー」gris argentのファイユ地のスカート。1878年6月23日号には、ロシア・グレーとともに、「灰のグレー」gris cendreと「ブロンズ・グレー」gris bronzeの三種のことが並んでいる。同年12月1日号には、「濃いグレー」gris foncéのドレス。1876年4月23日号の「雉鳩色」tourterelleは色刷りのプレートによれば茶系の色だが、モンテスキュー伯の「雉鳩のグレー」に通じるだろうし、1875年8月1日号の「フェルト色」feutreもプレートの色刷りによればグレーの範疇にある。

そして特筆すべきは、モンテスキュー伯のフロックコートの色であった「鉄のグレー」gris de ferである。鉄が最先端の素材であり、鉄骨の建造物に人びとが目を見張った時代なのであれば、この色名は新たな時代の波を感じさせるものだろう。1875年8月22日号には、秋の装いを予想しながら、鉄のグレーのファイユ地のスカートが勧められている。10月17日には予告通りにこの色のドレスが紹介されている(図11)。前年の『最新流行』誌も9月20日号で、この色の衣裳を散歩服と

して紹介している。

そしてここに「鋼の真珠」perle d'acier という装飾品が縫い付けられていることが、さらに鉄素材への関心を示している。散歩服として紹介された上着は黒のシシリエンス地で、そこに鋼を球状に成形したと思われる「鋼の真珠」が縫い付けられている。『ラ・モード・イリュストレ』誌にも、1875年9月26日号に、黒い絹地のリボン状の装飾布に、これが縫い取りされ、しかもグレーと青の二種の色合いが記されている(図12)。それは黒いファイユ地のドレスに重ねられた、同じように黒いファイユ地の大型エプロンに付けられた装飾で、おそらくリボンの波形に合わせて鉄の球が並んでいるのだろう。「鋼の青」という色名が、1878年6月30日号に見えるから、鋼の色はグレー系と青色系の二種類あるということか。1875年10月24日号には「硫化物の金属と鉄の首飾り」colliers en métal oxide en fer というのが登場し、鉄の球を繋げたネックレスもある。さらに『最新流行』誌には、「鉄のспанコール」paillettes d'acier なるものが登場している。それは12月20日号で、クリスマスを迎える時期であるから、客を迎える際の服装で、ロシア・グレーのドレスの上に羽織られた同じ色合いのピロード製の^{キューラス}胴着の飾りである。

「鉄のグレー」のドレス、あるいは「鋼の真珠」「鉄のспанコール」という装飾品、これらは鉄骨による建造物や鉄道を近代都市のシンボルとした時代であればこそ生まれたファッションである。グレーの色名の多様性は、この色のニュアンスの微妙な差異に関心をもったこの時代の美的な感性を示し、それはグリザイユで捉えられた近代都市パリを示す色であった。1875年10月3日号にあるレインコートが鉄のグレーであるというのは、グリザイユの雨のパリで着用するにまことにふさわしい。グレーは近代の色であり、ゆえにファッションナブルな色である。

結論

黒を男の色とする強い意識のある一方で、黒が女性のモードとして流行し、それを印象派の画家は好んで描いた。黒を男の色として認識する社会通念があったからこそ、黒いモードは画家たちの関心を引いたのではなかったか。黒服が文明化された男性性の象徴として捉えられたのと同じように、女性の黒いドレスも近代化したパリのシンボルとして捉えられたように思われる。シャルル・ブランは文明化された社会では、黒は思想・観念を代表する男性性に対応し、色は感情的な女性性に対応すると述べたが、女性の間に黒やグレーが流行したとき、それもまた近代社会という文明化の表象であった。少なくとも1870年代の女性モードの黒やグレーが、そのように捉えられることは、「鉄のグレー」という色名や「鋼の真珠」という装飾品が端的に示しているだろう。グレーのさまざまなニュアンスが、女性モードに限られた色使いではなく、男性服にも等しく使われる色調であったことも、それを証している。

注

- 1) アン・ホランダー 『性とスーツ—現代衣服が形づくられるまで』(中野香織訳、白水社、1997年)、71頁。
- 2) Michel Pastoureau, *Le noir, histoire d'une couleur* (Seuil, Paris, 2008).
- 3) Philippe Perrot, *Le Luxe, une richesse entre faste et confort, XVIII^e - XIX^e siècle* (Seuil, Paris, 1995) pp. 159-169.
- 4) ジョン・ハーヴェイ 『黒服』(太田良子訳、研究社、1997年)、第六章。
- 5) デイヴィッド・バチュラー 『クロモフォビア—色彩をめぐる思索と冒険』(田中裕介訳、青土社、2007年)。
- 6) Charles Blanc, *Grammaire des arts du dessin* (Paris, Renouard, 1867), p. 559.

- 7) Charles Blanc, *L'Art dans la parure et dans le vêtement* (Paris, Renouard, 1871), p. 81.
- 8) *Ibid.*, p. 90.
- 9) アン・ホランダーは、このような色の性差をつくったのは、「姿形はさまざまでも中身はみな同じという女性観を生み出したロマン主義思潮」に一因があると述べている。アン・ホランダー、前掲書、138頁。
- 10) ファイユ地は faille と記されるのが通常だが、『ラ・モー・ド・イリュストレ』誌では faye と綴られている。
- 11) *La Mode illustrée*, 30 mai 1875 (http://digital.bunka.ac.jp/kichosho/search_shousai.php#gazo).
- 12) *Ibid.*, 18 juillet 1875, p. 227.
- 13) *Ibid.*, 3 octobre 1875, p. 315.
- 14) 賀川恭子「ルノワールと社交界——一八七〇年代のサロン復帰を中心に」『西洋近代の都市と芸術 2 パリ I—19世紀の首都』（喜多崎親編、竹林舎、2014年）、406-422頁。
- 15) Augustin de Butler, *Renoir, Ecrits, entretiens et lettres sur l'art* (Edition de l'Amateur, 2009) pp. 188-198.
- 16) *L'Art dans la parure et dans le vêtement, op.cit.*, p. 82.
- 17) ゴラ『ボヌール・デ・ダム百貨店』吉田典子訳、藤原書店、2004年、第5章、202頁。
- 18) 吉田典子「ゴラ『ボヌール・デ・ダム百貨店』における近代消費社会とジェンダー——デパートの女店員と女性の商品化」『近代』89号、2002年、96-105頁。
- 19) アラン・コルバン『娼婦』（杉村和子監訳、藤原書店、1991年）198-199頁。
- 20) 鳥海基樹「オスマンの都市改造と景観」『西洋近代の都市と芸術 2 パリ I』前掲書、27-45頁。
- 21) ボードレール「一八四六年のサロン」『美術批評上』（阿部良雄訳、筑摩書房、1985年）、166頁。
- 22) Aileen Ribeiro, Gustave Caillebotte, Rue de Paris ; temps de pluie, *L'Impressionisme et la Mode*, (Musée d'Orsay / Metropolitan Museum of Art / Art Institute of Chicago, 2012-2013), pp. 65-73.
- 23) *Ibid.*, p. 71.
- 24) 二人の男女について、女性は娼婦であり、通りすがりに男が女を誘っている場面だとする解釈もある。『カイユボット展—都市の印象派』ブリヂストン美術館、2013年、226-227頁。
- 25) 三浦篤「近代のイメージとイメージの近代—マネの《鉄道》をめぐる考察」小林康夫・松浦寿輝編『表象のディスクール』第4巻（東京大学出版会、2000年）、127-152頁；坂上桂子「郊外の風景—印象派から新印象派へ」『西洋近代の都市と芸術 2 パリ I』前掲書、335-353頁。
- 26) *La Dernière Mode*, 6 sep. 1874, p. 8 ; 20 sept. 1874, p. 8 (Paris, Editions Ramsay, 1978).
- 27) フィリップ・ジュリアン『一九〇〇年のプリンス—伯爵ロベール・ド・モンテスキュー伝』（志村信英訳、国書刊行会、1987年）、108頁。



図1 ジャン・ベロー《コンコルド広場のパリジェンヌ》制作年不明、パリ、カルナヴァレ博物館



図2 エドワール・マネ《パリジェンヌ》1875年、ストックホルム美術館



図3 『ラ・モード・イリュストレ』誌、1875年5月30日



図4 ルノワール《シャルパンティエ夫人と子どもたち》1878年、メトロポリタン美術館



図5 ジャン・ベロー《コンコルド広場のモディスト》制作年不明、個人蔵



図6 ルノワール《モディスト》1877年、メトロポリタン美術館



図7 エドワール・マネ《モディストの店》1881年、サンフランシスコ美術館



図8 ジェームズ・ティン《売り子》1883-85年、トロント、オンタリオ・アート・ギャラリー



図9 ギュスターヴ・カイユボット《パリの通り、雨》1877年、シカゴ美術館



図10 ギュスターヴ・カイユボット《ヨーロッパ橋》1876年、ジュネーヴ、プティ・パレ美術館



図11 『ラ・モード・イリュストレ』誌、1875年10月17日



図12 『ラ・モード・イリュストレ』誌、1875年9月26日

〔編集後記〕

キャンパスの樹木が色づく季節となりました。「日本女子大学総合研究所紀要」第21号をお届けいたします。本号は、2017年度に研究期間を終了した3件の研究を掲載しております。研究課題(60)「途上国における女性支援のためのプログラム開発」は、ラオス国の女子教育や子どもの食生活向上を目的とした本学の大学教員と附属中学・高校の教員による実践的な研究です。これらの研究成果はアジアの女性の自立支援への貢献が期待されます。研究課題(61)「日本女子大学における学生を主体とした地域連携活動の活性化のための調査・研究」は、地域の活性化を目的とし、本学の学生たちがいろいろな視点から主体的にワークショップや公開講座を開催するなどの地域連携活動を行った成果が述べられています。今後、ますます大学と地域との連携が生まれていくことでしょう。研究課題(62)「イギリスのファッションに見る「女性らしさ」の規範—フランス、日本との比較を通して」は、19世紀後半から1920年代頃のイギリスのさまざまな事象において、「女性らしさ」と「男性らしさ」との比較を行い、女性の多様な考えがファッションに投影され、ファッションがより自由に・活動的に・自分の意志で行動する女性を作ることに貢献していることを明らかにした興味ある研究です。このように、総合研究所は、(1)創業者成瀬仁蔵に関する研究、(2)日本女子大学一貫教育に関する研究、(3)女子教育に関する研究、(4)日本女子大学を拠点とする学際的な共同研究を実施しています。これらは、同じ専門分野に限らず異分野の専任教職員による連携から生まれる広い視野を基盤とすることを特徴としています。今年度もこのような学園の知を融合した総合研究所紀要をお届けできることをうれしく存じます。今後も意欲的な新規性のある研究課題の応募をお待ちしています。

多屋淑子、橋本のぞみ、押田昊子、古澤彩子

日本女子大学総合研究所紀要 第21号

2018(平成30)年11月1日 発行

発行人 多屋淑子

発行所 日本女子大学総合研究所

〒112-8681 東京都文京区目白台2丁目8番1号

電話 03 (5981) 3277 (直通・FAX)

印刷所 メディア・パック

〒178-0061 東京都練馬区大泉学園町6丁目13番20号

電話 03 (5947) 9135
